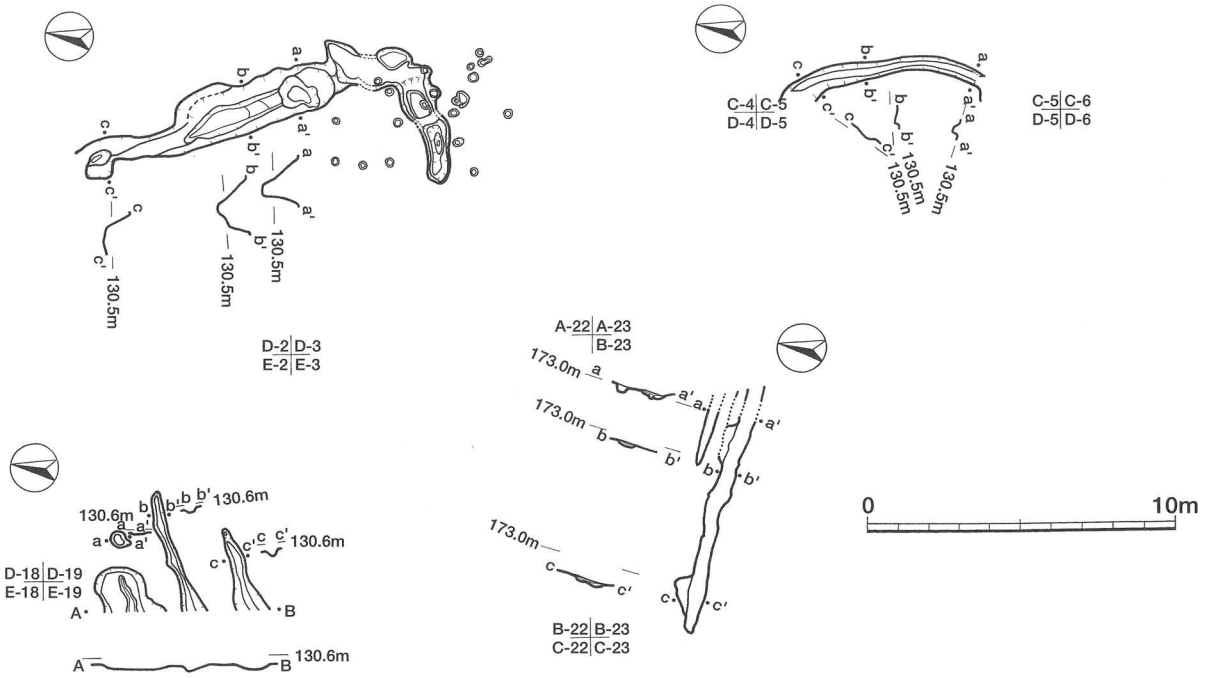
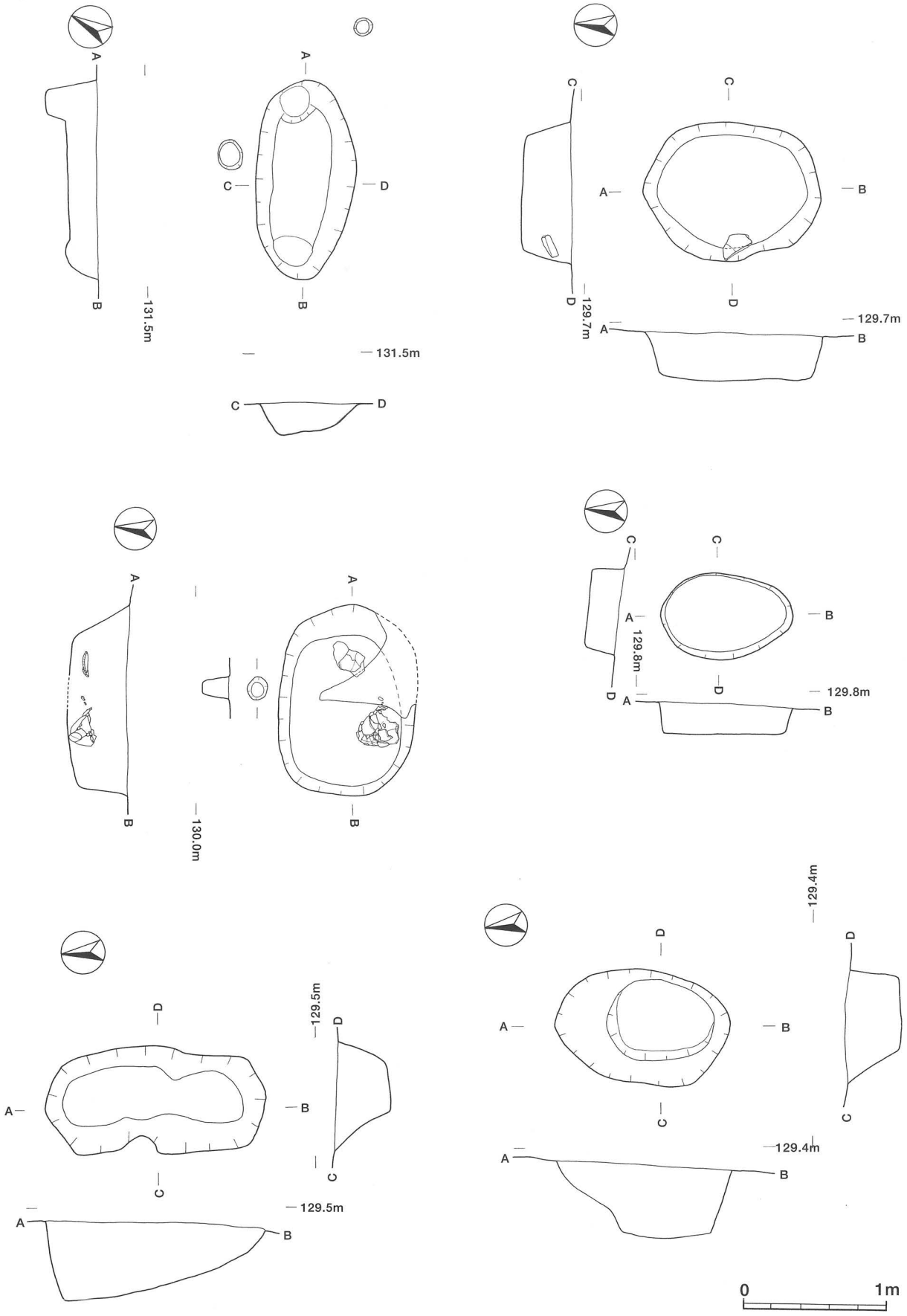
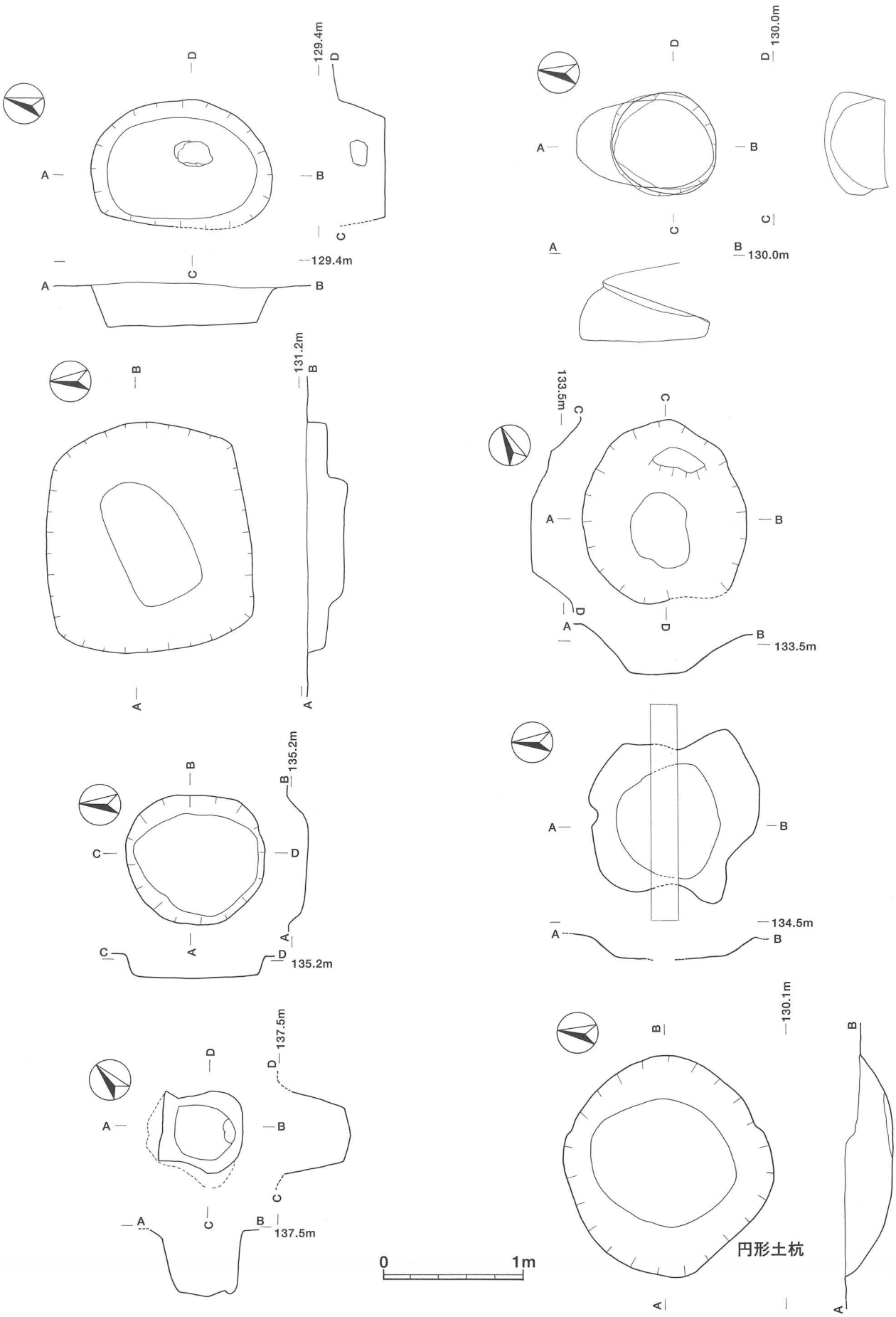

D-2 D-3
E-2 E-3
130.5m
C-4 C-5
D-4 D-5
C-5 C-6
D-5 D-6
A-22 A-23
B-23
173.0m
B-22 B-23
C-22 C-23
D-18 D-19
E-18 E-19
130.6m
0
10m

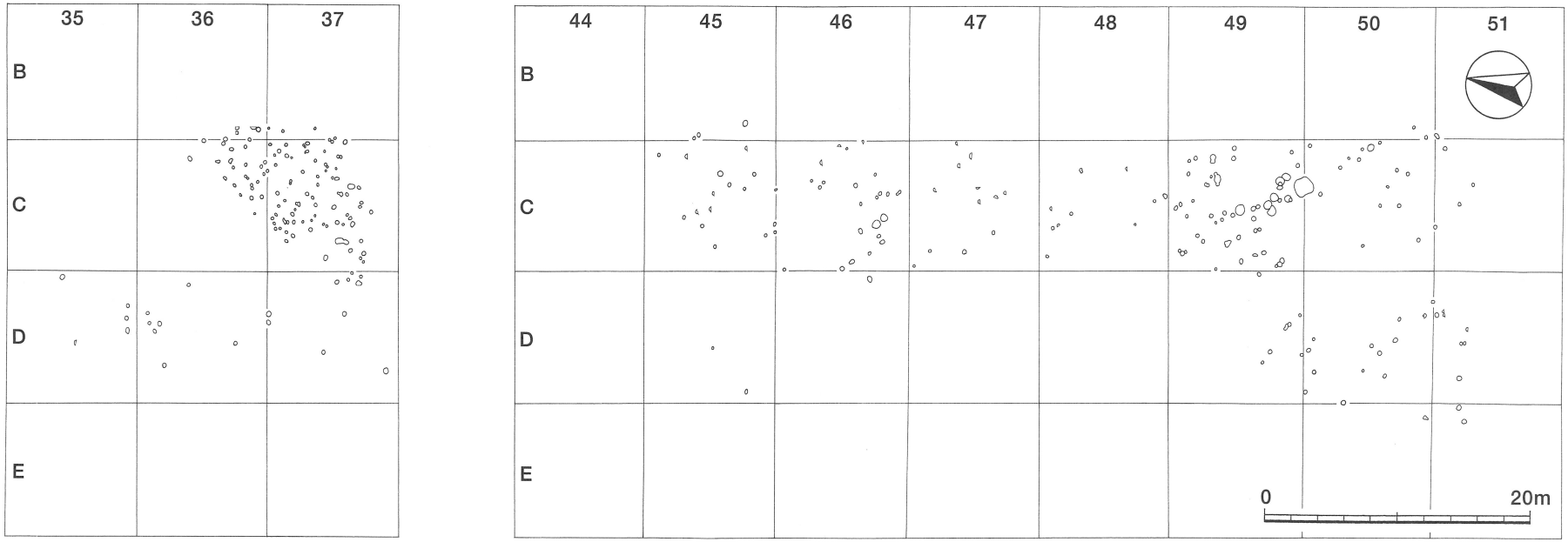
第88図　溝状遺構（2）

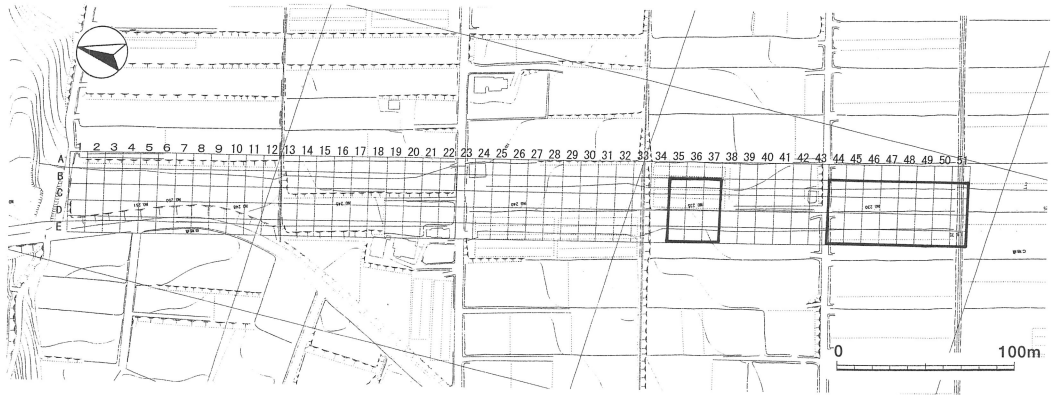


第89図　土坑１～６



第90図　土坑７・８，円形土坑





第91図　ピット位置図

住居跡出土石器（第92～95図，491～512）

検出された住居内の埋土から，成川式に伴い数十点の石器が出土した。その中から状態の良いものをそれぞれ図化した。

住居１号内からは，５点の遺物が出土した。包含層での分類を基に遺物を判断した。凹石が３点・敲石が２点であり，いずれも花崗岩である。

491～493はは凹石である。491・493は表面と上部・下部に敲打痕がみられ，裏面には６㎜ほどのくぼみがある。ほぼ全面に擦痕がみられる。492は，上下と表裏に敲打痕がみられる。また，表裏の敲打された所に凹みが入り，全面が研磨されている。

493・494は敲石に分類した。いずれも敲打面が中心にあり，その後研磨がほどこされている。

住居２号からは，５点の遺物が出土した。

497は，うすく扁平な頁岩を用いた礫器である。右側辺から下辺，左側辺にかけて規則性の無い粗い剥離によって刃部が形成されている。一部に階段状の剥離がみられる。また刃部には，使用によるつぶれがみられる。497は凹石である。砂岩を用いており，表裏面に共に４㎜弱の深さのくぼみを呈する。擦痕や敲打痕はみられない。498は花崗岩を用いた敲打痕が強く残り，表裏面には擦痕を呈する。499は黒曜岩を用いた磨石である。角の取れた三角柱を呈し，全ての面に強く擦痕がみられる。500は軽石製品である。楕円形の柱状を呈し，上部に向かってやや狭くなっている。下部は欠損しているようにみえるが，擦痕がみられる。全面に擦痕がみられるが，詳しい情報は不明である。

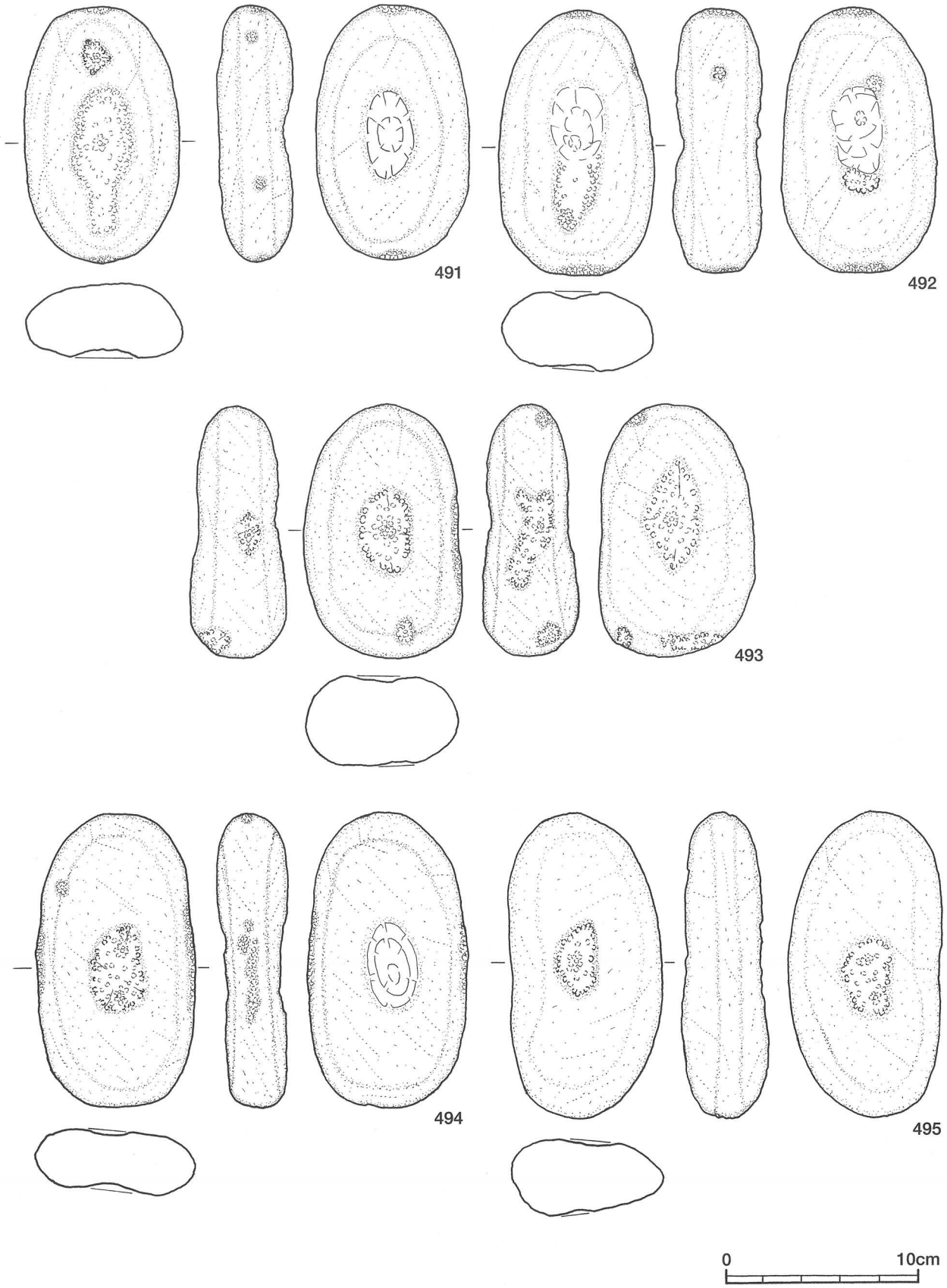
住居３号からは敲石２点，磨石１点が出土した。

501は，花崗岩の円礫を用いている。側辺に敲打がみられるが，連続性はなく左側辺に敲打が特に強くみられる。表裏に擦痕がみられ，また，側辺部には敲打面をのぞいた所に擦痕がみられる。

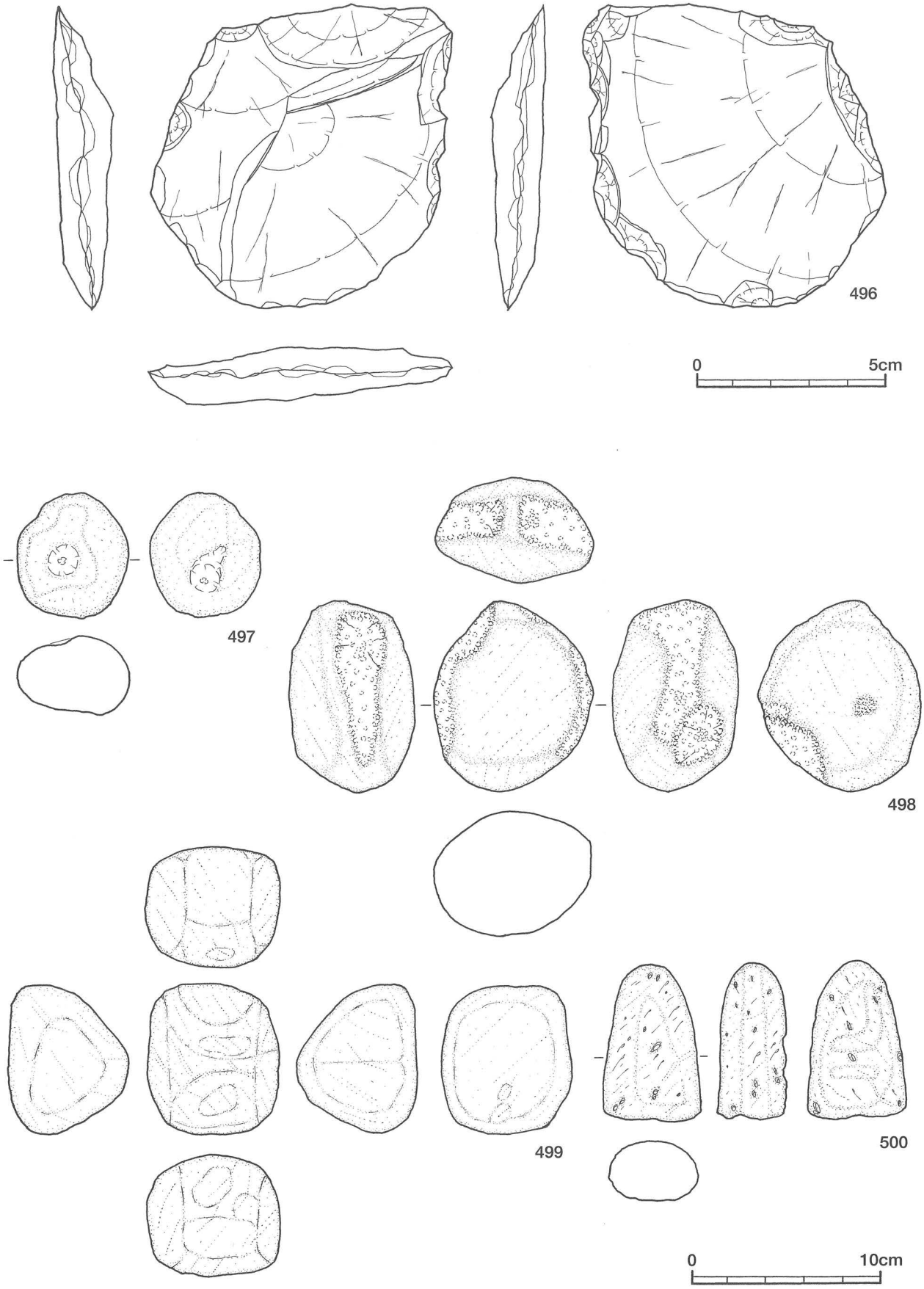
502は，花崗岩を用いた磨石である。表裏と両側面にわずかに敲打がみられるが，裏面は平滑化が強くあらわれるほどの擦痕がある。503は，黒曜岩を用いた小柄な敲石である。側辺全てに敲打がみられ，表裏面には弱く擦痕がみられる。

住居２・３・４号は，検出面が切り合っており，それに準じて遺物も住居番号が判断できないものが存在する。95図に住居番号不明遺物として掲載する。

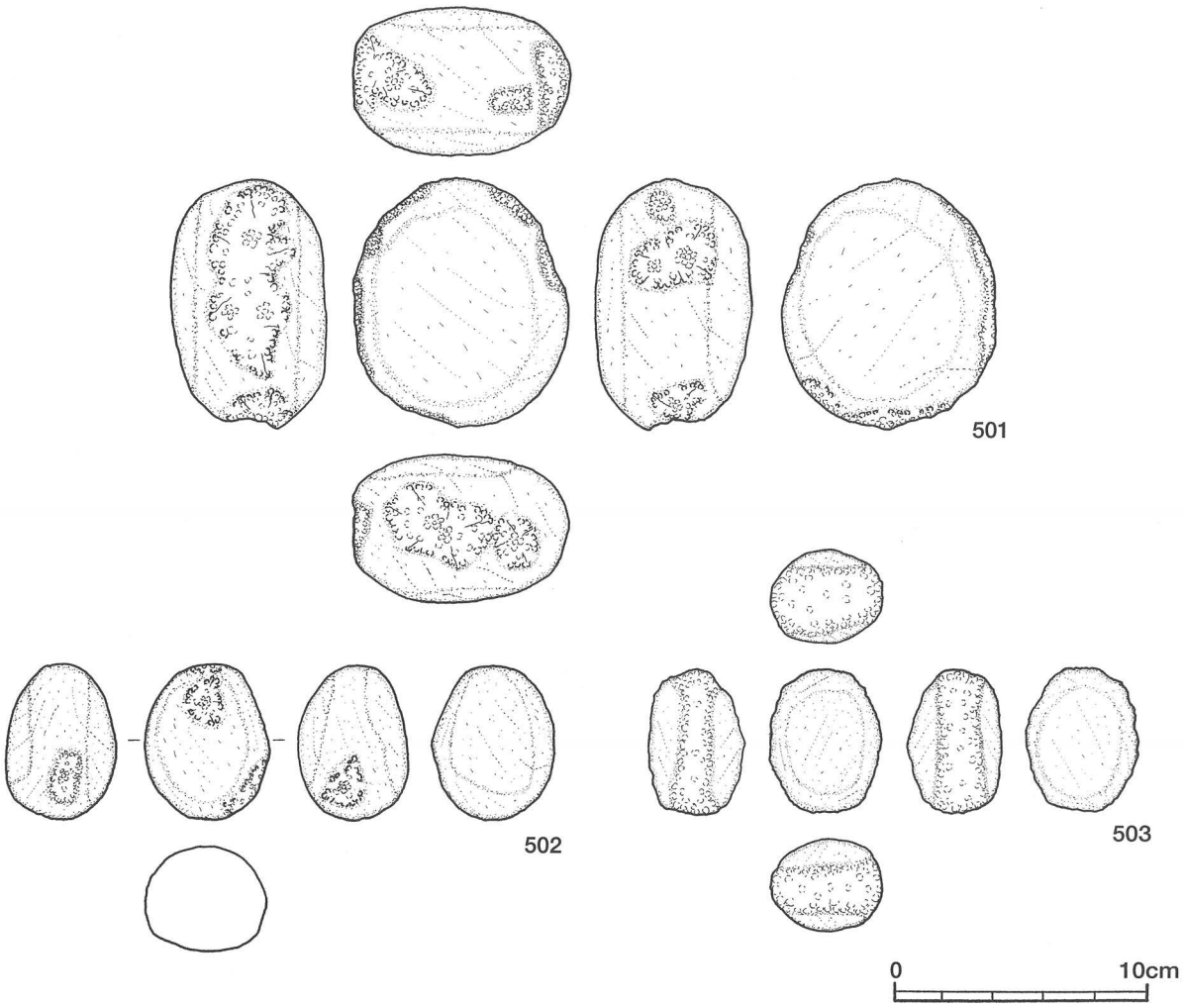
501～504は，敲石である。全て花崗岩を用いているが，形状には大きな差がある。側辺に敲打痕がみられ，全体に擦痕がみられる。503は，中央にも敲打痕がみられ，台石の可能性を考えさせる。505は，花崗岩の小円礫を用いた磨石である。表面には，２箇所の磨面がみられ，それの切り合いにより，稜が作られている。裏は研磨により，平坦な面が作られている。506は，花崗岩を角礫を用いた台石である。表面のみ使用痕がみられ，その他の面には自然面が残る。表面中央部に敲打痕がみられ，表全面に擦痕がみられる。507・510は軽石製品である。510は方形，507は楕円形を呈しているが，全ての面に擦痕がみられる。



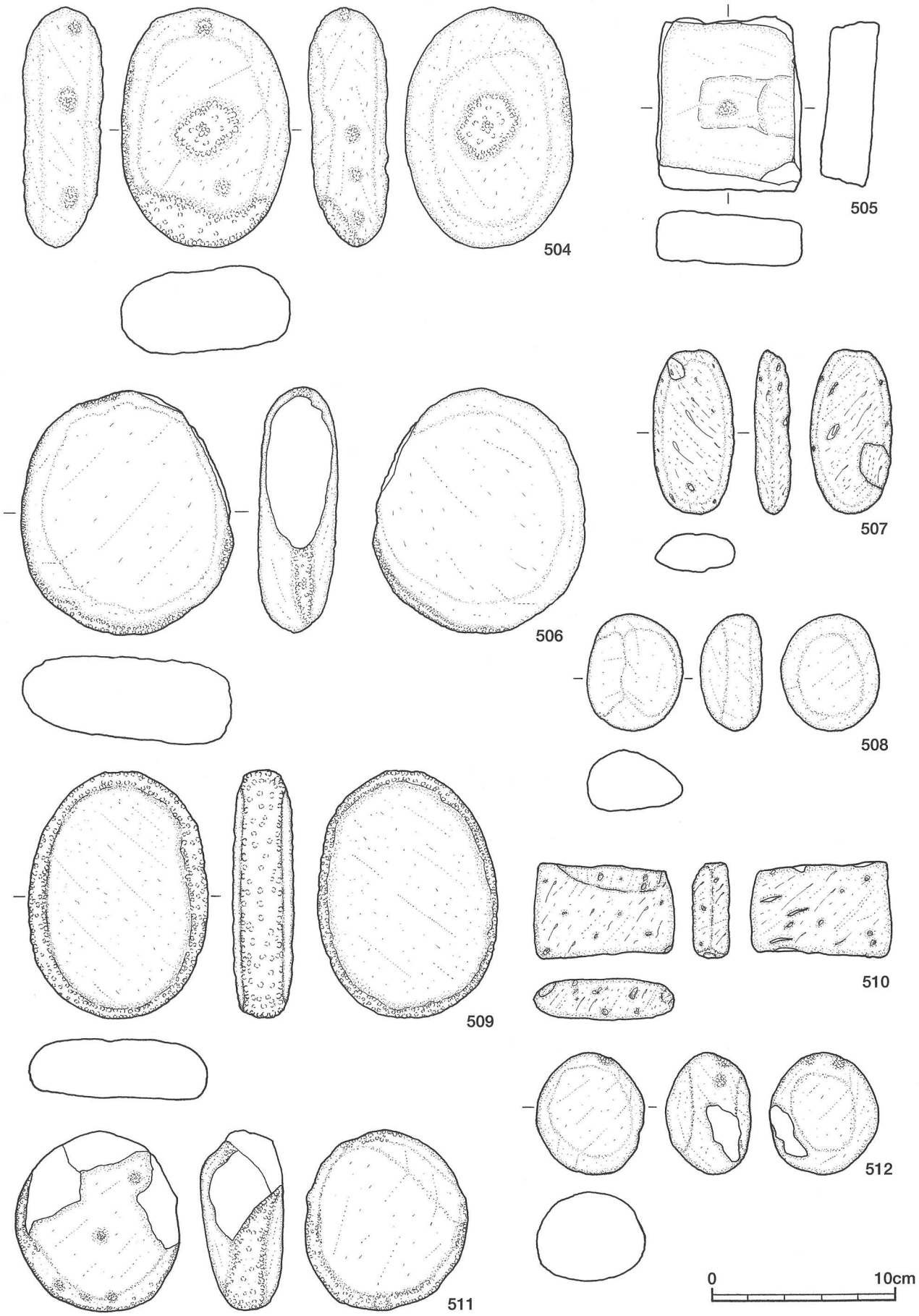
第92図　遺構出土石器（1）



第93図　遺構出土石器（2）



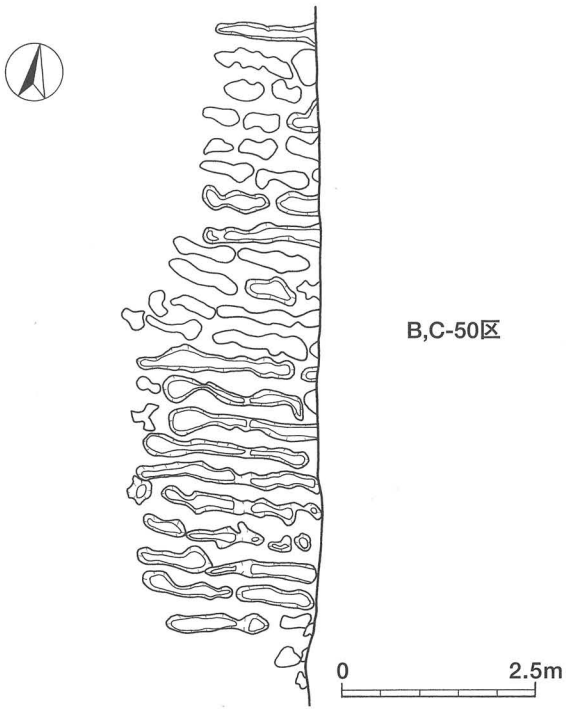
第94図　遺構出土石器（3）



第95図　遺構出土石器（4）

第18表　鷲ヶ迫遺跡遺構内石器観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	器　種	石　材	区	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
92	491	12542	凹石	花崗岩	C・D27	住1	13.3	8.0	4.1	690.0	
	492	12546	凹石	花崗岩	C・D27	住1	12.6	8.0	4.5	760.0	
	493	12544	凹石	花崗岩	C・D27	住1	13.0	8.1	4.9	840.0	
	494	12551	敲石	花崗岩	C・D27	住1	15.2	8.2	3.6	730.0	
	495	12543	敲石	花崗岩	C・D27	住1	16.0	7.9	4.4	800.0	
93	496	9605	礫器	頁岩	C2	住2	9.5	7.4	1.2	95.0	
	497	3158	凹石	砂岩	C2	住2	6.8	5.8	3.8	190.0	
	498	8244	敲石	花崗岩	C2	住2	10.2	8.4	6.2	670.0	
	499	7755	敲石	黒曜岩	C2	住2	7.5	6.8	6.1	470.0	
	500	8065	軽石製品	軽石	C2	住2	8.3	5.2	3.6	50.0	
94	501	1922	敲石	花崗岩	D5	住3	10.2	8.5	6.0	730.0	
	502	2191	敲石	安山岩	D5	住3	6.2	4.8	4.7	175.0	
	503	7250	敲石	黒曜岩	D5	住3	5.8	4.5	3.8	125.0	
95	504	13146	敲石	花崗岩	—	—	13.3	9.2	4.4	820.0	
	505	15910	台石	花崗岩	—	—	9.5	7.5	3.0	495.0	
	506	7355	敲石	花崗岩	—	—	13.3	11.6	4.3	1030	
	507	415	軽石製品	軽石	—	—	8.9	4.4	2.0	30.0	
	508	—	磨石	花崗岩	—	—	6.4	5.2	3.3	155.0	
	509	7218	敲石	花崗岩	—	—	13.6	9.8	3.3	670.0	
	510	1661	軽石製品	軽石	—	—	5.3	7.6	2.0	30.0	
	511	1645	敲石	花崗岩	—	—	9.9	8.8	4.3	450.0	
	512	3466	敲石	花崗岩	—	—	6.2	5.3	4.6	275.0	



第96図　畝跡

畝跡（第96図）

Ｂ・Ｃ－50区，Ⅱ層上面で検出された畝跡である。圃場整備等により削平されていたため，全体はつかめなかったが，残存面積は約23㎡であった。畝と畝間の比高差は約５㎝程しかない。畝幅は約30㎝で，長さ約2.5ｍ程検出されたものが，23条残っていた。畝跡の使用時期は層位等から中世から近世と考えている。

北原中遺跡

第Ⅴ章　北原中遺跡

第１節　発掘調査の概要

北原中遺跡の調査は道路新設工事図面のSTA.192とSTA.193を基準に10m間隔の区割りを設定した。平成11年度から確認調査及び本調査を行ったが，用地買収に手間取り変則的な発掘調査になった。そのため，平成11・12・16・18年度に発掘調査を行った。

その結果に基づいて，表土は重機にて排除し，Ⅱ層の全面調査を実施した。Ⅲ層下位は区割りに沿ってトレンチを設定し，下層確認を行った結果，古墳時代・縄文時代晩期の遺物がⅢ層に包含されていたことが確認されたため，Ⅲ層までは全面調査を行った。

第２節　縄文時代の調査

Ⅲ層からは，縄文時代晩期から古墳時代の遺構・遺物が出土した。遺物はC・D－10・11区，C－12～17区，C・D18～24区に集中し，遺構は集石遺構が５基検出された。

遺構

集石遺構１（第98図）

C－20区，Ⅲ層上面で，検出したものである。21個の拳大の角礫が，70×50cmの楕円状の範囲に集中して検出された。これらの礫の表面は赤化しており，火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

集石遺構２（第98図）

集石遺構２より南西約６mのC－21区，Ⅲ層上面で検出されたものである。約60×60cmの円形の範囲に，16個の拳大の角礫が散在した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており，集石遺構１同様，火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

集石遺構３（第98図）

集石遺構２より北西23mのD－19区，Ⅲ層上面で，検出したものである。89個の拳大の円・角礫が，約140×100cmの楕円状の範囲に集中して検出された。これらの礫の表面は赤化しており，火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

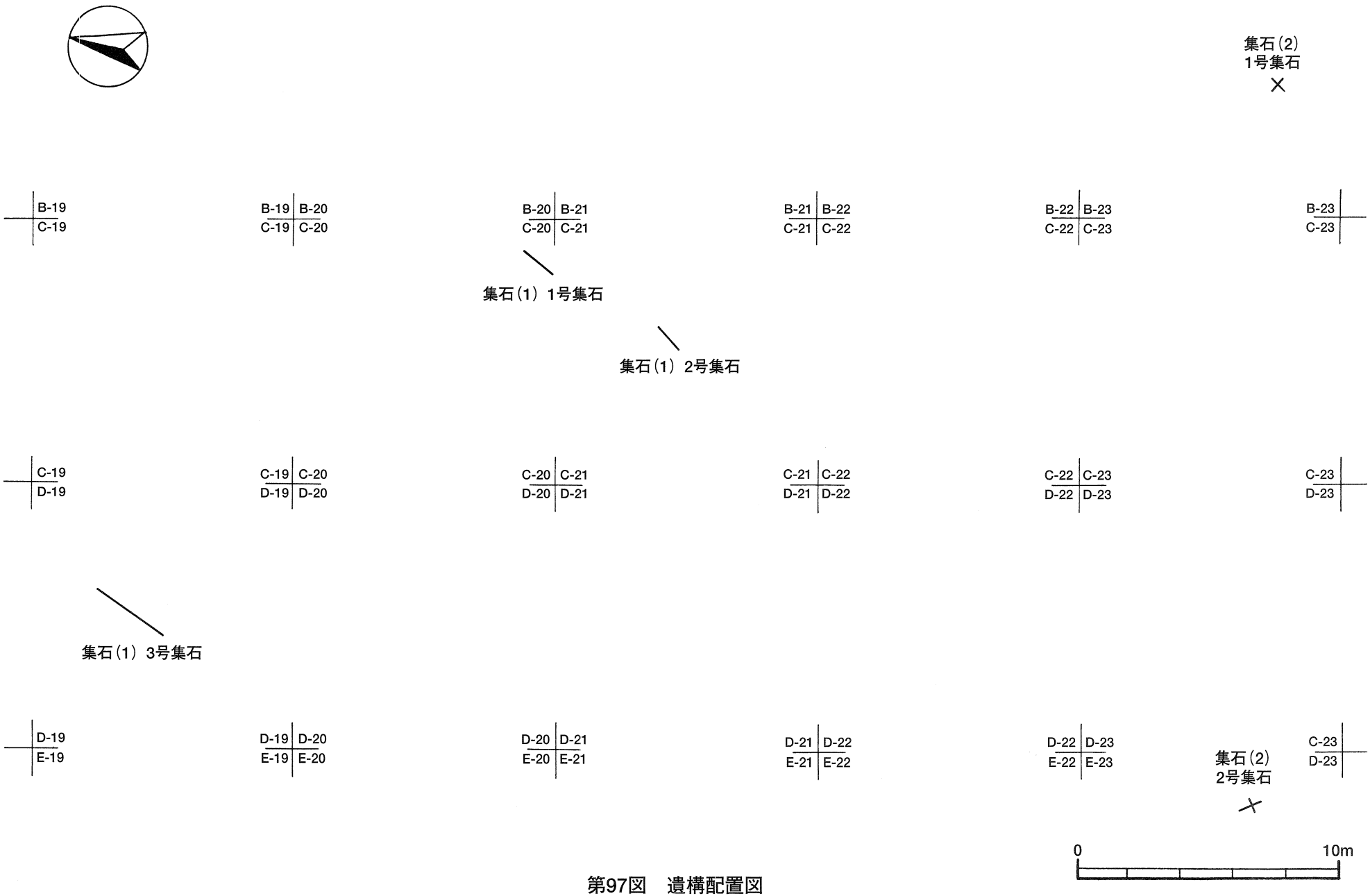
集石遺構２－１（第99図）

集石遺構２より南東約26mのE－23区，Ⅲ層上面で検出されたものである。約50×40cmのほぼ円形の範囲に，14個の拳大の角礫が散在した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており，他の集石遺構同様，火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

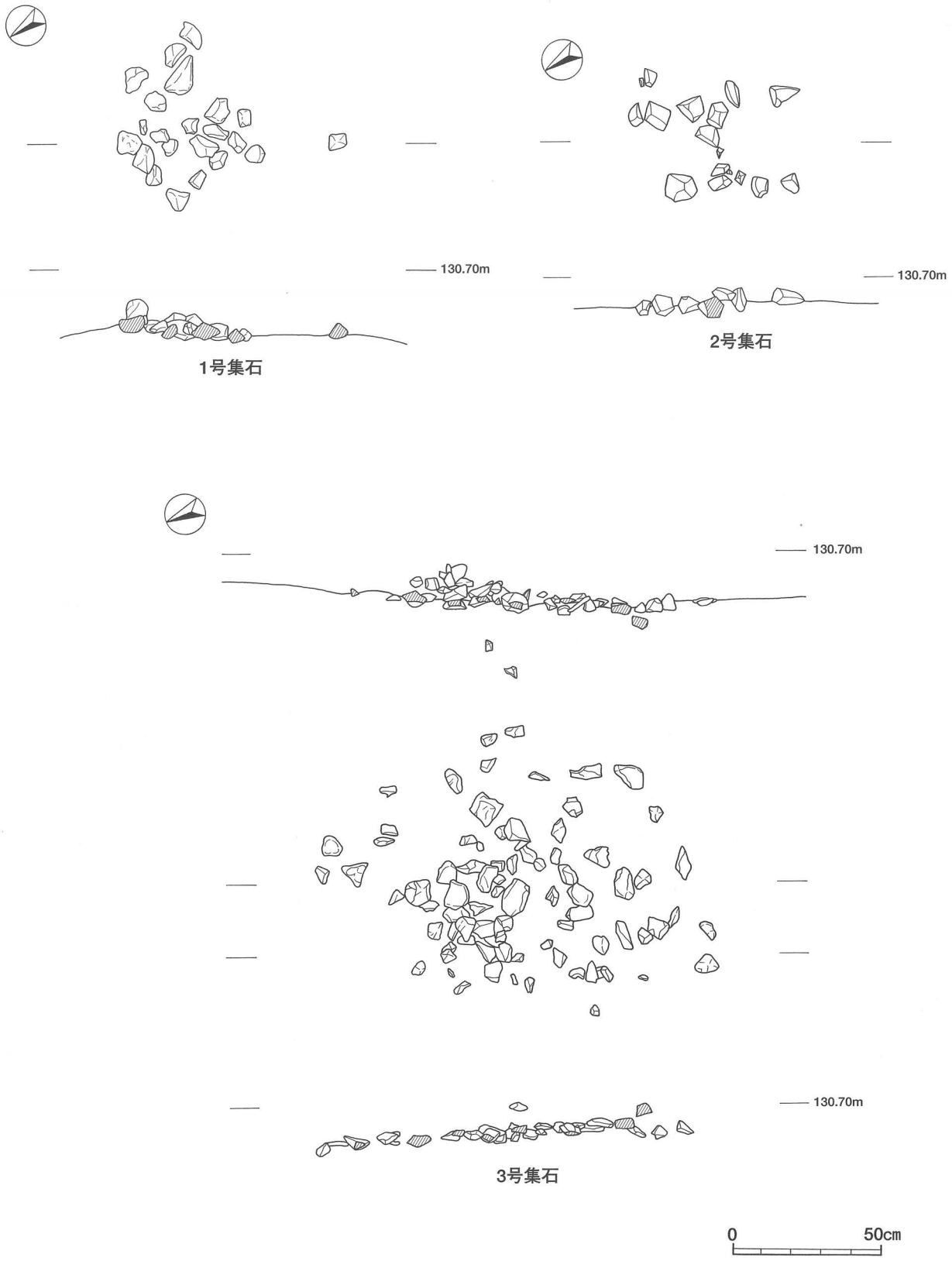
集石遺構２－２（第99図）

集石遺構２－１より西約26mのB－23区，Ⅲ層上面で検出されたものである。約40×20cmの範囲に，５個の拳大の角礫が散在した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており，他の集石遺構同様，火熱の影響を受けたものと考えられる。掘り込み等は認められなかった。

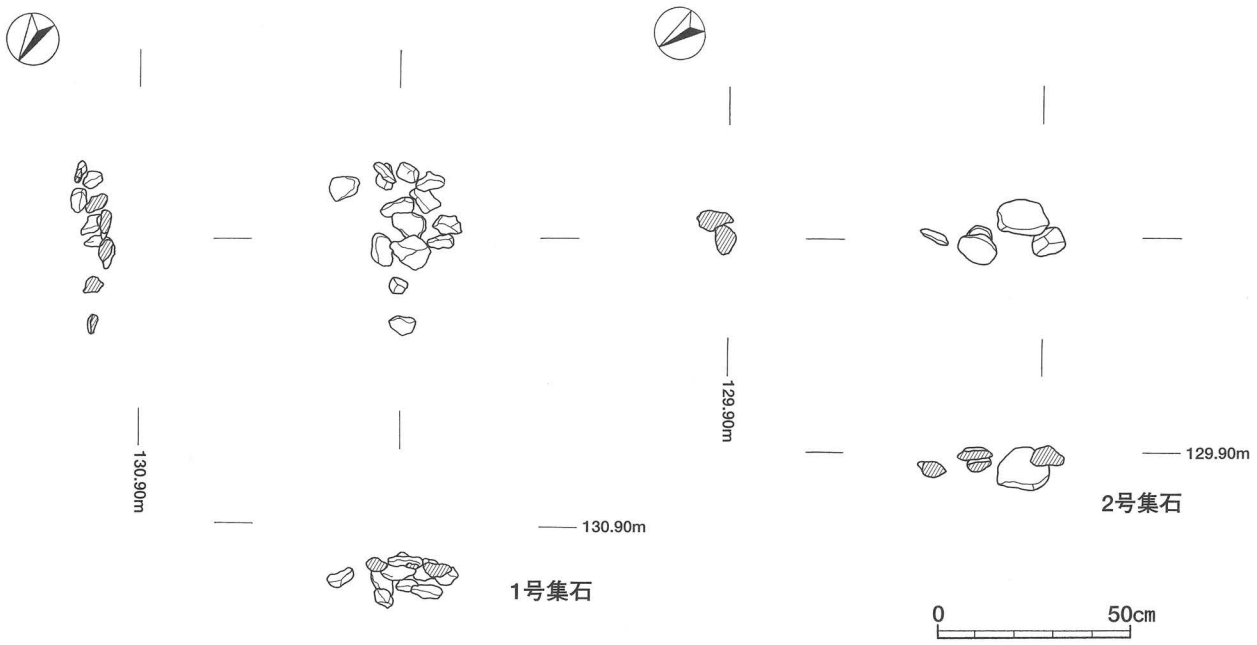
これらの集石遺構の周辺からは，縄文時代晩期の土器や石器が共伴したことから，この集石遺構の時期は縄文時代晩期と想定される。


集石(2)
1号集石
B-19
C-19
B-19 B-20
C-19 C-20
B-20 B-21
C-20 C-21
B-21 B-22
C-21 C-22
B-22 B-23
C-22 C-23
B-23
C-23
集石(1) 1号集石
集石(1) 2号集石
C-19
D-19
C-19 C-20
D-19 D-20
C-20 C-21
D-20 D-21
C-21 C-22
D-21 D-22
C-22 C-23
D-22 D-23
C-23
D-23
集石(1) 3号集石
D-19
E-19
D-19 D-20
E-19 E-20
D-20 D-21
E-20 E-21
D-21 D-22
E-21 E-22
D-22 D-23
E-22 E-23
集石(2)
2号集石
C-23
D-23
0
10m

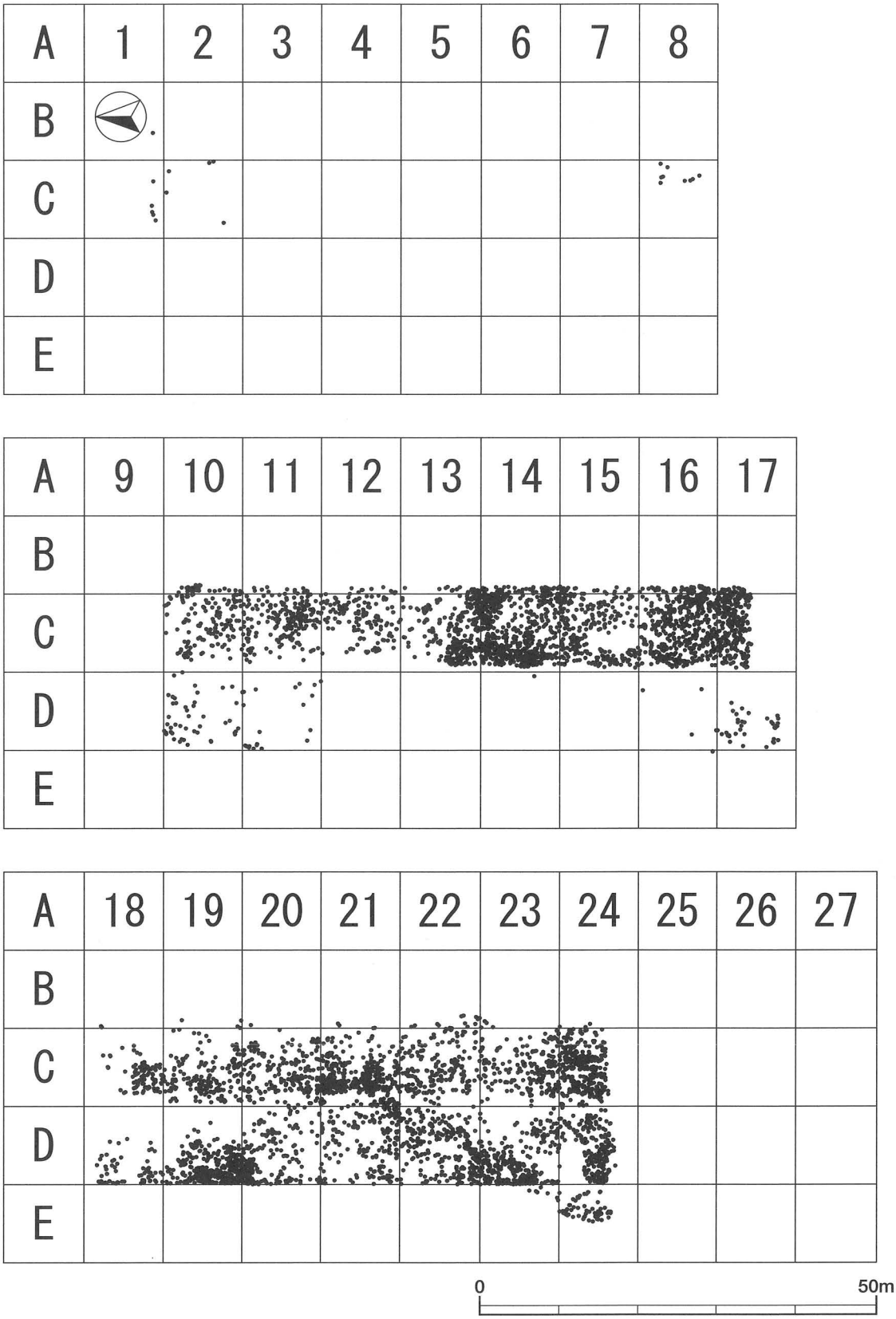
第97図　遺構配置図



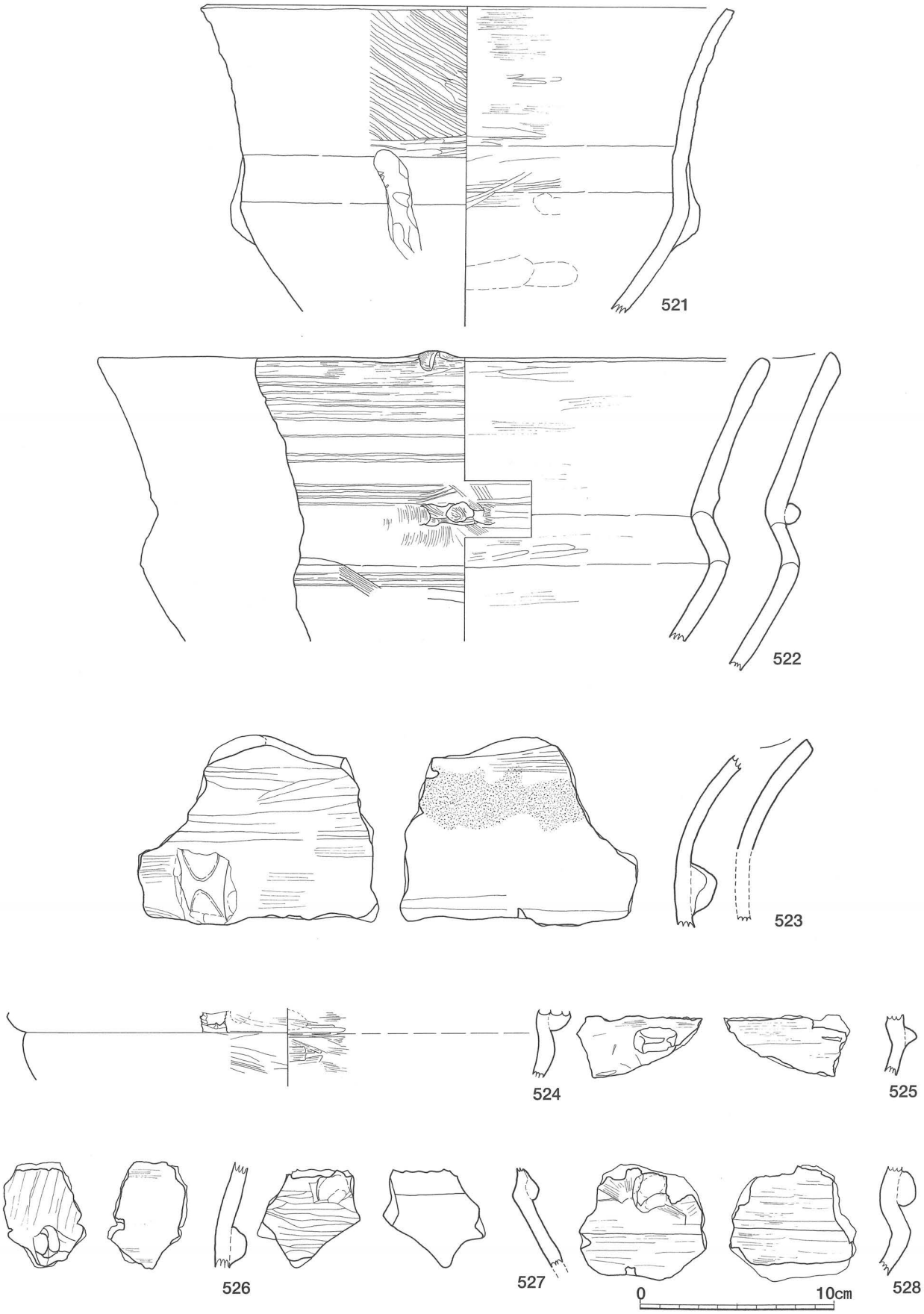
第98図　集石（1）



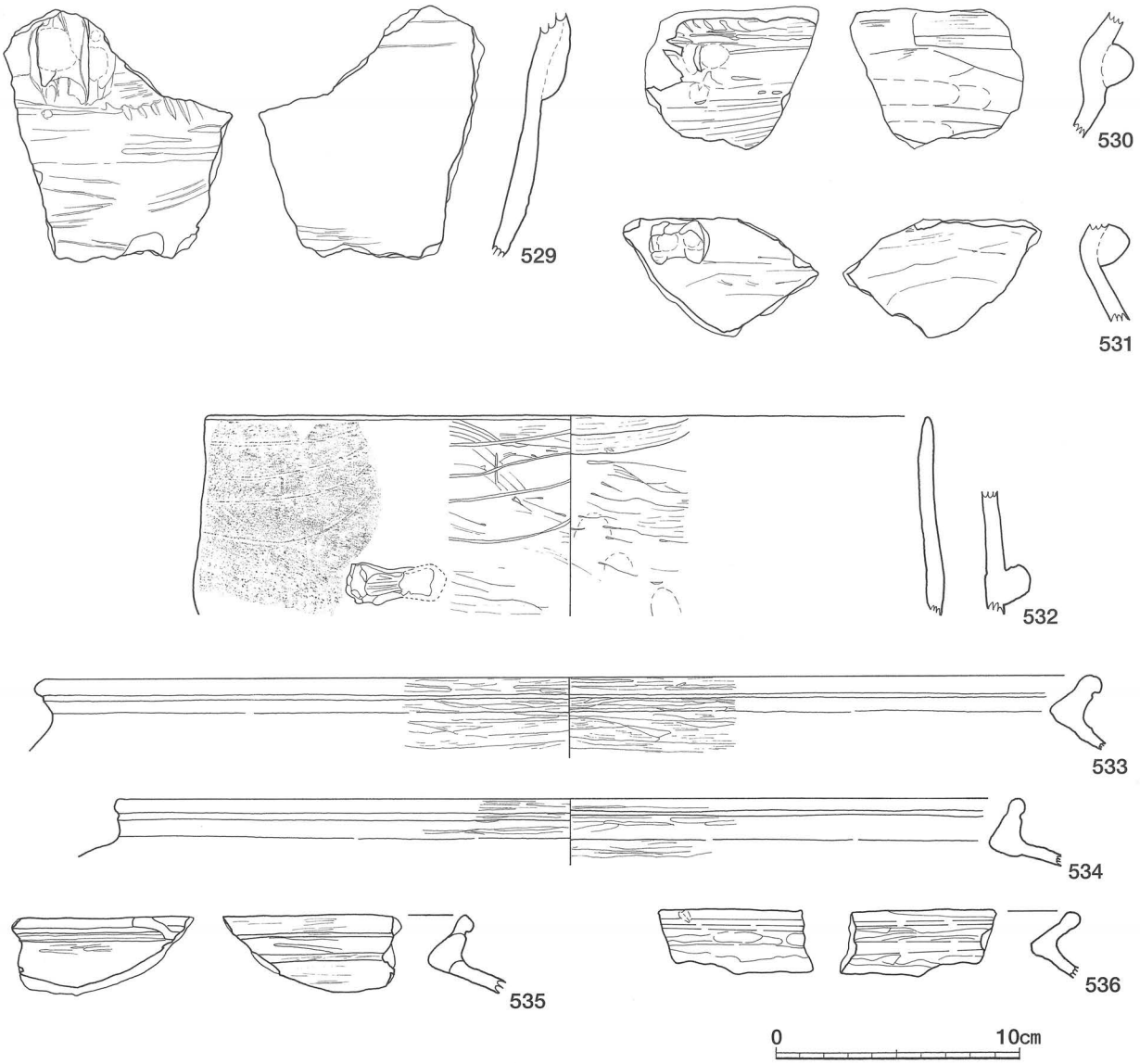
第99図　集石（2）



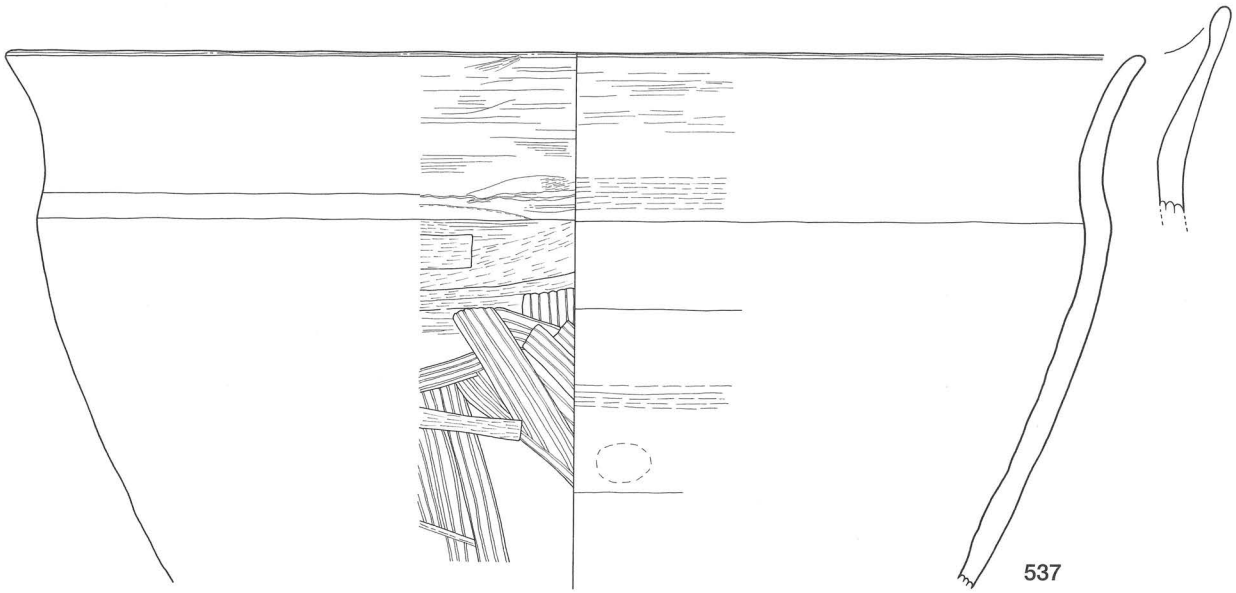
第100図　Ⅳ層遺物出土状況

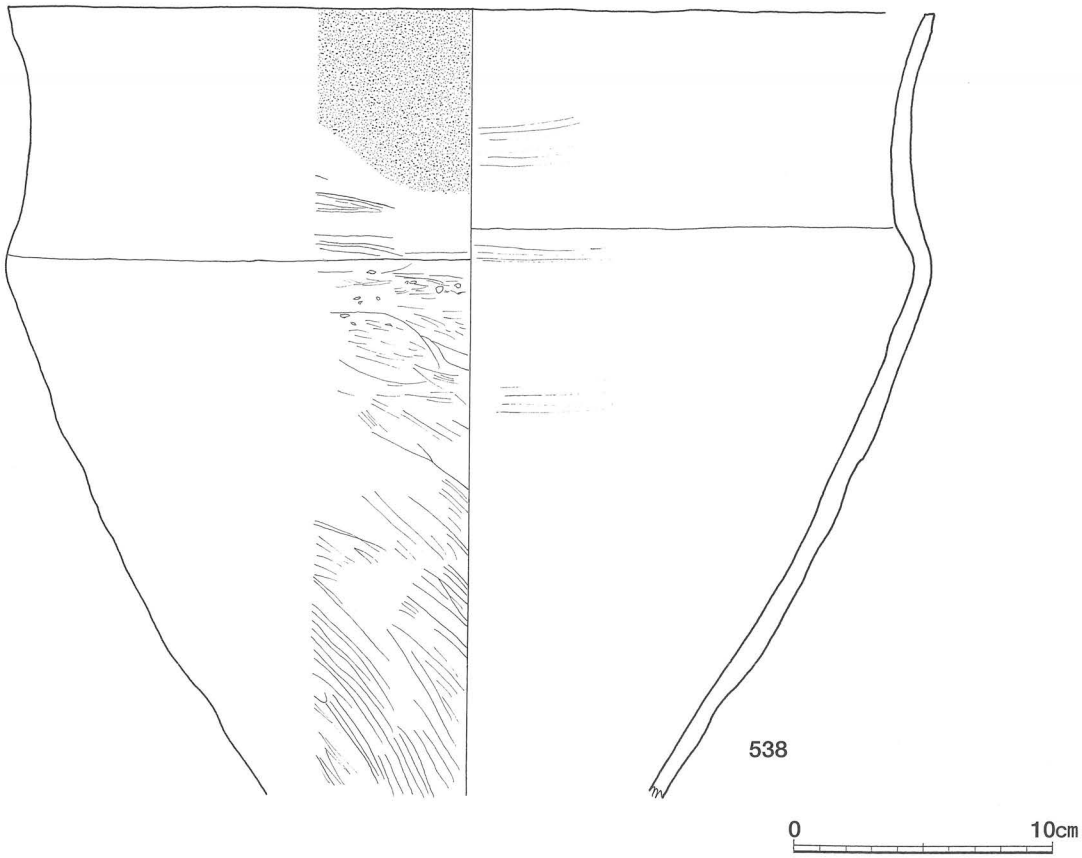


第101図　晩期土器 1

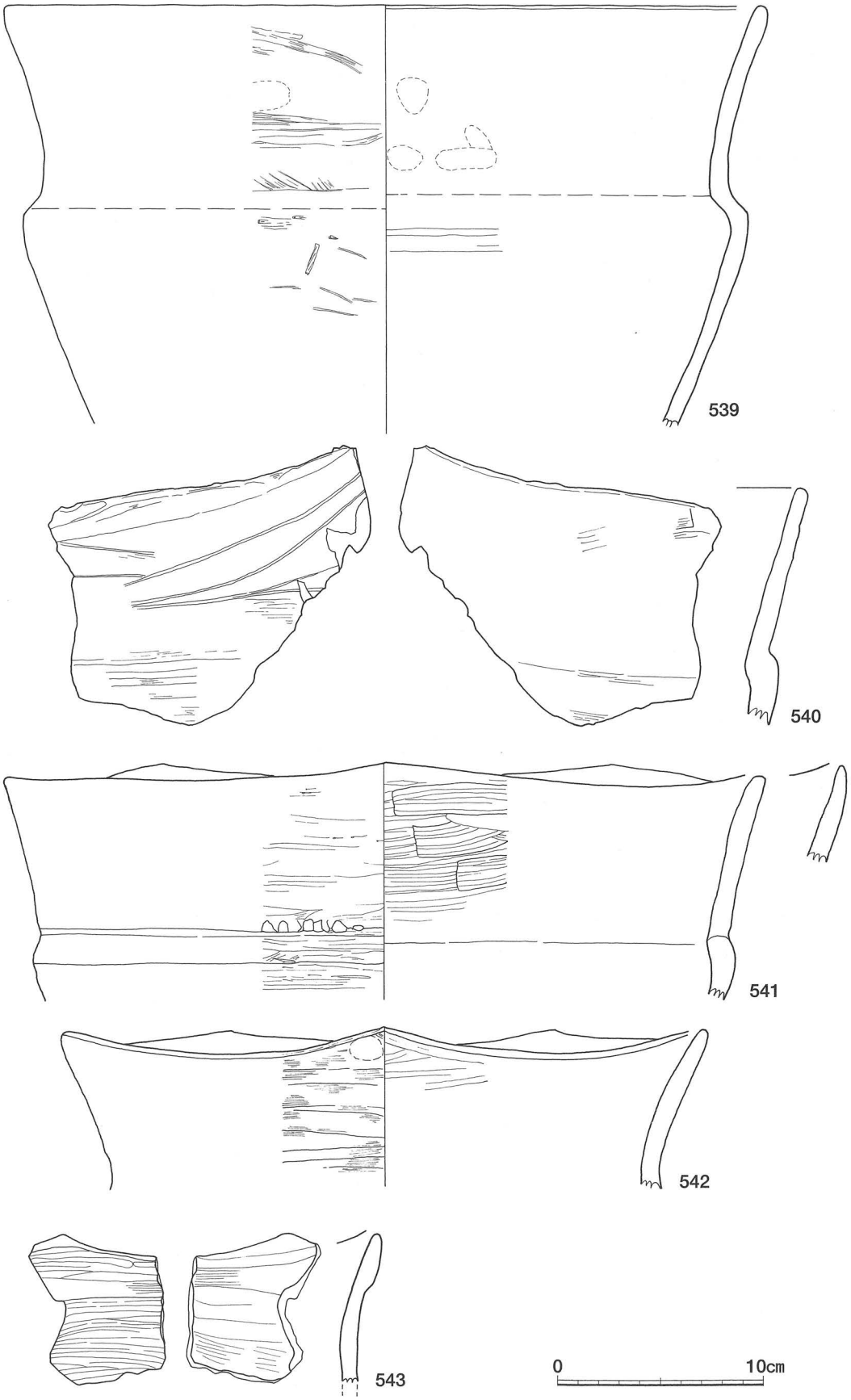


第102図　晩期土器 2





第103図　晩期土器 3



第104図　晩期土器 4

土器

Ⅲ～Ⅳ層にかけて，縄文時代晩期の土器がC・D－10・11区，C－12～17区，C・D－18～24区にかけて大量に出土した。

器形は，深鉢形土器・浅鉢形土器・椀形土器（まり）などであり，粗製土器・精製土器等がみられた。

521～532はリボン状の突起を付けたものである。521・522は外反する器形で，口縁部が長い土器である。頸部や肩部でそれぞれ「く」の字状に折れている。内外面ともナデ整形を施すものである。521のリボン状突起は縦位に，522は横位に施されている。

532は直口する口縁部をもつまり形土器である。

533～536は浅鉢形土器である。533・534は口縁部端部が丸みを帯び，口縁部外面に一条の沈線が施されている。口縁接合部の内面に僅かに稜線がみられる。内外面ともヘラ研磨で整形されている。

535・536も口縁端部が丸みを帯びているものである。

深鉢形土器

537～578は深鉢である。

537～539は口縁部が帯状に肥厚し，全体的に口縁部の口径が大きく開口したような器形で，口縁部が外反し，頸部や肩部がそれぞれ「く」の字状に折れるものである。

540～543は山形を呈する口縁部をもつもので，内外面ともナデ調整で整形を行っている。

544は口縁が直口し，口縁部が内弯するものである。口径は27cmを測る。内外面とも横位のヘラミガキ調整を行っている。

545は口縁部が短く「く」の字状に折れる器形のタイプである。横方向のナデ調整を行っている。復元口径は30.6cmを測る。

546は頸部と肩部が「く」の字状に直線的に折れるもので，外面は横方向のヘラナデで仕上げている。肩部口径は26.8cmを測る。

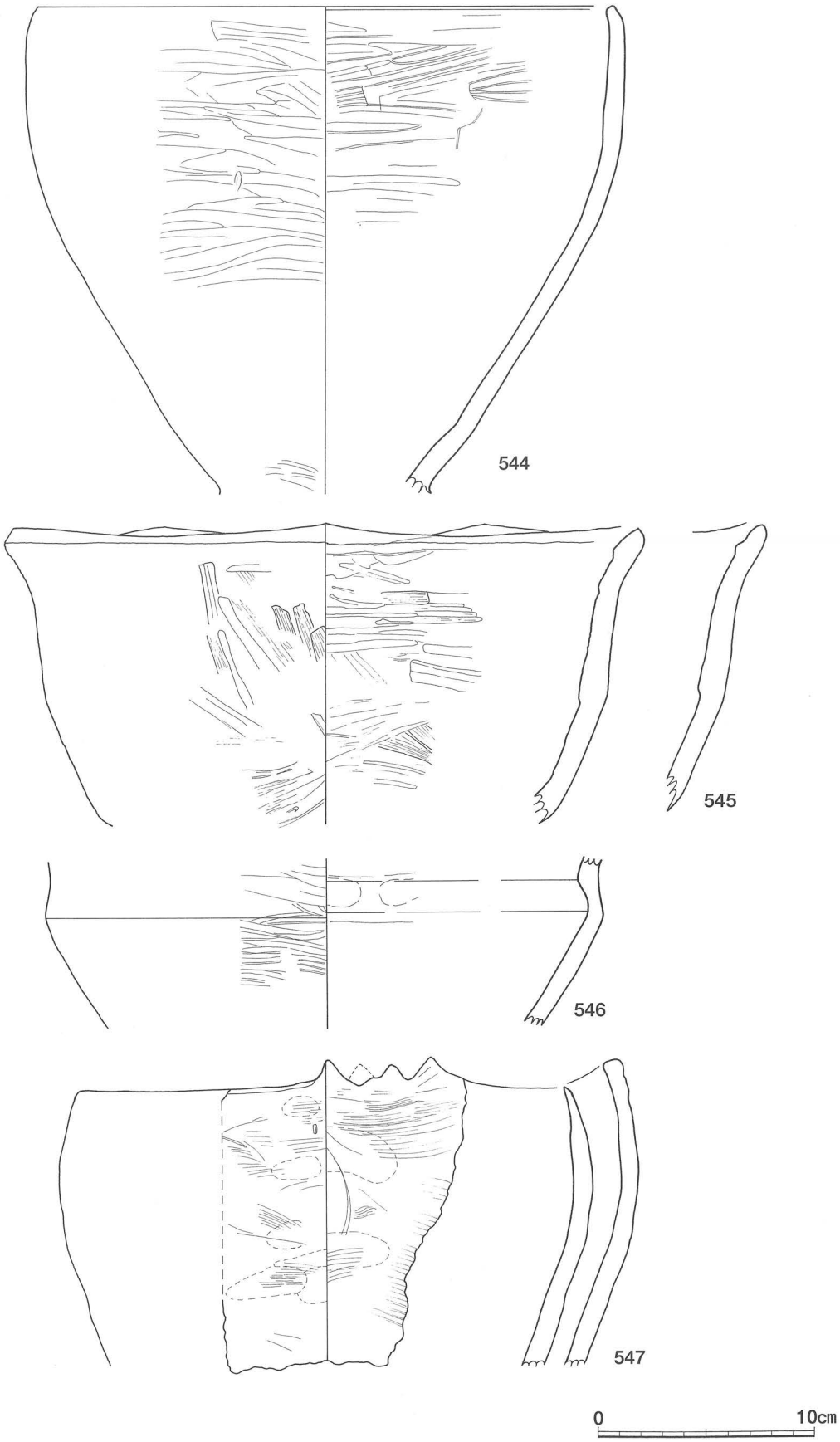
547は口唇部にやや小ぶりの山形突起を4個付したもので，復元口径23cmを測る。内外面ともナデ整形で調整している。

548～553は直口する口縁部をもつものである。外面はヘラミガキ，内面はヘラミガキ・ナデ整形を行っている。548・550は外面に煤が付着している。

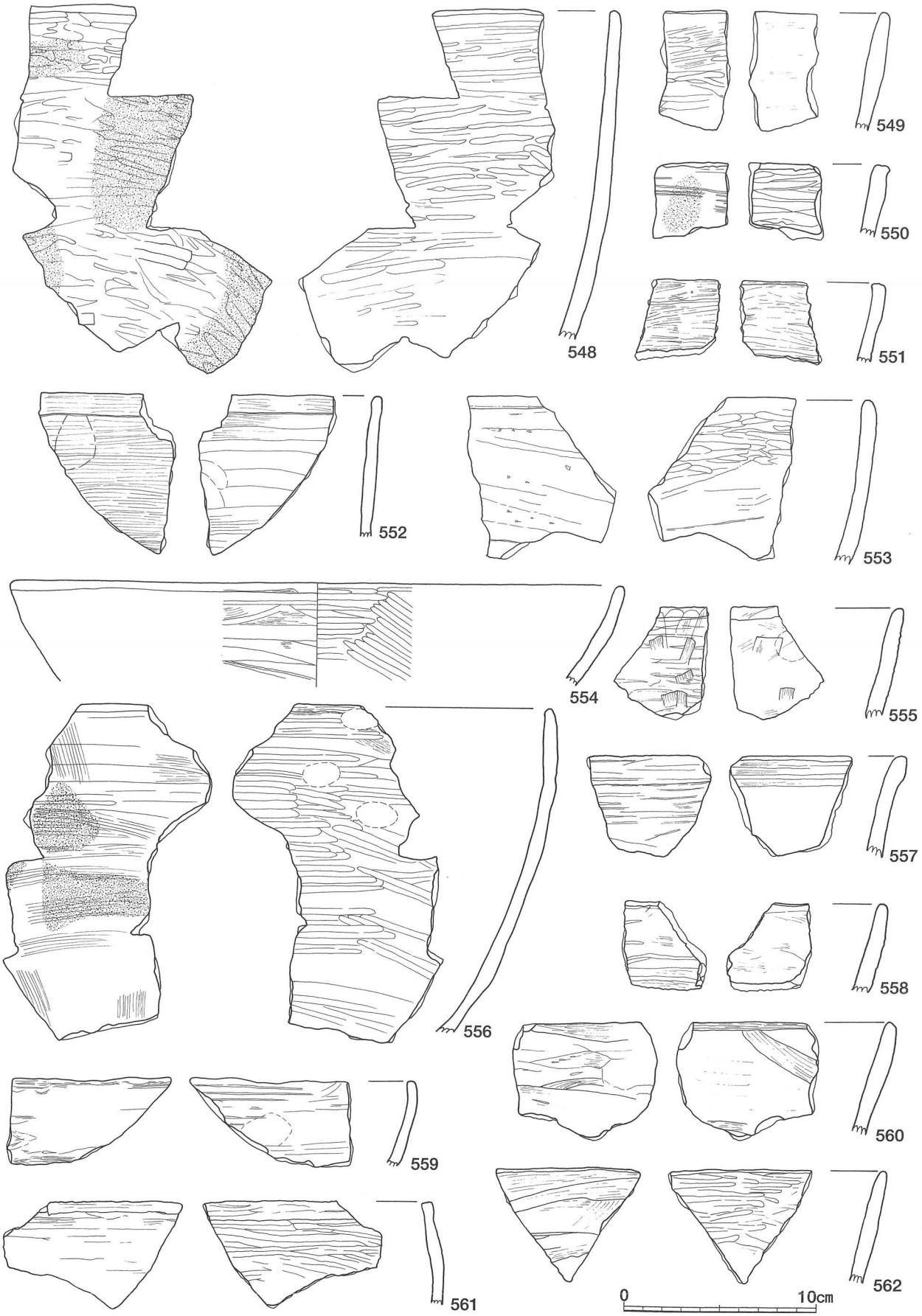
554～556は口縁部がやや内弯するもので，外面は横方向のヘラナデで仕上げ，内面はヘラミガキである。

563～569は外反する口縁部をもつものである。内外面ともナデ整形を行っている。

572は口縁部が内側に傾き，頸部は緩やかに内弯し，肩部から胴部にかけて「く」の字状に折れ，その径が口縁部より大きい形状を呈している。工唇部は平坦に調整している。内外面ともヘラミガキで仕上げている。



第105図　晩期土器 5


548
549
550
551
552
553
554
555
556
557
558
559
560
561
562
0
10cm

第106図　晩期土器 6

浅鉢形土器

579・580は頸部の口径の直径が33cm・28.5cmを測るものである。口唇部が玉縁状になり，肩部から口縁部にかけて立ち上がる，長い口縁部をもち，頸部で締まり肩部で「く」の字状に折れる器形を呈する。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

581は口径が35cmを測る大型の浅鉢形土器である。口唇部が玉縁状になり，肩部から口縁部にかけて立ち上がるもので，579・580よりやや寝る状態のものである。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

582・588・590は口縁部のみであるが，口唇部が低く玉縁が断面三角形状を呈する形状になるものである。復元口径は37cm・20cm・19.2cmを測る。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

583～585は口唇部が玉縁状になり，肩部から口縁部にかけて短く立ち上がるものである。復元口径は，それぞれ38cm・33cm・32.6cmを測る。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

586・587は口縁部の口唇部が玉縁状になり，口縁部が直口するものである。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。587の復元口径は31.2cmを測る。

589は口縁部が丸みをもちながら外反し，肩部で「く」の字状に折れる器形である。

591～598は口唇部が玉縁口縁で，肩部から口縁部にかけて短く立ち上がる精製された浅鉢形土器である。頸部で締まり，肩部で「く」の字状に折れる器形を呈する。復元口径は21.6cm～32.4cmを測る。内外面とも丁寧なヘラで研磨が施され調整されている。

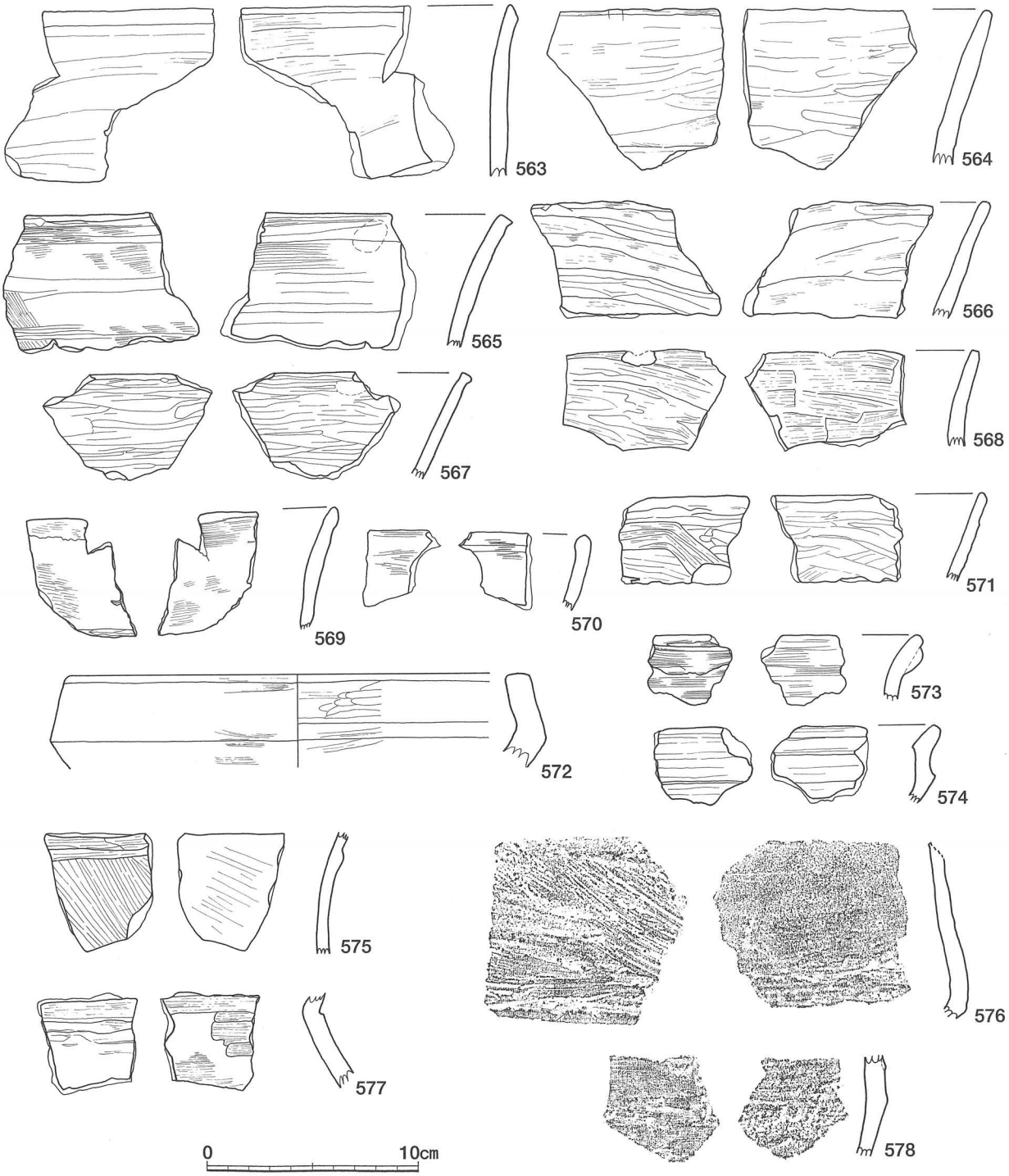
599はやはり口唇部が玉縁口縁であり，肩部が「く」の字状に折れる器形である。復元口径は24cmを測る。600も同様の玉縁口縁であり，復元口径は31.5cmを測る。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。

601～608は浅鉢形土器の口縁部である。いずれも玉縁口縁で外反している。内外面とも丁寧なヘラ研磨が施されている。608は口唇部に鰭状突起を付けている。

609～618は口縁部が玉縁口縁で，頸部が大きく「く」の字状に折れ，肩部から胴部にかけて半球状に曲がる形状の精製された浅鉢形土器である。復元口径は21cm～40.8cmを測る。内外面とも丁寧なヘラで研磨が施され調整されている。

610は内面に１条の浅い沈線がみられる。口縁接合部の内面に明瞭な稜をもつものや，接合部が丸みを帯びるものがある。

619～625も同様の口縁部である。


563
564
565
566
567
568
569
570
571
572
573
574
575
576
577
578
0
10cm

第107図　晩期土器７

626～628は深鉢である。

626・627は口縁部が外反し，頸部が「く」の字状に折れるものである。胴部最大幅が口縁寄りにあり，稜をなすものである。内外面ともナデ整形を行っている。復元口径28.2cm，25.5cmを測る。

629～632は鉢形土器である。深鉢と浅鉢の中間的な器高のものをまとめた。

629は口縁内側端部を肥厚させるものである。復元口径23cmを測り，外面はヘラケズリとナデ整形で調整し，内面はナデ整形を施している。630は口縁端部が平坦なもので，631は先細りするものである。復元口径18cm，22.5cmを測る。共のナデ整形で調整されている。

643・644は玉縁口縁をもつもので，復元口径19.5cm，21.2cmを測るもので，ナデ整形で鬼面調整を行っている。

645～649は玉縁口縁をもつ浅鉢形土器である。内外面とも丁寧なヘラナデが施されている。645は古墳時代の3号住居，647は6号住居から出土しているが，古墳時代の住居埋土に混入したものと思われる。

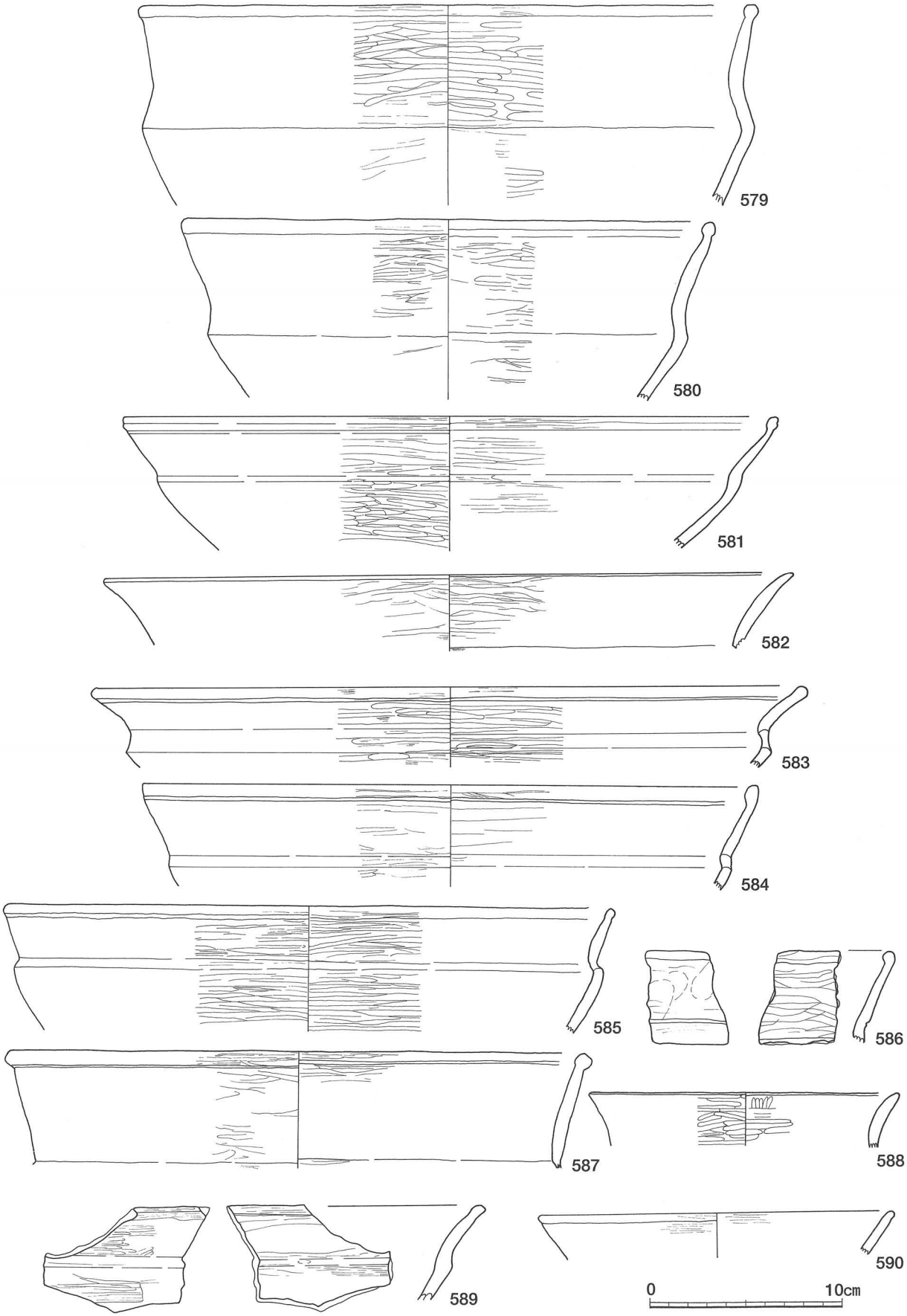
650は復元口径16cmを測る鉢形土器で，口縁端部が平坦で直口するものである。内外面とも丁寧なヘラミガキで器面調整が行われている。651・652も同様の口縁部である。

653・654・656・660は椀形土器（マリ）である。半球形の薄手で胴部が深い土器で，653は復元口径17cm，656は15cm，660は13cmを測る。いずれも丁寧なヘラミガキで器面調整が施され，653・656・660の外面には赤色顔料が付着している。

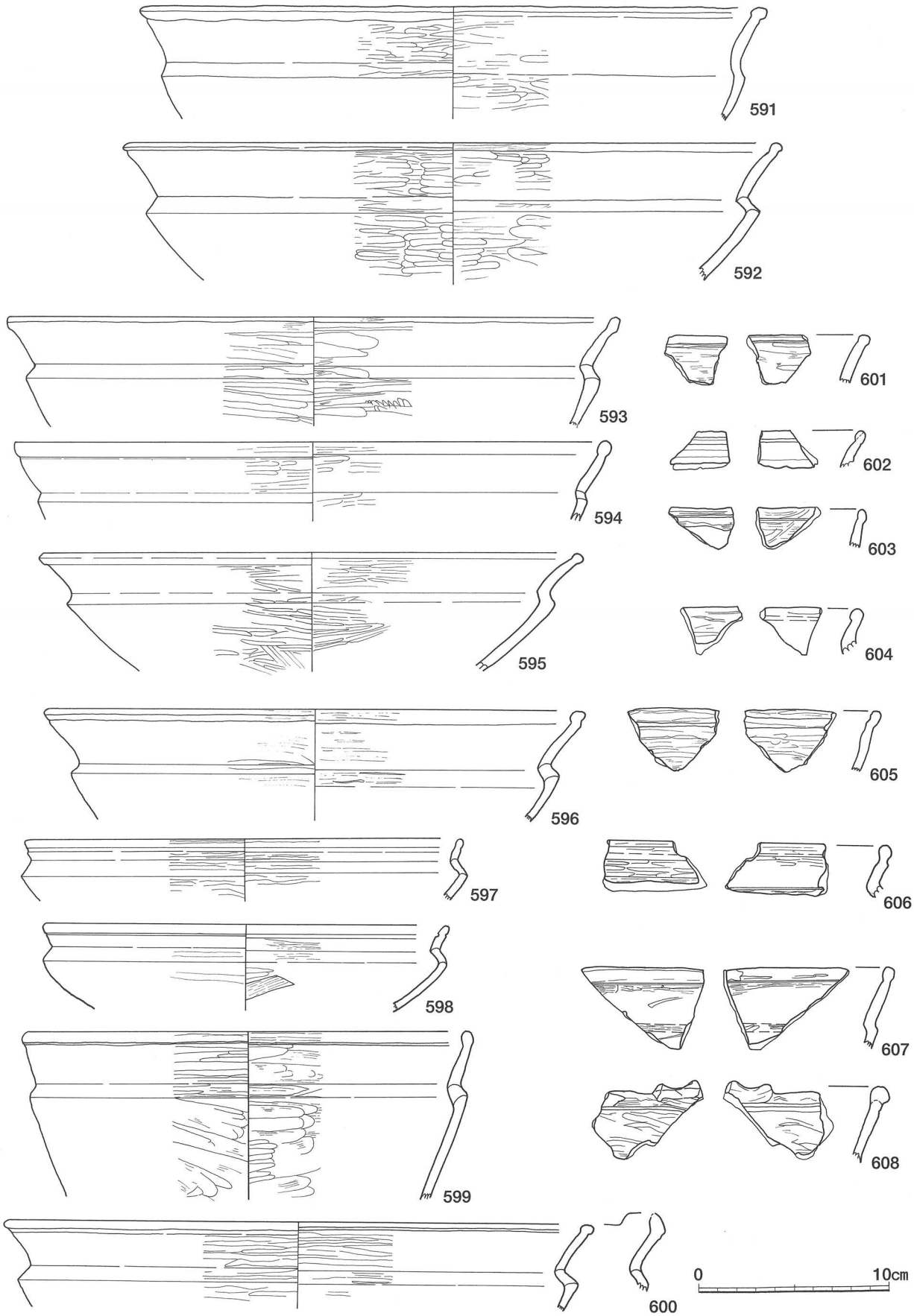
661～675は縄文時代晩期の土器底部である。深鉢形土器・浅鉢形土器など器種による分類が困難なため，ここでは一括して取り上げた。661は丸底であり，内外面とも丁寧なヘラ研磨が調整が施されていることから浅鉢形土器の底部の可能性がある。

662～675は平底である。662は上げ底気味の底部で，外開きの胴部に移行するものである。663～675は平底で，張り出しのみられる底部からすぐ外開きの胴部に移行するもの（662～672・674），接地面から僅かに立ち上がり外開きになるもの（673），上げ底気味で高台状の底部になる675がみられる。

676は組織痕土器である。組織痕土器には圧痕の種類として網目，席目，布目，籠目の4種類が知られているが，676は網目圧痕の組織痕土器である。網目の一節の長さは0.5cmを測る。



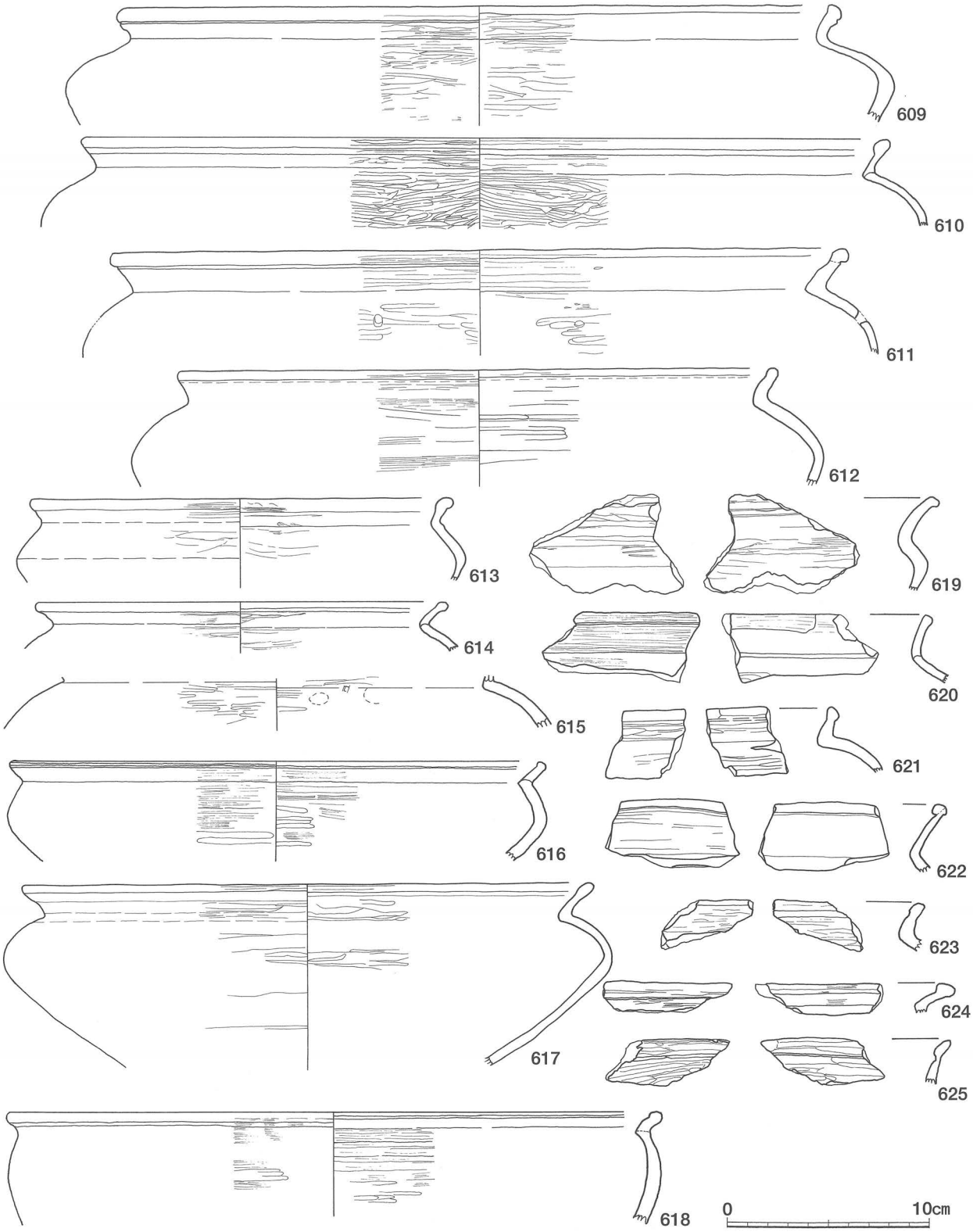
第108図　晩期土器 8


591
592
593
594
595
596
597
598
599
600
601
602
603
604
605
606
607
608
0
10cm

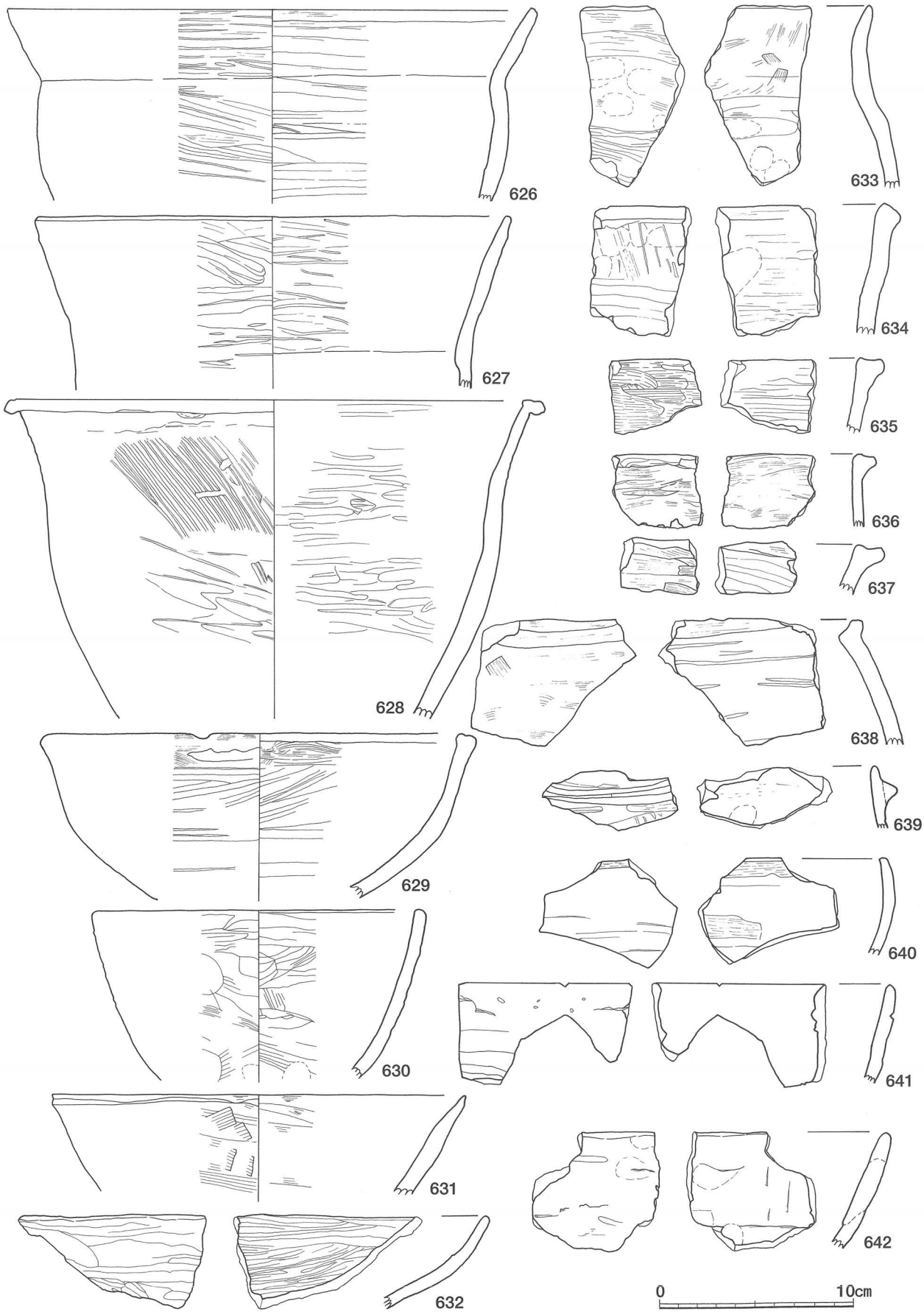
第109図　晩期土器 9

縄文時代晩期土器口縁部口径観察表

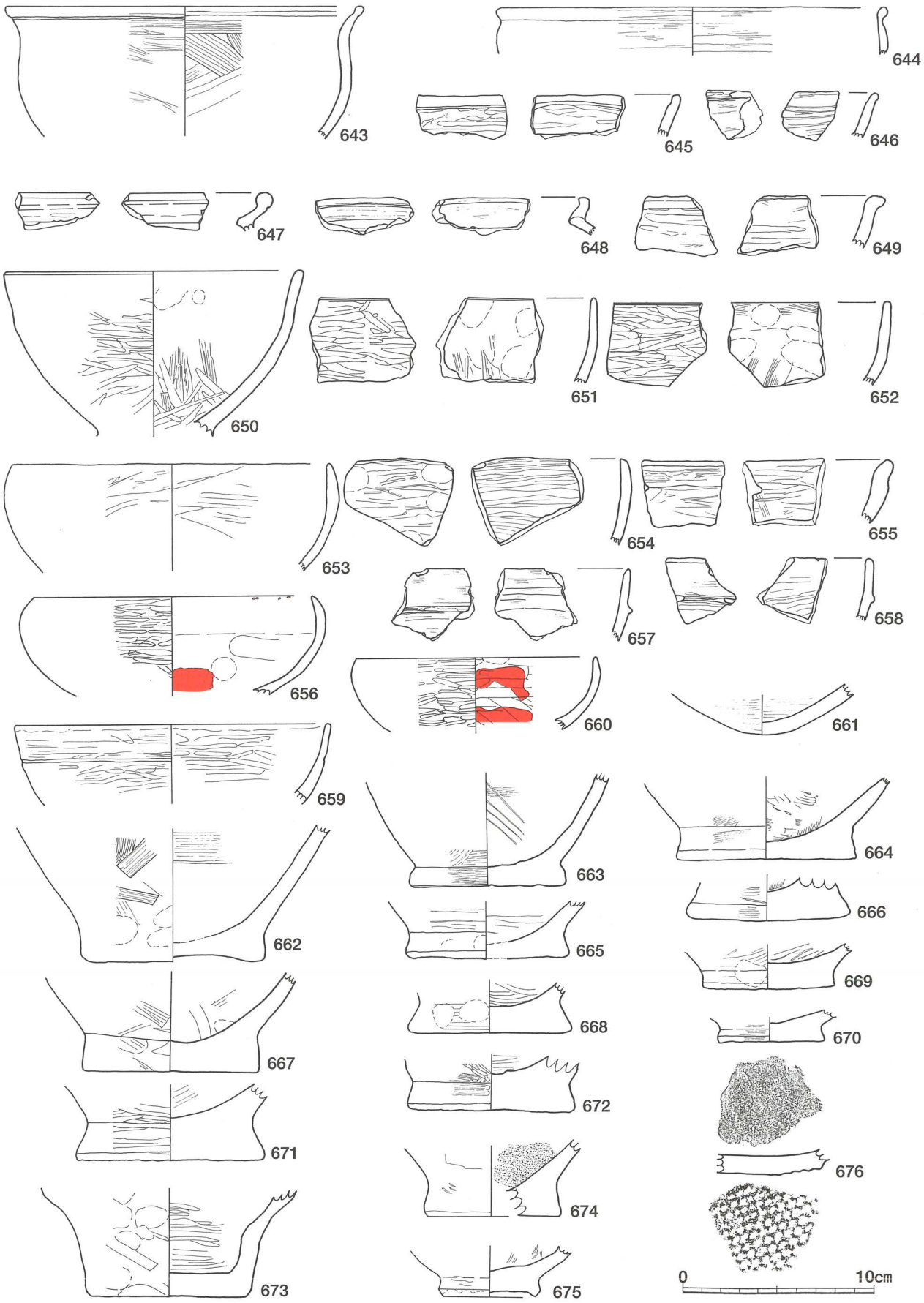
挿図番号	遺物番号	出土区	分　　類	口径(cm)	取上番号	備　　考
101	521	D−18・19	深鉢形土器	27.8	5350	リボン貼付け
	522	C−14	深鉢形土器	35.4	546	リボン貼付け
102	532	C−15	深鉢形土器	30.6	2498	
	533	C−18	浅鉢形土器	43.8	2398	
	534	C−12	浅鉢形土器	37.8	739	
103	537	B−13	深鉢形土器	44.1	1903	
	538	B−13	深鉢形土器	36.0	1420	
104	539	E−23	深鉢形土器	36.9	1194	
	541	C−13・14	深鉢形土器	36.6	1914	
105	544	C−18	深鉢形土器	27.0	7345	
	545	C−11	深鉢形土器	30.6	2709	
	547	D−19	深鉢形土器	23.0	7345	
106	554	D−22	深鉢形土器	32.4	8192	
107	572	E−23	深鉢形土器	22.5	1142	
108	579	C−23	浅鉢形土器	33.0	5136	
	580	C−23	浅鉢形土器	28.5	5130	
	581	D−20	浅鉢形土器	34.8	6130	
	582	C−20	浅鉢形土器	37.0	1915	
	583	C−18	浅鉢形土器	38.0	15	
	584	C・D−20	浅鉢形土器	33.0	16	
	585	C−14	浅鉢形土器	32.6	2546	
	587	E−23	深鉢形土器	31.2	2806	
	588	C−19	深鉢形土器	20.0	5596	
	590	C−22	鉢形土器	19.2	3433	
109	591	C−13	浅鉢形土器	33.0	1461	
	592	B−12	浅鉢形土器	35.1	1468	
	593	C−20	浅鉢形土器	32.4	6383	
	594	D−20	浅鉢形土器	31.5	6672	
	595	D−20	浅鉢形土器	28.8	12	
	596	C−16	浅鉢形土器	28.8	268	
	597	C−21	浅鉢形土器	23.1	6541	
	598	C−21	浅鉢形土器	21.6	6949	
	599	D−20	浅鉢形土器	24.0	6727	
	600	C−20	浅鉢形土器	31.5	1966	
110	609	C−23	浅鉢形土器	36.3	1574	
	610	D−22	浅鉢形土器	40.5	7971	
	611	D−19	浅鉢形土器	36.9	5657	穿孔あり
	612	D−21	浅鉢形土器	30.0	6647	
	613	C−14	浅鉢形土器	21.0	2134	
	614	D−21	浅鉢形土器	20.7	6992	
	616	C−20	浅鉢形土器	27.0	1963	
	617	D−19	浅鉢形土器	27.3	6300	
	618	C−21	浅鉢形土器	33.0	1840	
111	626	C−20	深鉢形土器	28.2	1951	
	627	C−20	深鉢形土器	25.5	1947	
	628	C−13	深鉢形土器	28.8	1978	
	629	C−16	浅鉢形土器	23.0	4617	
	630	C−14	鉢形土器	24.0	1901	
	631	C−19	鉢形土器	21.8	6477	
112	643	E−23	浅鉢形土器	19.2	1187	
	644	C−18	浅鉢形土器	21.0	2524	
	650	D−21	浅鉢形土器	16.2	160	
	653	D−21	浅鉢形土器	16.8	70	赤色顔料付着
	656	D−21	浅鉢形土器	15.0	64	赤色顔料付着
	659	E−24	鉢形土器	16.8		
	660	D−21	浅鉢形土器	12.8	31	赤色顔料付着



第110図　晩期土器10



第111図　晩期土器11



第112図　晩期土器12

第19表　縄文土器観察表（1）

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	分類	器種	調整 外面	調整 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	取上番号	備考
101	521	D18･D19	Ⅳa	深鉢	口～胴	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい赤褐色	5350他	突帯
	522	C14		深鉢	口～胴	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黄褐色	546他	リボン貼付け
	523	C23	Ⅳa	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	fl,qz	暗赤褐色	にぶい黄橙色	1589他	リボン貼付け スス付着
	524	D32	Ⅳa	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	qz	赤褐色	褐色	7182他	リボン貼付け
	525	D19	Ⅲb	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	qz	褐色	褐色	6291	リボン貼付け
	526	D20	Ⅳa	深鉢	胴部	工具ナデ		qz	黒褐色	褐色	6756他	リボン貼付け
	527	D18	Ⅲb	深鉢	胴部	貝殻条痕		fl,qz	にぶい橙色	明黄褐色	7309	リボン貼付け
	528	E23	Ⅳa	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	fl,qz	黒褐色	灰褐色	2845	リボン貼付け
102	529	C18		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	fl,礫	にぶい黄褐色	明褐色	2482	リボン貼付け
	530	D18		深鉢	胴部	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	5398	リボン貼付け
	531	C20	Ⅲb	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	qz	灰黄褐色	橙色	6332	リボン貼付け
	532	C15	Ⅳ	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	bi,fl,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	2498他	リボン貼付け
	533	C18	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	2398	
	534	C12	Ⅳ	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	739	
	535	C10	Ⅳa	鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	2289	
	536	C12	Ⅳa	鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	790	
103	537	B13	Ⅳ	深鉢	口～胴	ミガキ	ミガキ	qz	褐色	橙色	1903他	
	538	B13	Ⅳ	深鉢	口～胴	ナデ	ナデ	fl,qz	にぶい褐色	にぶい黄橙色	1420他	スス付着
104	539	E23	Ⅲb	深鉢	口～胴	ナデ	ナデ	qz	褐色	にぶい黄橙色	1194他	
	540	C13	Ⅳ	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	1317他	
	541	C13･14	Ⅳ	深鉢	口縁	ナデ	工具によるナデ	qz	赤褐色	黒褐色	1914他	
	542	C20	Ⅲb	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	浅黄色	2218他	
	543	C20	Ⅳa	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	橙色	2125他	
105	544	C18	Ⅳ	深鉢	口～胴	ナデ	工具ナデ	fl,qz	黒褐色	灰黄褐色	7345他	
	545	C11	Ⅳ	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	明黄褐色	にぶい橙色	2709他	
	546	D18	Ⅳa	深鉢	胴部	工具ナデ	ナデ	ho,qz	にぶい褐色	黒褐色	5711他	
	547	D19	Ⅳa	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	fl,qz	黒褐色	暗灰黄色	7345他	
106	548	C23･D22	Ⅳa,Ⅲb	深鉢	口～胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	5031他	スス付着
	549	D21	Ⅲb	深鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	fl,qz	褐色	褐色	6145	
	550	C16	Ⅳ	深鉢	口縁	ミガキ	ヘラミガキ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	2710	スス付着
	551	D20	Ⅲb	深鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	6763	
	552	C20	Ⅳa	深鉢	口縁	ナデ	ミガキ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	6386	条痕あり
	553		1住	深鉢	口縁	工具ナデ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	122	
	554	D22	Ⅳa	深鉢	口縁	ナデ	ミガキ	qz	黒褐色	褐色	8192他	
	555	D21	Ⅳa	深鉢	口縁	工具ナデ	ミガキ	qz	黒褐色	褐色	7204	
	556	C15･16	Ⅳ	深鉢	口～胴	ナデ	ミガキ	qz	黒褐色	褐色	274他	スス付着
	557	C22	Ⅳa	深鉢	口縁	ナデ	ミガキ	fl,qz	赤褐色	赤褐色	1743	
	558	D21	Ⅲb	深鉢	口縁	ナデ	ミガキ	qz	明赤褐色	明赤褐色	5986	
	559	D21	Ⅲb	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい橙色	6153	
	560	C20	Ⅳa	深鉢	口縁	ヘラケズリ	ナデ	qz,礫	にぶい褐色	黒褐色	2054	
	561	D18	Ⅳa	深鉢	口縁	ナデ	ミガキ	qz	灰褐色	にぶい褐色	5422	
	562	C19	Ⅲb	深鉢	口縁	ナデ	ヘラミガキ	qz	黒褐色	にぶい黄橙色	3545	
107	563	E23	Ⅲb	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	橙色	土器集中部	
	564	D21	Ⅲb	深鉢	口縁	工具ナデ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい褐色	6138	
	565	D19	Ⅲa	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい褐色	6227	
	566	C20	Ⅳa	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	2202	
	567	D22	3住	深鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい黄色	にぶい黄色	25	
	568	D22	3住	深鉢	口縁	ミガキ	ナデ	qz	黒褐色	暗灰黄色	19	
	569	D21	Ⅳb	深鉢	口縁	ミガキ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	6648	
	570	D21	Ⅳa	深鉢	口縁	ミガキ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	7208	
	571	D21	Ⅲb	深鉢	口縁	ヘラナデ	ヘラミガキ	qz	黒褐色	暗褐色	6189	
	572	E23	Ⅲb	鉢	口縁	ミガキ	ヘラミガキ	qz	明赤褐色	にぶい褐色	1142	
	573	C18	Ⅲb	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい黄橙色	3563	
	574	C16	Ⅳ	鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	205	
	575	C16	Ⅳ	深鉢	胴部	ヘラケズリ	ナデ	qz	にぶい褐色	黄褐色	206	
	576		3住	深鉢	胴部	ハケメ	ナデ	qz	橙色	にぶい黄橙色	100	
	577	E23	Ⅲb	深鉢	胴部	ケズリ	ハケメ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	1173	
	578		3住	深鉢	胴部	ナデ	ナデ	ho,qz	橙色	にぶい黄橙色	74	
108	579	C23	Ⅳa	浅鉢	口～胴	ナデ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	5136他	
	580	C23	Ⅳa	浅鉢	口～胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	5130他	
	581	D2	Ⅲb	浅鉢	口～胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6130	
	582	C20	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	明赤褐色	にぶい褐色	1915	
	583	C～D18･23	Ⅲb	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	一括	
	584	C･D20	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	暗灰黄色	暗灰黄色	16他	
	585	C14	Ⅳ	浅鉢	口～胴	ミガキ	ミガキ	qz	褐色	にぶい赤褐色	2546他	
	586	D21	Ⅳa	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	橙色	にぶい黄褐色	6997	
	587	E23	Ⅲb	深鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	2806	
	588	C19	Ⅳa	鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	暗褐色	黒褐色	5596	
	589	C16	Ⅳ	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	ハケメ	qz,ho	黒褐色	褐色	260他	
	590	C22	Ⅳa	鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	褐色	褐色	3433	
109	591	C13	Ⅳ	浅鉢	口～胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	褐色	1461他	
	592	B12	Ⅳ	浅鉢	口～胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	にぶい褐色	1468他	入佐
	593	C20	Ⅳa	浅鉢	口～胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6383他	
	594	D20･21	Ⅲb	浅鉢	口～胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	にぶい褐色	6672他	
	595	D20	5住	浅鉢	口～胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	12他	
	596	C16	Ⅳ	浅鉢	口～胴	ミガキ	ミガキ	qz,ho	黒褐色	暗灰黄色	268	
	597	C21	Ⅲb	浅鉢	口～胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6541	
	598	C21	Ⅳa	浅鉢	口～胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6949他	

第20表　縄文土器観察表（2）

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	分類	器種	調整 外面	調整 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	取上番号	備考
109	599	D20	Ⅲb	浅鉢	口～胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6727	
	600	C20	Ⅳa	浅鉢	口～胴	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	1966他	
	601	C18	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	にぶい橙色	2505	
	602	C13	3住	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	一括	
	603	D19	Ⅳa	浅鉢	口縁	横ナデ	ナデ	qz	黒褐色	褐灰色	5671	
	604	C21	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい褐色	褐灰色	1905	
	605	C16	Ⅳ	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	2396	
	606	D22	3住	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	61	
	607	D20	Ⅲb	浅鉢	口縁	ミガキ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	6730	
	608	C12	Ⅳ	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz,ho	暗灰黄色	灰褐色	742	
110	609	C23	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz,ho	灰黄褐色	褐色	1574他	入佐
	610	D22	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ		黒褐色	黒褐色	7971	
	611	D19	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	5657他	入佐　穿孔有り
	612	D21	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	6647	
	613	C14	Ⅳ	浅鉢	口縁	ミガキ	ナデ	fl,qz	黒褐色	暗灰黄色	2134	
	614	D21	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	褐灰色	6992他	
	615	D20	5住	浅鉢	胴部	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	褐灰色	褐灰色	37	
	616	C20	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	明赤褐色	にぶい黄色	1963	
	617	D19	Ⅲb	浅鉢	口～胴	ミガキ	ミガキ		黒褐色	暗灰黄色	6300他	
	618	C21	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ		黒褐色	黒褐色	1840	
	619	D20	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	褐灰色	6465	
	620	D19	Ⅳa	浅鉢	口縁	工具ナデ	工具ナデ	qz	明褐色	明褐色	5410	
	621	C16	Ⅳ	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	fl,qz	褐灰色	灰褐色	1193他	
	622	D21	4住	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	黒褐色	黒褐色	25	
	623	D18	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ		黒褐色	黒褐色	5718	
	624	D21	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ		黒色	黒色	6058	
	625	D18	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ		褐灰色	褐灰色	5362	
111	626	C20	Ⅳa	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	1951	
	627	C20	Ⅳa	深鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	褐灰色	1947他	
	628	C13･15	Ⅳ	甕	口縁	工具ナデ	工具ナデ	qz	黒褐色	褐灰色	1978他	
	629	C16	Ⅳ	浅鉢	口縁	ケズリ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	4617	
	630	C14	Ⅳ	鉢	口縁	工具ナデ	工具ナデ	qz,ho	橙色	褐灰色	1901他	
	631	C19	Ⅲb	鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz,礫	黒褐色	にぶい橙色	6477	
	632	C20	Ⅳa	鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	暗赤褐色	にぶい赤褐色	1919	
	633	C20	Ⅳa	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	黒褐色	2130他	
	634	D21	Ⅳa	甕	口縁	ケズリ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	6680	
	635	C14	Ⅳ	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	灰褐色	にぶい褐色	540	
	636	C21	Ⅲb	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒色	にぶい赤褐色	6542	
	637	B15	Ⅳ	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	褐色	明褐色	432	
	638	C16	Ⅳ	甕	口縁	工具ナデ	工具ナデ	qz	灰褐色	黒褐色	1775	
	639	C22	Ⅳa	鉢	口縁	ナデ	ハケメ	qz,礫	黒褐色	褐色	1719	
	640	C21	Ⅲ	鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい黄橙色	6530	
	641	D21	4住	鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz,礫	にぶい橙色	褐灰色	139他	
	642	D21	Ⅳa	鉢	口縁	工具ナデ	ナデ	qz,礫	橙色	にぶい黄褐色	6602	
112	643	E23	Ⅲb	浅鉢	口～胴	工具ナデ	工具ナデ	qz	にぶい褐色	黒褐色	1187	
	644	C18	Ⅳa	浅鉢	口縁	工具ナデ	工具ナデ	qz,ho	にぶい黄橙色	褐灰色	2524他	
	645	C16	Ⅳ	浅鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	明赤褐色	2387	
	646	D22	3住	浅鉢	口縁	ミガキ	工具ナデ	qz	明褐色	にぶい褐色	33	
	647		6住	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	ナデ	fl,qz	にぶい褐色	にぶい褐色	一括	
	648	C21	Ⅳa	浅鉢	口縁	ナデ	ナデ	ho,qz	橙色	橙色	1855	
	649	D20	Ⅲb	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	褐灰色	にぶい褐色	6764	黒色磨研
	650	D21	4住	浅鉢	口～胴	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	黒褐色	にぶい赤褐色	160他	
	651	D21･22	4住	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	明赤褐色	明赤褐色	146	
	652	D21･22	4住	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	指ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	90	
	653	D21･22	4住	浅鉢	口～胴	ヘラミガキ	ナデ	qz	にぶい褐色	黒褐色	70	丹の付着
	654	D21	Ⅳa	浅鉢	口縁	工具ナデ	工具ナデ	qz	黒色	橙色	6589	
	655	E23	Ⅲb	浅鉢	口縁	ナデ	ナデ	qz	橙色	橙色	713	
	656	D21	4住	浅鉢	口～胴	ヘラミガキ	ヨコナデ	qz	黒色	黒褐色	64他	赤色顔料付着
	657	D22	Ⅳa	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい赤褐色	にぶい黄橙色	5864	
	658	D22	Ⅲb	浅鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	ho,qz	にぶい赤褐色	明黄褐色	5854	
	659	E24	表層	鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		
	660		4住	浅鉢	口縁	ヘラミガキ	指ナデ	ho,qz	黒色	にぶい黄褐色	31他	赤色顔料付着
	661	C18	Ⅳa	浅鉢	底部	ミガキ	ミガキ	fl,qz	黒色	黒褐色	2515	
	662	C18	Ⅳa	甕	底部	工具ナデ	工具ナデ	qz,礫	にぶい橙色	にぶい橙色	2453他	
	663	D21	Ⅲb･Ⅳa	甕	底部	ナデ	ハケメ	ho,fl,qz,礫	にぶい黄橙色	灰黄褐色	6625他	
	664	C18	Ⅳa	甕	底部	ハケメ	工具ナデ	fl,qz	橙色	橙色	2363	
	665	C20	Ⅳa	甕	底部	工具ナデ	ナデ	qz	灰黄色	明黄褐色	2049他	
	666	C22	Ⅳa	甕	底部	ナデ	工具ナデ	fl,qz,礫	明赤橙色	明赤褐色	1735	
	667	C20	Ⅳa	甕	底部	ナデ	ナデ	qz,礫	橙色	浅黄色	5269	
	668	D20	Ⅳa	甕	底部	指ナデ	ナデ	qz	浅黄色	浅黄色	8134	
	669	C22	Ⅳa	甕	底部	工具ナデ	ナデ	qz,礫	橙色	にぶい橙色	5262	
	670	C21	Ⅳa	甕	底部	ナデ	ナデ	fl,qz	にぶい黄橙色	にぶい橙色	3372	
	671	C18	Ⅳa	甕	底部	工具ナデ	ナデ	qz,礫	にぶい橙色	明黄褐色	2409	
	672	C20	Ⅳa	甕	底部	工具ナデ	ナデ	fl,qz	にぶい赤褐色	にぶい褐色	3228	
	673	C12	Ⅳa	甕	底部	ナデ	ナデ	qz	明黄褐色	灰黄色	2744	
	674	D22	3住	甕	底部	工具ナデ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい黄橙色	24他	炭化物付着
	675	E23	表層	壺	底部	ナデ	工具痕	qz,ho	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		
	676		5住	甕	底部	筵圧痕		ho,fl,qz	浅黄橙色	暗灰黄色	38	筵圧痕文

石器

北原中遺跡のⅢ・Ⅳ層からは縄文晩期の土器と共伴して，石鏃・スクレイパー・石錐・石核・磨製石斧・打製石斧・凹石・敲石・磨石・軽石製品などが出土した。

石材は黒曜石・頁岩・安山岩・チャート・瑪瑙・花崗岩・砂岩などであり，黒曜石は肉眼的観察により県内産の三船・上牛鼻・平木場，県外産の腰岳・椎葉川などがみられた。

石鏃（第115図，677～702）

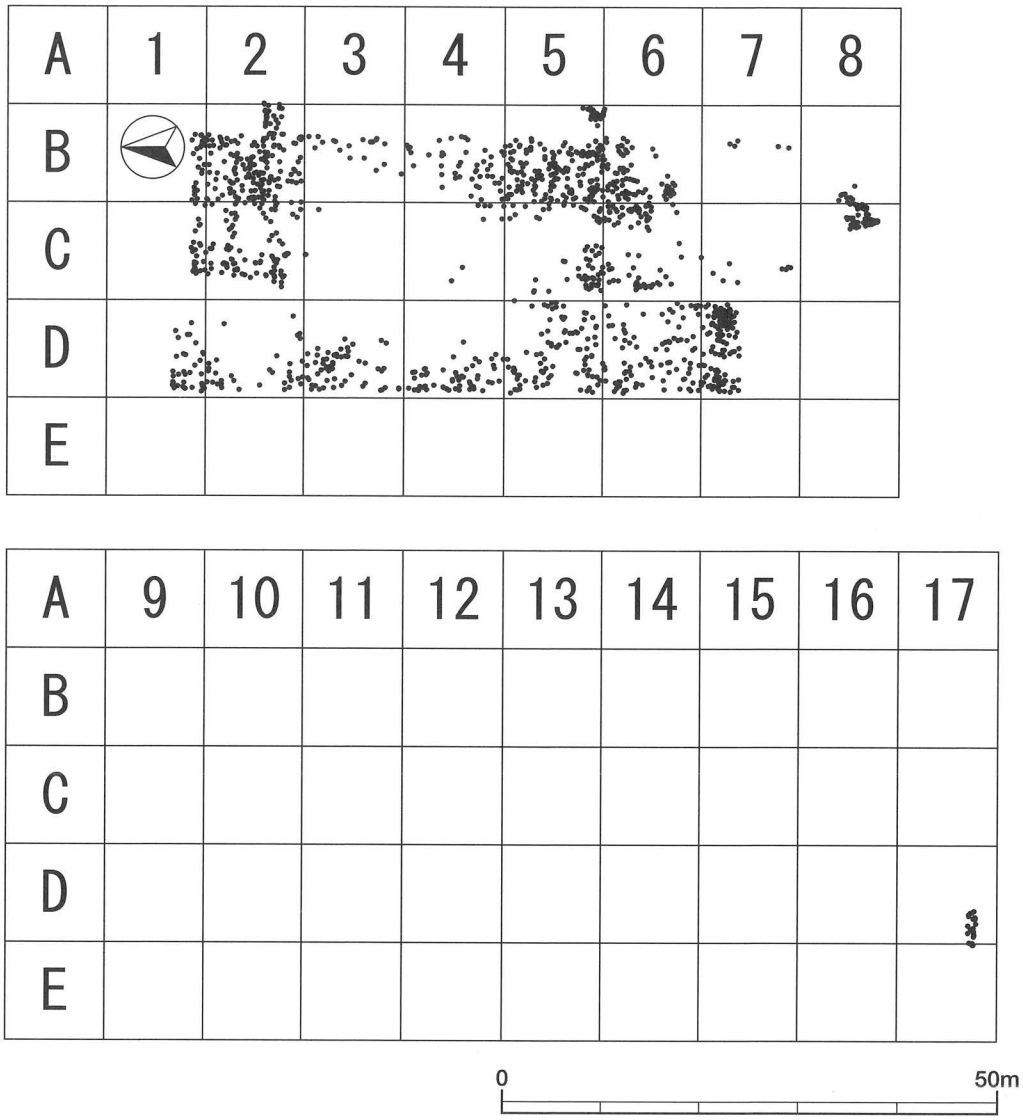
北原中遺跡の4層からは，17点の石鏃が出土した。様々な素材が用いられており，五角形鏃が9点，平基鏃が5点その他形状の石鏃が3点と3タイプに分類し，鷲ヶ迫遺跡同様の分類を行った。

677と678は黒曜石を用いており，677は三船産黒曜石，678は椎葉川産黒曜石を素材としている。677はやや小型で，左側辺がわずかに鋸歯状を呈している。678は，側辺が外弯し，張り出しがあまり目立たない。右側辺は鋸歯状の調整剥離が施されている。679は頁岩を用いている。側辺が直線的で，わずかに鋸歯状を呈する。逆刺はやや丸く，側辺下部に張り出しを持つ。680・681はハリ質安山岩を用いている。680は側辺が弯曲し，側辺下部に張り出しを持つ。逆刺はするどい。681は側辺の上部に張り出しが作られ，逆刺は鈍く，粗いタッチで調整が施されている。682は，暗緑灰色のチャートを用いている。側辺がわずかに内弯し，下部に張り出しをもつ。逆刺は丸く鈍い。683・684は安山岩を用いている。683は脚部付近の側辺に，深い剥離を施し張り出しを作っている。粗いタッチの剥離により，側辺に鋸歯状を呈している。684は，側辺下部にごくわずかな張り出しがみられる。側辺は直線的で逆刺は丸い。685は淡黄色の瑪瑙を用いているが，上部は欠損している。側辺中央部に張り出しを呈するが，左右非対象である。五角形鏃は逆刺に若干の差がみられるが，いずれも浅く，広い抉りを呈している。686～691は平基鏃である。686・688は玉髄を用いている。686は粗く調整剥離が施されており，側辺は不規則な波状を呈している。逆刺は鈍く丸い。

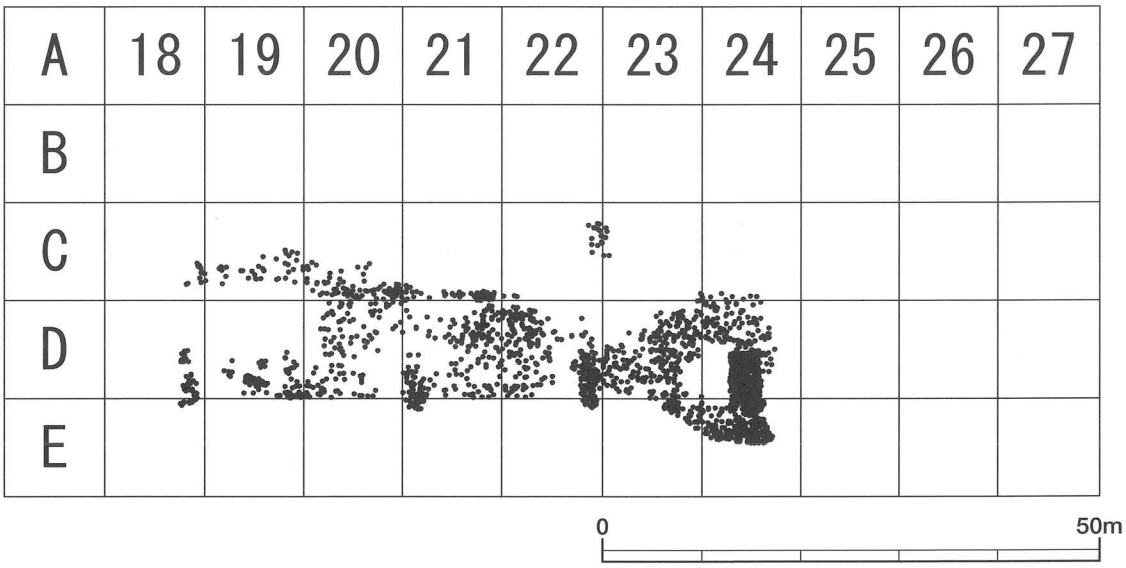
688はほぼ正三角形を呈しており，側辺はわずかに外弯する。調整痕により鋸歯状を思わせる。687はハリ質安山岩を用いている。側辺の中央部にわずかな角が入り，五角形鏃を思わせる形態である。逆刺は丸い。689・691は先端部が欠損している。いずれも安山岩を用いている。689は大まかな調整により側辺が作られており，やや外弯する。鋸歯状を呈しているように見える。691はやや小型で，側辺の中央部から大きく外弯している。その他の形状の石鏃は，690・692・693の3点である。690は安山岩を用いやや厚みがある。側辺が外弯し逆刺は丸い。抉りが2箇所の剥離によって浅く作られており，アルファベットの「M」を呈している。692は安山岩を用いており，先端部が欠損したものである。側辺部が直線状を呈しているが，左右の脚部に大きく差がみられる。693は上牛鼻産黒曜石を用いている。側辺が直線を呈し，先端部が欠損しているようにみえるが，細かな調整剥離により，逆刺が形成されていることが観察された。右脚部が欠損している。

Ⅲ層からは9点の石鏃が出土した。鋸歯状のもの1点，五角形鏃6点，欠損品2点である。

694は頁岩を用いたやや厚みのあるものである。側辺が内弯し，表裏からの調整剥離により，わずかに鋸歯状を呈する。抉りは浅く大まかな剥離によって不規則につくられている。695～699は五角形鏃である。695～697は，浅い抉りの入ったものである。いずれも暗青灰色のチャートを用いている。側辺部が直線状を呈し，695は張り出しが特に強い。698・699は平基の五角形鏃である。698は，暗緑色のチャート，699はハリ質安山岩を用いている。側辺部での調整が粗く，わずかに張り



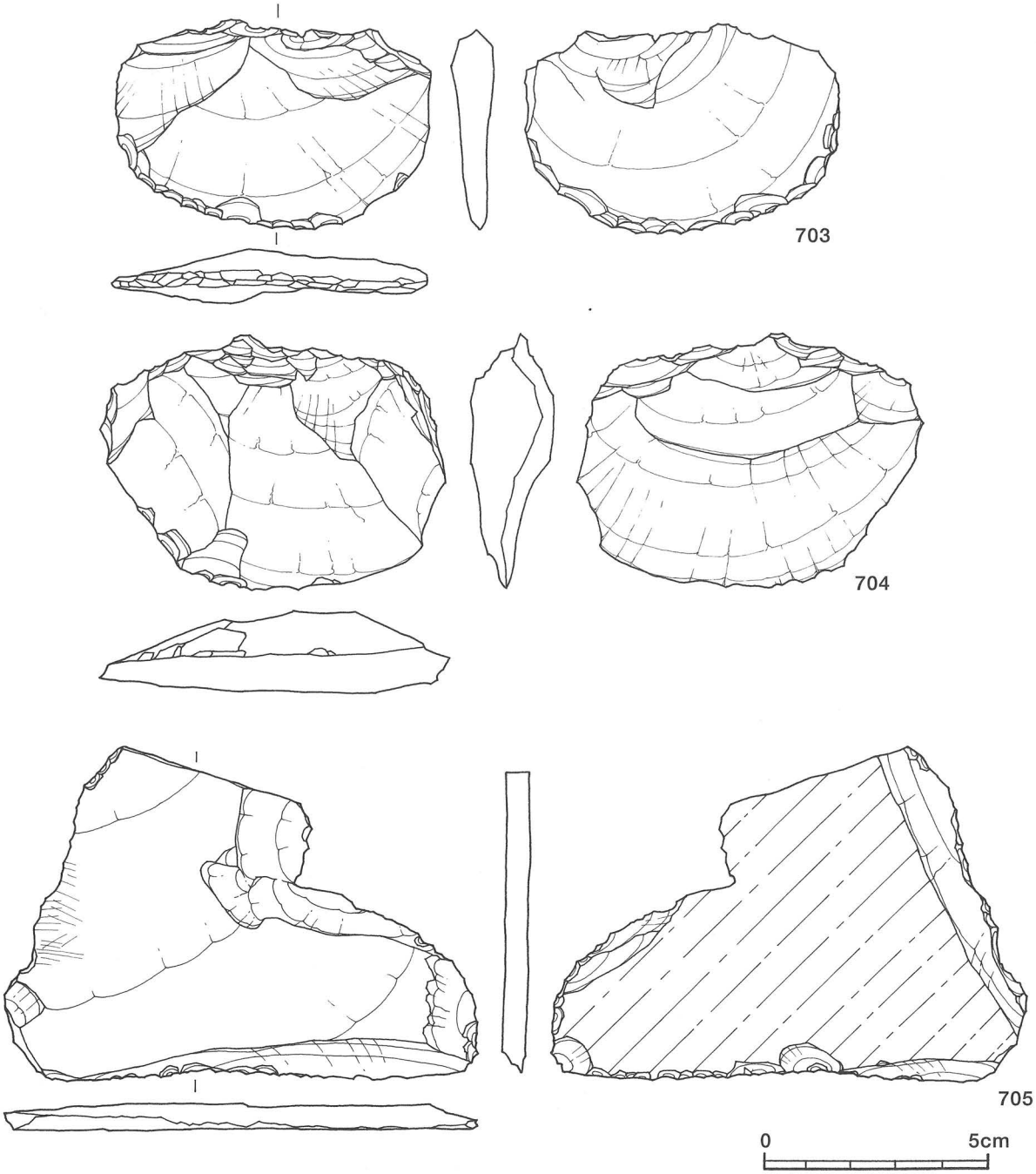
第113図　石器出土状況（1）



第114図　石器出土状況（2）

677
678
679
680
681
682
683
684
685
686
687
688
689
690
691
692
693
694
695
696
697
698
699
700
701
702
0
5cm

第115図　石鏃

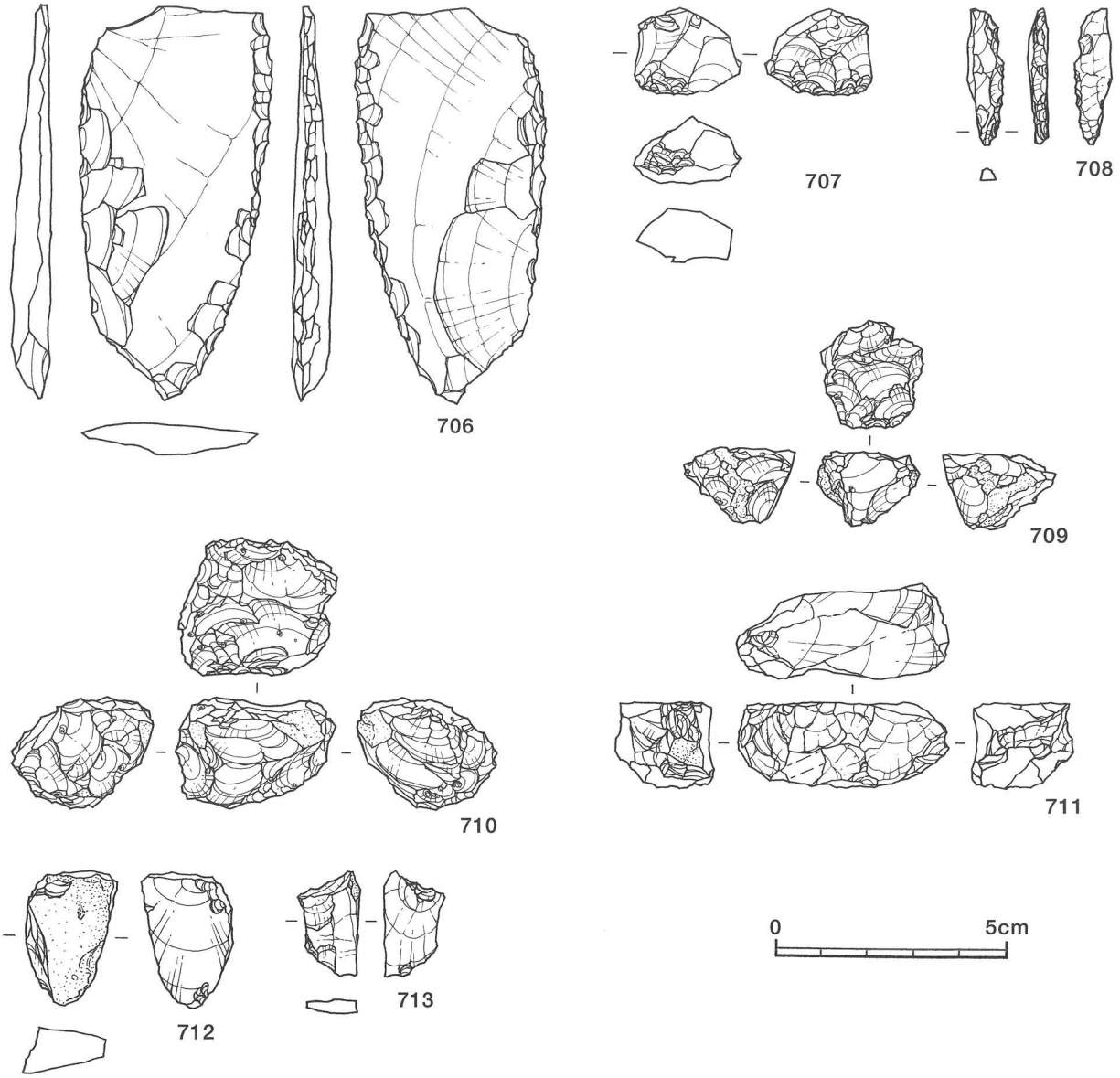


第116図　スクレイパー（1）

出しを持つ。いずでも逆刺は丸い。700～702は欠損品である。700は桑ノ木津留産黒曜石を素材とし先端部が欠損している。調整が粗く側辺が不定形である。浅く抉りが入り，断面に厚みがある。701は乳白色の瑪瑙を用いた先端部のみ残るものである。側辺が外弯し逆刺が丸い。調整が粗く，右側辺には階段状の剥離がみられる。702は，三船産黒曜石を用い，左脚部を欠損したものである。側辺が外弯し，上部は鋸歯状を呈する。

スクレイパー（第116・117図，703～706）

4点出土した。頁岩を用いたもの3点，粘板岩1点である。厚みは薄く幅広の剥片を用いている。703・704は半円に近い形状の横長剥片を用いている。いずれも右側辺から下辺，右側辺にかけて刃



第117図　スクレイパー（2）・二次加工剥片・石錐

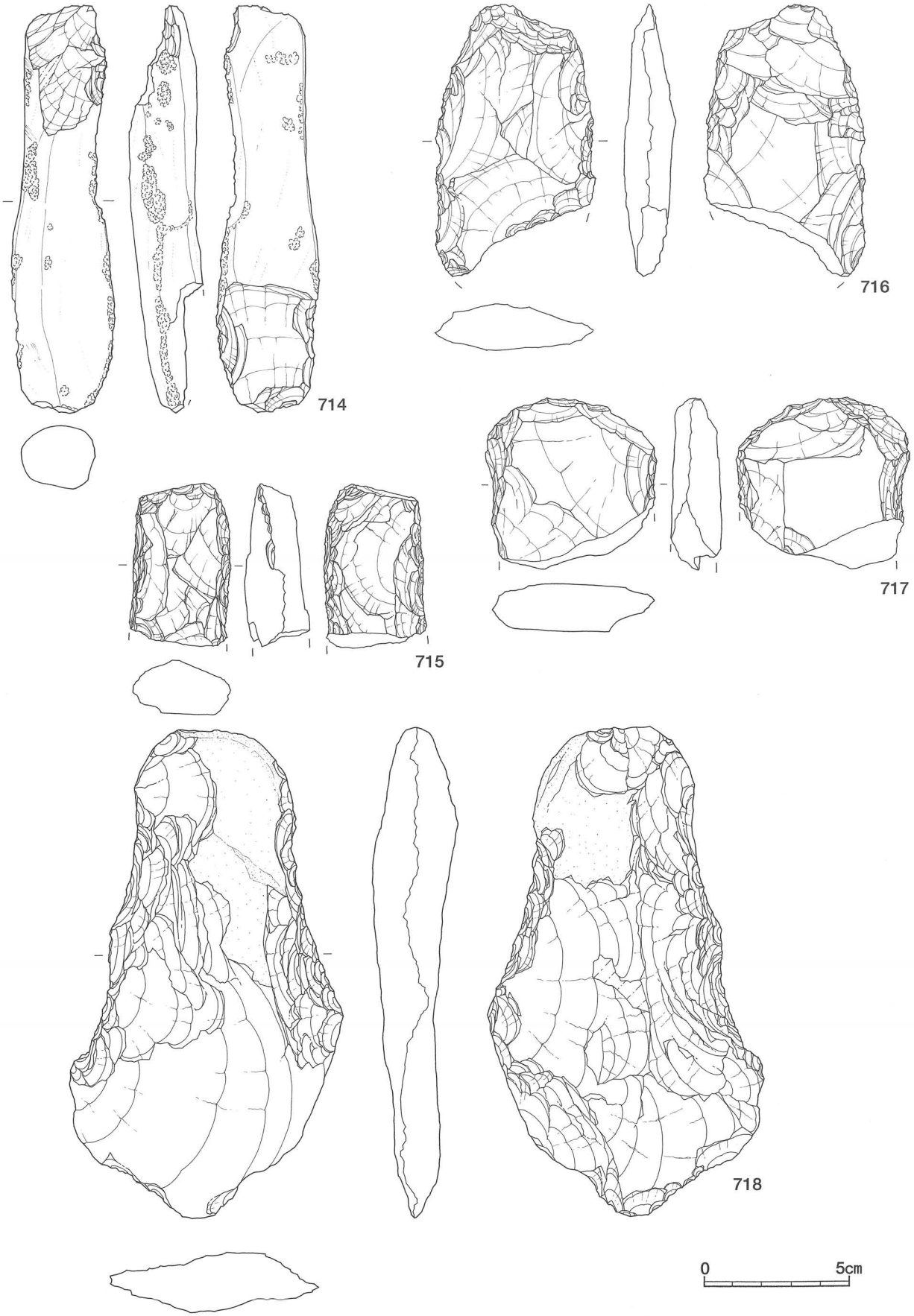
部が形成されており，703は表裏から704は裏面からの調整によるものである。705は，幅の広い粘板岩の縦長剥片を用い，表面には，サビを含む節理面を有する。下辺に表裏からの調整により，刃部が作られる。706は黒色頁岩の横長剥片を縦位に用い，両側辺に刃部を有するものである。連続性のある表裏からの調整によって刃部が形成され，また右側辺に使用痕がみられる。

二次加工剥片（第117図，707）

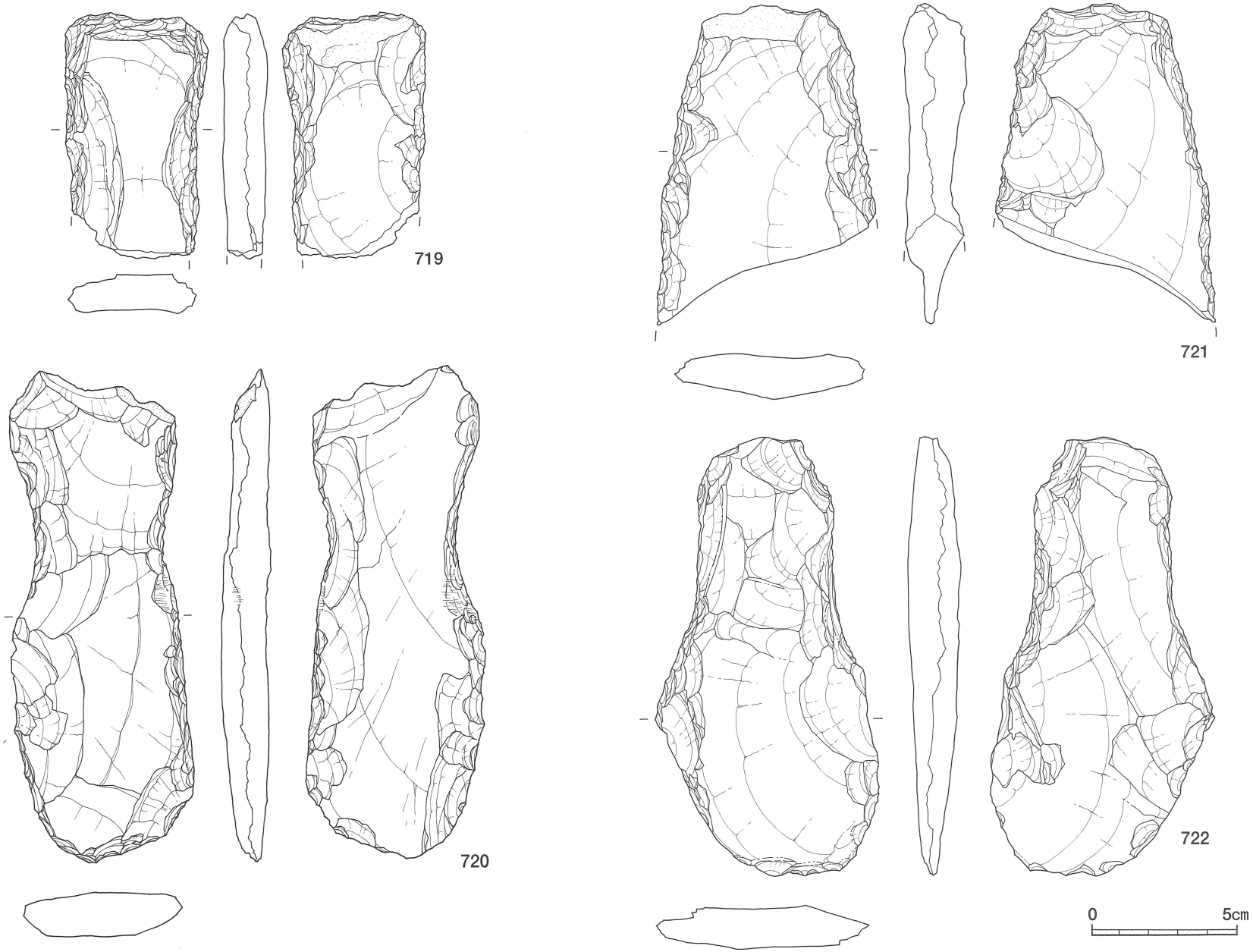
１点出土した。節理面を有する玉髄を用いており，下辺に階段状の剥片がみられる。使用痕と思われるつぶれがみられ，スクレイパーの可能性も考えられる。

石錐（第117図，708）

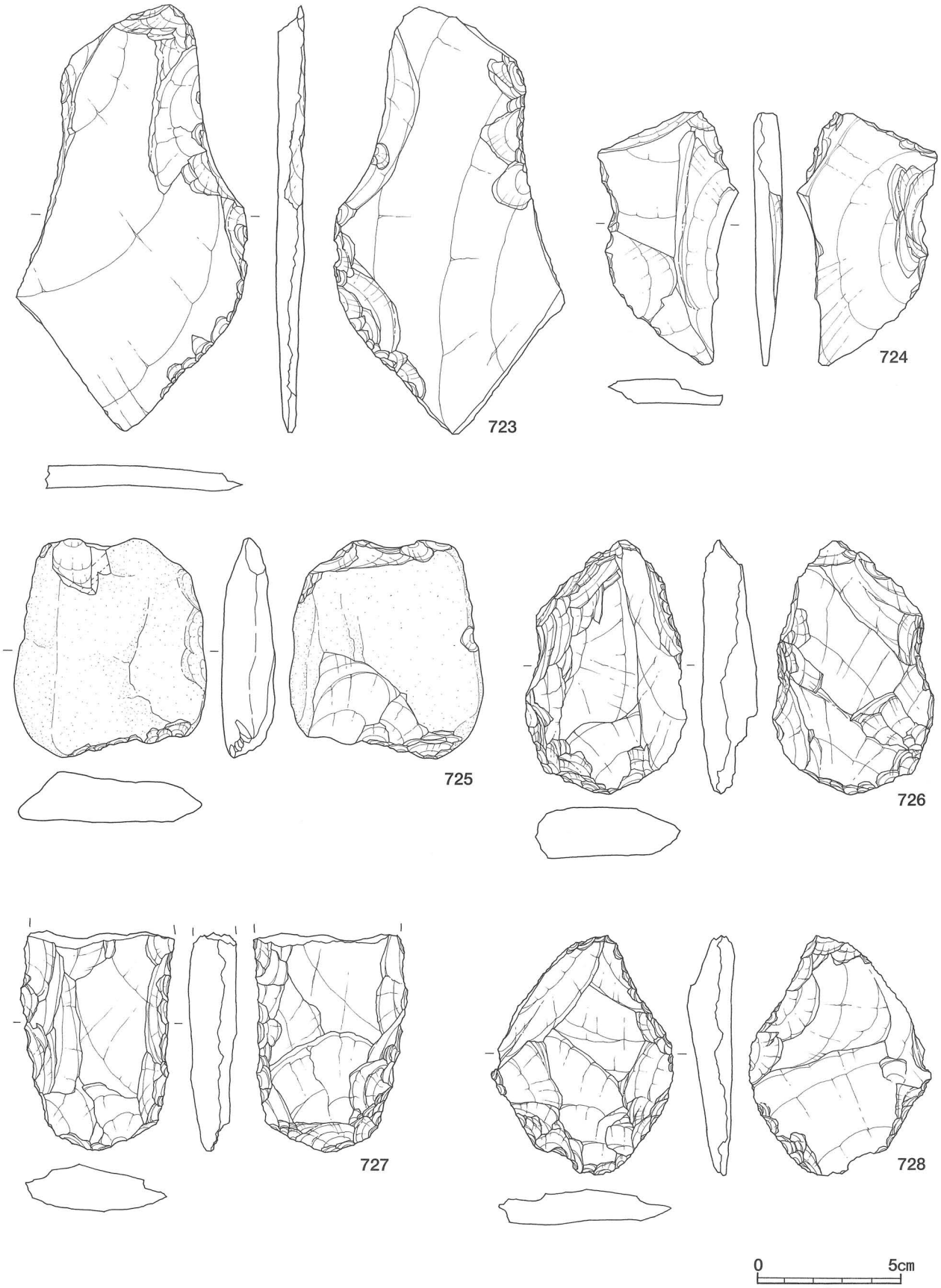
１点出土した。灰色のチャートの縦長剥片を用いており，錐部に細かな調整がみられる。左側辺は切断されており，右側辺には裏面からの調整剥離によりスクレイパーのような刃が形成されている。転用品の可能性がある。



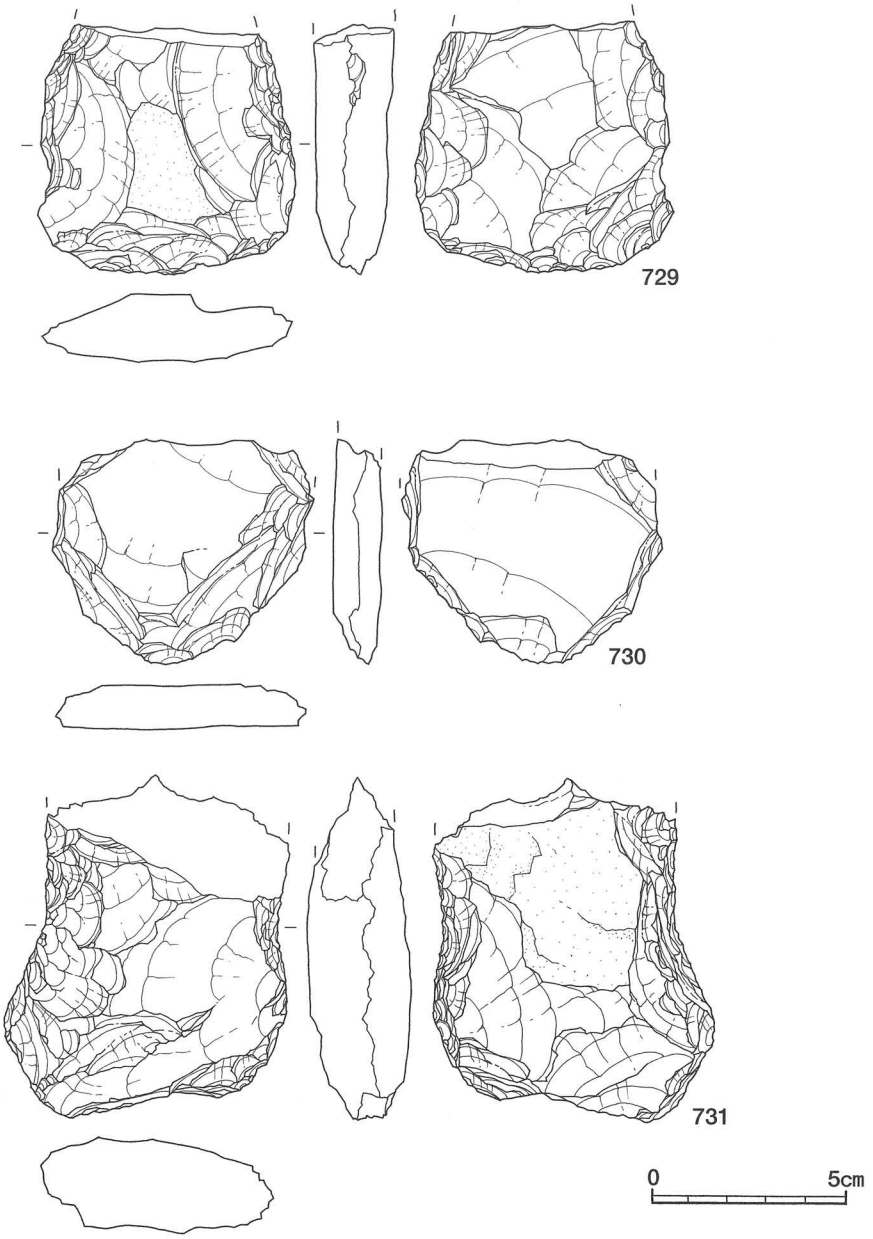
第118図　磨製石斧・打製石斧（1）



第119図　打製石斧（2）



第120図　打製石斧（3）



第121図　打製石斧（4）

石核（第117図，709～711）

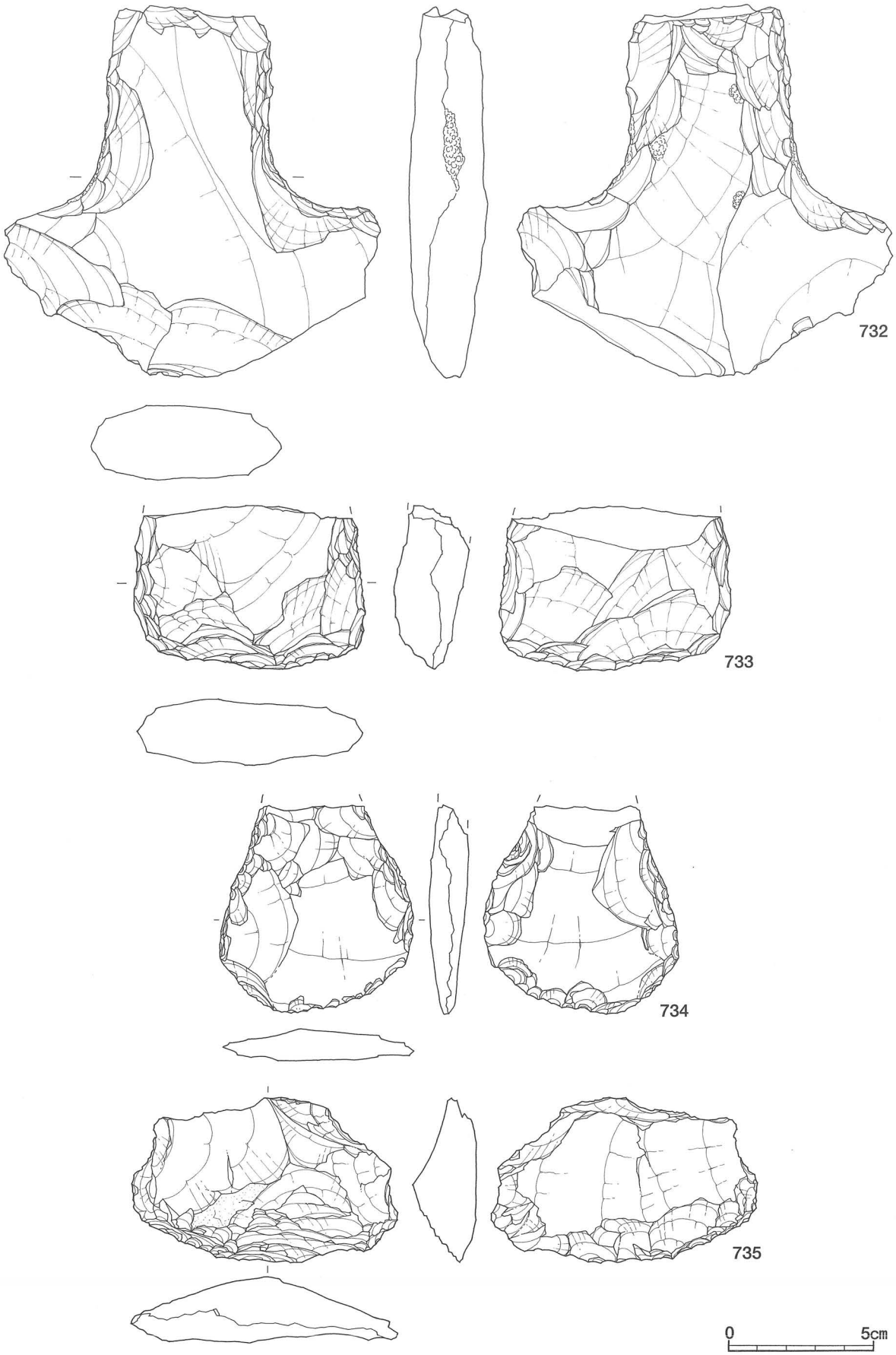
小型の剥片石器製作を目的とした素材剥片の獲得に利用されたと考えられる石核が3点出土した。709・710は自然面や気泡の多い粗雑な三船産黒曜石を素材にしている。打点に規則性はみられない。711は縦長剥片を用い，主要剥離面をプラットホームにしている。

使用痕剥片（第117図，712・713）

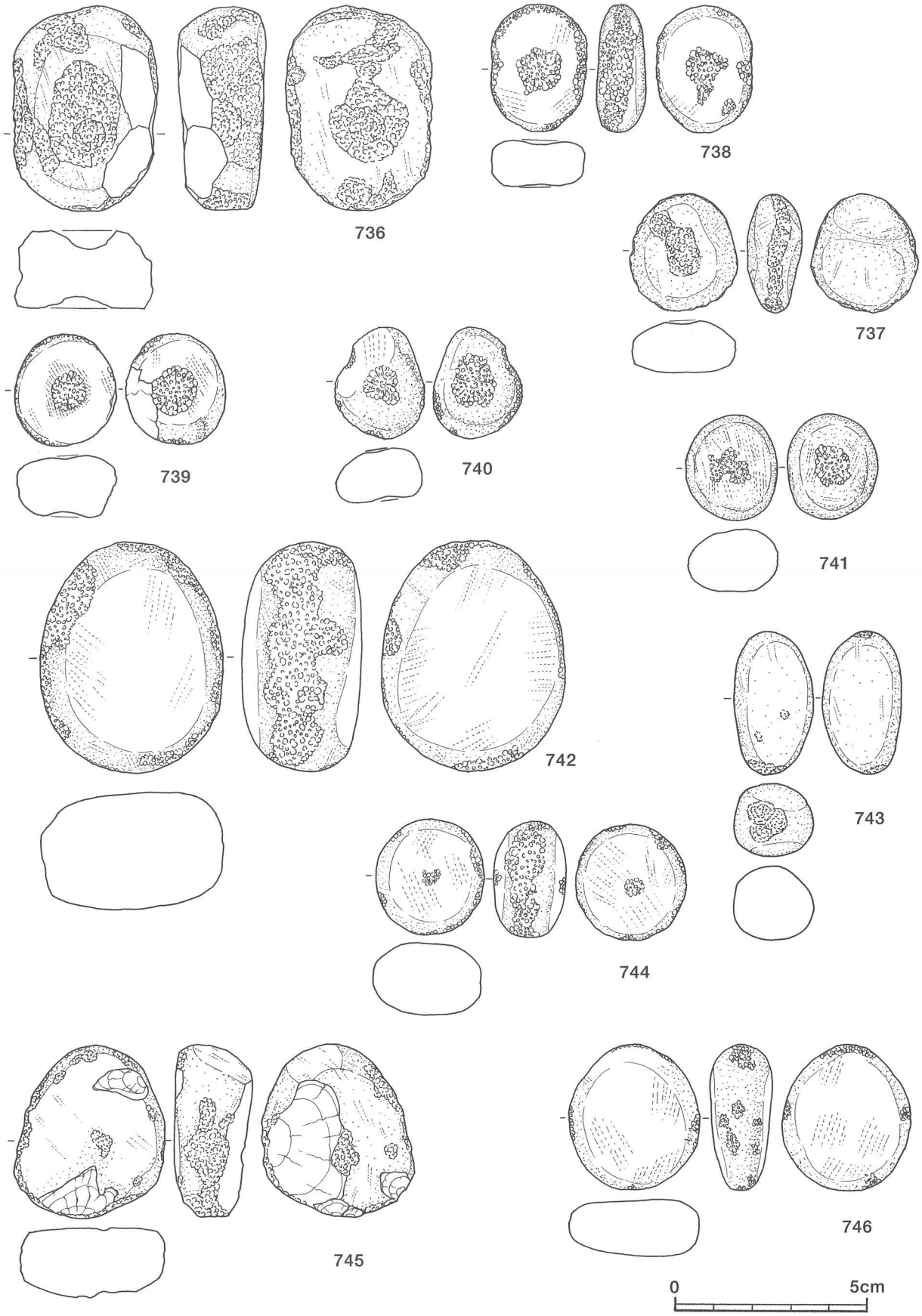
712は自然面を有する腰岳産黒曜石，713は安山岩を素材とし，いずれも縦長剥片を用いている。712は，側辺に微細剥離がみられ，713は，上部と下部に微細剥離が上部には階段状剥離がみられる。

石斧（第118～122図，714～734）

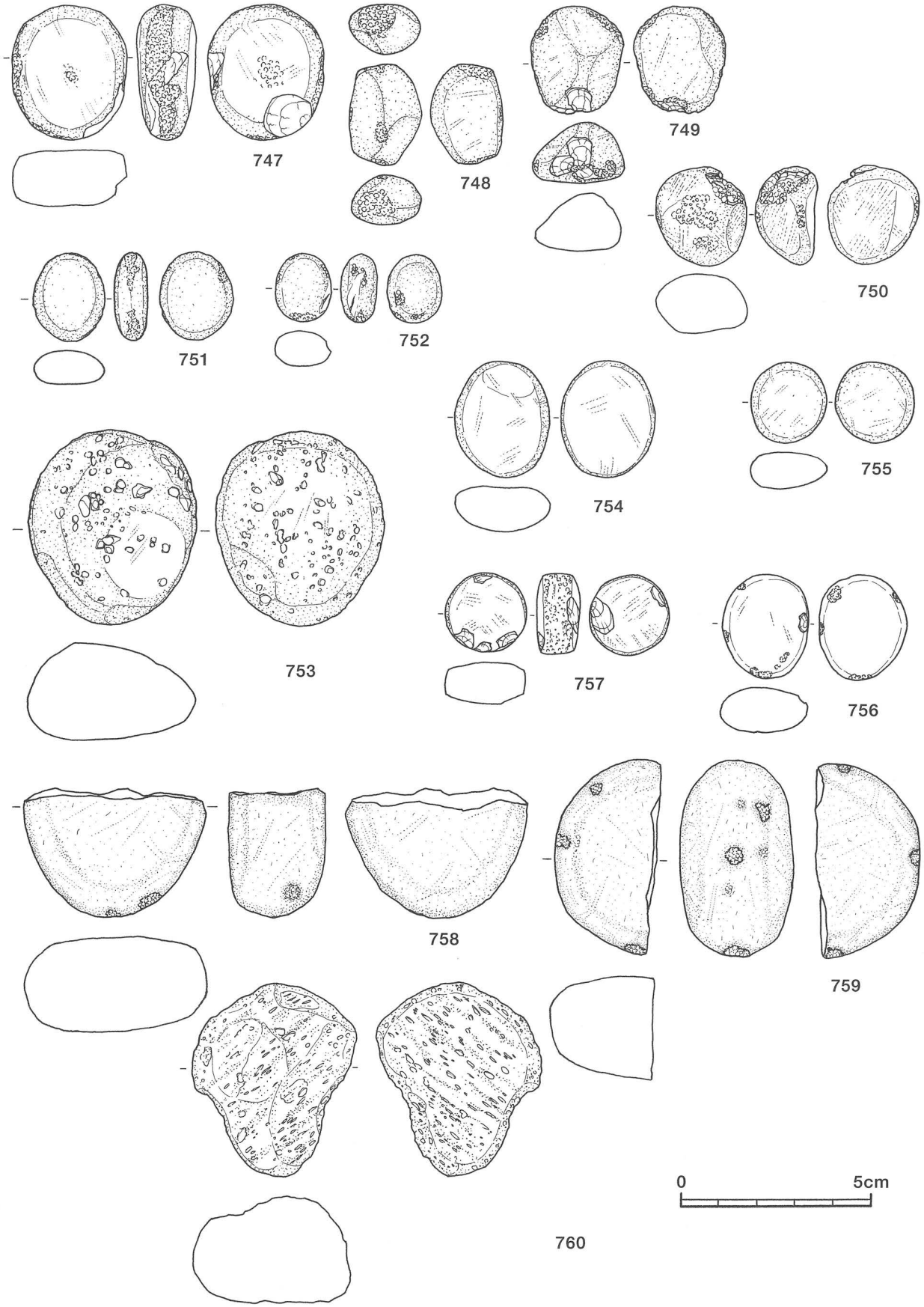
磨製石斧1点，打製石斧（完形）6点，欠損品14点が出土した。全て頁岩を用いている。



第122図　打製石斧（5）・礫器



第123図　凹石・敲石



第124図　敲石・磨石・軽石製品

714は，短冊形を呈する磨製石斧である。側辺が敲打により形成されており，その後全体を入念に研磨している。裏面の刃部が大きく欠損しているが，表面の刃部が残り使用によるつぶれが観察できた。718・720・722～724・732は，打製石斧の完形品である。石材の性質上，薄手でやや粗雑な調整が目立つ。718・720・722～724は有肩石斧である。718・720・722は両肩部から下側辺にかけて使用痕がみられる。723・724は尖底状を呈しており使用痕が目立つため，つるはしの様に使用された可能性がある。732は肩部が広く作られ，それに伴い幅広の外弯する刃部を呈するものである。刃部につぶれや剥離痕が多くみられる。715～717・719・721は，肩部や刃部が欠損したものである。715は，整形のための調整剥離により，側辺が階段状を呈している。柄の部分の可能性がある。716・717・719・721は，有肩石斧か短冊型の石斧が判断できなかった。725～731・733・734は，基部の欠損するものである。いずれも粗雑な調整により刃部が形成されており，階段状を呈するものである。731と734は有肩石斧であろうと判断できた。

礫器（第122図，735）

礫器は１点出土した。正面の一部に自然面を有し粗いタッチで剥離により刃部を作り出している。刃部の中央に使用痕がみられる。

凹石・敲石・磨石（第123・124図，736～759）

一個体に的して，凹み・敲打・研磨がみられるものがあるが，鷲ヶ迫遺跡同様著顕に表れている使用痕により遺物を判断した。大きさに統一性はなく，主に花崗岩と安山岩を素材としてる。

736～741は，凹石である。花崗岩の円礫・楕円礫を用いている。736は表裏の中央に敲打により凹みが深く入っている。側辺のほぼ全面に敲打痕が残り擦痕が弱く残る。737～739は，やや小型であるが，736と同様の使用痕がみられる。裏面は強い研磨により稜が形成されている。741は，表裏に敲打による浅い凹みと擦痕を有する。側辺に敲打痕はみられない。

742～752は，敲石である。花崗岩を素材としているが751は砂岩の小形の円礫を用いている。

742・743は側辺部に敲打痕が集中し表裏面に擦痕を有する。744は楕円形の礫を用い上部と下部に敲打痕がみられる。全体に弱い擦痕が残る。745は，いたる所に敲打痕がみられ，表裏面に強く擦痕が残り敲打による剥離痕がみられる。746・747は側辺部に敲打がみられ，表裏面に弱い擦痕を有する。748・749は不定形な礫を用い上面と下面に敲打痕がみられる。正面は自然面が残り裏面に強く擦痕が残る。750・751は小形の円礫を用い，側辺に敲打痕がみられたが，擦痕は観察できなかった。752は右上部が敲打により大きく破砕している。裏面には擦痕が強く残り稜を形成している。

753～759は磨石である。753・758・759は花崗岩を用い，754～757は安山岩を用いている。なお，758・759は欠損品である。753は，気泡の多い花崗岩を用いており，表裏面に弱く擦痕がみられる。754・755は円礫を用い表裏が強く磨き込まれている。756は，円柱状で表裏が磨き込まれている。側面は敲打の後研磨されてる。758は，表裏面にのみ研磨がみられた。758・759はほぼ全面に研磨が施され，敲打痕も観察できる。

軽石製品（第124図，760）

１点出土した。厚みがあり不定形である。表面は多方向に擦痕がみられるが，裏面には一定方向に向かって広く研磨面を呈する。

第21表　北原中遺跡縄文石器観察表（1）

挿図番号	遺物番号	取上番号	器　種	石　材	区	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
115	677	5566	打製石鏃	黒曜石三船	D19	Ⅳ	1.5	1.3	0.3	0.6	
	678	2816	打製石鏃	黒曜石椎葉川	E23	Ⅳ	2.3	1.8	0.3	1.2	
	679	2356	打製石鏃	頁岩	B19	Ⅳ	2.5	1.7	0.4	1.6	
	680	6675	打製石鏃	ハリ質安山岩	D21	Ⅳ	2.4	1.6	0.4	1.4	
	681	2653	打製石鏃	ハリ質安山岩	C13	Ⅳ	2.6	1.5	0	1.4	
	682	560	打製石鏃	チャート	C14	Ⅳ	1.9	1.4	0.4	0.8	
	683	7351	打製石鏃	ハリ質安山岩	D18	Ⅳ	1.7	1.1	0.3	0.5	
	684	5522	打製石鏃	安山岩	D19	Ⅳ	1.7	1.2	0.4	0.7	
	685	1547	打製石鏃	瑪瑙	C23	Ⅳ	1.5	1.3	0.3	0.7	
	686	3729	打製石鏃	玉髄	B6	Ⅳ	2.1	1.5	0.4	1.0	
	687	6430	打製石鏃	ハリ質安山岩	D20	Ⅳ	2.1	1.3	0.3	0.7	
	688	2412	打製石鏃	玉髄	C16	Ⅳ	1.7	1.4	0.5	0.9	
	689	2310	打製石鏃	安山岩	C15	Ⅳ	1.8	1.7	0.3	1.2	
	690	1922	打製石鏃	安山岩	C13	Ⅳ	2.2	1.7	0.5	1.8	
	691	5728	打製石鏃	安山岩	D18	Ⅳ	1.5	1.3	0.3	0.7	
	692	2429	打製石鏃	安山岩	C16	Ⅳ	1.8	1.6	0.3	0.7	
	693	6842	打製石鏃	黒曜石上牛鼻	D19	Ⅳ	2.0	1.6	0.3	0.8	
	694	6516	打製石鏃	頁岩	C27	Ⅲb	2.6	1.6	0.5	1.4	
	695	—	打製石鏃	チャート	D18･19	Ⅲb	1.8	1.3	0.3	0.6	
	696	7247	打製石鏃	チャート	D19	Ⅲb	2.3	1.3	0.4	1.3	
	697	676	打製石鏃	チャート	E23	Ⅲb	1.8	1.4	0.2	0.6	
	698	6194	打製石鏃	チャート	D19	Ⅲb	1.8	1.3	0.3	0.6	
	699	6433	打製石鏃	ハリ質安山岩	D20	Ⅲb	1.7	1.2	0.3	0.8	
	700	6873	打製石鏃	黒曜石桑ノ木津留	D19	Ⅲb	1.4	1.2	0.4	0.7	
	701	7535	打製石鏃	瑪瑙	D23	Ⅲb	1.4	1.8	0.5	1.2	
	702	6641	打製石鏃	黒曜石三船	D21	Ⅲb	1.7	1.2	0.4	0.7	
116	703	5652	スクレイパー	頁岩	D19	Ⅳa	4.9	7.2	1.0	34.0	
	704	6429	スクレイパー	頁岩	D19	Ⅳa	5.9	7.6	1.6	76.5	
	705	2179	スクレイパー	粘板岩	C14	Ⅳ	8.4	10.6	0.5	56.6	
117	706	70	スクレイパー	黒色頁岩	D9	Ⅳ	8.7	4.1	0.8	30.9	
	707	6582	二次加工剥片	玉髄	D21	Ⅳa	2.0	2.1	1.2	4.9	
	708	6938	石錐	チャート	C23	Ⅳa	3.0	1.8	0.4	1.0	
	709	6090	石核	黒曜石三船	D21	Ⅲb	1.9	2.2	2.1	7.0	
	710	7916	石核	黒曜石三船	D22	Ⅲb	3.1	3.2	2.0	25.2	
	711	2776	石核	チャート	C13	Ⅳ	1.9	4.5	1.8	24.0	
	712	2490	剥片	黒曜石腰岳	C15	Ⅳ	2.9	2.0	1.3	7.5	
	713	6223	剥片	安山岩	D19	Ⅳa	1.3	1.3	0.3	1.1	
118	714	7347	磨製石斧	頁岩	D19	Ⅲb	14.5	3.6	2.4	142.8	
	715	2495	打製石斧	頁岩	C18	Ⅳa	5.7	3.7	2.1	63.0	
	716	5981	打製石斧	頁岩	D21	Ⅳa	9.9	5.9	1.6	100.9	
	717	1886	打製石斧	頁岩	C21	Ⅳa	6.3	6.6	0.8	88.0	
	718	2093	打製石斧	頁岩	C14	Ⅳ	17.7	9.6	2.7	332.0	
119	719	2418	打製石斧	頁岩	C18	Ⅳa	8.5	5.0	1.5	96.1	
	720	5455	打製石斧	頁岩	D18	Ⅳa	17.0	6.6	1.5	227.7	
	721	7099	打製石斧	頁岩	D22	Ⅳa	10.6	7.9	2.0	169.8	
	722	5456	打製石斧	頁岩	D18	Ⅳa	15.3	7.6	1.7	228.7	
120	723	2703	打製石斧	頁岩	C10	Ⅳ	15.1	8.0	0.7	121.4	
	724	105	打製石斧	頁岩	D10	Ⅳ	5.4	8.5	0.8	39.7	
	725	2556	打製石斧	頁岩	C14	Ⅳ	7.8	6.7	1.8	115.4	
	726	7733	打製石斧	頁岩	D23	Ⅳa	9.1	5.6	1.8	105.6	
	727	106	打製石斧	頁岩	D10	Ⅳ	7.9	5.3	1.6	90.9	
	728	4673	打製石斧	頁岩	C14	Ⅳa	6.3	7.6	1.4	69.8	
121	729	—	打製石斧	頁岩	C31	Ⅳa	6.5	6.6	2.0	120.0	

第22表　北原中遺跡縄文石器観察表（2）

挿図番号	遺物番号	取上番号	器　種	石　材	区	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
121	730	2553	打製石斧	頁岩	C14	Ⅳ	6.2	7.0	1.1	66.0	
	731	1745	打製石斧	頁岩	C16	Ⅳ	9.2	7.3	2.7	184.2	
122	732	7617	打製石斧	頁岩	D23	Ⅲb	12.9	12.8	2.6	400.0	
	733	7618	打製石斧	頁岩	D23	Ⅲb	5.4	7.9	2.0	136.1	
	734	6484	打製石斧	頁岩	C19	Ⅲb	7.3	6.8	1.2	72.7	
	735	6580	礫器	頁岩	D21	Ⅳa	5.8	8.8	2.2	93.6	
123	736	2463	凹石	花崗岩	—	Ⅳ	10.7	7.7	4.5	520.0	
	737	6230	凹石	花崗岩	D19	Ⅳa	6.2	5.6	2.7	120.0	
	738	2508	凹石	花崗岩	C15	Ⅳ	6.8	5.0	2.5	118.1	
	739	1403	凹石	花崗岩	C14	Ⅳ	5.9	5.4	3.5	151.0	
	740	6010	凹石	花崗岩	D21	Ⅳa	5.9	4.7	3.3	100.6	
	741	6674	凹石	花崗岩	D21	Ⅳa	5.5	4.7	3.4	126.1	
	742	2520	敲石	花崗岩	C1	Ⅳ	12	9.5	6.2	110.0	
	743	8023	敲石	花崗岩	D23	Ⅳa	7.5	4.2	3.8	191.2	
	744	6204	敲石	花崗岩	D19	Ⅲb	6.0	5.7	3.8	198.5	
	745	7803	敲石	花崗岩	D22	Ⅳa	9.1	7.9	3.9	338.2	
	746	6233	敲石	花崗岩	D19	Ⅲb	7.7	6.8	3.2	240.9	
124	747	6218	敲石	花崗岩	D19	Ⅲb	7.2	6.1	3.1	207.5	
	748	6639	敲石	花崗岩	D21	Ⅳa	5.3	3.7	2.6	14.7	
	749	7514	敲石	花崗岩	D23	Ⅳa	5.7	4.8	3.4	98.4	
	750	3537	敲石	花崗岩	C19	Ⅲb	5.2	4.8	3.1	106.6	
	751	2060	敲石	砂岩	C14	Ⅳ	3.7	2.9	1.9	26.2	
	752	5457	敲石	花崗岩	D18	Ⅳa	4.8	3.7	1.7	44.6	
	753	6959	磨石	花崗岩	D21	Ⅳa	10.4	8.9	5.2	585.0	
	754	7350	磨石	安山岩	D18	Ⅳa	6.2	5.0	2.4	102.8	
	755	7353	磨石	安山岩	D18	Ⅳa	4.4	3.9	1.9	49.4	
	756	2363	磨石	安山岩	C14	Ⅳ	5.5	4.6	2.3	81.4	
	757	6903	磨石	安山岩	D18	Ⅲb	4.2	4.3	2.2	70.0	
	758	5817	磨石	花崗岩	D22	Ⅲb	7.4	10.2	5.1	499.0	
	759	5176	磨石	花崗岩	C33	Ⅳa	11.0	6.3	5.6	530.0	
	760	—	軽石製品	—	—	—	10.2	8.0	5.6	142.6	

第３節　古墳時代の調査

古墳時代の遺構・遺物はⅢａ層で検出された。遺構は竪穴Ｃ・Ｄ－７区，Ｃ・Ｄ－20～23区で竪穴住居跡が８軒検出され，その他，土坑６基，焼土１か所，溝状遺構７条が検出された。

遺物は成川式土器（甕形土器・壺形土器・高坏・坩形土器），手捏土器と石器（石皿・砥石・台石・軽石製品）が出土した。

①Ｈ11年度　２号住居跡

２号住居跡は，Ｃ－７区，Ⅲａ層で検出された。外径3.0ｍ×3.0ｍの方形，内径は2.6ｍ×2.1ｍの長方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約20～30㎝を測る。主軸方向はＮ－56°－Ｅである。硬化面・灰等は検出しなかった。内部では柱穴，落ち込み部を検出したが，主柱穴は不明だった。

出土遺物は甕形土器・壺形土器が若干出土したが細片であった。

②Ｈ11年度　３号住居跡

３号住居跡は，Ｄ－７区，Ⅲａ層で検出された。外径2.8ｍ×2.3ｍの内径2.5ｍ×2.1ｍの隅丸長方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約20～30ｍを測る。主軸方向はＮ－28°－Ｅである。硬化面・灰等は検出しなかった。住居内のほぼ中央部に90㎝×60㎝の約10㎝の深さの土坑がみられた。柱穴は５個の検出された。30～40㎝の深さの柱穴が検出された。

出土遺物は甕形土器・壺形土器が出土したが，細片であった。

③１号住居跡

１号住居跡はＤ－23区，Ⅲａ層で検出された。外径2.1ｍ×1.8ｍ，内径1.8ｍ×1.6ｍの長方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約30～40㎝を測る。主軸方向はＮ－81°－Ｅである。東南隅に約１ｍ幅の硬化面がみられた。

内部に柱穴・落ち込み等は検出出来なかった。

出土遺物は，甕形土器・壺形土器・埦・坩形土器等が出土した。

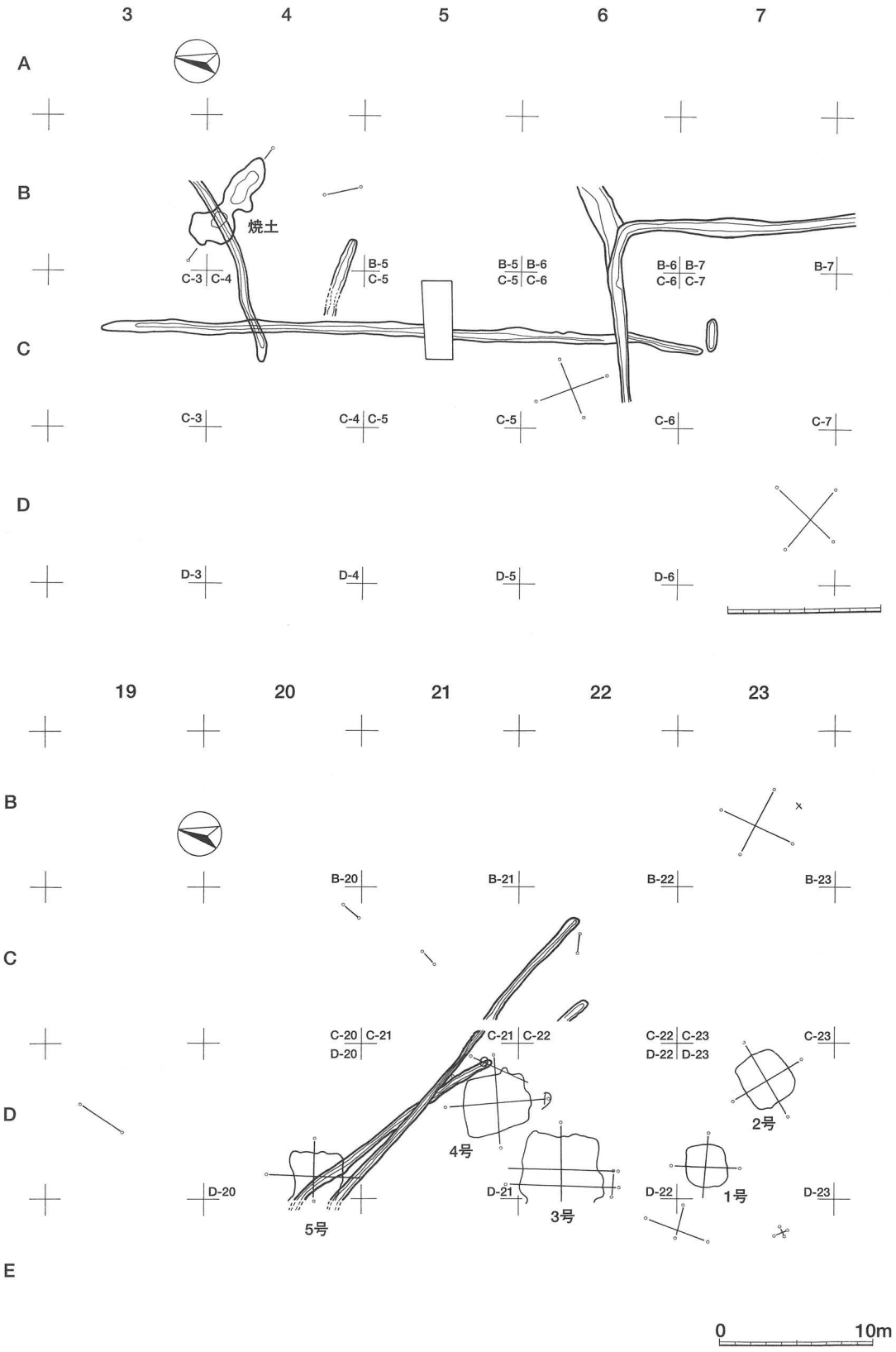
④２号住居跡

２号住居跡はＤ－23区，Ⅲａ層で１号住居の東側約５ｍの位置にあり外径2.7ｍ×2.4ｍ，内径2.1ｍ×2.1ｍのやや長方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは40㎝前後を測る。主軸方向はＮ－45°－Ｅである。南側壁面に幅30㎝程の段が設けられている。内部に柱穴・落ち込み等は認められなかったが，中央部に硬化面がみられた。

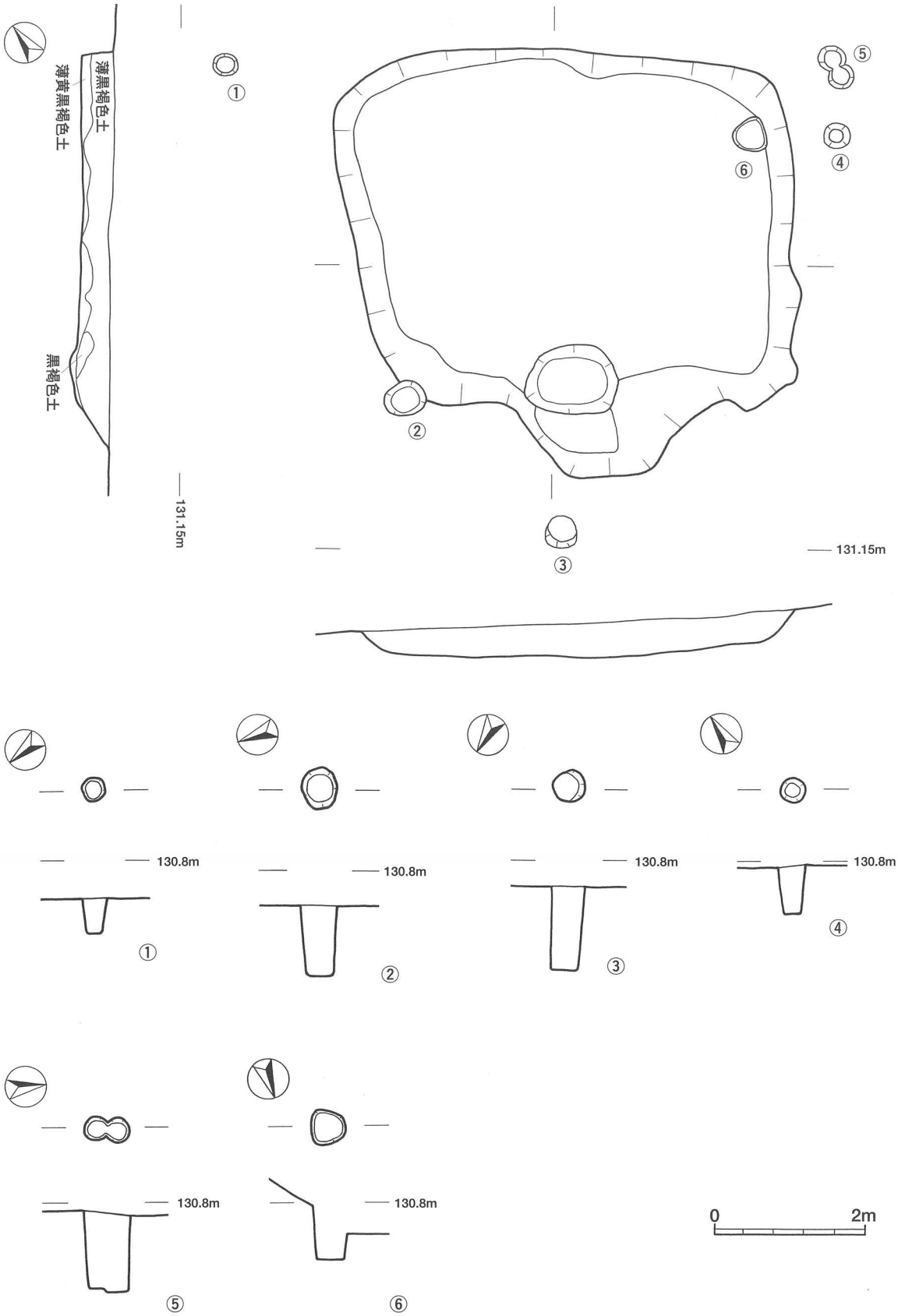
出土遺物は甕形土器・埦・高坏・坩形土器・石皿・軽石製品等が出土した。

⑤３号住居跡

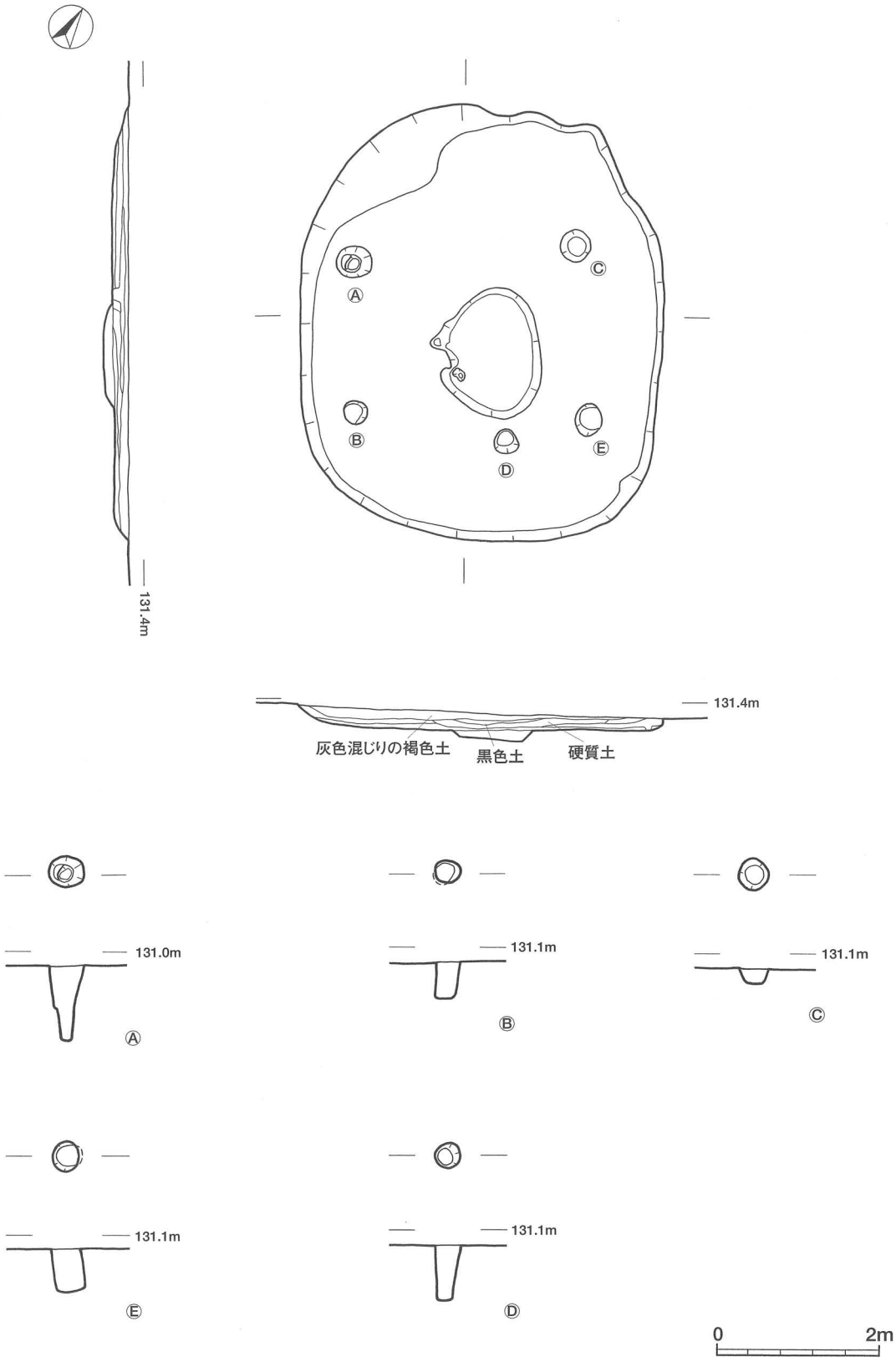
３号住居跡はＤ－22区，Ⅲａ層で１号住居跡の北側約９ｍの位置にある。プランは調査区域外の西側が延びているため判明しないが，遺構検出面からの深さは約25～35㎝を測る。主軸方向はＮ－



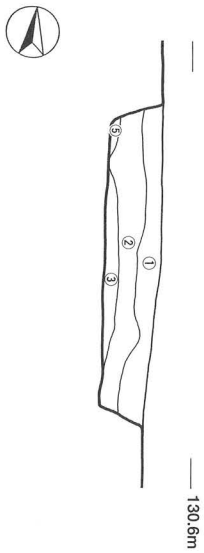
第125図　古墳時代遺構配置図

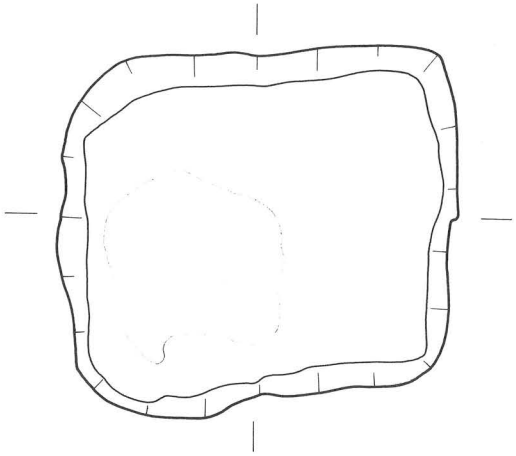


第126図　H11年度２号住居跡

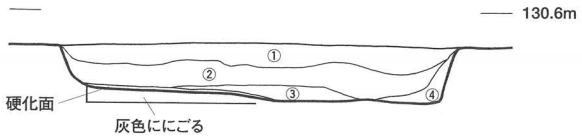


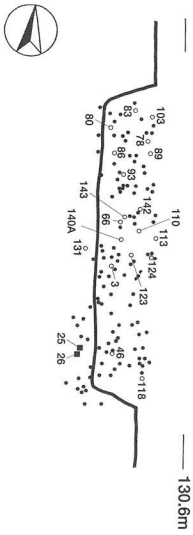
第127図　H11年度３号住居跡

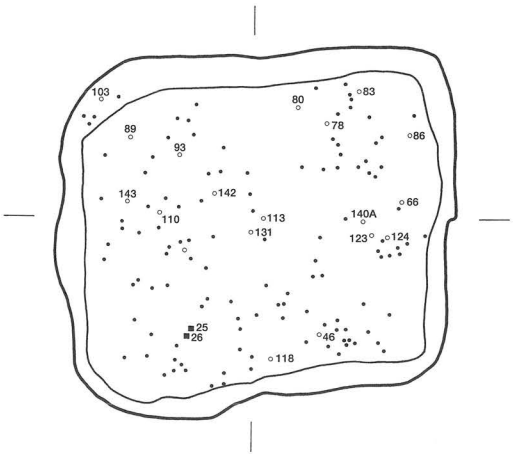


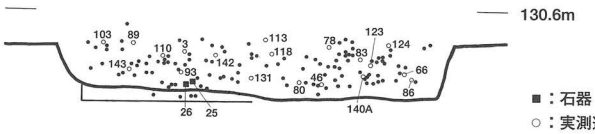


①：Ⅲbより黄色，②より明，パミスブロックなし
②：Ⅲbによるパミスアカホヤブロック
③：黒灰・炭化物，Ⅲbより淡い
④：Ⅳbがにごった感じ，Ⅳa・Ⅳbブロック混じる，樹痕etcのカクラン，②④の境が住居のカベの可能性もある
⑤：やや赤灰色の土，サラサラ似たような色の土が5住・4住にもある

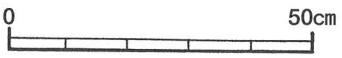








■：石器
○：実測遺物
●：土器



第128図　1号住居跡

80°－Eである。内部には20～30cmの深さを測る柱穴が3個あり，中央部には硬化面がみられる。

出土遺物は甕形土器・壺形土器が出土した。

⑥4号住居跡

4号住居跡は，C－21・22区，Ⅲa層で3号住居跡の北東側約4mの位置にある。外径3.4m×2.9m，内径3.0m×2.6mの方向プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約40cmを測る。主軸方向はN－15°－Wである。内部には約50cmの深さを測る柱穴が2個検出され，中央部には硬化面がみられる。

出土遺物は，甕形土器・坩形土器が出土した。

⑦5号住居跡

5号住居は，D－20区，Ⅲa層で4号住居跡の北西側約12mの位置にある。外径2.5m×2.4m，内傾2.1m×2.0mのほぼ方形プランの竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約30～40cmを測る。主軸方向はN－11°－Eである。硬化面・灰などは検出されず，柱穴・落ち込み等もみられなかった。

出土遺物は甕形土器・高坏・台石が出土した。

⑧7号住居跡

7号住居跡は，C－23区，Ⅲa層で検出された。農道との交差部で調査対象区が変則的であったため，半分程しか検出することが出来なかった。外径の長さが5.3mとこの遺跡では大型の竪穴住居跡である。遺構検出面からの深さは約30cmであり，主軸方向はほぼ南北である。内部には柱穴等は検出されなかったが中央部に硬化面がみられた。

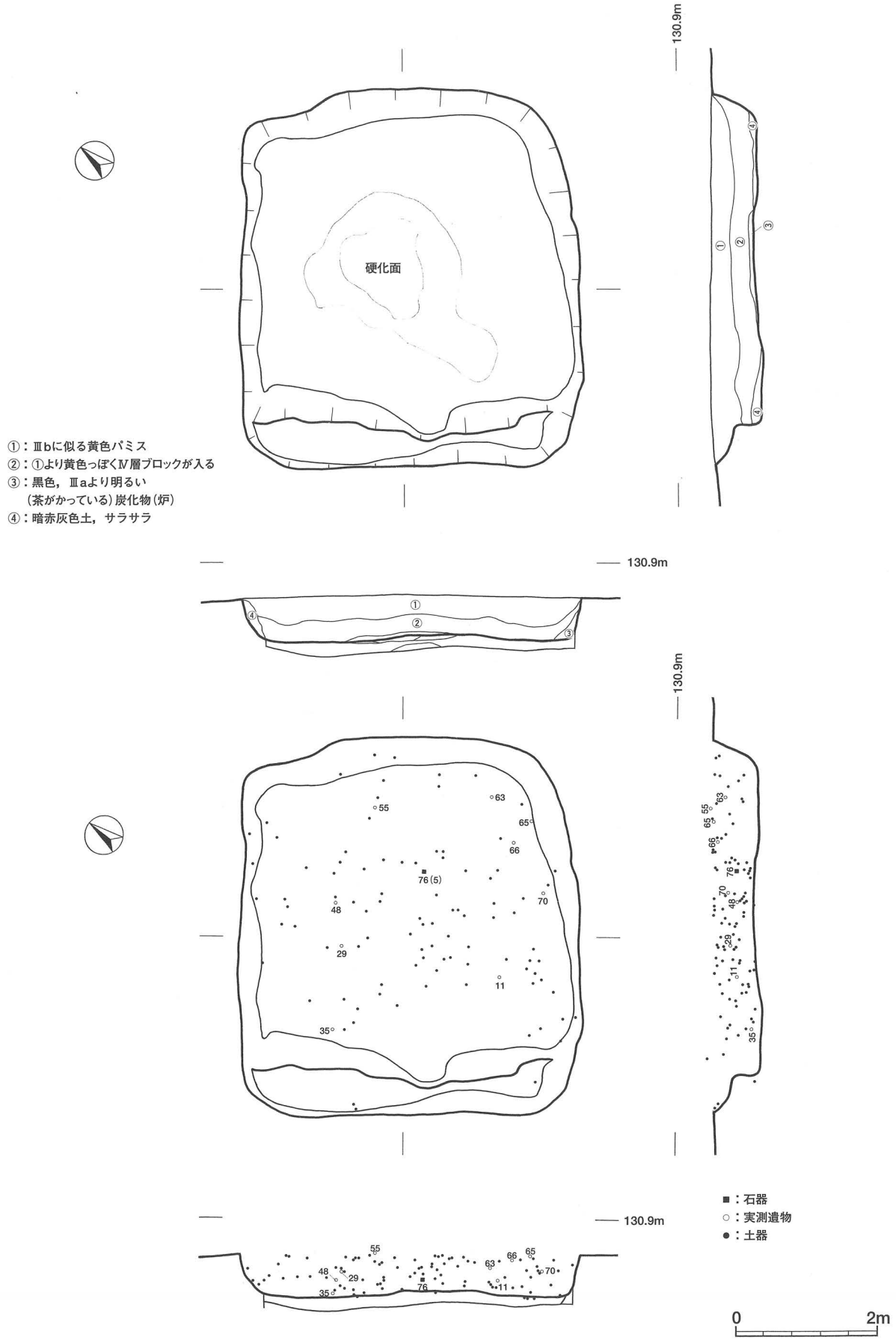
出土遺物は，甕形土器・壺形土器・砥石が出土した。

焼土

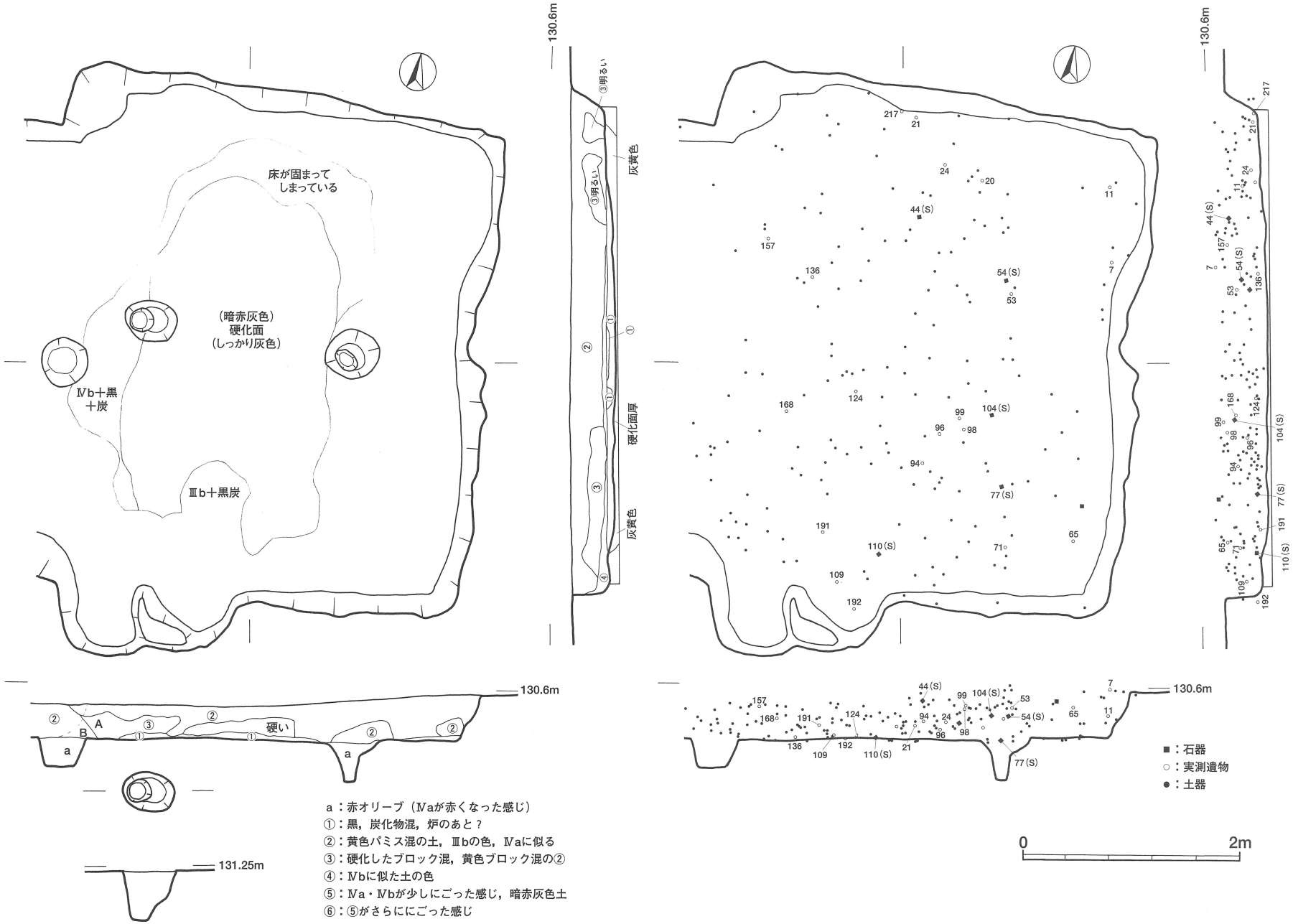
C－3・4区Ⅲa層から主軸が東西に長い5.5m×2.2mの隋円形の焼土城が検出された。中央部に炭化物も含まれているが，性格等は不明である。

土坑

土坑は，調査区域内で6基検出した。ほぼ同タイプの土坑で直径1.5m前後の円形プランで，遺構検出面からの深さは約30cmを測る。性格等は不明である。

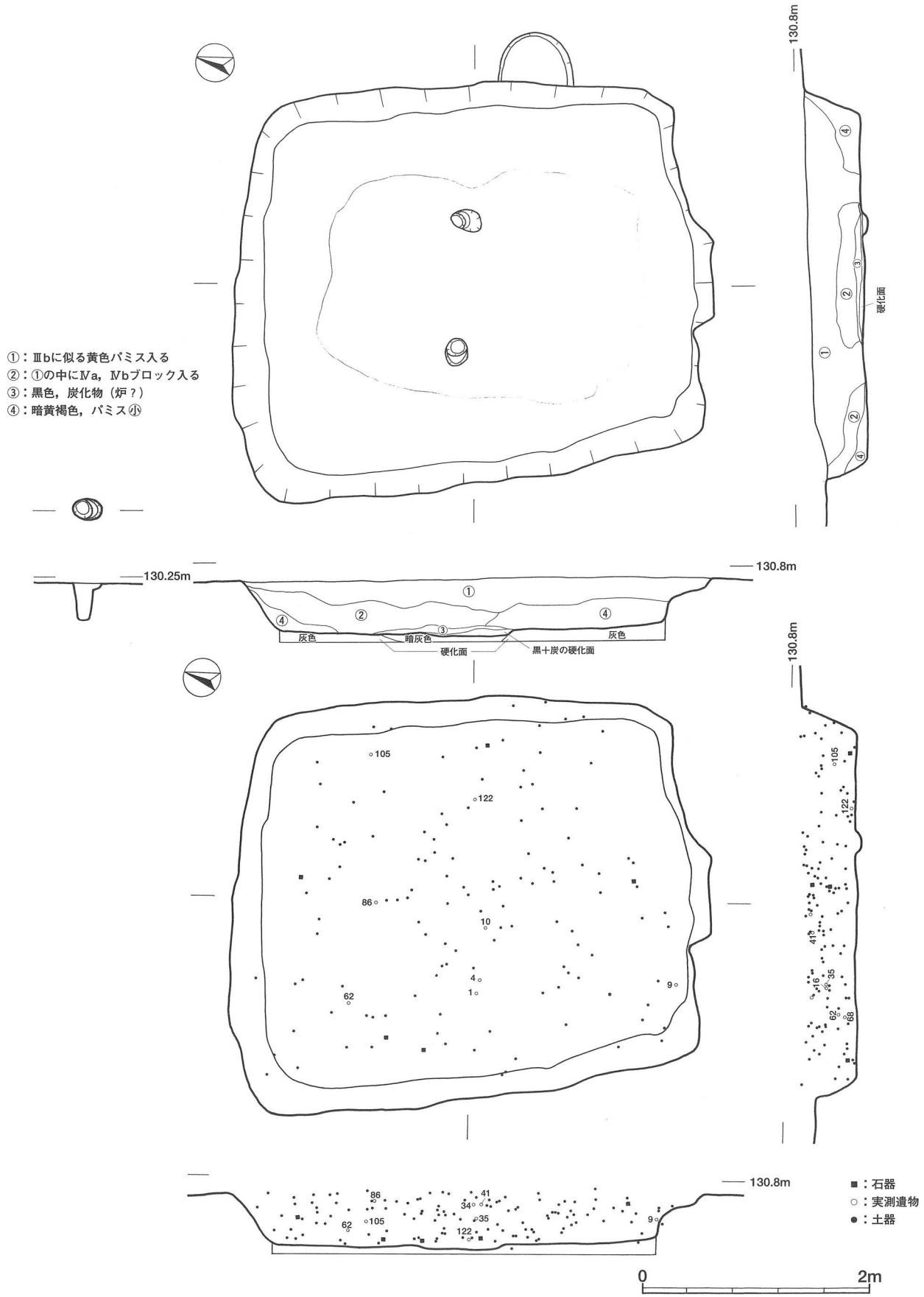

130.9m
硬化面
①：Ⅲbに似る黄色パミス
②：①より黄色っぽくⅣ層ブロックが入る
③：黒色，Ⅲaより明るい
（茶がかっている）炭化物（炉）
④：暗赤灰色土，サラサラ
130.9m
130.9m
55
63
65
66
76 (5)
70
48
29
11
35
130.9m
■：石器
○：実測遺物
●：土器
0
2m

第129図　2号住居跡

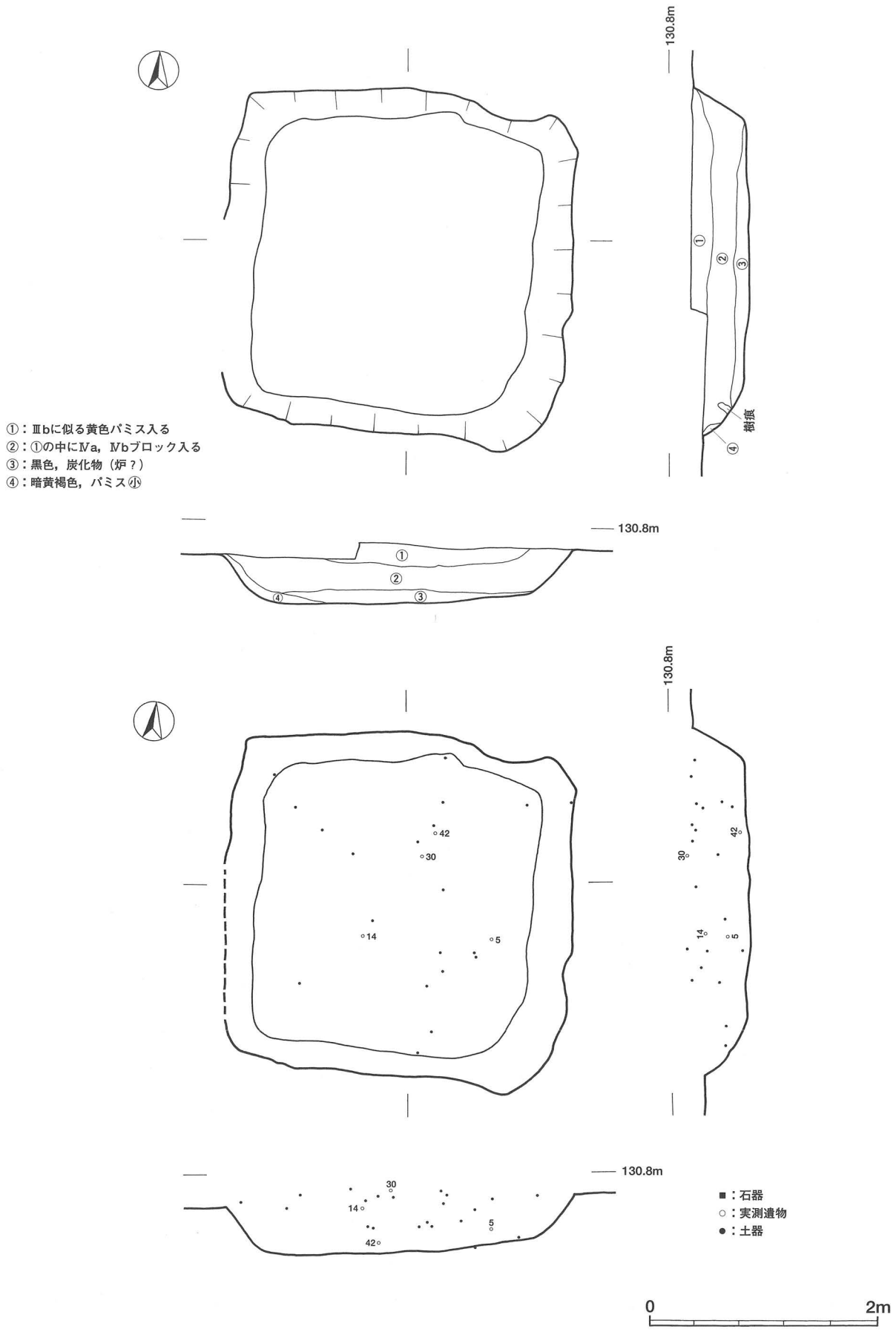


a：赤オリーブ（Ⅳaが赤くなった感じ）
①：黒，炭化物混，炉のあと？
②：黄色パミス混の土，Ⅲbの色，Ⅳaに似る
③：硬化したブロック混，黄色ブロック混の②
④：Ⅳbに似た土の色
⑤：Ⅳa・Ⅳbが少しにごった感じ，暗赤灰色土
⑥：⑤がさらににごった感じ

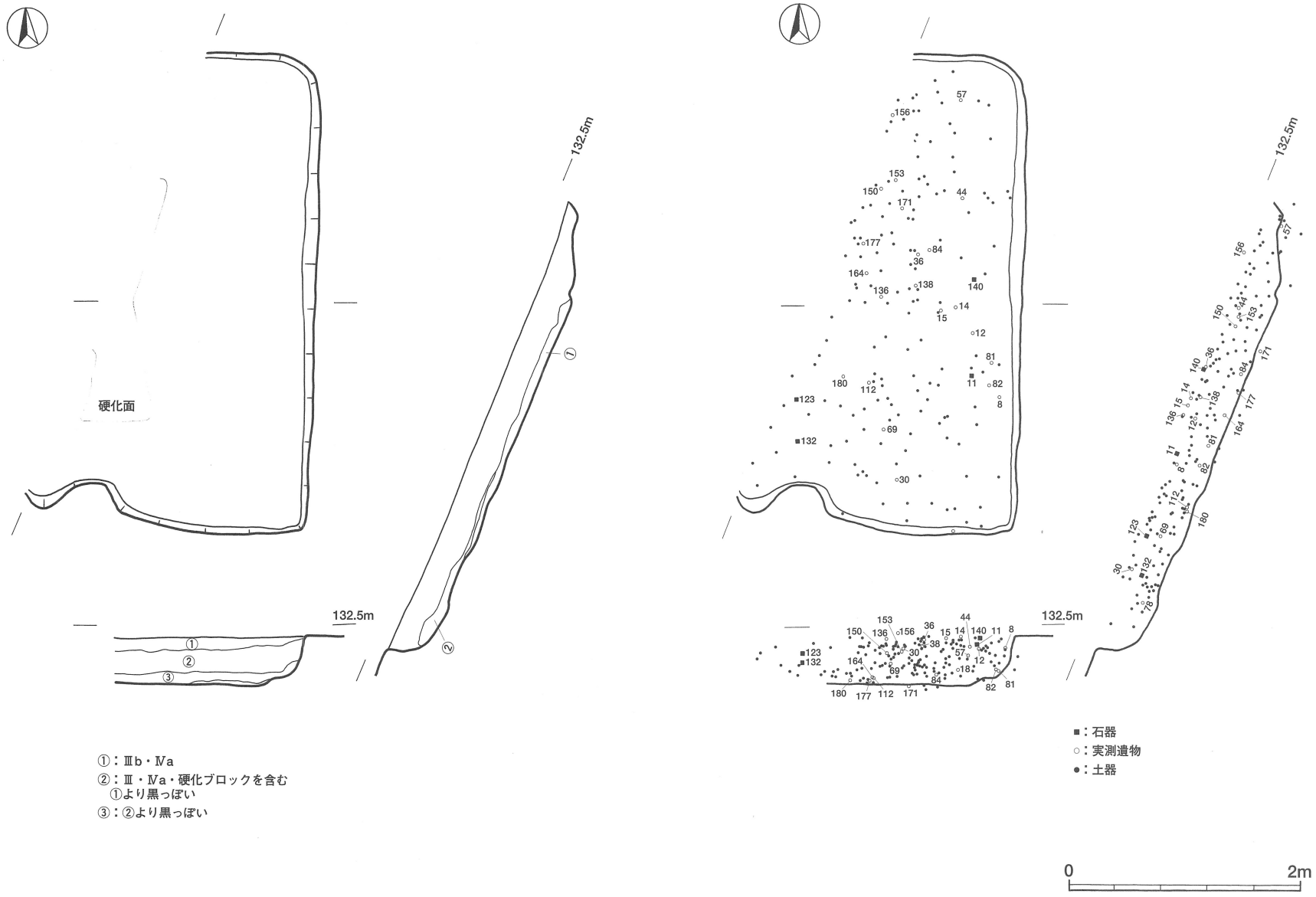
第130図　3号住居跡


①：Ⅲbに似る黄色パミス入る
②：①の中にⅣa，Ⅳbブロック入る
③：黒色，炭化物（炉？）
④：暗黄褐色，パミス㊀
130.8m
硬化面
130.25m
130.8m
灰色
暗灰色
硬化面
黒十炭の硬化面
灰色
130.8m
130.8m
■：石器
○：実測遺物
●：土器
0
2m

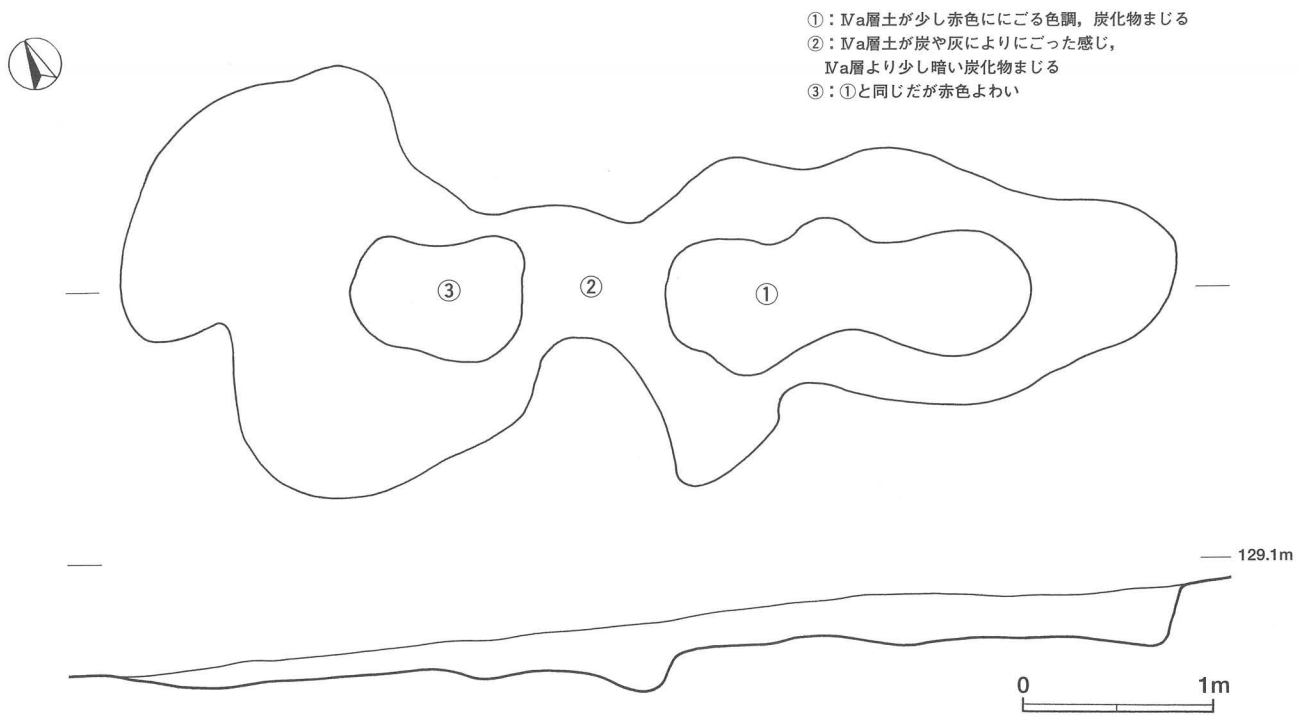
第131図　4号住居跡


①：Ⅲbに似る黄色パミス入る
②：①の中にⅣa，Ⅳbブロック入る
③：黒色，炭化物（炉？）
④：暗黄褐色，パミス小
130.8m
樹痕
42
30
14
5
■：石器
○：実測遺物
●：土器
0
2m

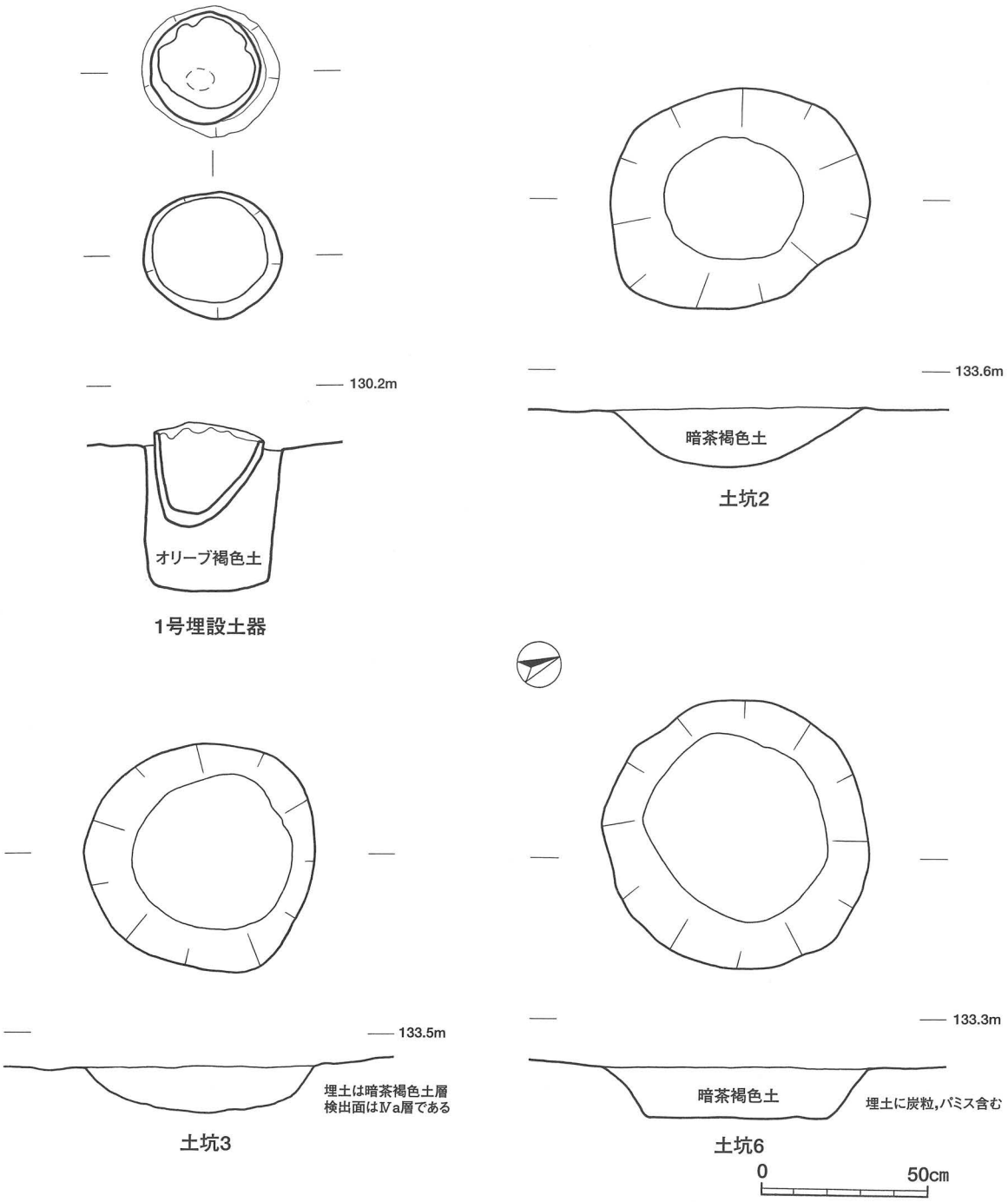
第132図　5号住居跡


硬化面
132.5m
①
②
③
①：Ⅲb・Ⅳa
②：Ⅲ・Ⅳa・硬化ブロックを含む
①より黒っぽい
③：②より黒っぽい
■：石器
○：実測遺物
●：土器
0
2m

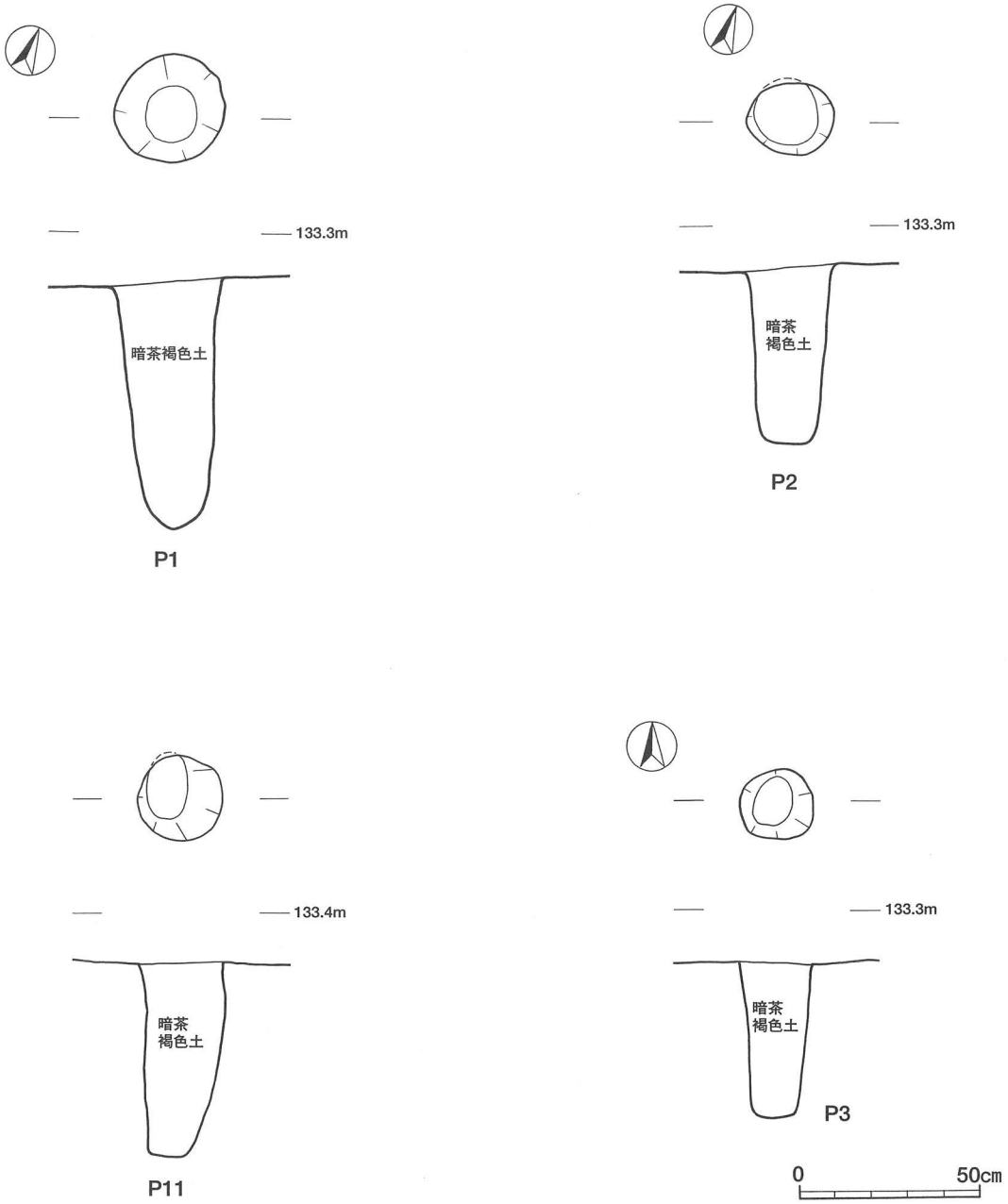
第133図　7号住居跡


①：Ⅳa層土が少し赤色ににごる色調，炭化物まじる
②：Ⅳa層土が炭や灰によりにごった感じ，
Ⅳa層より少し暗い炭化物まじる
③：①と同じだが赤色よわい
③
②
①
129.1m
0
1m

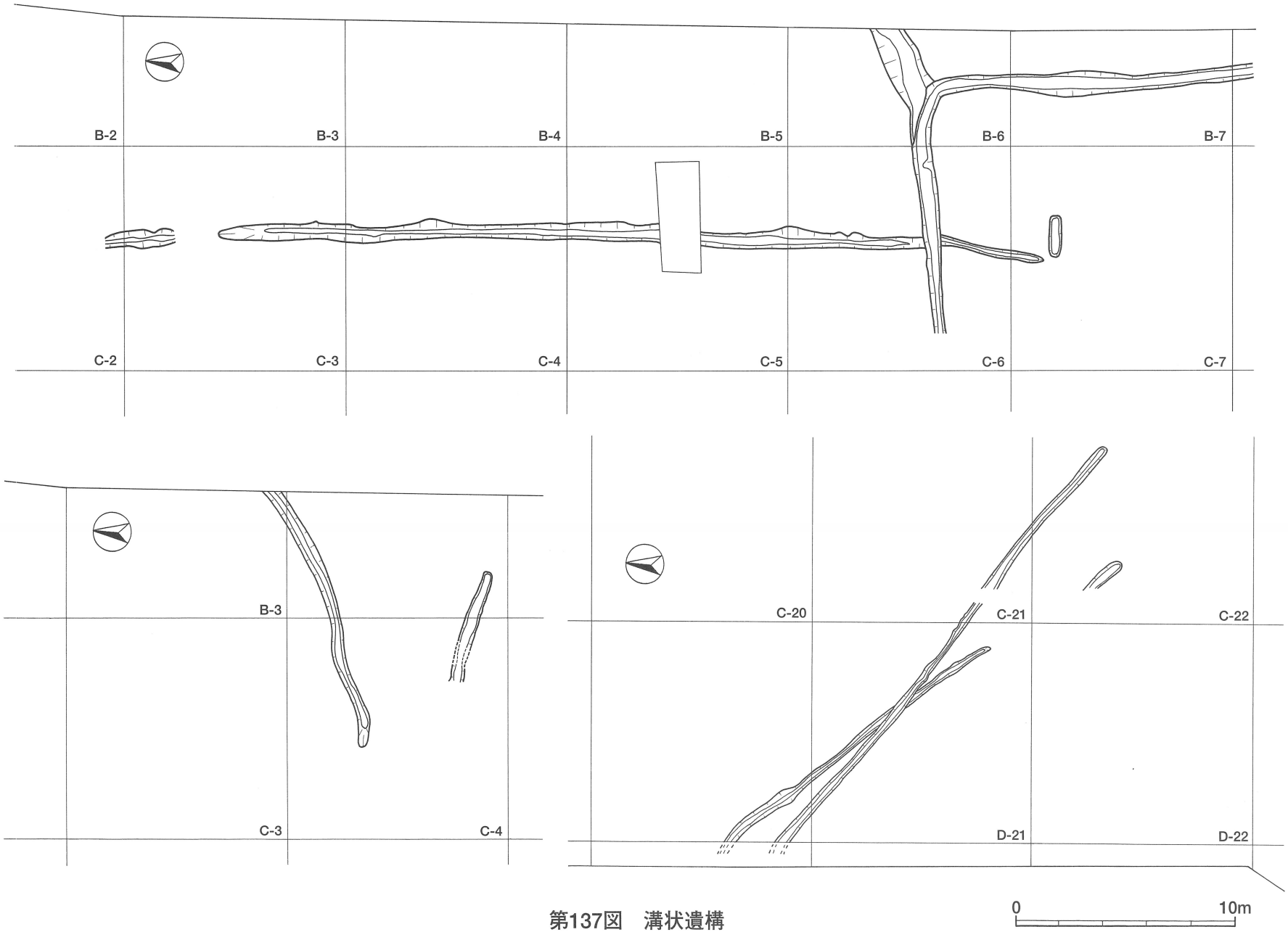
第134図　焼土


130.2m
オリーブ褐色土
1号埋設土器
133.6m
暗茶褐色土
土坑2
133.5m
埋土は暗茶褐色土層
検出面はⅣa層である
土坑3
133.3m
暗茶褐色土
埋土に炭粒,パミス含む
土坑6
0
50cm

第135図　土坑


133.3m
暗茶褐色土
P1
133.3m
暗茶
褐色土
P2
133.4m
暗茶
褐色土
P11
133.3m
暗茶
褐色土
P3
0
50cm

第136図　ピット



第137図　溝状遺構

遺構出土の土器

1号住居跡

761～777は，1号住居跡出土の土器である。

761～772は甕形土器である。761は復元口径21.6cmを測る口縁部で頸部に絡縄突帯を施すものである。口縁部は内弯し，内面の器面はナデ調整を行い，外面はヘラミガキで調整している。762は内弯する口縁部に幅広粘土を貼り付けたものである。ナデ調整を施し，胎土に細礫を多く含む。

773は鉢形土器である。口径は15cmを測り，やや内弯気味であるが直口する口縁部である。外面に沈線による段を有する。丁寧なナデ整形を行っている。

774～777は壺形土器である。いずれも肩部で口縁部からなで肩で胴部へ下るものである。外面はヘラミガキ整形を行っている。777は平底の底部で，内面は指ナデを行い，外面はヘラミガキ整形を行っている。

2号住居跡

778～790は2号住居跡から出土した土器である。

778～785は甕形土器である。778は口径38.0cmを測り，外反する口縁部で頸部に絡縄突帯を施すものである。外面はハケ目調整を施している。この突帯は交じらない。780は口径24.6cmで，外反する口縁部をもつものである。781は口径28.5cm，器高35.1cm，脚台径10.5cmを測る完形土器である。口縁は直口し，脚部は中空のあげ底底部である。784は底部で中空である。785は頸部で絡縄突帯を施すものである。ヘラミガキ調整を施している。

786は坩形土器でやや内向気味に立ち上がる口縁部である。ヘラミガキ調整を施している。丹塗り土器で，口径12.0cmを測る。

787は椀形土器である。内向気味の口縁部で，外面の器面調整はヘラミガキ調整を施している。やはり丹塗り土器である。

788は高坏の口縁部で丹塗りした椀形の器形をした坏部である。内外面とも丁寧なヘラミガキで調整されている。

3号住居跡

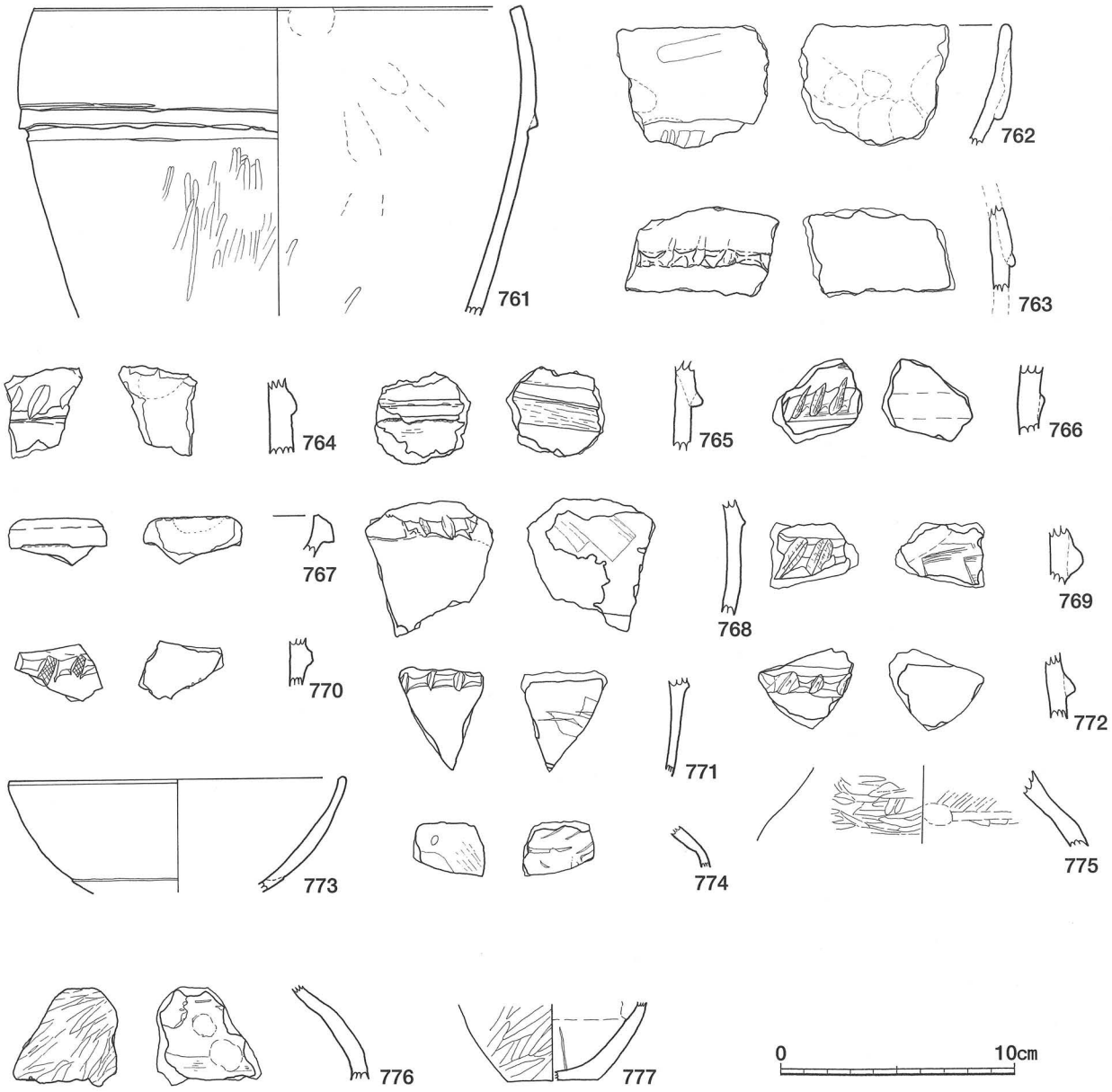
791～810は3号住居跡出土の土器である。

791～793・795～809は甕形土器で，794・810は壺形土器である。

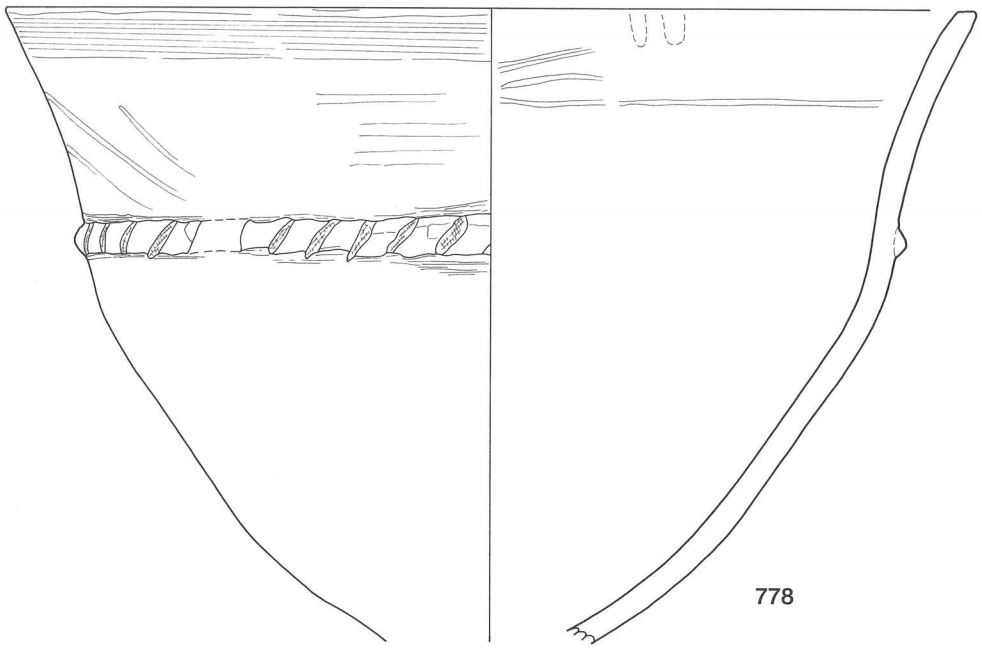
791は口径30.8cm，31.8cmを測り，外反する口縁部で頸部に絡縄突帯を施すものである。外面は縦位のハケ目調整を施している。793も同様のものである。795は直口する甕形土器の胴部である。

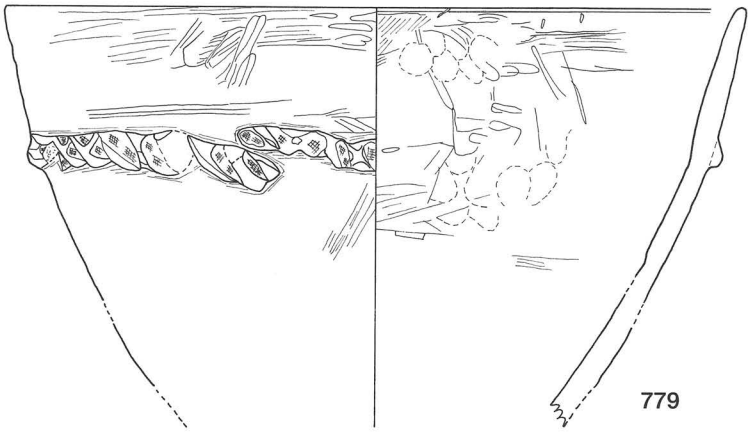
796・797は外反する口縁部をもつ甕形土器で器面はナデ調整を施している。798～803は頸部に絡縄突帯を施すものである。いずれもナデ調整を施している。

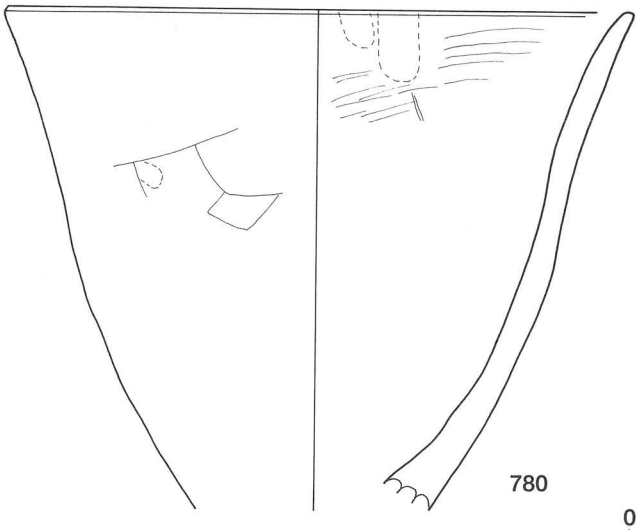
805～809は甕形土器の底部である。何れも中空のあげ底底部である。脚台径は9.6cm，8.7cm，11.7cm，8.7cm，9.6cmを測る。内外面ともナデ調整を施している。



第138図　1号住居内出土遺物



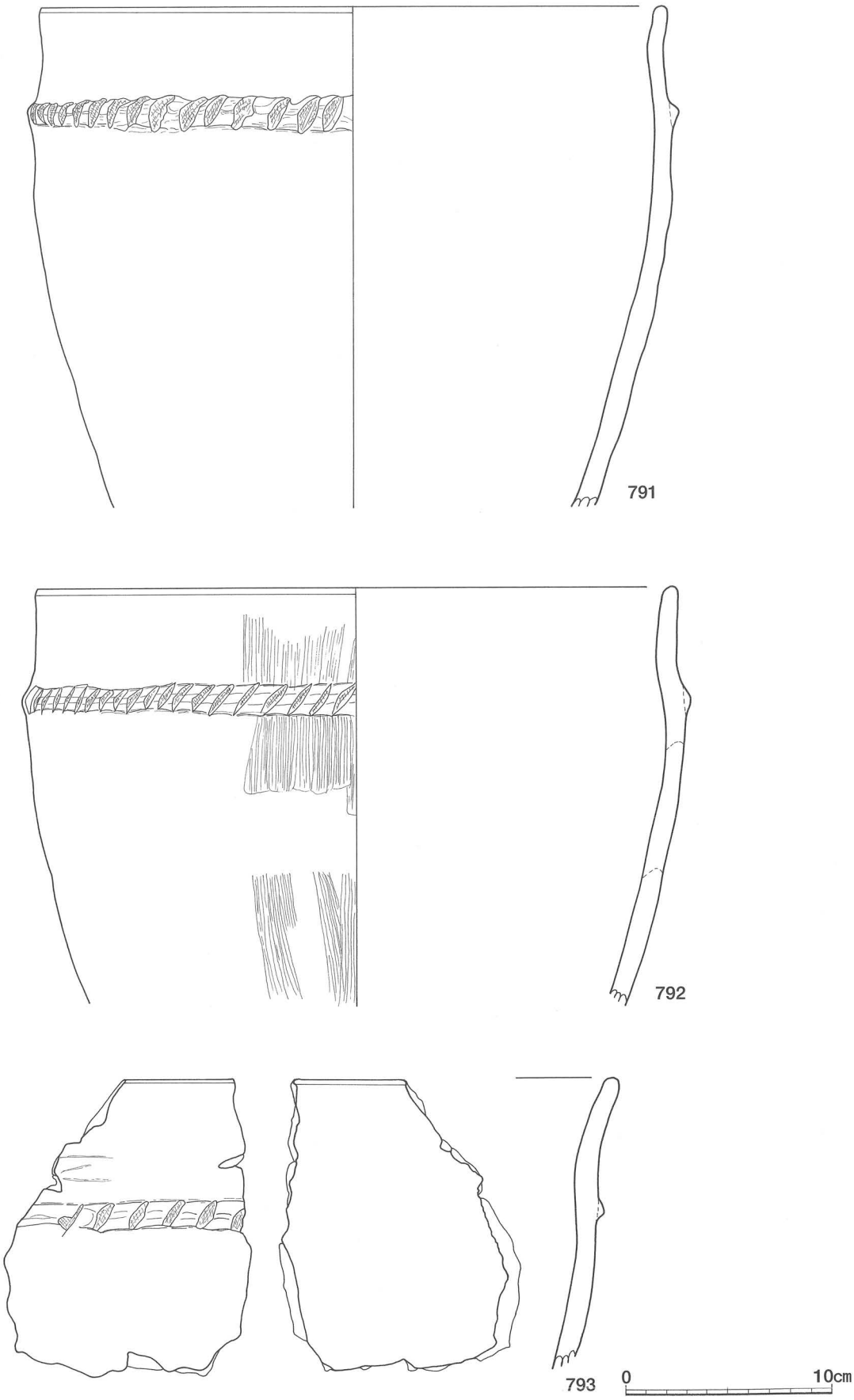




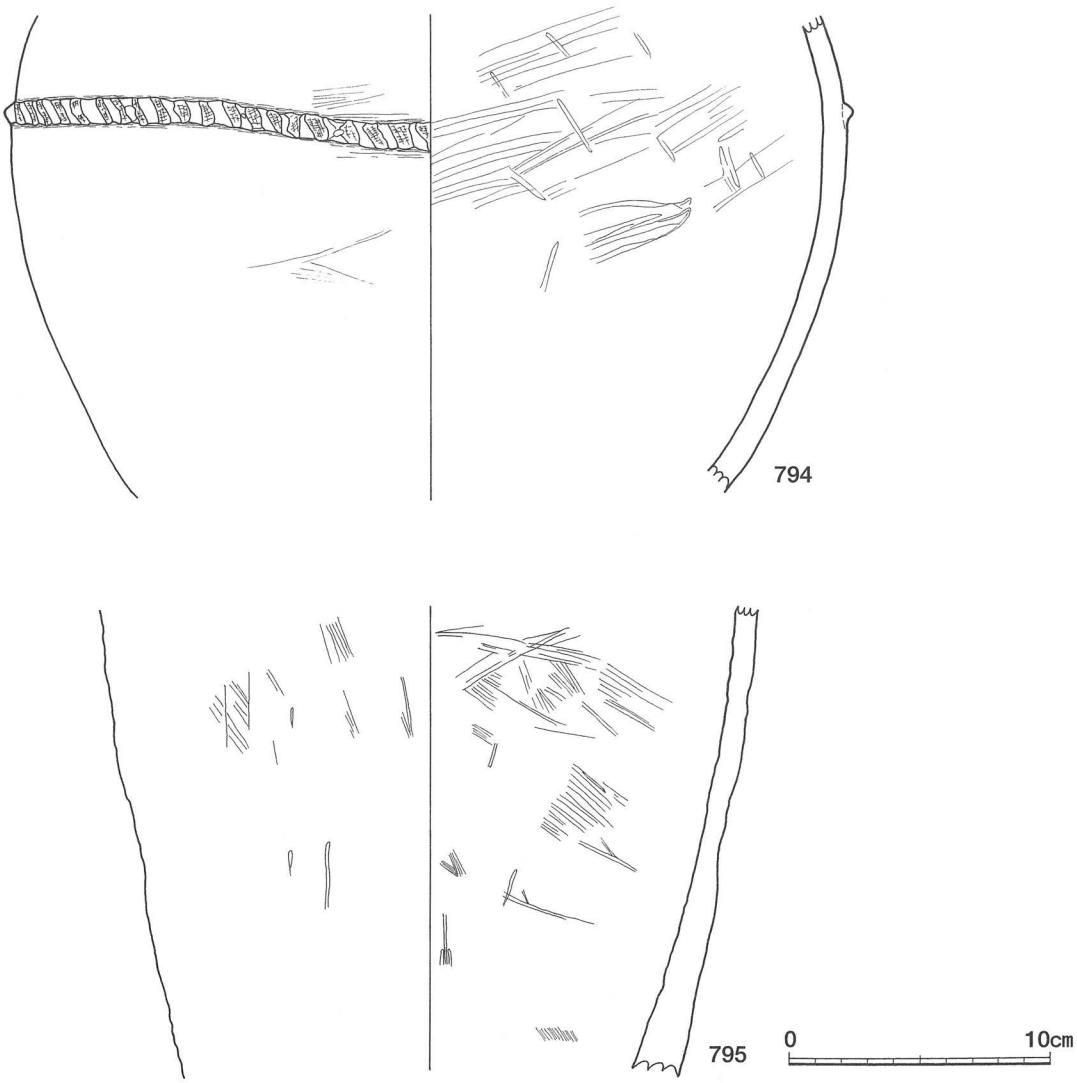
0　10cm

第139図　2号住居内出土遺物（1）

第140図　2号住居内出土遺物（2）



第141図　3号住居内出土遺物（1）



第142図　3号住居内出土遺物（2）

4号住居跡

811～817は4号住居跡出土の土器である。

811～816は甕形土器である。811～814は頸部に絡縄突帯を施すものである。内外面とも器面調整はナデ整形を施している。816は中空のあげ底底部である。

817は坩形土器の口縁部である。外反する長い口縁部をもつもので丹塗りされ，外面は丁寧なヘラミガキが施されている

5号住居跡

818・819は5号住居跡出土の土器である。818は甕形土器の胴部で絡縄突帯を施している。819は高坏脚部の筒部であり，丹塗りされ外面は丁寧なヘラミガキ調整を施している。

6号住居跡

820～822は6号住居跡から出土した土器である。

820は口径20.4cmを測る甕形土器である。「く」の字状に外反する口縁で，胴部はやや膨らむものである。ハケ目による調整痕がみられる。ハケ目方向は縦位に施されている。822は口径22.2cmを測る甕形土器で，直口する口縁部をもつものである。ナデ整形で器面調整を施している。

821は高坏脚部である。丹塗りされ外面に丁寧なヘラミガキ調整を施している。

7号住居跡

823～840は7号住居跡から出土した土器である。

803～831は甕形土器である。823～827は外反する口縁部であり，823は口径33.0cmを測る。825は口径26.1cmを測る。何れも内外面ともナデ調整を施している。828・829・833・834は頸部に絡縄突帯を施すもので，ナデ調整が施されている。

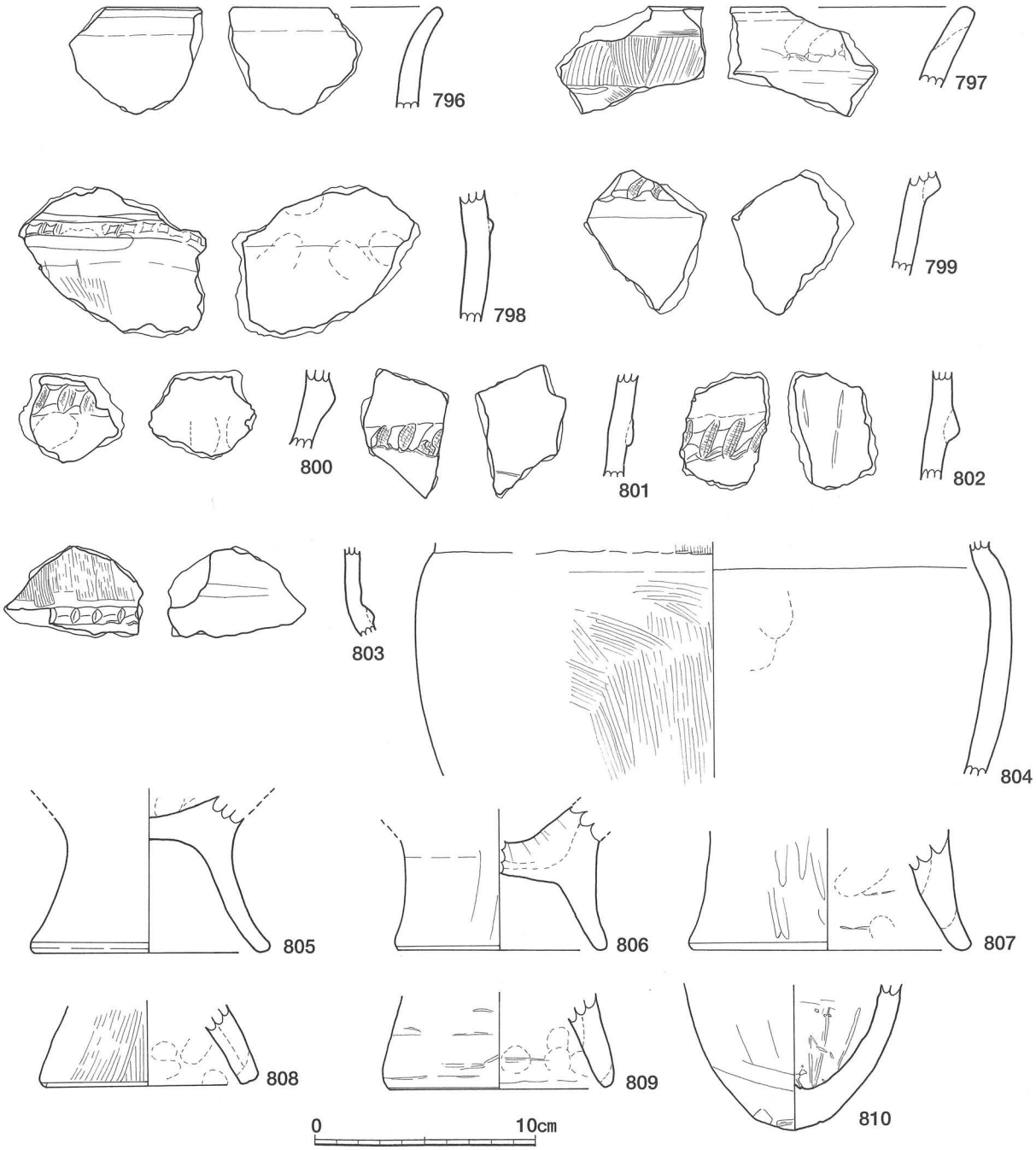
830・831・835は中空のあげ底底部である。

836・837は坩形土器の口縁部である。836は口径10.5cmを測るものである。外反する口縁で丁寧なヘラミガキ調整を施している。837はやや内向気味に立ち上がる口縁部で，口径10.5cmを測る。外面はヘラミガキ調整が施されている。

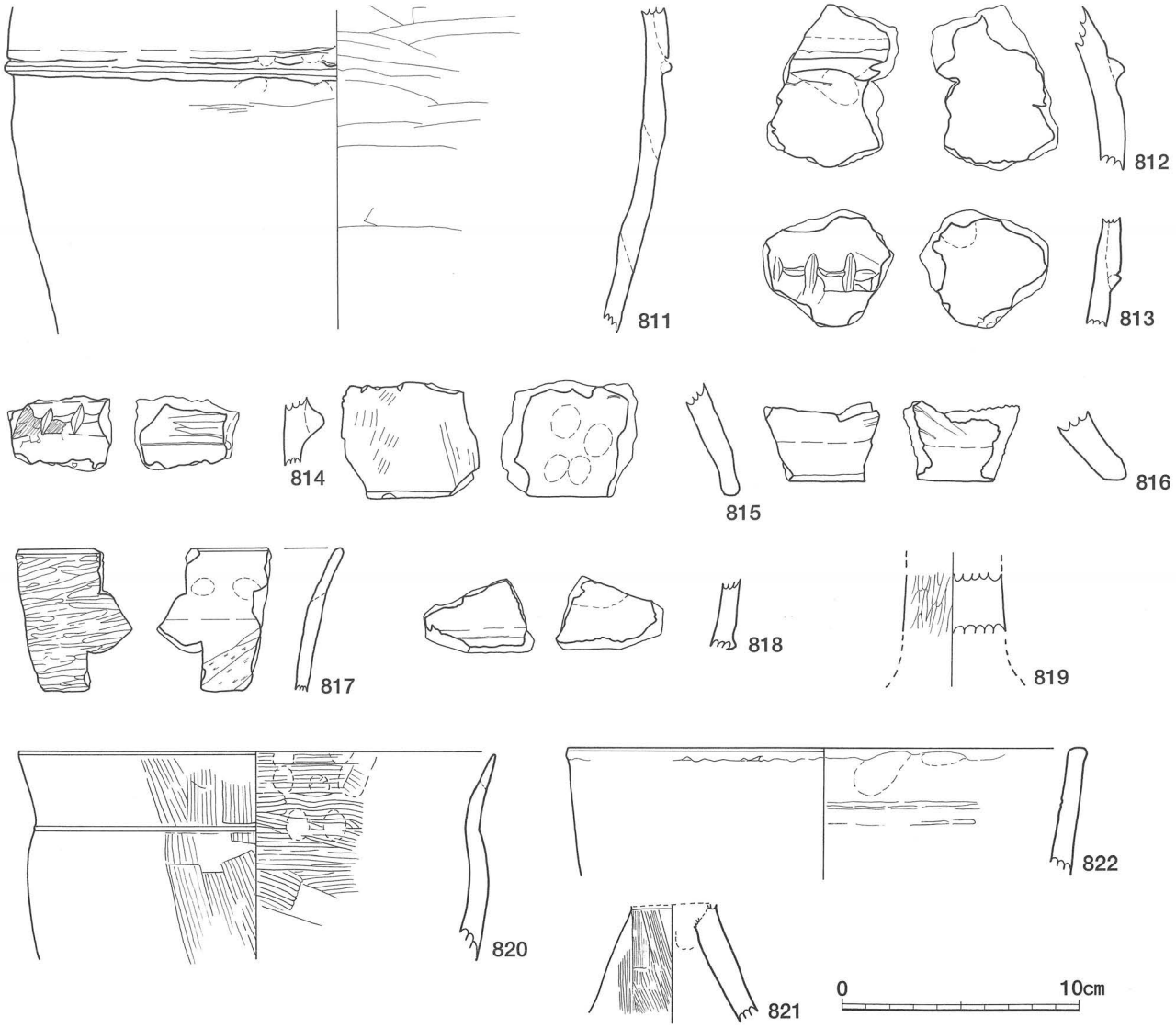
838は壺形土器の肩部である。340は壺形土器の丸底底部である。

839は坩形土器である。

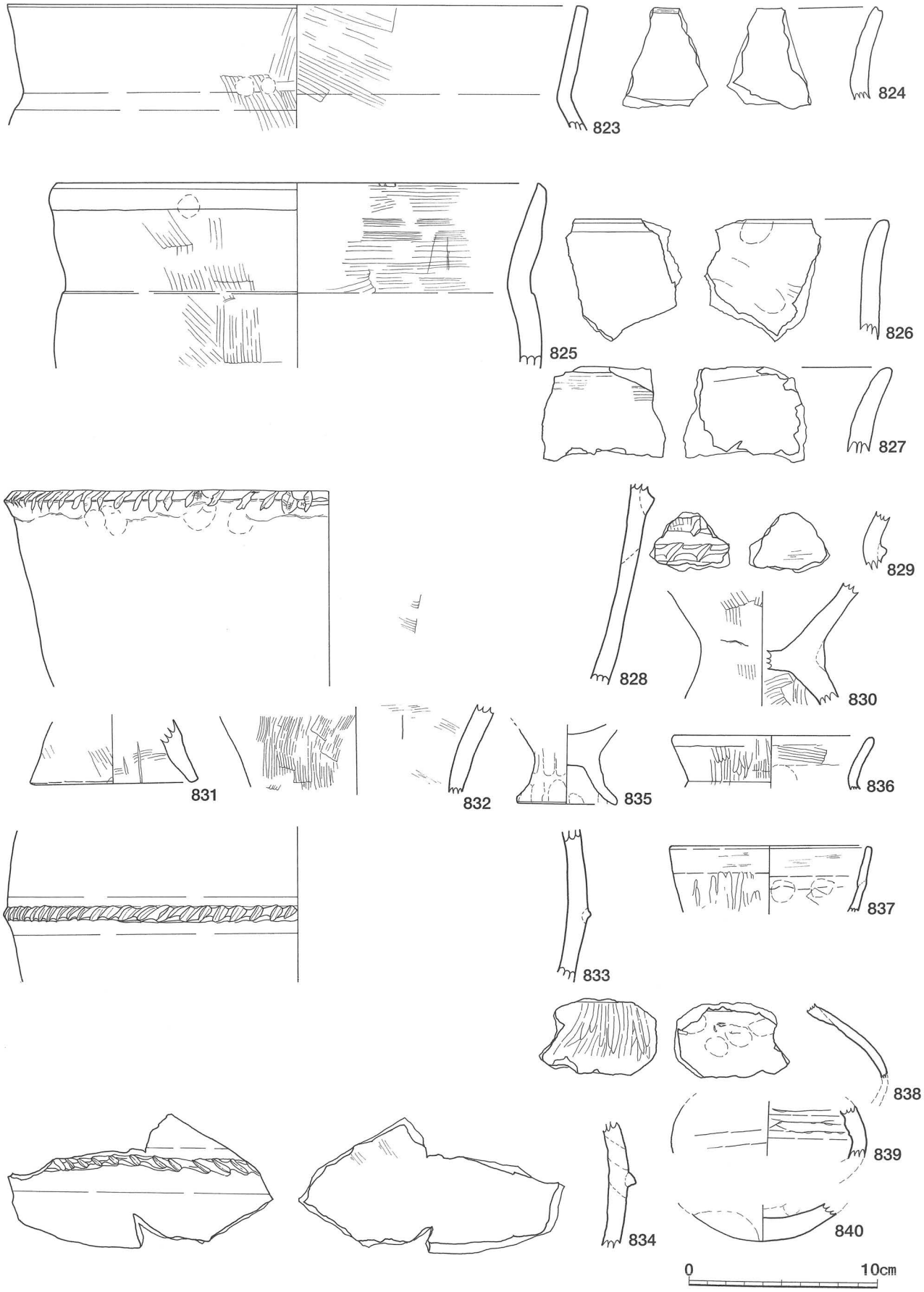
841は，C－22区，Ⅲa層から出土した埋設土器である。壺形土器で肥厚した丸底を呈するものである。外面はナデ調整が施され，煤が付着している。



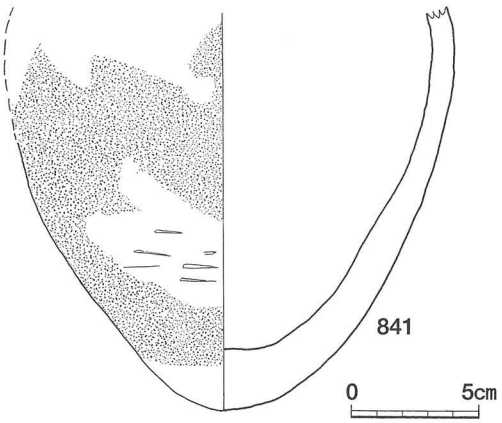
第143図　3号住居内出土遺物（3）



第144図　4・5・6号住居内出土遺物



第145図　7号住居内出土遺物



第146図　埋設土器

甕形土器

842～877は甕形土器である。

842～857は外反する口縁部をもつもので，842は口径33.0cmを測る。頸部はやや丸みにある「く」の字状に折れている。ナデ調整が施されている。

847・853～855・857は絡縄突帯を施すものである。器面調整は内面をナデ整形，外面はハケ目調整を行っている。

858～876は内弯する口縁部をもつもので，ナデ整形で器面調整がなされ，絡縄突帯を施すものである。858～860の口径は24.0cm，18.0cm，26.2cmを測る。860の突帯は刻目を施す。ナデ整形で器面調整を行っている。861は尖り気味の口縁部をもつ。877は口径37.8cmを測る大型の甕形土器である。頸部が「く」の字状に折れ，外反する口縁部をもつものである。

壺形土器

878は尖底気味の丸底をもつ壺形土器である。肩部に刻目のある絡縄突帯を施すものである。内外面ともナデ整形で器面調整を施している。879・880も同様の壺形土器である。893は小型壺で頸部が「く」の字状に折れ外反気味に直口する口縁部である。

鉢形土器

881・882は口径17.0cm，15.0cmを測る鉢形土器である。881は内弯気味に直口する口縁部で，882は内弯する口縁部である。内外面とも丁寧なヘラミガキ調整を施している。883・884は中空のあげ底底部で，脚台径は7.2cm，9.0cmを測る。890・891も鉢形土器である。890は口径13.5cmを測る内弯する口縁部である。内外面ともナデ整形を施している。891は肥厚した底部で平底である。

坩形土器

885～889は坩形土器である。885は外反する長い口縁部をもつ小型丸底壺である。器面調整はナデ整形である。復元口径11.0cm，器高13.8cm，胴部径12.8cmを測る。886も同様のもので，胴部径7.5cmを測る。887は外反する口縁部で，口縁下位に刻目突帯が貼付されている。内外面とも丁寧なヘラミガキ調整を施している。888は内弯する口縁部で復元口径は10.2cmを測る。889は長い口縁部をもつもので外反する。内面はナデ整形，外面は丁寧なヘラミガキ調整を施している。

高坏

894～900は高坏である。894は坏部である。口縁部が体部から外折反転したもので，口径21.3cmを測る。895は脚部で，筒部が短く，裾部が緩やかに外反するものである。896は完形品で，口径24.0cm，器高24.0cm，脚部径12.2cmを測る。口縁部は体部から外折反転したもので，脚部は底部から筒部をもたずすぐ裾部になる形状を呈している。897～899は脚部で筒部が短く，裾部が緩やかに外反するもの（848），底部から筒部をもたずすぐ裾部になる形状を呈しているもの（897・899）がある。何れも丹塗りである。

手捏土器

901～904は手捏土器である。901・902は底部が肥厚して平底となるもので，口縁は内弯気味のものである。902の口縁部は尖り気味である。903は丸底で内弯気味の口縁をあるもつものである。

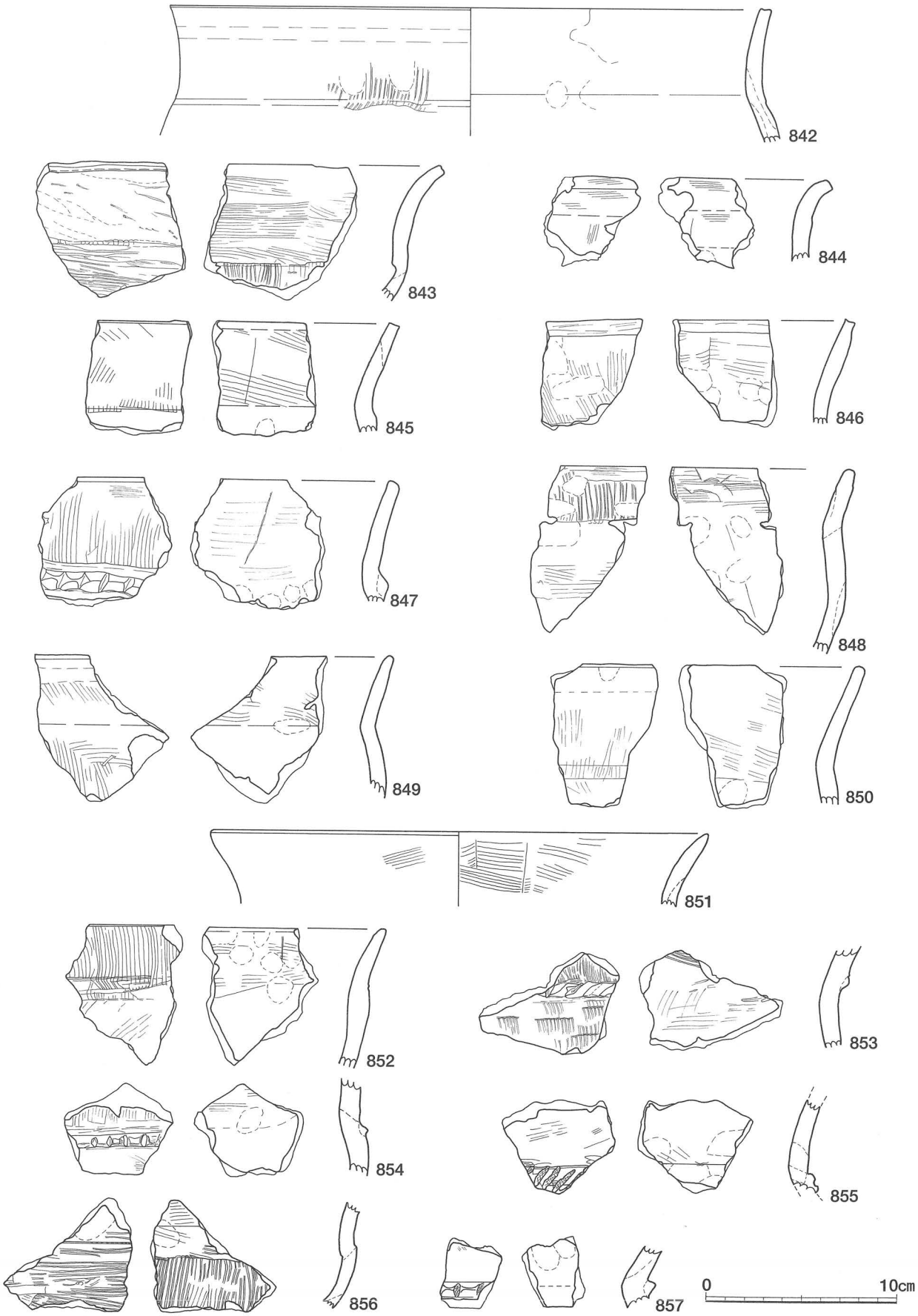
904は外反気味に直口する口縁をもつもので，底部は尖底である。

第24表　北原中遺跡遺構内出土土器観察表（1）

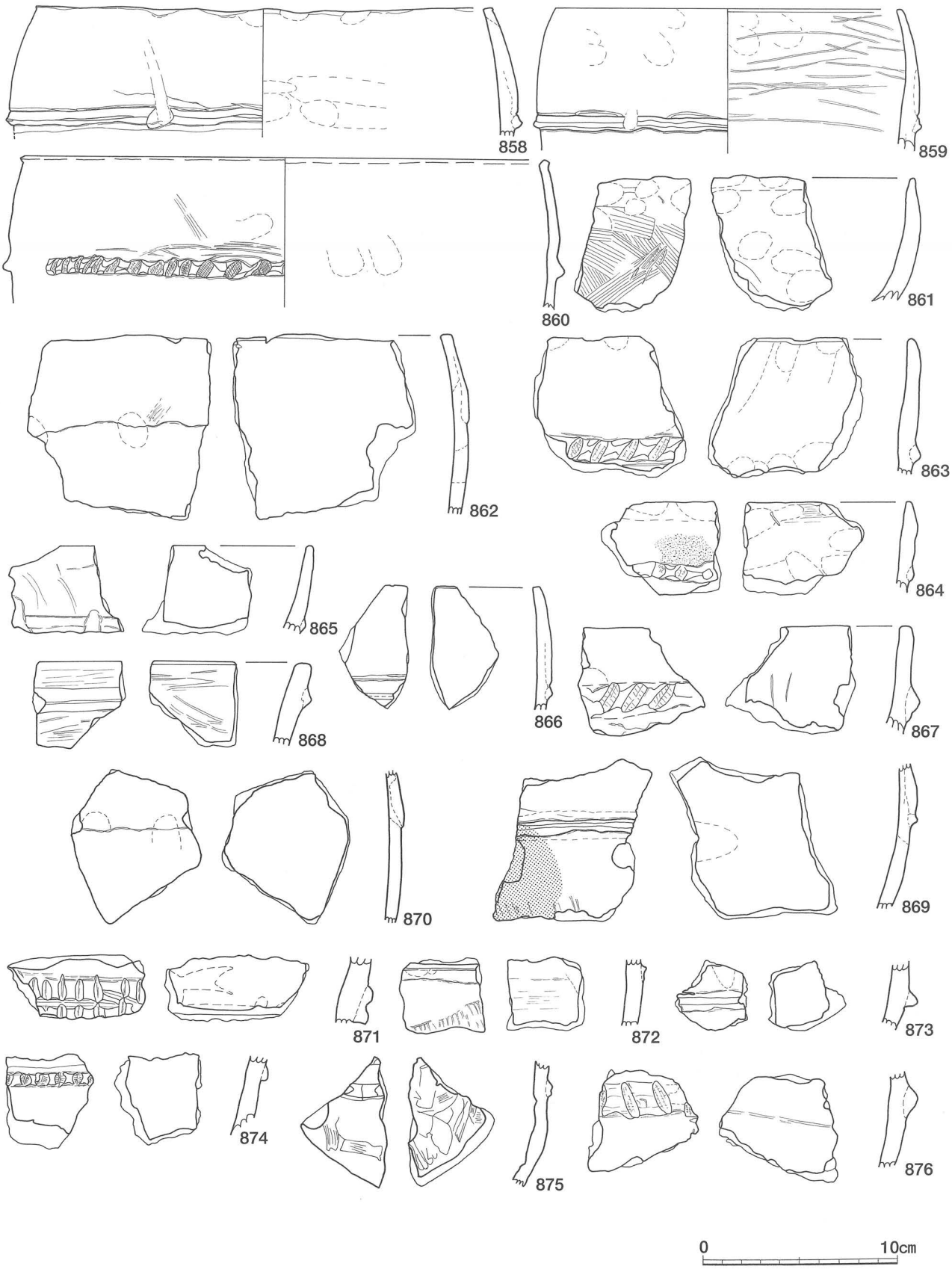
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	器種	部位	調整 外面	調整 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	取上番号	備考
138	761	D−23	住居1	甕	口〜胴	ミガキ	ナデ	qz	黒褐色	褐色	3他	
	762	D−23	住居1	甕	口縁	ヨコナデ	指押さえ	qz,礫	暗褐色	にぶい赤褐色	46	
	763	D−23	住居1	甕	突帯		ナデ	qz	橙色	にぶい橙色	142	
	764	D−23	住居1	甕	突帯	ヨコナデ	ナデ	qz	黄褐色	橙色	89	
	765	D−23	住居1	甕	突帯	指押さえ	工具ナデ	qz,礫	黒褐色	黒褐色	86	
	766	D−23	住居1	甕	突帯	ヨコナデ	ヨコナデ	qz	褐色	にぶい褐色	一括	
	767	D−23	住居1	甕	口縁	ミガキ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	118	
	768	D−23	住居1	甕	突帯	ナデ	ハケメ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	103	
	769	D−23	住居1	甕	突帯	ヨコナデ	ハケメ	qz	橙色	にぶい橙色	66	
	770	D−23	住居1	甕	突帯	ヨコナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	赤褐色	一括	
	771	D−23	住居1	甕	突帯	ナデ	工具痕	qz	黒褐色	にぶい褐色	80	
	772	D−23	住居1	壺	突帯	ナデ	ナデ	qz	褐色	にぶい褐色	131	
	773	D−23	住居1	埦	口〜胴	ナデ	ヨコナデ	ho,qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	78	
	774	D−23	住居1	坩	肩部	ナデ	ナデ	qz		灰褐色	一括	
	775	D−23	住居1	坩	胴部	ヘラミガキ	ナデ	qz	褐色	にぶい褐色	93	丹塗り
	776	D−23	住居1	坩	胴部	ヘラミガキ	指ナデ	qz	赤褐色	赤褐色	113	
	777	D−23	住居1	壺	底部	ヘラミガキ	指ナデ	qz	にぶい褐色	明褐色	143	
139	778	D−7	住居2	甕	口〜胴	ハケメ	指押さえ	ho,qz	橙色	橙色	一括	
	779	D−7	住居2	甕	口縁	ナデ	指押さえ	qz	にぶい橙色	にぶい橙色		
	780	D−7	住居2	甕	口縁	工具痕	指押さえ	ho,qz	橙色	橙色		
140	781	D−7	住居2	甕	完形	ナデ	ナデ	qz	橙色	にぶい橙色	一括	スス付着
	782	D−7	住居2	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	明褐色	明黄褐色	一括	
	783	D−7	住居2	甕	底部	ハケメ	ナデ	qz	にぶい橙色	にぶい黄橙色	29	
	784	D−7	住居2	甕	脚台	ヨコナデ	工具痕	fl,qz	にぶい黄褐色	褐色	一括	
	785	D−7	住居2	壺	突帯	ヨコナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	黒褐色	一括	
	786	D−7	住居2	壺	口縁	ヘラミガキ	ヘラミガキ	qz	赤褐色	明赤褐色	66	丹塗り
	787	D−7	住居2	埦	口縁	ヘラミガキ	ナデ	qz	赤褐色	にぶい褐色	55他	丹塗り
	788	D−7	住居2	高坏	口縁	ミガキ	ヘラミガキ	qz	赤色	にぶい褐色	65	丹塗り
	789	D−7	住居2	甕	口縁	ヨコナデ	ナデ	qz	明赤褐色	にぶい橙色	11	
	790	D−7	住居2	坩	胴部	ナデ	ヨコナデ	qz	明黄褐色	明黄褐色	一括	
141	791	D−7	住居3	甕	口〜胴	ナデ	ナデ	fl,qz	明赤褐色	橙色	191他	
	792	D−7	住居3	甕	口〜胴	板ナデ		qz	にぶい褐色	にぶい黄褐色	9他	
	793	D−7	住居3	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	橙色	明赤褐色	132他	
142	794	C− 6	住居3	甕	胴部	ナデ	工具痕	fl,ho,qz	暗赤褐色	明赤褐色	13他	
	795	C−11	住居3	甕	胴部	ハケメ	ハケメ	fl,ho,qz	赤褐色	明赤褐色	203他	
143	796	D−22	住居3	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	71	
	797	D−22	住居3	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	黒褐色	にぶい黄褐色	109	黒塗り
	798	D−22	住居3	甕	突帯	ハケメ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい黄橙色	157	
	799	D−22	住居3	甕	突帯	ヨコナデ	ナデ	fl,qz	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	65	
	800	D−22	住居3	甕	胴部	ヨコナデ	ナデ	ho,qz	にぶい橙色		177	
	801	D−22	住居3	甕	胴部	ヨコナデ	ナデ	qz	黄褐色	橙色	一括	
	802	D−22	住居3	甕	突帯	ヨコナデ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	98	
	803	D−22	住居3	壺	突帯	ハケメ	ヨコナデ	qz	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	7	
	804	D−22	住居3	甕	胴部	ハケメ	ナデ	fl,qz	にぶい褐色	橙色	804他	
	805	D−22	住居3	甕	脚台	ヨコナデ	ヨコナデ	fl,qz	にぶい黄褐色	にぶい赤褐色	21他	
	806	D−22	住居3	甕	脚台	ヨコナデ	ヨコナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	191	
	807	D−22	住居3	甕	脚部	ヨコナデ	ヨコナデ	fl,qz	褐色	にぶい赤褐色	192	
	808	D−22	住居3	甕	脚部	ハケメ	指押さえ	qz	にぶい黄橙色	にぶい赤褐色	136	
	809	D−22	住居3	甕	胴部	ナデ	ナデ	fl,qz	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	124他	
	810	D−22	住居3	壺	底部	板ナデ	工具痕	fl,qz	橙色	にぶい黄橙色	一括	
144	811	D−21	住居4	甕	胴部	ヨコナデ	ナデ	qz,礫	赤黒色	にぶい黄橙色	41他	
	812	D−21	住居4	甕	突帯	指押さえ	ナデ	qz	暗石灰色	にぶい黄橙色	122他	
	813	D−21	住居4	甕	突帯	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	橙色	6	
	814	D−21	住居4	甕	突帯	ナデ	ナデ	qz	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	35	
	815	D−21	住居4	甕	脚台	ハケメ	ナデ	qz	橙色	にぶい橙色	34	
	816		住居4	甕	脚台	ヨコナデ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	入口土坑	
	817		住居4	坩	口縁	ヘラミガキ	ヨコナデ	qz	褐灰色	灰褐色	一括	丹塗り
	818		住居5	甕	突帯	ヨコナデ	ナデ	qz	橙色	黒色	一括	
	819	D−20	住居5	高坏	脚部	ヘラミガキ	/	qz	暗灰褐色	灰褐色	5	丹塗り
	820	B−23	住居6	甕	口縁	ヨコハケ	ナデ	qz	暗灰黄色	にぶい黄褐色	一括	
	821	D−23	住居6	高坏	脚部	ハケメ	指ナデ	qz	にぶい橙色	橙色	19	
	822	B−23	住居6	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	明赤褐色	一括	
145	823	E22	住居7	甕	口縁	ナデ	ハケメ	qz	明黄褐色	明黄褐色	44	
	824	E23	住居7	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	明赤褐色	12	
	825	E22	住居7	甕	口縁	ヨコナデ	ナデ	qz	橙色	にぶい黄橙色	14他	
	826		住居7	甕	口縁	指ナデ	ヨコナデ	qz	明黄橙色	にぶい黄橙色	82	
	827		住居7	甕	口縁	ヨコナデ	ヨコナデ	qz	褐色	にぶい褐色	81	
	828	E22	住居7	甕	胴部	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	橙色	57他	
	829	E23	住居7	壺	突帯	ヨコナデ	ナデ	qz	橙色	橙色	30	

第25表　北原中遺跡遺構内出土土器観察表（2）

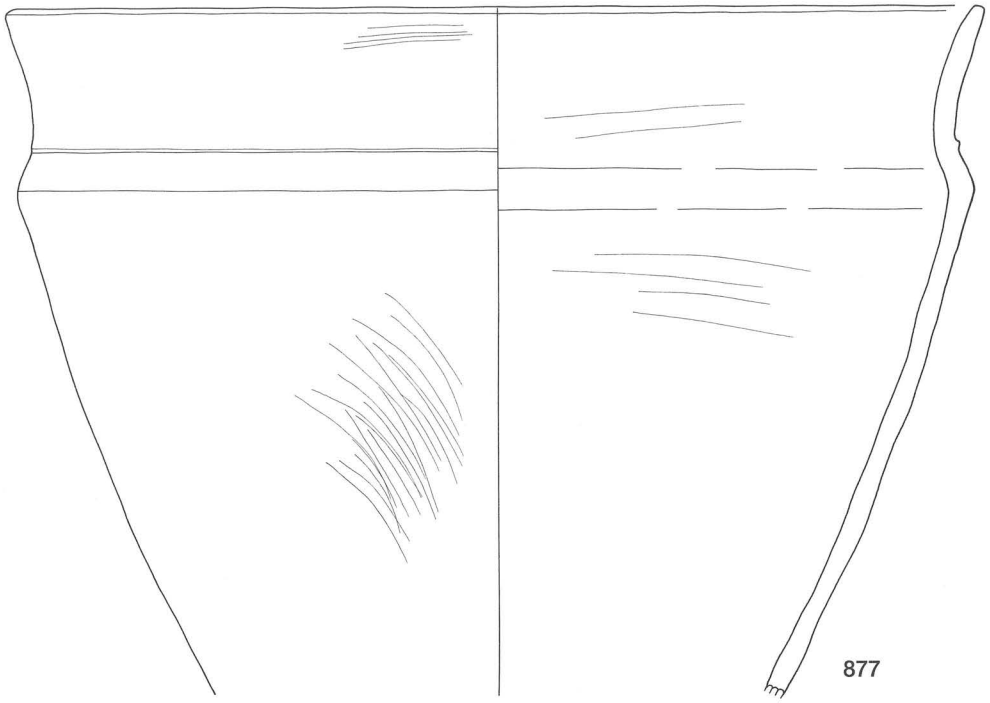
挿図番号	遺物番号	出土区	層位	器種	部位	調整		胎土	色調		取上番号	備考
						外面	内面		外面	内面		
145	830		住居7	甕	底部	ヨコナデ	指ナデ	qz	にぶい橙色	黒色	138	
	831	E22	住居7	甕	底部	ヨコハケ	ヨコハケ	qz	明黄褐色	明黄褐色	84	
	832	E23	住居7	壺	頸部	ハケメ	ナデ	qz	明黄褐色	にぶい黄橙色	15	
	833		住居7	壺	胴部	ナデ	ナデ	fl,qz	にぶい黄色	にぶい黄色	136	
	834		住居7	壺	突帯	ヨコナデ	ナデ	fl,qz	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	134他	
	835	E22	住居7	甕	脚台	指ナデ	指押さえ	qz	橙色	にぶい黄橙色	36	
	836	E23	住居7	坩	口縁	ミガキ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい褐色	6	
	837	E22	住居7	坩	口縁	ヘラミガキ	指押さえ	qz	橙色	橙色	112	
	838	E22	住居7	壺	肩部	ミガキ	指押さえ	qz	明赤褐色	にぶい黄橙色	一括	
	839		住居7	坩	肩部	ミガキ	指ナデ	qz	にぶい黄橙色	浅黄色	171	
	840	E22	住居7	壺	底部	ミガキ	指ナデ	qz	橙色	橙色	156	黒　斑
146	841	C−22	1号埋土	壺	胴〜底	ナデ		fl,qz,礫	にぶい褐色	黒褐色	埋設	スス付着

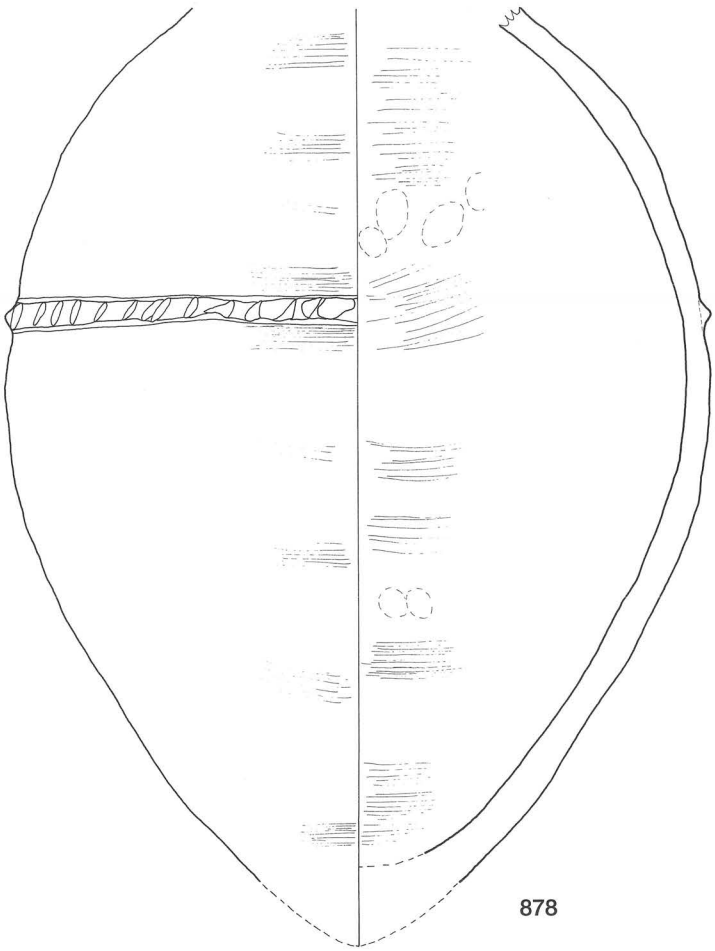


第147図　Ⅳ層出土土器（1）

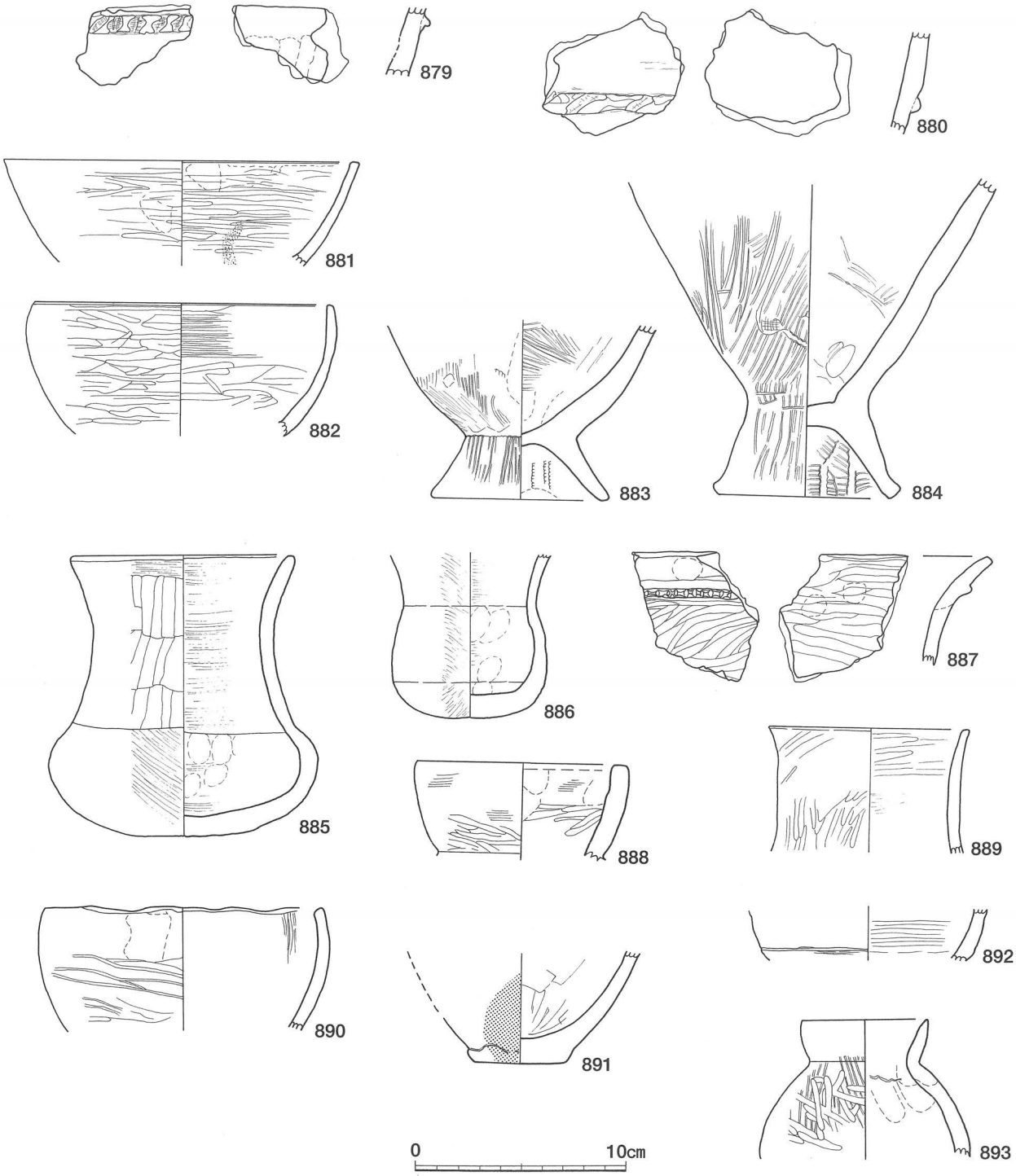


第148図　Ⅳ層出土土器（2）

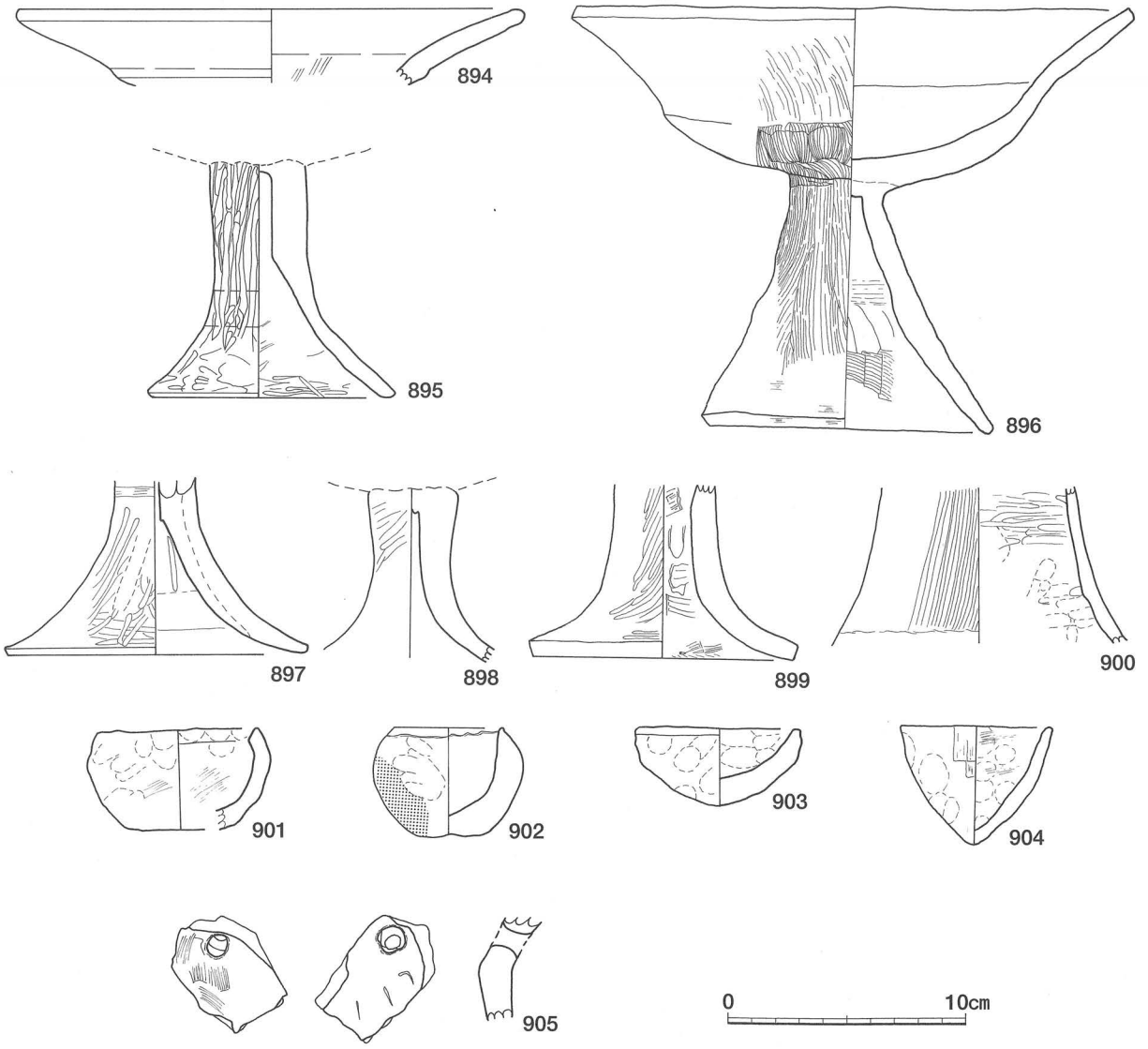




第149図　Ⅳ層出土土器（3）



第150図　Ⅳ層出土土器（4）



第151図　Ⅳ層出土土器（5）

第26表　北原中遺跡包含層成川式土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	器種	部位	調整 外面	調整 内面	胎土	色調 外面	色調 内面	取上番号	備考
147	842	D23	Ⅲb	甕	口縁	ナデ	ナデ	fl,qz	橙色	橙色	7725	
	843	D23	Ⅲb	甕	口縁	ケズリ	ハケメ	fl,qz	明赤褐色	にぶい褐色	7731	
	844	C9	Ⅳ	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz,礫	明黄褐色	明黄褐色	1595	
	845	D23	Ⅲb	甕	口縁	ハケメ	ハケメ	qz	にぶい黄橙色	にぶい橙色	7442	
	846	D23	Ⅲb	甕	口縁	ハケメ	ハケメ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	7918	
	847	D23	Ⅳa	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	にぶい黄橙色	にぶい橙色	7630他	
	848	E23	Ⅲb	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	橙色	にぶい黄橙色	2832他	
	849	E23	Ⅲb	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	明黄褐色	明黄褐色	711	
	850	E23	Ⅲ	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	にぶい黄橙色	橙色	1157	
	851	D23	Ⅳa	甕	口縁	ナデ	横ハケ	qz	明黄褐色	明黄褐色	7651	
	852	E23	Ⅲb	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	橙色	明黄褐色	786	
	853	D23	Ⅲb	甕	突帯	工具ナデ	工具ナデ	qz	明赤褐色	にぶい赤褐色	7524	
	854	D23	Ⅲb	甕	突帯	ハケメ	ナデ	qz	にぶい黄橙色	明灰黄色	7740	
	855	E23		甕	突帯	横ナデ	指ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	一括	
	856	D23	Ⅲb	甕	頸部	ハケメ	ハケメ	fl,qz	にぶい橙色	橙色	7734	
	857	E23	Ⅲb	甕	突帯	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい褐色	1168	
148	858	E23	表層	甕	口縁	横ナデ	指ナデ	ho,qz	黒褐色	にぶい黄橙色	カクラン	
	859	E23	表層	甕	口縁	指ナデ	ナデ	qz,礫	にぶい褐色	にぶい褐色	カクラン	
	860	E23	Ⅲb	甕	口縁	ナデ	ナデ	ho,fl,qz	にぶい黄橙色	明黄褐色	755他	
	861	E23	Ⅲb	甕	口縁	ハケメ	ナデ	qz	橙色	橙色	722	
	862	E23	表層	甕	口縁	指ナデ	ナデ	ho,qz,礫	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	カクラン	
	863	E23	Ⅳb	甕	口縁	ナデ	ナデ	ho,qz	にぶい黄橙色	橙色	1145	
	864	C10	Ⅳa	甕	口縁	ナデ	横ナデ	qz	橙色	橙色	1110	
	865	E23	Ⅳ	甕	口縁	ナデ	ナデ	qz	にぶい褐色	にぶい橙色	カクラン	
	866	D22	表層	甕	口縁	横ナデ	ナデ	qz	暗褐色	にぶい黄褐色	73	
	867	D23	Ⅲb	甕	口縁	ナデ	ハケメ	qz	橙色	橙色	7700	
	868	E23	Ⅲb	甕	口縁	ハケメ	ハケメ	ho,fl,qz	にぶい橙色	橙色	1211	
	869	E23		甕	突帯	横ナデ	ナデ	qz	明褐色	暗赤灰色	土器集中部	スス付着
	870	E23	表層	甕	突帯	ナデ	ナデ	qz,礫	橙色	にぶい黄橙色	一括	
	871	E23	Ⅲb	甕	突帯	ナデ	ナデ	ho,qz	にぶい橙色	にぶい橙色	719	
	872	D23	Ⅳa	甕	突帯	ナデ	工具ナデ	fl,qz	にぶい橙色	にぶい橙色	7715	
	873	E23	表層	甕	突帯	ナデ	ナデ	qz,礫	にぶい赤褐色	明赤褐色	カクラン	
	874	D23	Ⅳa	甕	突帯	ナデ	ナデ	fl,qz	にぶい赤褐色	にぶい褐色	7633	
	875	E23	表層	甕	突帯	ナデ	ナデ	qz	橙色	橙色	一括	
	876	D23	Ⅲb	甕	突帯	ナデ	ナデ	ho,fl,qz	橙色	にぶい橙色	7463	
149	877	C15	Ⅳ	甕	口～胴	ハケメ	ハケメ	qz	にぶい橙色	にぶい黄橙色	2299他	
	878	C15		壺	胴部	ナデ	ナデ	qz,礫	にぶい橙色	褐灰色	294他	
150	879	D23	Ⅲb	壺	突帯	ナデ	ナデ	ho,qz	にぶい赤褐色	にぶい橙色	7406	
	880	E23	表層	壺	突帯	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	カクラン	
	881	E23	表層	鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	赤色	にぶい褐色	カクラン	
	882	E23	表層	鉢	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	カクラン	
	883	D16	Ⅳb	壺	底部	ハケメ	ハケメ	fl,qz	明赤褐色	黄褐色	1	
	884	E23	Ⅲb	壺	底部	工具ナデ	工具ナデ	fl,qz	にぶい赤褐色	黒色	1123他	
	885	C15	Ⅲ	小型壺	完形	ナデ	ナデ	qz	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	811他	
	886	C15	Ⅲ	小型壺	胴～底	ナデ	ナデ	ho,qz	にぶい橙色	にぶい橙色	1845	
	887	E23	表層	壺	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	カクラン	
	888	E23	Ⅲb	小型壺	口縁	ナデ	ミガキ	fl,qz	明赤褐色	明赤褐色	716	
	889	E23	表層	坩	口縁	ミガキ	ミガキ	qz	赤色	にぶい橙色	カクラン	
	890	E23	表層	埦	口縁	ナデ	ナデ	fl,qz	明赤褐色	明赤褐色	カクラン	
	891	D23	Ⅳa	埦	底部	ナデ	ナデ	fl,qz	橙色	にぶい橙色	一括	スス付着
	892	E23	表層	鉢	胴部	ミガキ	ナデ	qz	赤色	にぶい赤褐色	一括	
	893	C9	Ⅳ	小型壺	口～胴	ハケメ	指押え	fl,qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1126他	
151	894	E23	表層	高坏	口縁	ナデ	ナデ	qz	橙色	橙色	カクラン	
	895	D22	Ⅲb	高坏	脚部	ヘラミガキ		fl,qz	赤色	にぶい黄褐色	7899	
	896	B10	Ⅳ	高坏	完形			ho,qz	明赤褐色	橙色	1013	
	897	E23	Ⅲb	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	qz	赤褐色	にぶい黄褐色	一括	
	898	E23	Ⅲb	高坏	脚部	ミガキ		fl,qz,礫	明赤褐色	にぶい赤褐色	723	
	899	E23	表層	高坏	脚部	ミガキ	ナデ	qz	赤色	明赤褐色	カクラン	
	900	E23	表層	高坏	脚部	ミガキ	ハケメ	qz	赤色	にぶい黄橙色	カクラン	
	901	D23	Ⅳa	手づくね		指押さえ	指押え	qz,礫	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	8078他	
	902	D23	Ⅳa	手づくね		ナデ	ナデ	fl,ho,礫	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	8078	スス付着
	903	D23	Ⅳa	手づくね		指押さえ	指押え	qz,礫	灰白色	灰白色	8078・8025	黒斑
	904	C16	Ⅲ	手づくね		ナデ	ナデ	qz	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	3694	
	905	E23	Ⅲb	高坏	脚部	ハケメ	工具痕	ho	にぶい褐色	明赤褐色	1112	透かし

住居内出土石器（第152～154図，906～910）

検出された住居内の胎土から，成川式土器に伴い数十点の石器が出土した。その中から，状態の良いものをそれぞれ図化した。

2号住居は，2点の遺物を図化した。906は石皿である。扁平な安山岩を用いており，最大長33.5cm，重量10.2kgを計る。両面に擦痕を有し，特に表面にはツヤがある。907は軽石製品である。全体に擦痕がみられ，中央に深いくぼみがあるが，詳しい情報は不明な点が多い。

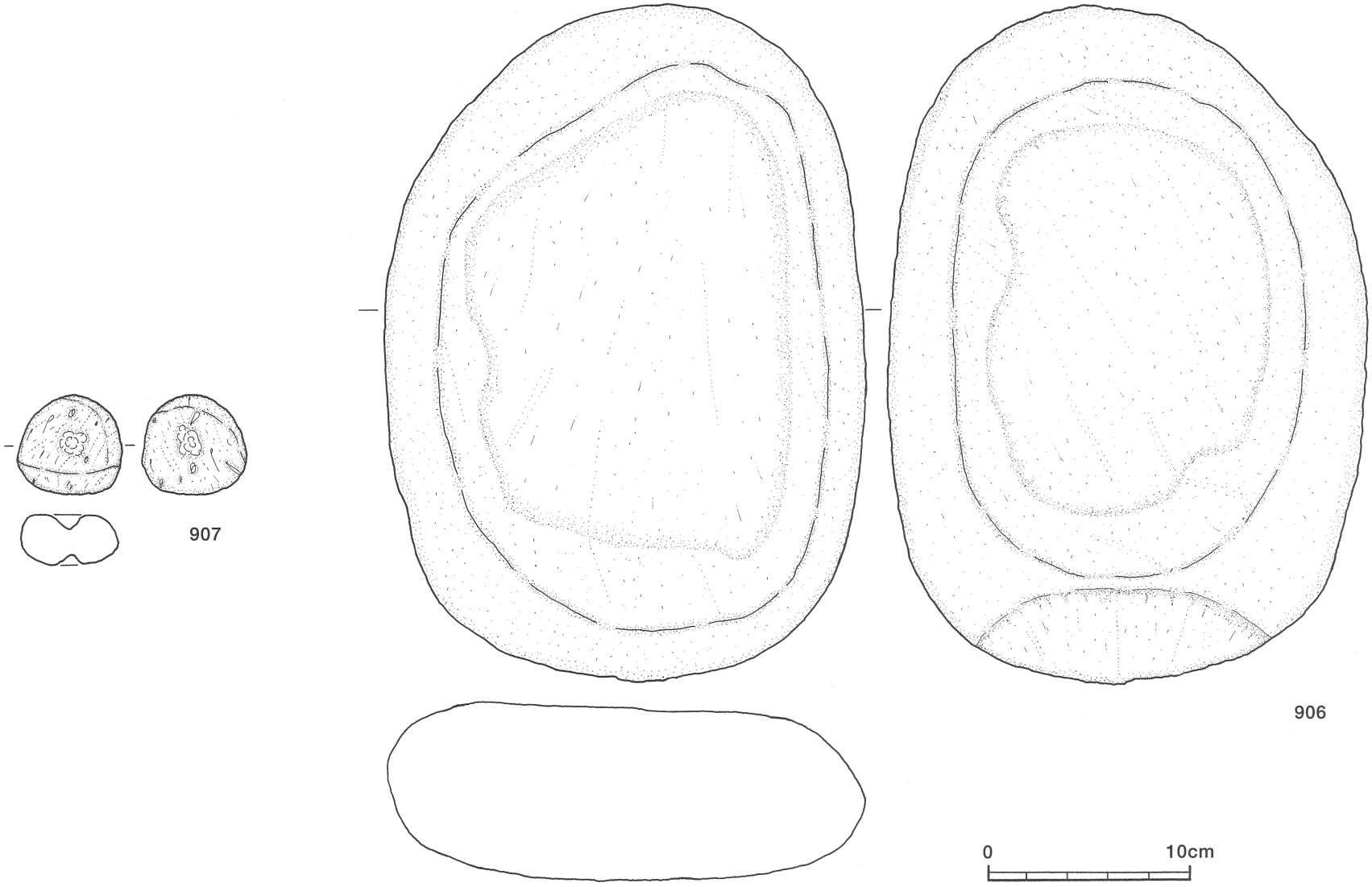
909は3号住居跡から出土したもので，大きく欠損しているが，花崗岩の扁平な素材を用いた石皿である。表裏に作業面を有し，いずれも弱い擦痕がみられる。中央部に向かって，緩やかにくぼんでいく。

910は5号住居跡から出土したもので，顕著に確認できる使用痕により，台石とした。楕円形の砂岩を用いている。正面には，やや深く擦り減った研磨面がみられる。方向が一定であり，砥石として利用された可能性がある。左右面，裏面には，ほぼ面の中心に敲打によるつぶれ状の使用痕がみられる。台石として使用されたと推測できる。上面と下面には，敲打痕と思われるつぶれや剥落が観察できた。全ての面に使用痕がみられ，また，一部弱い所もあるが擦痕が全面に確認できた。台石としたが，石器のオールマイティな使用法を考えさせる遺物であろう。

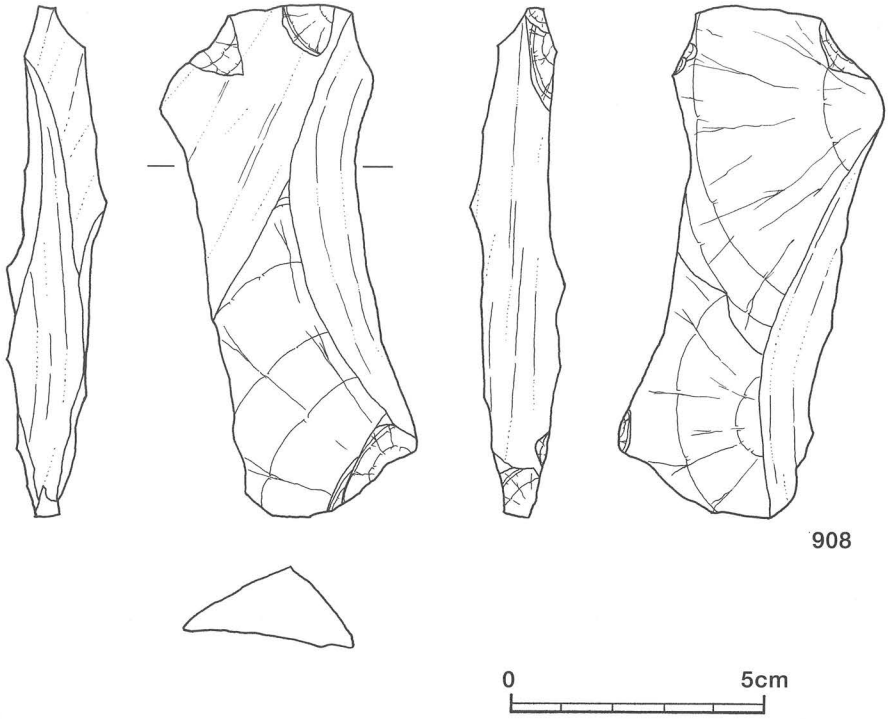
908は7号住居跡から出土したもので，頁岩製の砥石1点である。表面と裏面に大きく剥離面を残している。主に両側辺と正面の上部に，一定方向に向かっての研磨がみられる。

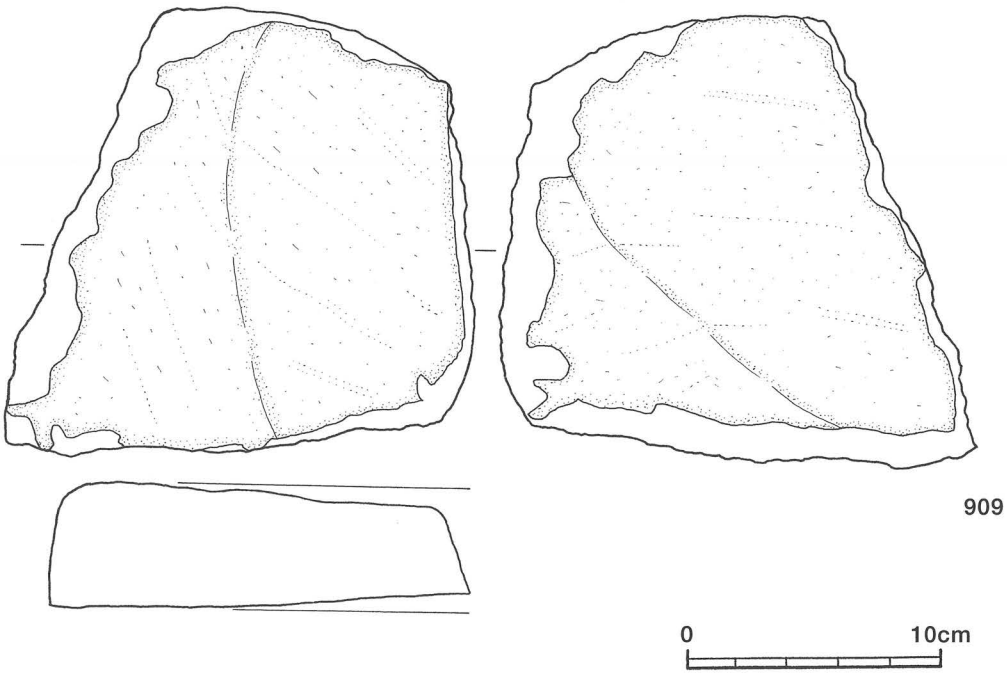
第27表　北原中遺跡住居内出土石器観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	器　種	石　材	区	住居No.	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
152	906	13338	石皿	安山岩	B5	2号	33.5	23.5	8.2	10200	
152	907	49	軽石製品	軽石	D23	2号	4.8	5.0	2.4	20.0	
153	909	7798	石皿	花崗岩	C6	3号	16.3	17.0	5.3	2810	
154	910	114	台石	砂岩	D20	5号	21.8	8.6	7.2	2140	
153	908	—	砥石	頁岩	E23	7号	10.1	4.2	1.5	70.0	

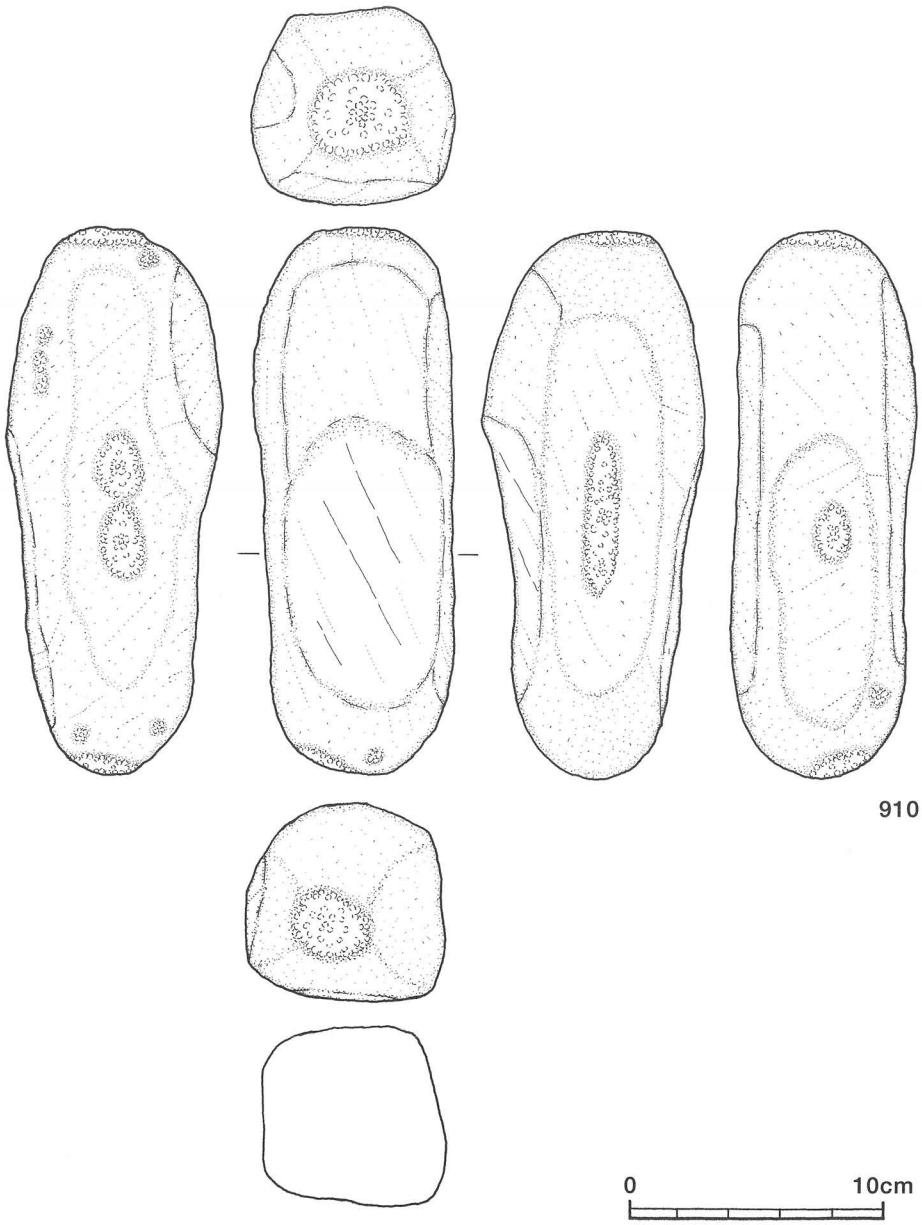


第152図　遺構内出土石器（1）





第153図　遺構内出土石器（2）



第154図　遺構内出土石器（3）

宇都上遺跡

第Ⅵ章　宇都上遺跡

第１節　発掘調査の概要

宇都上遺跡の調査は道路新設工事図面のSTA.192とSTA.180を基準に10m間隔の区割りを設定し，北側から１～12，西側からＡ～Ｆ区と名称した。平成17年度に確認調査を行い，面積が２,700㎡で縄文時代と古代～中世の二文化層があることが判明し，本調査を平成18年５月９日から10月27日まで行った。

平成17年度に，下記のとおり16か所のトレンチを設定して確認調査を行った。

ﾄﾚﾝﾁ	規模(m)	遺　　構	遺　　物
1	4×5	溝状遺構・古道・柱穴	縄文後期土器，古墳時代土器
2	2×5	溝状遺構	縄文後期土器
3	3×5	—	—
4	2×5	土坑・古道	縄文後期土器，磨石，古墳時代土器
5	2×5		縄文後期土器，陶磁器
6	2×10	ピット	陶磁器
7	2×4	土坑	縄文後期土器，古墳時代土器

その他，２×５ｍ（１か所），１×５ｍ（４か所），３×５ｍ（４か所）は，盛土，削平があり遺構・遺物は発見されなかった。

この結果に基づいて，表土は重機にて排除し，Ⅱ～Ⅳ層の全面調査を実施した。

その結果，縄文時代・古墳時代・古代～中世の遺構・遺物が検出された。

縄文時代の遺構・遺物は，集石２基と市来式土器・丸尾式土器等の後期土器と石鏃・石斧・敲石等の石器が出土した。

古墳時代では成川式土器が出土し，古代～中世では土坑・溝状遺構・道跡等が検出され，また，第２次大戦の防空壕跡も検出された。出土遺物は須恵器・土師器・陶磁器・滑石製品等が出土した。

第２節　縄文時代の調査

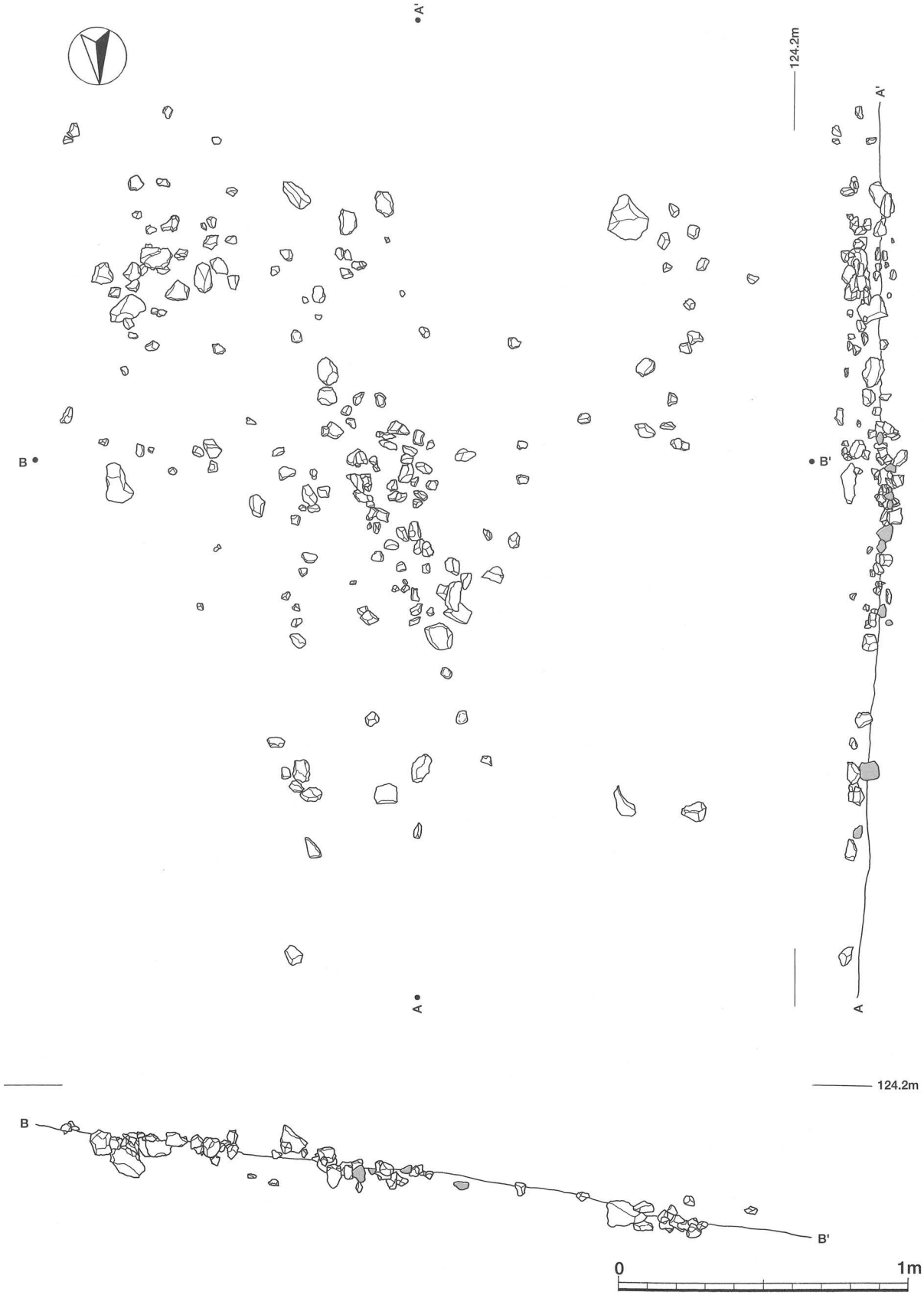
Ⅲ～Ⅳ層からは，縄文時代後期の遺構・遺物が出土した。遺物はＢ～Ｅ－２～12区に集中し，遺構は集石遺構が２基検出された。

集石遺構１（第155図）

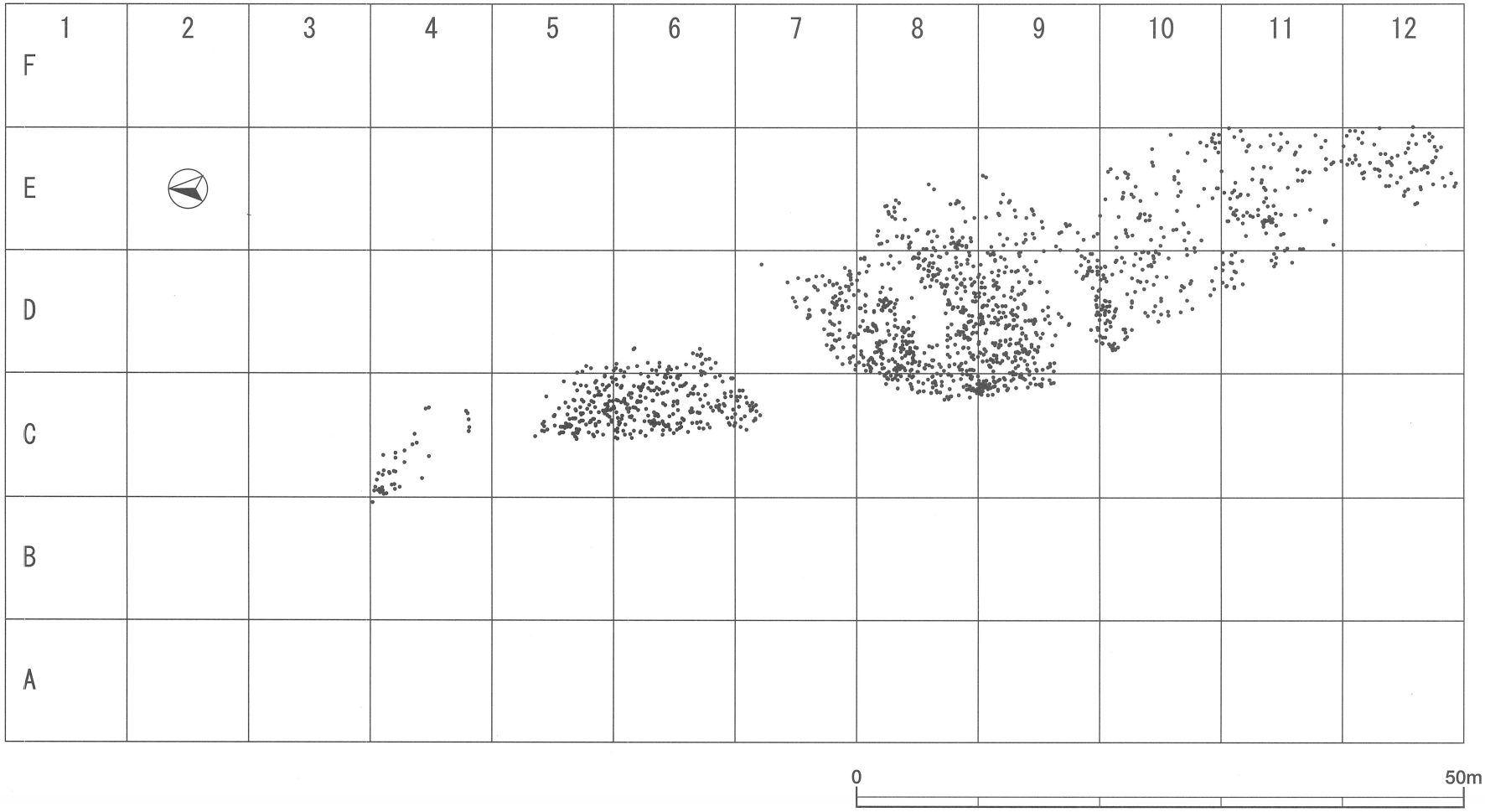
Ｃ－４区，Ⅲａ層上面で検出したものである。175個の拳大の角礫が，240cm×240cmのほぼ円形の範囲に散在した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており，加熱の影響を受けたものと考えられる。彫り込み等は認められなかった。

集石遺構２（第166図）

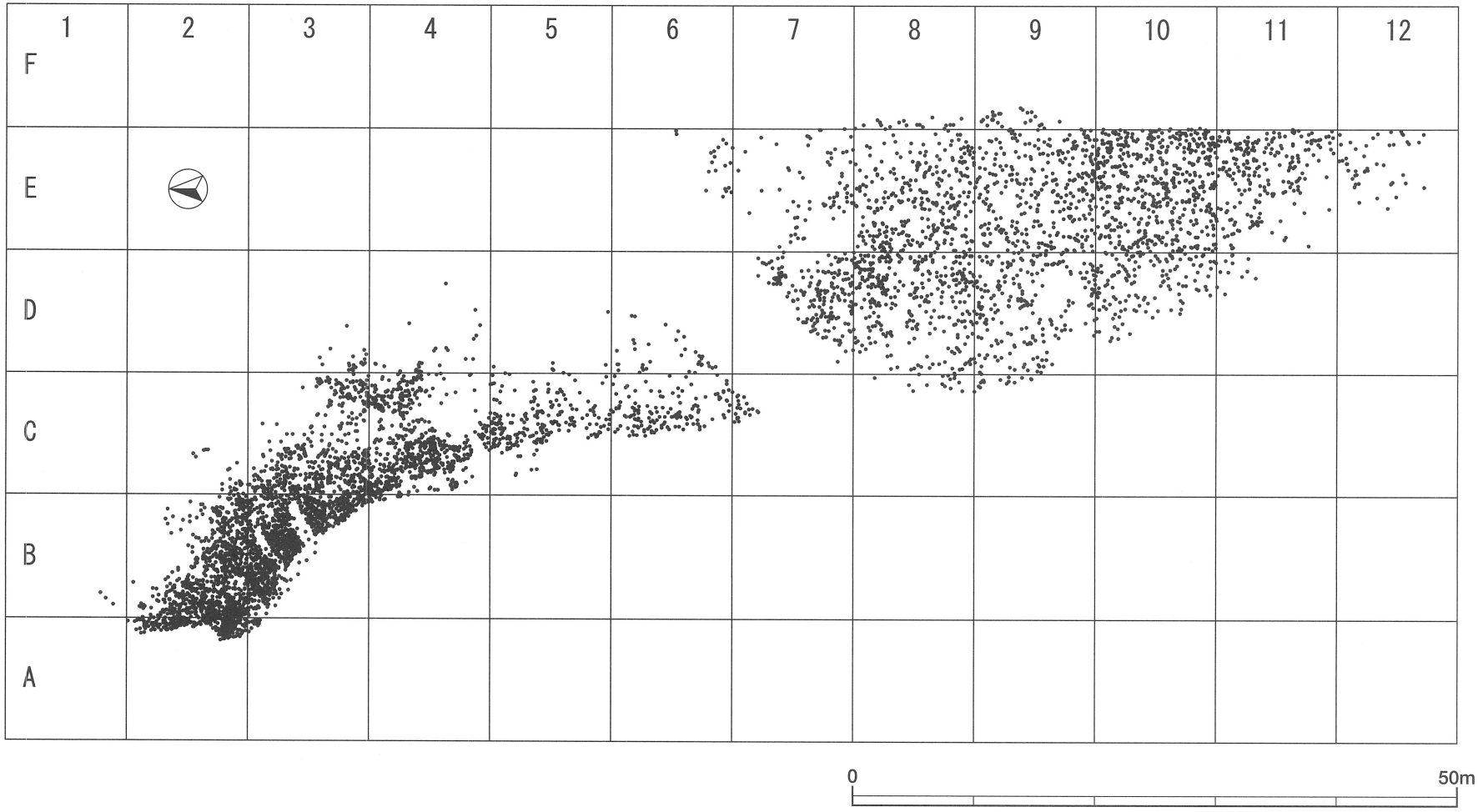
Ｃ－10区，Ⅲａ層上面で検出したものである。９個の拳大の角礫が，50cm×20cmの楕円形の範囲に集中した状態で検出された。これらの礫の表面は赤化しており，加熱の影響を受けたものと考えられる。彫り込み等は認められなかった。



第155図　集石（1）



第156図　Ⅲ層遺物出土状況



第157図　Ⅳ層遺物出土状況

縄文土器

縄文土器は，Ｂ～Ｆ－２～12区，Ⅳ層で出土した。縄文時代後期を主体にしたものである。

920～923はやや内弯する口縁部を呈し，胴部が緩やかにカーブないしほぼ直線的な立ち上がりをみせる鉢形土器である。文様は沈線のみで構成されている。辛川式土器に該当する土器である。

924・925は胴部である。

926は口縁部断面形が緩やかな三角形を呈し，口縁部の文様に沈線を用いるものである。北久根式土器に該当するものである。

927・928も辛川式土器の胴部で沈線を文様にするものである。

929～931は口縁部と胴部に磨消縄文を施す土器で，やや内弯する口縁部をもち，胴部の立ち上がりのカーブがやや強い土器である。加治木町干迫遺跡や鹿屋市中ノ原遺跡から出土した中ノ原式土器に類似する。

932は，口径24.0cmを測る口縁部で中ノ原土器であるが，２本の平行沈線で構成され，沈線のみで磨消縄文が施されていないものである。

933も北久根式土器で，926同様，口縁部断面形が緩やかに三角形を呈し，口縁部の文様に沈線を施すものである。

934は，口縁部が「く」の字状を呈するもので，口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。ナデ整形で器面調整を行っている。丸尾式土器に該当する。

935は，口縁部が外反するもので，内外面とも貝殻条痕で施文を行っているものである。市来式土器に該当する。

936は，口縁部が外反する土器で，口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。口縁部が山形を呈するものである。

937も市来式土器で，口縁部下位に貝殻復縁による斜位の連続刺突文を施すものである。

938～944は，口縁部が外反する土器で，口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。貝殻刺突文は羽状に施され，942は口縁部が山形を呈す。

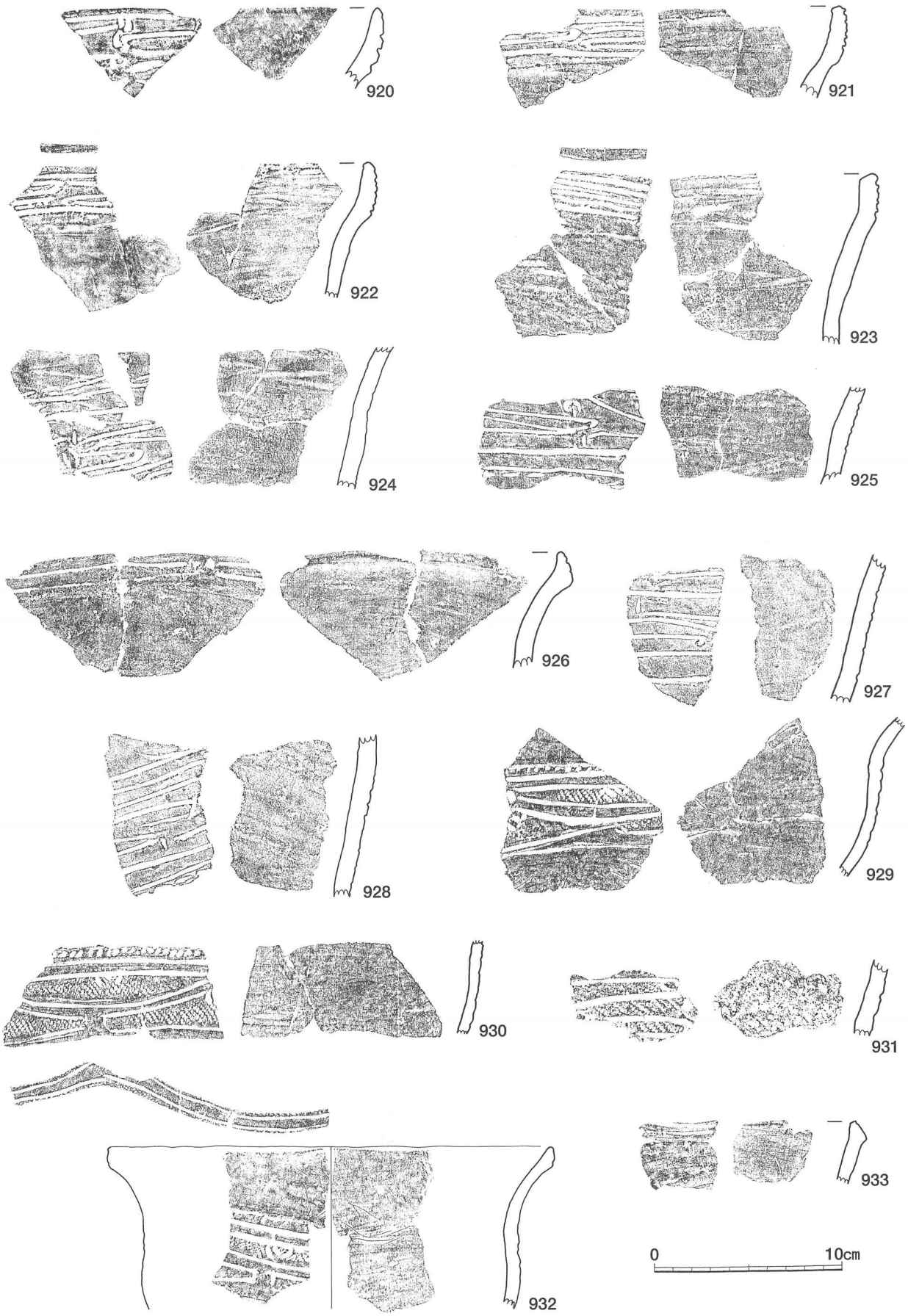
945は，口径31.2cmを測る外反する口縁部で，口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。

946～948・950は，外反する口縁部をもつもので，口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしものである。947は貝殻刺突文は羽状に施されている。

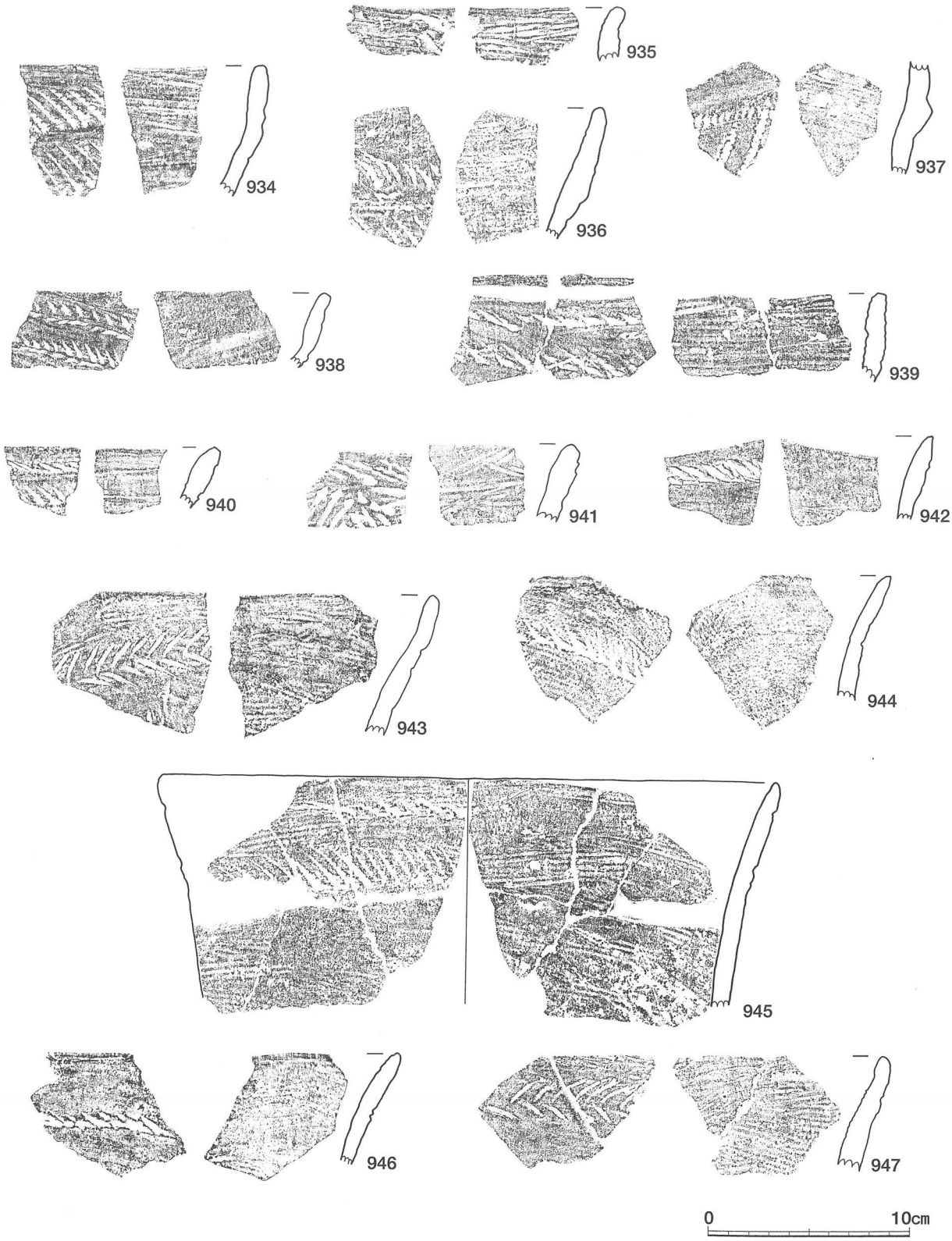
949は，口縁部の断面形が「く」の字状を呈するもので，口縁部下に連続する貝殻刺突文をめぐらしている。

951～955は，丸尾式土器の貝殻条痕を施した胴部である。

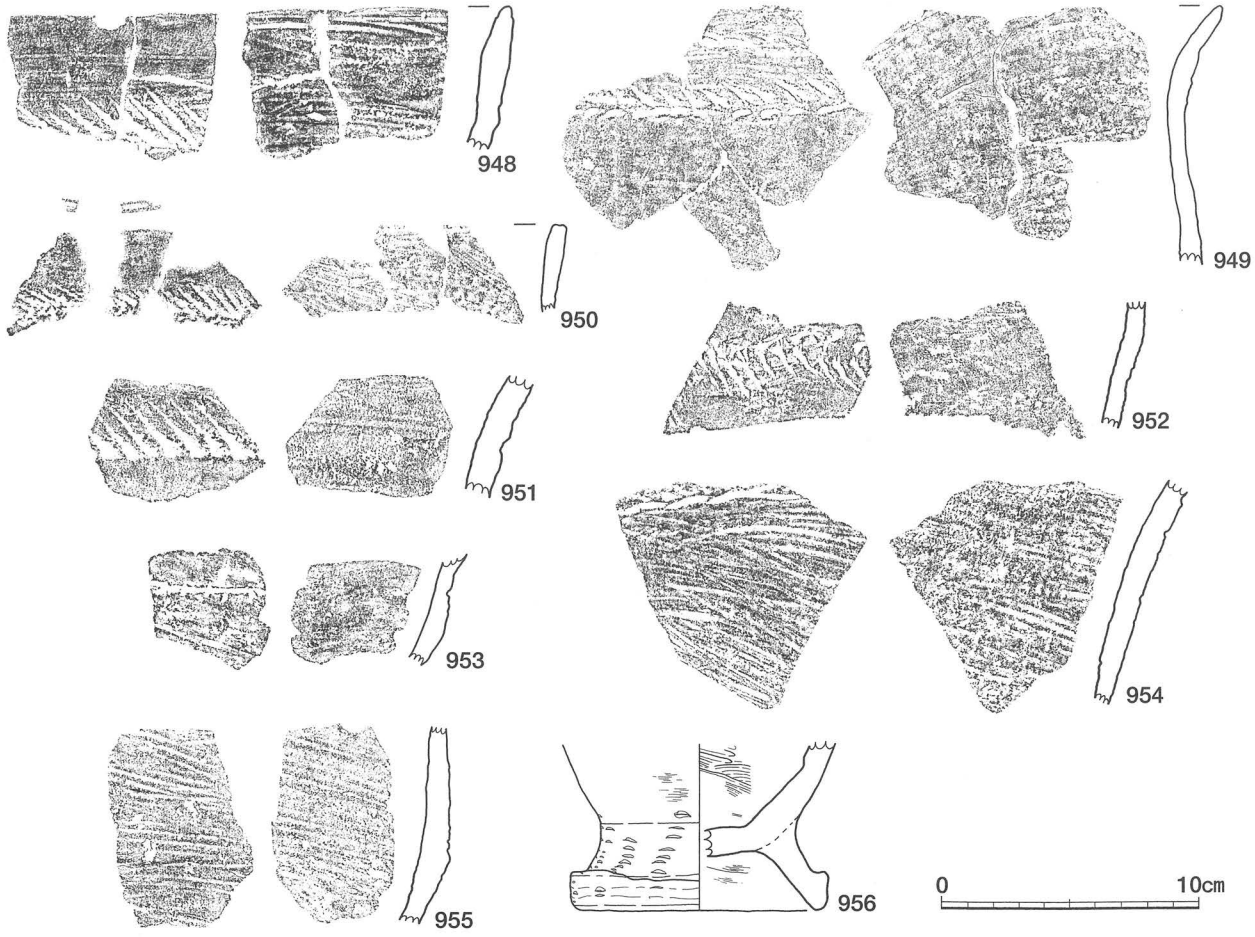
956は，脚台をもつ鉢形土器の脚台部である。上観面が円形をベースとするもので，脚台径が9.8cmを測るものである。爪形押圧で文様を構成している。



第158図　縄文土器（1）



第159図　縄文土器（2）



第160図　縄文土器（3）

第28表　宇都上遺跡縄文土器観察表

挿図番号	遺物番号	出土区	層位	分類	部位	調整		胎土	色調		取上番号	備考
						外面	内面		外面	内面		
158	920	C4	Ⅳb	辛川	口縁	ナデ	ナデ	bi,qz	黒褐色	淡茶褐色	6191	
	921	C4	Ⅳa	辛川	口縁	ナデ	ナデ	ho,qz	黒褐色	黒褐色	5033他	
	922	C4	Ⅷ	辛川	口縁	ナデ	条痕	ho,qz	暗褐色	黒褐色	6210	
	923	C4･5	Ⅳa	辛川	口縁	ナデ	ナデ	ho,qz	黒褐色	黒褐色	5554他	
	924	C4	Ⅳa	辛川	胴部	ナデ	ナデ	ho,qz	暗褐色	暗褐色	5650他	
	925	C4	Ⅳa	辛川	胴部	ナデ	ナデ	ho,qz	暗茶褐色	暗茶褐色	5621他	
	926	C4	Ⅳa	北久根	口縁	ナデ	条痕	ho,qz	暗黄褐色	暗褐色	5043他	
	927	C4	Ⅳb	辛川	胴部	ナデ	ナデ	ho,qz	茶褐色	暗黄褐色	6205	
	928	C4	Ⅳa	辛川	胴部	ナデ	ナデ	ho,qz	橙色	暗褐色	5585他	
	929	C4	Ⅳa	中ノ原	胴部	ナデ	条痕	ho,qz	橙色	暗褐色	5615他	
	930	C4	Ⅳb	中ノ原	胴部	ナデ	条痕	ho,qz	黒褐色	黒褐色	6077他	
	931	C4	Ⅳa	中ノ原	胴部	ナデ	ナデ	qz,礫	暗茶褐色	暗茶褐色	6066	
	932	C4	Ⅳa	中ノ原	口縁	ナデ	ナデ	ho,qz	暗褐色	黒褐色	5611他	
	933	C4	Ⅳa	北久根	口縁	条痕	ナデ	bi,ho,qz	橙色	黒色	5582	
159	934	C3	Ⅳa	丸尾	口縁	条痕	条痕	bi,qz	暗茶褐色	赤褐色	6092	
	935	C4	Ⅳb	市来	口縁	条痕	条痕	bi,qz	赤褐色	赤褐色	5134	
	936	C4	Ⅳb	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	ho,qz	淡赤褐色	暗赤褐色	5028	
	937	C4	Ⅳa	市来	胴部	ナデ	ナデ	bi,qz	橙色	橙色	6185	
	938	C3	Ⅳa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi,qz	暗茶褐色	暗茶褐色	5120	
	939	C4	Ⅳa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi,qz	黒褐色	赤褐色	5235他	
	940	C3	Ⅳb	丸尾	口縁	条痕	条痕	bi,qz	黒褐色	赤褐色	4839	
	941	C5	Ⅳa	丸尾	口縁	ナデ	条痕	ho,qz	黒褐色	淡赤褐色	7400	
	942	C4	Ⅳa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi,ho,qz	暗褐色	黄褐色	5102	
	943	C3	Ⅳa	丸尾	口縁	ナデ	条痕	bi,qz	暗茶褐色	暗黄褐色		
	944	C3	Ⅳa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi,qz	暗黄褐色	黒褐色	5545	
	945	C4	Ⅳb	丸尾	口縁	ナデ	条痕	bi,qz	暗茶褐色	茶褐色	5533他	
	946	C3	Ⅳa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi,qz	暗赤褐色	暗茶褐色	4854	
	947	C4	Ⅳb	丸尾	口縁	ナデ	条痕	bi,qz	赤褐色	暗黄褐色	6164	
160	948	C3	Ⅳa	丸尾	口縁	ナデ	条痕	ho,qz	黒褐色	にぶい茶褐色		
	949	C4	Ⅳa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi,qz	暗茶褐色	赤褐色	5572	
	950	C4	Ⅳa	丸尾	口縁	ナデ	ナデ	bi,qz	にぶい茶褐色	黒褐色	6059他	
	951	C4	Ⅳa	丸尾	胴部	ナデ	ナデ	bi,qz	黒褐色	赤褐色	5256	
	952	C4	Ⅳa	丸尾	胴部	ナデ	ナデ	bi,qz	黒褐色	赤褐色		
	953	C4	Ⅳa	丸尾	胴部	ナデ	ナデ	bi,qz	暗茶褐色	黒褐色	5616	
	954	C4	Ⅳa	丸尾	胴部	条痕	条痕	qz	暗茶褐色	赤褐色	5040	
	955	C4	Ⅳb	丸尾	胴部	ナデ	条痕	qz	にぶい赤褐色	黒褐色	6053	
	956	C3	Ⅳa	市来	底部	ナデ	ナデ	ho,qz	黄褐色	にぶい黄褐色	5128	

石器

宇都上遺跡からは，縄文時代後期・晩期，古代，中世の遺物が出土した。様々な石材が用いられており，黒曜石は肉眼的観察により，鷲ヶ迫遺跡同様の分類を行った。

石鏃（第161図，957～960）

本遺跡では４点の石鏃が出土した。石材，形態に統一性はみられず，また，遺物数も少量の為，各々を述べていきたい。

957は，節理面を利用している五角形鏃である。形態は，両側辺の下方に張り出した部分が作られ，側辺は直線的で，先端部に向かうにつれてやや膨らみを持つようになる。その為，逆刺はやや鈍い。抉りは非常に浅く，基部は内弯しているようにみえる。958は安山岩を素材としたものである。側辺部はわずかに外弯し，先端部付近でゆるやかに内弯している。側辺の上部には，表裏面からの細かく丁寧な剥離によって逆刺が鋭く作られている。脚部と抉りが欠損しているため，形態や詳しい情報は不明である。959は桑ノ木津留産黒曜石を用いている。側辺部はやや外弯し逆刺は丸く作られている。側辺の先端部には使用痕らしきつぶれが，ごくわずかにみられる。抉りはやや深く入り右脚部がわずかに欠損している。細部にわたる細かな調整剥離によって全体が形成されている。960は頁岩の縦長剥片を用いている。右脚部付近に厚みがあり，また自然面を有する。表面は，粗く大まかな剥離により形成されており，表面も同様の剥離が呈されている。全体的に粗いタッチが目立つため，未成品の可能性が高い。

スクレイパー（第161図，961～964）

４点出土した。様々な素材を用いており，形態にも統一性はみられない。石鏃同様，分類せず，各々を述べていきたい。

961は自然面を有する，針尾産黒曜石の横長剥片を用いている。不定形を呈しているが，下部には使用によると思われる微細剥離がみられ，わずかに内弯する右側辺に表裏からの細かな調整剥離によって，刃部が形成されている。962は不純物を多く含む桑ノ木津留産黒曜石の縦長剥片を，横位に用いている。下辺に，表裏面からの調整剥離によって刃部が形成されているが，連続性はみられず，粗雑な印象を受ける。刃部はわずかに使用痕がみられる。右側辺には不純物が集中しており，破砕しているが，刃部はその部位まで続く可能性も考えられる。963は暗緑灰色のチャートを用いている。所々に風化面がみられる。ほぼ台形を呈し，下辺に表裏面からの調整剥離によって刃部が形成されている。左側辺が欠損しているが，そこに風化面がみられるため，欠損品を使用していた可能性がある。964はハリ質安山岩の縦長剥片を用いている。欠損品と思われ，下辺に刃部がわずかに残る。表裏からの調整剥離により，粗く刃部が形成されている。使用痕は観察できなかった。

石斧（第161図，965・966）

２点出土し，いずれも磨製石斧である。

965は黒色頁岩を用いている。基部，肩部が欠損し，半円状の刃部のみが残る。正面は研磨によって，ほぼ水平に加工されているが，かすかに稜を形成している。裏面には，広く剥離面が残り，

その部分を除いて研磨されている。刃部には，使用中の欠落と考えられる欠損部がある。966は剥落の激しい，粘板岩を素材としている。全面にわたり研磨が施されているが，非常に脆く，斧としての利用に疑問を感じる。

磨石・敲石（第162図，967～969）

本遺跡からは，磨石，敲石が多数出土したが，完形を留めているものが少なかった。その中から完形品３点を選別し，図化した。また磨石，敲石には，同一個体上に研磨，敲打の加工痕があり，重複して有する場合がある。鷲ヶ迫遺跡同様，顕著に表れている使用痕により遺物を判断した。

967・968は敲石である。いずれも花崗岩の円礫を用いている。967は側面の全てに，広範囲に使用痕がみられ，正面と裏面には擦痕がみられる。特に正面に擦痕が強く残る。
968は所々に敲打による深いくぼみとつぶれがみられる。全体に擦痕がみられるのだが，非常に弱い。969は花崗岩の楕円形の礫を用いた，磨石である。敲打痕は観察できなかった。全ての面に擦痕がみられるが側辺部の擦痕は，やや弱いものとなっている。

石皿（第162図，970・971）

２点出土し，いずれも欠損品である。

970は花崗岩を用い下部，上部，右側部を大きく欠損している。両面に使用痕がみられ，強く磨りくぼんでいる。裏面の一部に敲打による浅いくぼみがみられ，台石としての利用も考えられる。971は花崗岩を用いているが，大きく欠損している。正面は，多方向への研磨により，稜が形成されている。裏面にも弱く研磨がみられ，中央に敲打によるくぼみがかすかにみられる。

軽石製品（第162・163図，972～975）

軽石製品は４点出土した。

972は厚みを持つ楕円形で下部へ向けて膨らみを呈する。全面に研磨が施されている。

973・974は円形に近い不定形のものである。扁平な素材を用いており，研磨がみられる。

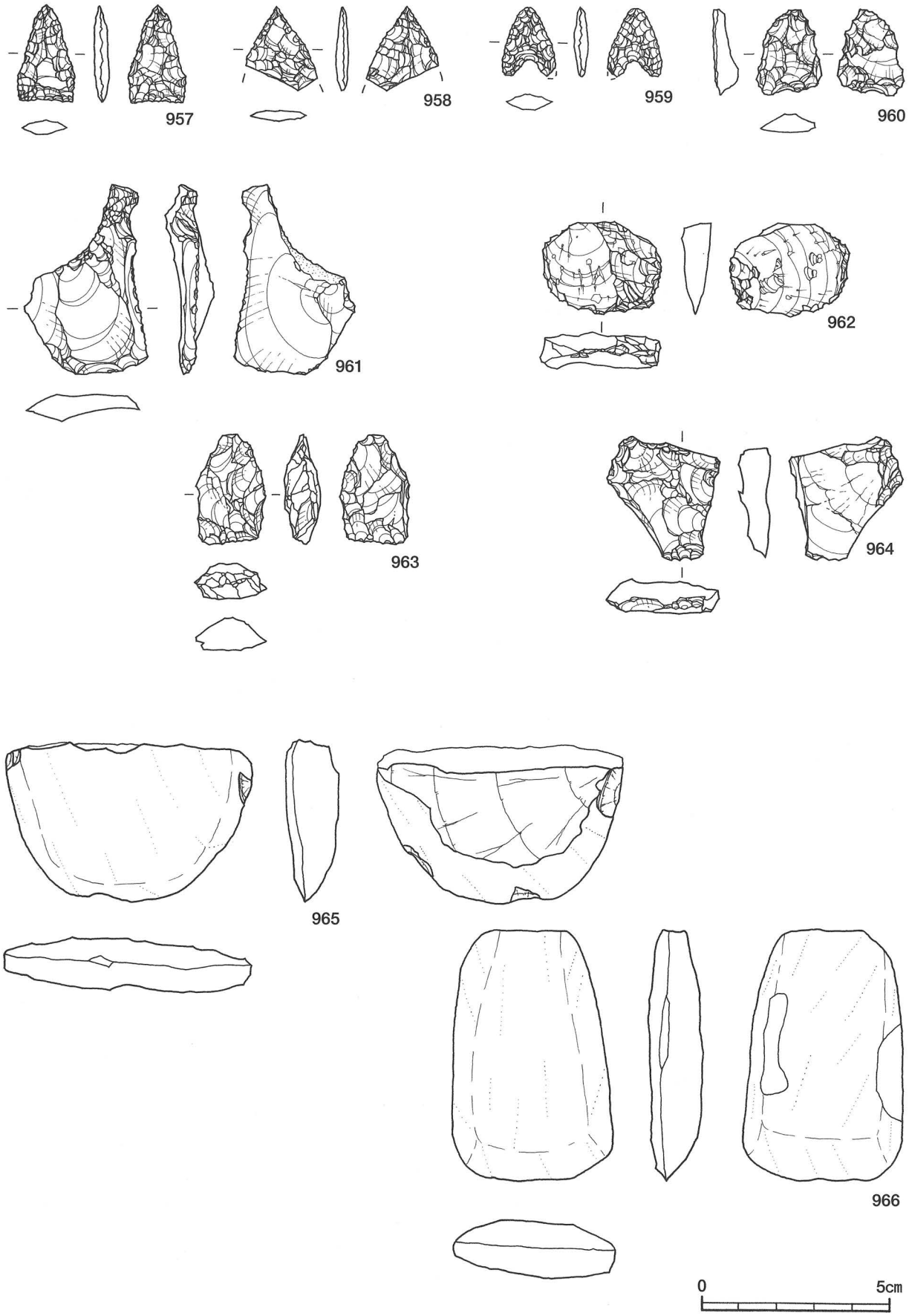
975は正面に１cm弱の深さのくぼみがみられる。欠損品のため，詳しい情報は不明である。

滑石製品（第164図，976～979）

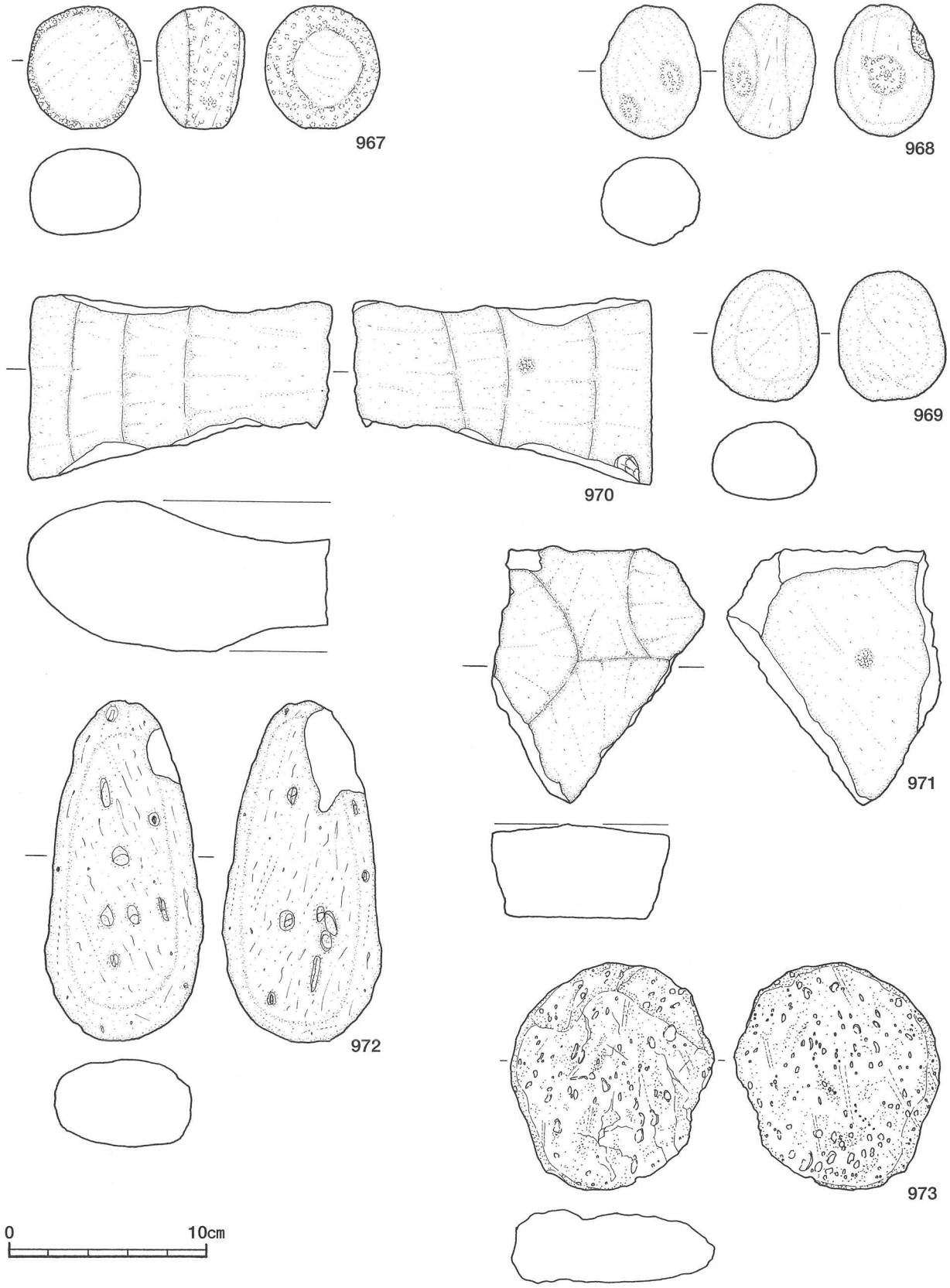
滑石製品，破片等，10数点の出土があったが，加工痕のみられるもの，原形を留めるもの４点を図化した。976～978は形態より，石錘と考えられる。

これらは，時期が不明な点が悔やまれるが，同一形態であり，用途的にも同一と思われる。

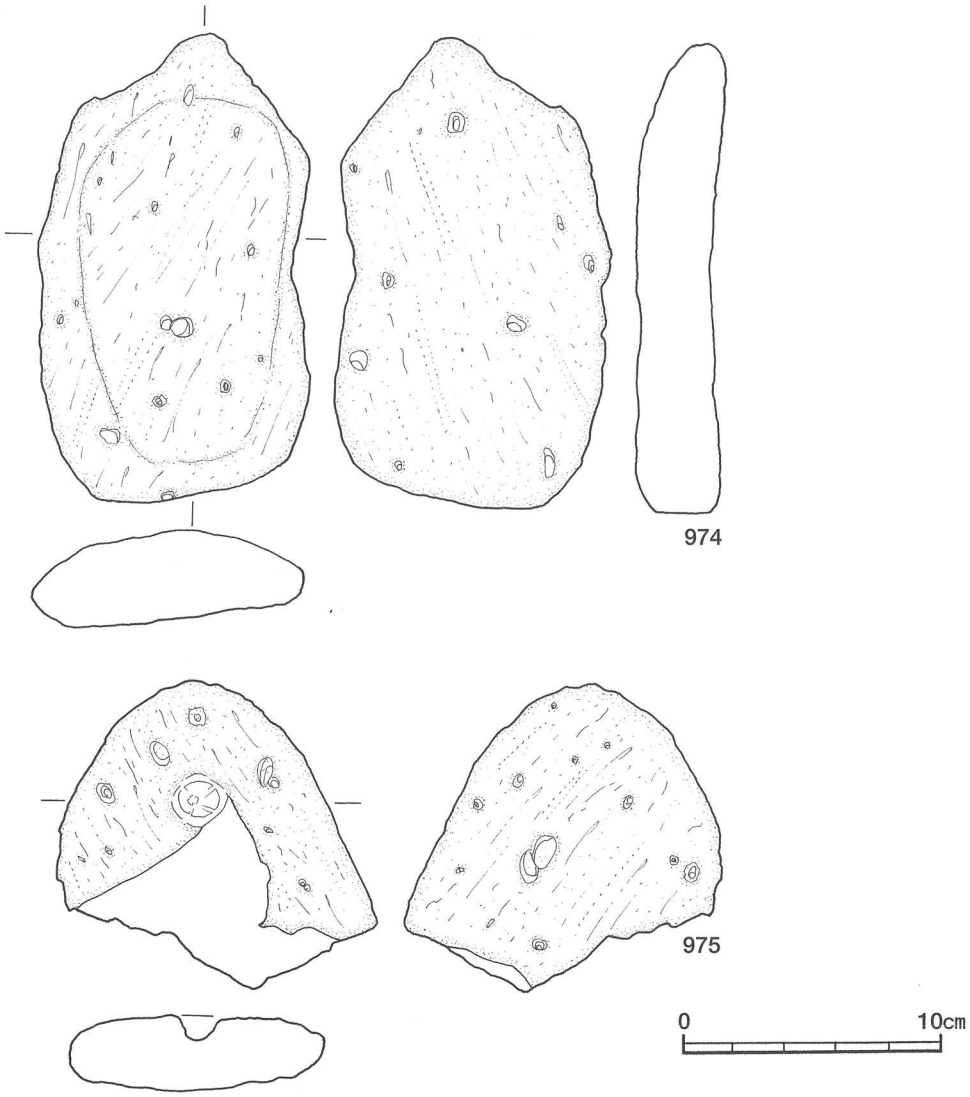
976は，表裏面に小型のノミ状の様な工具で加工されたような痕がわずかに観察できる。全体が５㎜程度の均等な厚さを呈しており，1.5㎜程の深さの溝が側辺に一周にわたって入っている。全体的に丁寧に仕上げられており，また重量が4.0ｇを計る。977は，表面は欠損，剥落が多く，幅が５㎜程度のノミ状の様な工具痕がかすかにみられる。一周にわたり，１～２㎜弱の深さの溝が入っており，側辺中央部にはそれに伴って３箇所交差する溝が作られている。裏面は内弯しており，上部と下部には形成の為と考えられる研磨痕がみられる。978は気泡の多い素材を用いている。下部



第161図　出土石器（1）



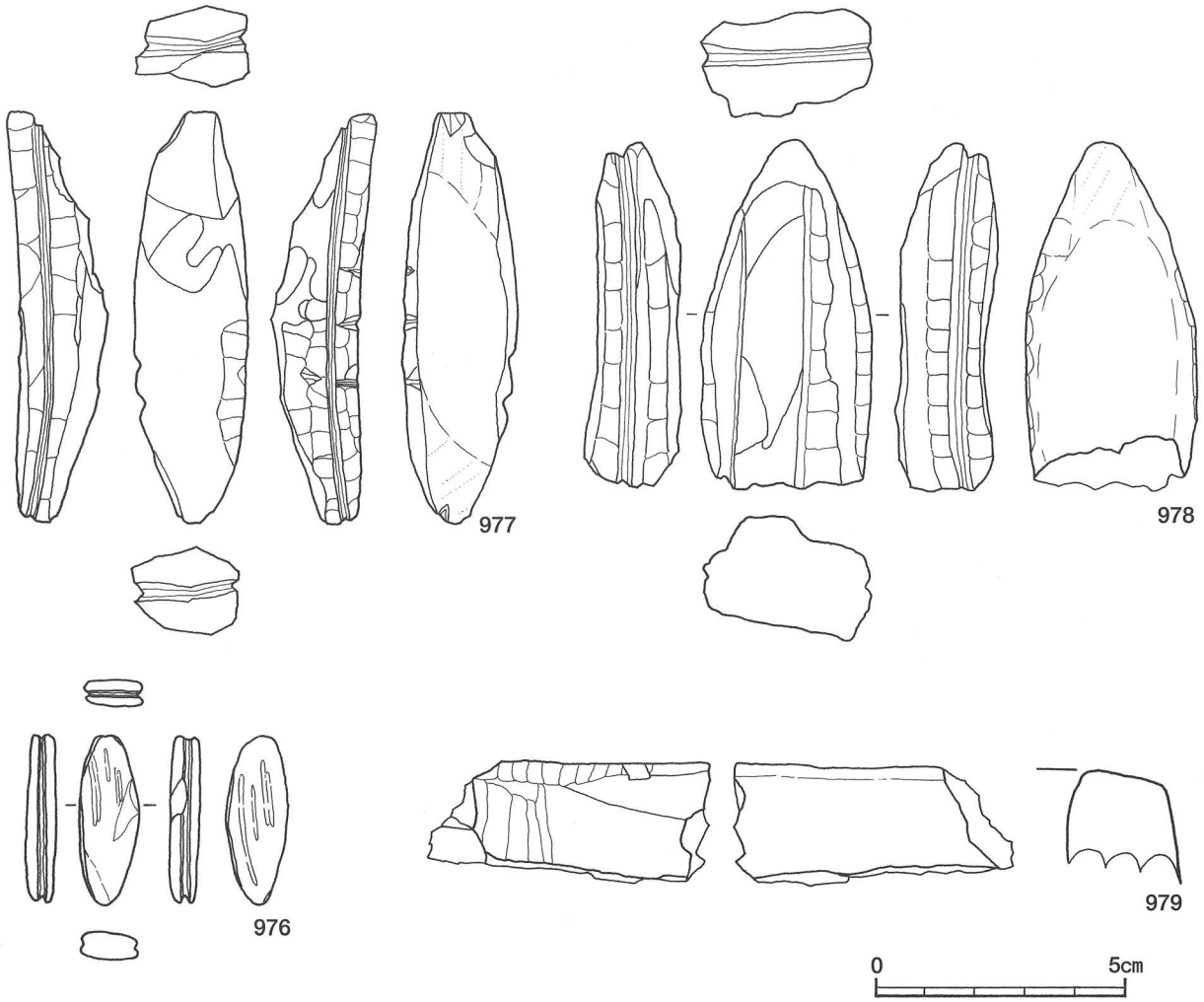
第162図　出土石器（2）



第163図　出土石器（3）

が欠損しているが，側辺部のノミ状加工痕と，ほぼ一周にわたる溝により977と同じ性格であろう。表面中央簿が同じ幅で隆起しており，滑石製石鍋の鍔の部分の転用品である可能性が高い。979は，滑石製石鍋の口縁部である。表面，口唇部は，幅の狭いノミ状工具による加工痕がうすくみられる。裏面は，細かな加工の後，丁寧に磨かれている。

ほぼ全ての遺物がⅢ層から出土しており，古代から中世の時期に該当する。滑石は長崎県西彼杵半島が主な産地であり，中世に滑石製石鍋としてほぼ全国に流通した。県内の遺跡からも滑石製石鍋出土の報告が多数あり，また，滑石の特性を活かした転用品や，滑石製品の出土も報じられている。宇都上遺跡でも多数の滑石片や，977のように転用を考えさせる遺物が出土している。中世の交流や流通経路を知る上で，重要な遺物である可能性が高い。



第164図　出土石器（4）

第29表　宇都上遺跡石器観察表

挿図番号	遺物番号	取上番号	器　　種	石　　材	区	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
161	957	5410	打製石鏃	玉髄	E7	Ⅳa	2.6	1.5	0.3	1.0	
	958	8342	打製石鏃	安山岩	E10	Ⅳb	2.3	1.8	0.3	1.0	
	959	6763	打製石鏃	桑ノ木津留	B3	Ⅳa	1.9	1.4	0.4	1.0	
	960	7185	打製石鏃	頁岩	F9	Ⅳa	2.3	1.7	0.6	2.0	
	961	9353	スクレイパー	黒曜石針尾	D9	Ⅳb	5.2	3.4	0.9	9.0	
	962	8392	スクレイパー	黒曜石桑ノ木津留	C8	Ⅲ	2.5	3.2	0.9	9.0	
	963	8788	スクレイパー	チャート	D8	Ⅳb	2.9	1.8	0.9	5.0	
	964	8791	スクレイパー	ハリ質安山岩	D8	Ⅳb	3.7	2.8	0.7	7.0	
	965	6087	磨製石斧	頁岩	C4	Ⅳb	4.3	6.6	1.2	50.0	
	966	4116	磨製石斧	粘板岩	C3	Ⅳ	6.9	4.3	1.3	60.0	
162	967	7483	敲石	花崗岩	E9	Ⅳb	6.4	5.7	4.4	240.0	
	968	7436	敲石	花崗岩	D6	Ⅳ	6.9	5.1	4.6	210.0	
	969	6324	磨石	花崗岩	D6	Ⅲ	6.8	5.4	4.2	220.0	
	970	6405	石皿	花崗岩	E10	土坑内	9.7	15.4	9.0	1690	
	971	7526	石皿	花崗岩	D6	Ⅳb	13.3	10.9	4.9	930.0	
	972	4593	軽石製品	軽石	B2	Ⅳa	18.8	10.7	3.7	170.0	
	973	4848	軽石製品	軽石	C3	Ⅳb	11.3	10.3	3.5	148.0	
163	974	2498	軽石製品	軽石	B2	Ⅳa	17.6	8.1	4.5	220.0	
	975	679	軽石製品	軽石	B2	Ⅳa	12.2	10.6	2.7	110.0	
164	976	3147	滑石製品	滑石	D9	Ⅲ	3.4	1.2	0.6	4.0	
	977	575	滑石製品	滑石	D9	Ⅲ	8.4	2.2	2.1	40.0	
	978	650	滑石製品	滑石	E8	Ⅲ	7.0	3.4	2.1	51.0	
	979	3143	石鍋	滑石	D10	Ⅳa	2.5	5.6	2.2	37.0	

第３節　古代～中世の調査

古代～中世の遺構・遺物はⅡ層で検出された。遺構はＣ～Ｅ－６～12区で道跡６条，溝状遺構７条，土坑37基が検出された。

遺物は土師器・陶磁器・滑石製品が出土した。

道跡（第166図）

道跡はＣ・Ｄ－６・７区，Ｄ－８・９区で検出された。溝状遺構と道跡の区別は，硬化面が顕著なものを道跡として分類した。Ｃ・Ｄ－６・７区に５条，Ｄ－８・９区に１条が検出された。

道跡１

Ｃ・Ｄ－６区，Ⅱ層で検出された。検出された幅は0.8～1.6mで，硬さや締まり具合はほぼ同じである。主軸方向Ｎ－71°－Ｅを測り，総延長は12mである。

道跡２

Ｃ・Ｄ－６区，Ⅱ層で検出された。検出された幅は0.4～0.6mで，硬さや締まり具合は部分により異なっている。主軸方向Ｎ－38°－Ｅを測り，総延長は10.4mである。

道跡３・４

Ｃ－６区，Ⅱ層で検出された。検出された幅は0.4～0.6mで，硬さや締まり具合はほぼ同じである。主軸方向Ｎ－70°－Ｅを測り，道跡１と同方向である。総延長は4.8m，14mである。

道跡５

Ｃ－７区，Ⅱ層で検出された。検出された幅は0.8～1.0mで，硬さや締まり具合はほぼ同じである。主軸方向Ｎ－38°－Ｅを測り，道跡２と同方向である。総延長は６mである。

道跡６

Ｄ－８・９区，Ⅱ層で検出された。検出された幅は0.4～0.6mで，硬さや締まり具合はほぼ同じである。主軸方向南北方向に走り，総延長は約５mである。

溝状遺構（第166図）

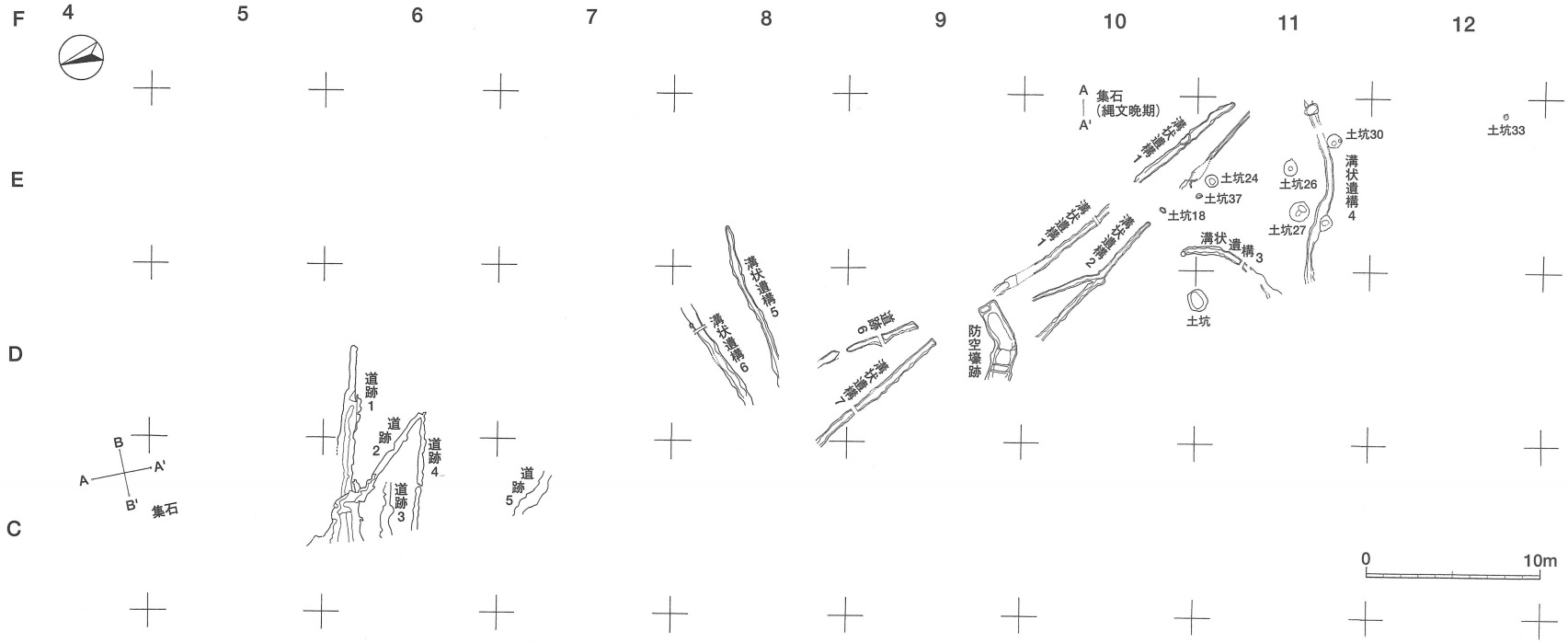
溝状遺構はＤ・Ｅ－８～11区で７条検出された。主軸方向は南北方向と東西方向，弯曲するものに分かれる。

南北方向

南北方向に走る溝状遺構は１・２・７の３条である。幅は0.5～0.7m，0.4～0.5m，0.5～0.7m，総延長は18m，17.5m，９mを測る。１・２はＤ・Ｅ－10・11区，７はＤ－７・８区で検出された。

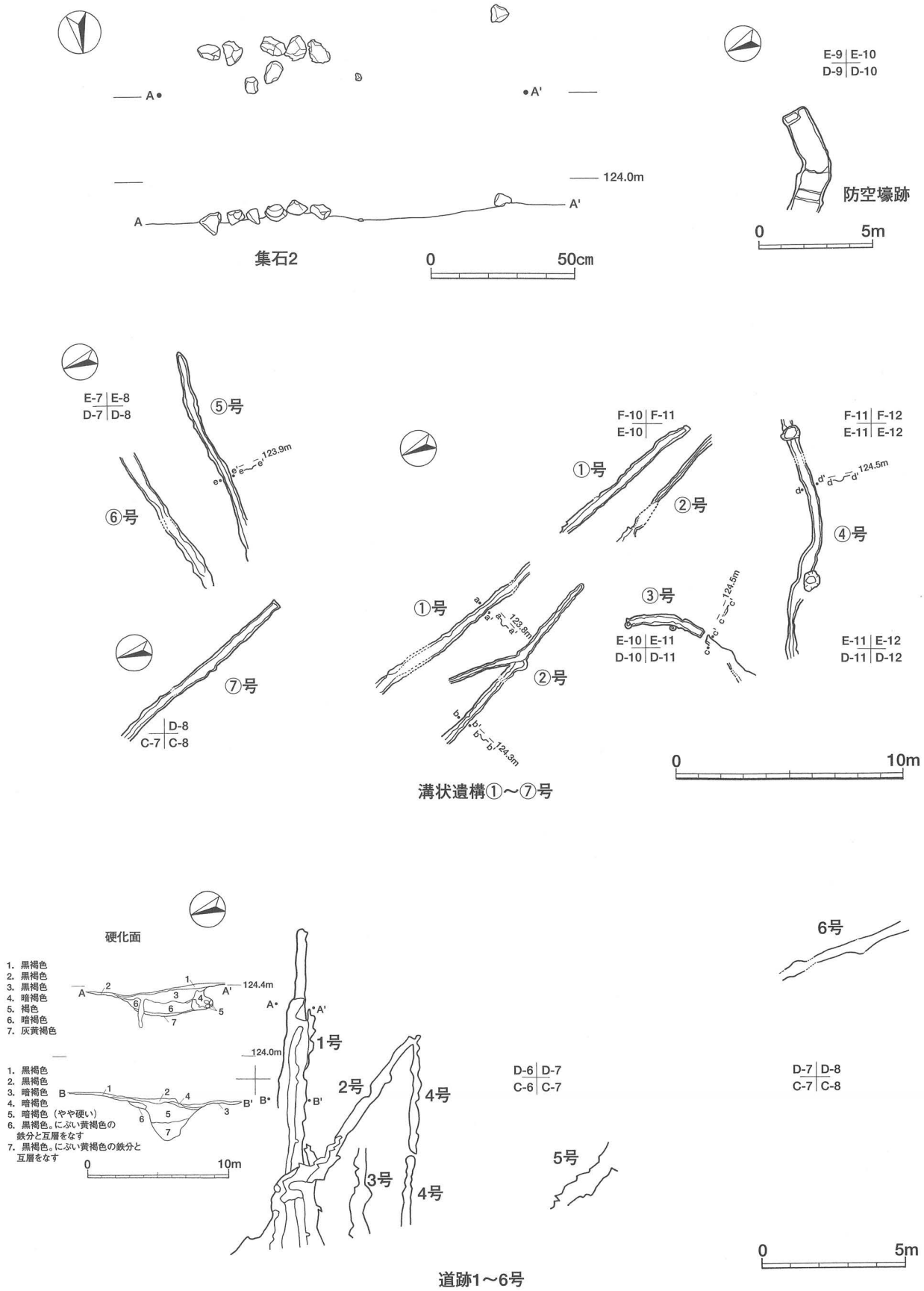
東西方向

東西方向に走る溝状遺構は４～６の３条である。幅は0.5～0.7m，0.4～0.5m，0.5～0.7m，総延長は11m，10m，6.8mを測る。４はＥ－11区，５・６はＤ・Ｅ－８区で検出された。


F
E
D
C
4
5
6
7
8
9
10
11
12
A
A'
集石
(縄文晩期)
溝状遺構1
溝状遺構2
溝状遺構3
溝状遺構4
溝状遺構5
溝状遺構6
溝状遺構7
溝状遺構8
溝状遺構9
防空壕跡
土坑
土坑18
土坑24
土坑26
土坑27
土坑30
土坑33
土坑37
道跡1
道跡2
道跡3
道跡4
道跡5
B
B'
集石
0
10m

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12
F
E
D
C
B
A
0
50m

第165図　遺構配置図



第166図　集石（2）・防空壕跡・溝状遺構①～⑦号・道跡１～６号

土坑（167図）

土坑は遺跡内で37基検出されたが，特徴のある８基を図示した。

土坑18

Ｅ－10区，Ⅱ層上面で溝状遺構２を切るような状況で検出された。外径は40×28cm，深さは56cmを測る楕円形を呈した土坑である。

土坑24

Ｅ－11区，Ⅱ層上面で検出された。外径は76×70cm，深さ128cmを測るほぼ円形の土坑である。埋土上部に礫や瓦が出土した。瓦から近世の遺構と考えられる。

土坑26

Ｅ－11区，Ⅱ層上面で検出された。外径は84×76cm，深さ136cmを測るほぼ円形の土坑である。埋土の状況から近世の土坑と考えられる。

土坑27

Ｅ－11区，Ⅱ層上面で検出された。外径は116×108cm，深さ184cmを測るほぼ円形で深い土坑である。底部は二重になる。埋土中に遺物は出土しなかったが，埋土の状況から近世の遺構と考えられる。

土坑28

Ｄ－10・11区，Ⅱ層上面で検出された。外径は128×104cm，内径96×60cm，深さ20cmを測る楕円形の浅い土坑である。

土坑30

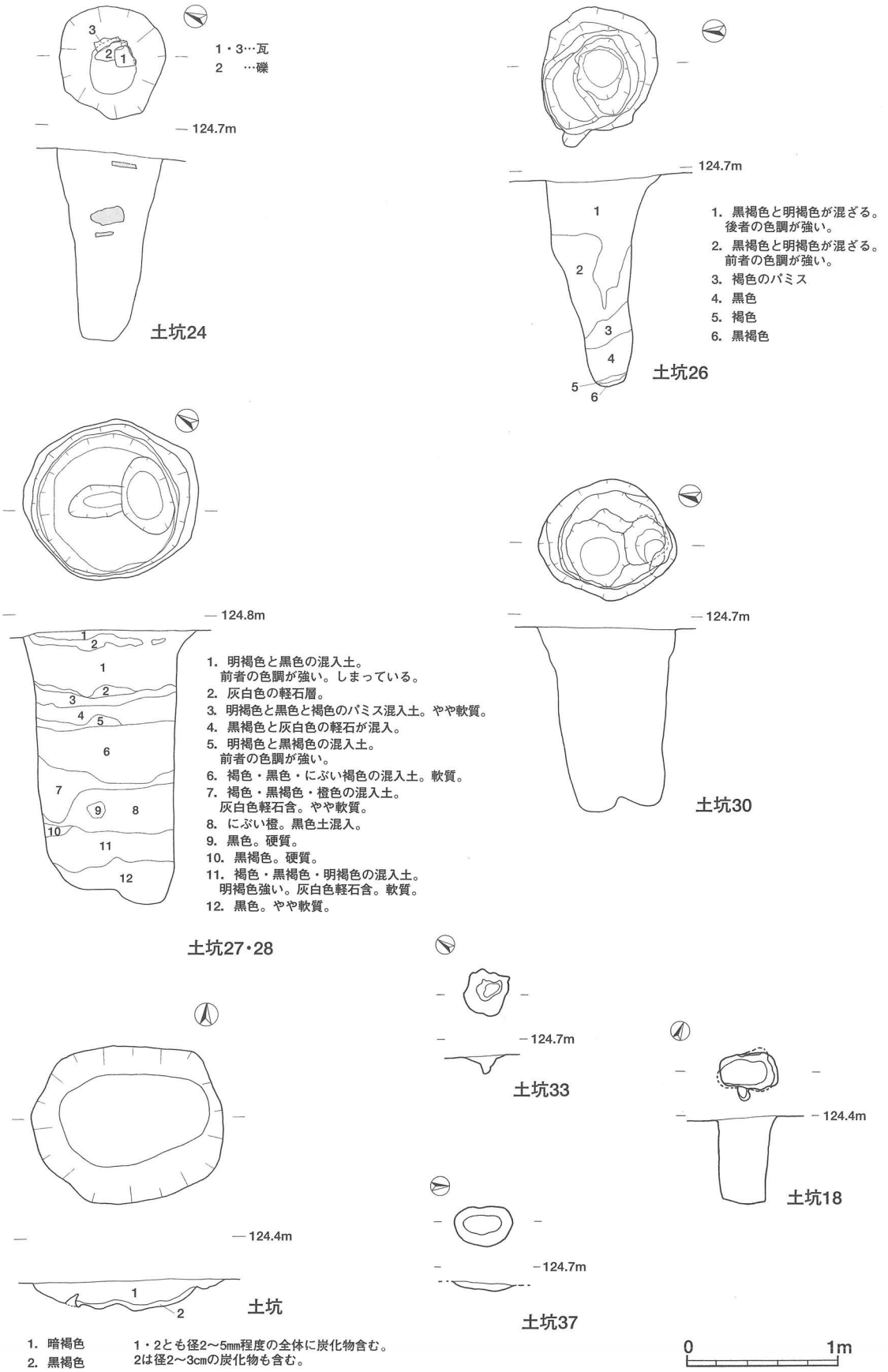
Ｅ－11区，Ⅱ層上面で検出された。外径は92×80cm，深さ124cmを測るほぼ円形の土坑である。底部は二重になる。埋土中に遺物は出土しなかったが，埋土の状況から近世の遺構と考えられる。

土坑33

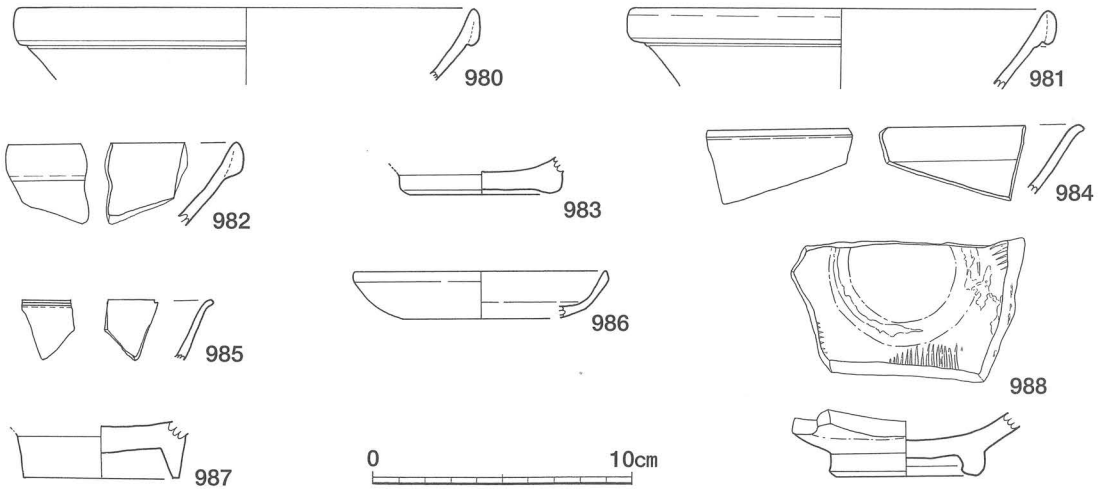
Ｅ－11区，Ⅱ層上面で検出された。外径は32×28cm，深さ12cmを測るほぼ円形の浅い掘り込みをもつ土坑である。

土坑37

Ｅ－11区，Ⅱ層上面で検出された。外径は40×26cm，深さ４cmを測る楕円形の浅い掘り込みをもつ土坑である。


1・3…瓦
2 …礫
124.7m
土坑24
124.7m
1. 黒褐色と明褐色が混ざる。後者の色調が強い。
2. 黒褐色と明褐色が混ざる。前者の色調が強い。
3. 褐色のパミス
4. 黒色
5. 褐色
6. 黒褐色
土坑26
124.8m
1. 明褐色と黒色の混入土。前者の色調が強い。しまっている。
2. 灰白色の軽石層。
3. 明褐色と黒色と褐色のパミス混入土。やや軟質。
4. 黒褐色と灰白色の軽石が混入。
5. 明褐色と黒褐色の混入土。前者の色調が強い。
6. 褐色・黒色・にぶい褐色の混入土。軟質。
7. 褐色・黒褐色・橙色の混入土。灰白色軽石含。やや軟質。
8. にぶい橙。黒色土混入。
9. 黒色。硬質。
10. 黒褐色。硬質。
11. 褐色・黒褐色・明褐色の混入土。明褐色強い。灰白色軽石含。軟質。
12. 黒色。やや軟質。
土坑27・28
124.7m
土坑30
124.7m
土坑33
124.4m
土坑18
124.4m
土坑
1. 暗褐色
2. 黒褐色
1・2とも径2～5mm程度の全体に炭化物含む。
2は径2～3cmの炭化物も含む。
124.7m
土坑37
0
1m

第167図　土坑



第168図　中世出土遺物

中世の出土遺物

中世の出土遺物としては白磁・青磁が出土しており，その出土量は少ない。時期的にはすべて11世紀後半～12世紀後半の範疇に相当するものと思われる。

980～986は白磁の碗である。980～982は玉縁口縁で，胎土は灰白色を呈する。釉は灰色味を帯びた白色である。983は980～982のような玉縁口縁を呈する碗の底部である。高台は幅広で，削り出しが浅いため底部は肉厚である。釉は外面腰部まで施釉されており，以下高台内面まで路胎する。984・985は口縁部を外側に外反させ，上端部を平坦気味につくるものである。胎土は茶色味を帯びた灰白色で釉は白色を呈する。987は口縁部が984・985のような形状を呈する碗の底部である。高台は細く高く直立する。胎土は灰白色で，釉の外面は体部と高台の境までかけられるもので，以下は高台内面まで路胎する。

986は白磁の皿である。口縁部は直口し，外面には明瞭な稜が入る。胎土は粗く，微細な白色粒子が混じる。

988は同安窯系青磁の碗である。口縁部は欠損しているがわずかに外反するものと思われる。胎の色調は部分的に異なり，灰色もしくは灰褐色を呈する。釉は外面腰部までかかり，以下は高台内面まで路胎する。内面には幅広で粗い縦の櫛目文を施す。見込みには重ね焼きの際の高台痕が残る。

第30表　中世出土遺物観察表

挿図番号	遺物番号		器種	取上番号	出土区	層位遺構	胎土	釉(薬)	露胎	焼成	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　考
168	980	白磁	碗	1026	D-9	Ⅲ	灰白色	灰釉白色	—	良	18.1	—	—	玉縁口縁
	981	白磁	碗	940	D-9	Ⅲ	灰白色	灰釉白色	—	良	10.7	—	—	玉縁口縁
	982	白磁	碗	497	D-9	Ⅲ	灰白色	灰釉白色	—	良	13.7	—	—	玉縁口縁
	983	白磁	碗	1606	E-11	Ⅲ	灰白色	灰釉白色	—	良	16.6	—	—	
	984	白磁	碗	6284	E-12	Ⅲ	灰白色	灰釉白色	腰部から高台内面	良	—	6.2	—	柳文
	985	白磁	碗	859	D-9	Ⅲ	灰白色	灰釉白色	—	良	—	—	—	鳥文
	986	白磁	皿	548	D-8	Ⅲ	灰白色	灰釉白色	高台脇から高台内面	良	—	6.0	—	
	987	白磁	皿	394	D-8	Ⅱ	灰白色	灰釉白色	—	良	9.6	6.0	1.8	
	988	青磁	碗	999	D-8	Ⅲ	灰色灰褐色	灰釉緑褐色	腰部から高台内面	良	—	5.8	—	同安窯系　内面に櫛目文 見込みに重ね焼きの高台痕あり

第Ⅶ章　発掘調査のまとめ

鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡・宇都上遺跡では，旧石器時代から中世までの長い期間にわたる生活跡が検出され，それぞれの時期において重要であるが，鷲ヶ迫遺跡の縄文時代・古墳時代，北原中遺跡の縄文時代晩期・古墳時代，宇都上遺跡の縄文時代が主な生活跡であった。以下，遺跡ごとに時代を追って簡単にまとめてみたい。

鷲ヶ迫遺跡

旧石器時代～縄文時代草創期

遺構は礫群・落とし穴が検出され，遺物はナイフ形石器・台形石器・三稜尖頭器・スクレイパー・細石刃核・細石刃・楔形石器等が出土した。その他，植刃器が出土した。この植刃器は県内で初出土であり，特筆すべきものである。共伴遺物に細石刃や小型ナイフ形石器があるが，検討が必要である。Ⅶ層からは１点のみであるが，無文土器が出土した。

縄文時代

縄文時代の遺構は落とし穴・集石が検出された。落とし穴は埋土内に遺物がみられなかったが，埋土より縄文時代早期該当の落とし穴と判断した。遺物も集中して出土したが，土器の主体は春日式土器であった。

石器は土器と同様の出土状況であった。石器は，石鏃・石槍・石匙・スクレイパー・楔形石器・石錐・石核・磨製石斧・打製石斧・凹石・敲石・磨石・石皿・砥石・軽石製品などが出土している。この中で，特筆されるものに磨製石鏃がある。Ⅳ層の早期該当層から２点が出土した。現在，県内では37か所の遺跡が知られている。また，楔形石器・石錐も貴重なものである。

古墳時代

古墳時代の遺構・遺物はⅢａ層で検出された。遺構はＤ－４・５区，Ｃ・Ｄ－27区，Ｃ－50・51区で竪穴住居跡が６軒検出される。その他，土坑14基，古道４条，溝状遺構15条が検出された。

遺物は成川式土器（甕形土器・壺形土器・高坏・坩形土器），手捏土器と石器（凹石・敲石・磨石・石皿・台石・軽石製品）が出土した。

竪穴住居跡６軒検出され，住居の形態は方形プランを基本とし，花弁状住居跡も検出された。

北原中遺跡

縄文時代

縄文時代の遺構は集石が５基検出され，落とし穴はⅢａ層上面で検出されたもので，数10個の赤化した拳大の礫が散布した状態で検出されたもので掘り込み等はみられないものであった。周辺に縄文時代晩期の遺物が多く同時期の集石と判断した。遺物も土器・石器が集中して出土した。土器の主体は晩期の入佐式土器・黒川式土器・組織痕土器であった。

石器は土器と同様の出土状況であった。石器は，石鏃・スクレイパー・磨製石斧・打製石斧・凹石・敲石・磨石などが出土している。この遺跡の特徴は，剥片石器が少なく礫石器が主体であったことである。石鏃は石材が豊富で県外の黒曜石等の使用もみられた。石斧の特徴は総数21点が出土

したが，磨製石斧は１点のみで，残りは全て打製石器であった。また，その大半が有肩石斧でありことである。土掘り具としての使用が考えられている有肩石斧が多かったこと，凹石・敲石・磨石が多く出土したことは，晩期の特徴を良く表していると考えられる。

古墳時代

古墳時代の遺構・遺物はⅢａ層で検出された。遺構はＣ・Ｄ－７区，Ｃ・Ｄ－20～23区で竪穴住居跡が８軒検出された。その他，土坑６基，焼土１か所，溝状遺構７条が検出された。竪穴住居跡は３ｍ前後の方形プランを呈したもので，内部施設の判明したものはなかった。

宇都上遺跡

縄文時代・古墳時代・古代～中世の遺構・遺物が検出された。

縄文時代の遺構・遺物は，集石２基と市来式土器・丸尾式土器等の後期土器と石鏃・石斧・敲石等の石器が出土した。

古墳時代では成川式土器が出土し，古代～中世では土坑・溝状遺構・道跡等が検出され，また，第２次大戦の防空壕跡も検出された。出土遺物は須恵器・土師器・陶磁器・滑石製品等が出土した。

この遺跡で特筆するものに，滑石製品の石錘があげられる。石鍋の鍔の転用品で鰹節形の形態を呈し，側辺に溝を彫り込んだものである。石錐に分類したが使用が不明のものである。

第31表　縄文時代磨製石鏃一覧表

No.	遺跡名	所　在　地	数量	時代	標　高	文献	備　　考
1	奥ノ仁田	西之表市安城	1	草創期	133m	2	粘板岩
2	鬼ヶ野	西之表市安城	5	草創期	74m	3	泥岩・2孔有（1）
3	三角山Ⅰ	中種子町砂中	5	草創期	243m	34	ホルンフェルス，頁岩
4	前原	鹿児島市松元町福山	9	早期	177m	4	頁岩
5	岩本	指宿市小牧	1	早期	48m	5	頁岩
6	小牧３Ａ	指宿市小牧	3	早期	110m	35	粘板岩
7	枦原西	枕崎市木原	1	早期	60～70m	6	粘板岩
8	志風頭	南さつま市加世田内山田	34	早期	61m	1	頁岩
9	ヘゴノ原	南さつま市加世田武田	1	早期	55m	7	頁岩
10	祝原	南さつま市加世田川畑	1	早期	64m	36	頁岩（赤色）
11	宇治野原	南さつま市金峰町白川	1	早期	90m	10	頁岩
12	木落	南さつま市金峰町白川	1	早期	54～62m	11	頁岩
13	南一ノ谷	知覧町東別府	3	早期	160～170m	8	粘板岩・頁岩
14	鷹爪野	川辺町上山田	29	早期	130m	9	頁岩
15	瀬戸頭A	日置市伊集院町竹之山	1	早期	188m	12	頁岩
16	塚ノ越	日置市吹上町	1	早期	19m	37	粘板岩
17	建昌城跡	姶良町西餅田	1	早期	107m	13	ハリ質安山岩
18	倉園B	志布志市志布志町内ノ倉	1	早期	119m	14	頁岩，局部磨製石鏃
19	中ノ丸	鹿屋市大浦町	1	早期	70m	15	頁岩
20	打馬平原	鹿屋市打馬平原	1	早期	65m	16	鉄石英，局部磨製石鏃
21	榎崎B	鹿屋市白水	2	早期	108m	17	頁岩
22	西丸尾	鹿屋市白水	1	早期	65m	38	粘板岩
23	原口岡	鹿屋市吾平町下名東	5	早期	30m	18	頁岩
24	益畑	鹿屋市串良町	1	早期	46m	19	頁岩・住居内
	鷲ヶ迫	**鹿屋市花岡町**	**2**	**早期**	**130m**	**本文**	**頁岩**
25	横高尾	錦江町大根占神川	1	早期	198m	20	粘板岩
26	大中原	錦江町大根占	2	早期	232m	21	頁岩
27	荒田原	錦江町田代麓	4	早期	293m	22	頁岩
28	ホケノ頭	錦江町田代郷ノ原	7	早期	217m	23	粘板岩
29	日守	西之表市安城	1	早期	75m	24	粘板岩・表採
30	牛ノ原	中種子町増田	1	早期	98m	25	頁岩
31	三角山Ⅰ	中種子町砂中	7	早期	243m	34	頁岩，砂岩
32	三角山Ⅱ	中種子町砂中	3	早期	255m	26	頁岩・2孔有（1）
33	三角山Ⅳ	中種子町砂中	2	早期	253m	26	頁岩
34	石ノ峯	南種子町中之上	3	早期	160m	27	頁岩
35	横峯C	南種子町島間	1	早期	120m	28	頁岩・表採
36	龍庵坂	南種子町西之	1	早期	102m	29	頁岩・2孔有
37	銭亀	南種子町	3	早期	82m	30	頁岩
38	上中段	曽於市末吉町深川	1	後期？	247m	31	頁岩
39	十文字	志布志市志布志町内ノ倉	1	後期	86m	14	粘板岩，局部磨製石鏃
40	籐平小田	南種子町島間	17	後期	50m	32	粘板岩
41	住吉貝塚	知名町住吉	1	晩期？	13m	33	砂岩・粘板岩1孔有（1）

文献

1 加世田市教育委員会　1999 「志風頭遺跡・奥名野遺跡」 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(16)
2 西之表市教育委員会　1995 「奥ノ仁田遺跡・奥嵐遺跡」 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(7)
3 西之表市教育委員会　2004 「鬼ヶ野遺跡」 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
4 鹿児島県立埋蔵文化財センター　2007 「前原遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(118)
5 指宿市教育委員会　1978 「岩本遺跡」 指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
6 加世田市教育委員会　1997 「ヘゴノ原遺跡」 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
7 枕崎市教育委員会　1993 「滝ノ下遺跡・枦原西遺跡」 枕崎市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
8 知覧町教育委員会　2003 「前原遺跡群」 知覧町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
9 川辺町教育委員会　1998 「鷹爪野遺跡」 川辺町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
10 金峰町教育委員会　1992 「宇治野原遺跡」 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
11 金峰町教育委員会　1991 「木落遺跡・高源寺遺跡」 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
12 鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005 「瀬戸頭A遺跡ほか」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(85)
13 姶良町教育委員会　2002 「建昌城跡」 姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
14 志布志町教育委員会　1983 「倉園B遺跡・十文字遺跡」 志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
15 鹿児島県教育委員会　1989 「中ノ丸遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)
16 鹿屋市教育委員会　1988 「打馬平原遺跡」 鹿屋市埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
17 鹿児島県立埋蔵文化財センター　1993 「榎崎B遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
18 吾平町教育委員会　1995 「原口岡遺跡」 吾平町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
19 串良町教育委員会　2005 「益畑遺跡」 串良町埋蔵文化財発掘調査報告書(11)
20 大根占町教育委員会　1999 「横高尾遺跡」 大根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(13)
21 根占町教育委員会　2000 「大中原遺跡」 根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
22 田代町教育委員会　1995 「荒田原遺跡」 田代町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
23 田代町教育委員会　2001 「ホケノ頭遺跡」 田代町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
24 西之表市教育委員会　1999 「日守遺跡」 西之表市埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
25 鹿児島県立埋蔵文化財センター　1996 「牛ノ原遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(18)
26 鹿児島県立埋蔵文化財センター　2004 「三角山Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(63)
27 南種子町教育委員会　1996 「石ノ峯遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
28 南種子町教育委員会　2000 「横峯C遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(8)
29 南種子町教育委員会　2004 「龍庵坂遺跡・今平遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
30 南種子町教育委員会　2006 「銭亀遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書
31 末吉町教育委員会　1986 「上中段遺跡ほか」 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
32 南種子町教育委員会　2002 「籐平小田遺跡」 南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
33 知名町教育委員会　2006 「住吉貝塚」 知名町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
34 鹿児島県立埋蔵文化財センター　2006.1「三角山遺跡群(3)」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(96)
35 鹿児島県立埋蔵文化財センター　1996「小牧3A遺跡・岩本遺跡」 県立埋文センター埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
36 加世田市教育委員会　2003 「祝原遺跡」 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(23)
37 吹上町教育委員会　1990 「塚ノ越遺跡，鳥越遺跡，内門堀遺跡」 吹上町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
38 鹿児島県教育委員会　1992 「西丸尾遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(64)

科 学 分 析

放射性炭素年代測定結果報告書
（AMS測定）
鷲ヶ迫遺跡

㈱加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

鷲ヶ迫遺跡は，鹿児島県鹿屋市花岡町鷲ヶ迫に所在する。

(2) 測定の意義

遺構の年代と遺構間の前後関係，出土試料の年代を明らかにする。

(3) 測定対象試料

測定対象は，ⅩⅡ層出土の炭化物（1：IAAA-70456），D－5区の住居3号から出土した木炭（2：IAAA-70457），D－27区の住居1号から出土した木炭2点（3・4：IAAA-70458・70459），D－14区の土坑から出土した炭化物（5：IAAA-70460），合計5点である。試料は採取後，乾燥させ，アルミホイルに包み，さらにビニール袋に入れて保管された。

(4) 化学処理工程

1）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

2）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

3）試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で2時間加熱する。

4）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

5）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

6）グラファイトを内径1㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

(5) 測定方法

測定機器は，3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ

酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により$^{13}C/^{12}C$の測定も同時に行う。

(6) 算出方法

1）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

2）BP年代値は，過去において大気中の^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る^{14}C年代である。

3）付記した誤差は，次のように算出した。

複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）$\delta^{13}C$の値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS測定の場合に同時に測定される$\delta^{13}C$の値を用いることもある。

$\delta^{13}C$補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで，　$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$ または $(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$ または $(^{14}C/^{13}C)_R$

$\delta^{13}C$は，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し，標準試料の測定値との比較から算出した$\delta^{13}C$を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，$\Delta^{14}C$は，試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。(1) 式の^{14}C濃度を，$\delta^{13}C$の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))^2 \qquad (^{14}A_S\text{として}^{14}C/^{12}C\text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000)) \qquad (^{14}A_S\text{として}^{14}C/^{13}C\text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \ (‰)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしない$\delta^{14}C$に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており，Δ^{14}Cとの関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C=(pMC/100-1)\times1000$（‰）

$pMC=\Delta14C/10+100$（%）

国際的な取り決めにより，このΔ^{14}CあるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$T=-8033\times\ln[(\Delta^{14}C/1000)+1]$

$=-8033\times\ln(pMC/100)$

5）^{14}C年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6）較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

(7) 測定結果

XⅡ層出土の炭化物（1：IAAA-70456）の^{14}C年代が4420±40yrBP，D－5区の住居3号から出土した木炭（2：IAAA-70457）の^{14}C年代が1730±30yrBP，D－27区の住居1号から出土した木炭2点（3・4：IAAA-70458・70459）の^{14}C年代が1590±30yrBP，1550±30yrBP，D－14区の土坑から出土した炭化物（5：IAAA-70460）の^{14}C年代が2920±30yrBPである。暦年較正年代（1σ＝68.2%）は，1が3270～2930BCに含まれる年代であり縄文時代中期前葉から中葉，2が250～345ADであり古墳時代前期後半から中期前半，3と4が420～550ADに含まれる年代であり古墳時代後期，5が1200～1050BCであり縄文時代晩期前葉に相当する。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAA Code No.	試　　料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA－70456	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷲ヶ迫 鷲ヶ迫遺跡 試 料 形 態：炭化物 試料名(番号)：1	Libby Age(yrBP)：　4,420 ± 40 δ^{13}C(‰)、(加速器) = −21.46 ± 0.48 Δ^{14}C(‰) = −423.2 ± 2.6 pMC(%) = 57.68 ± 0.26
#1784－1代替	(参考)　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C(‰) = −419.0 ± 2.5 pMC(%) = 58.10 ± 0.25 Age(yrBP)：　4,360 ± 40
IAAA－70457	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷲ヶ迫 鷲ヶ迫遺跡 試 料 形 態：木炭 試料名(番号)：2	Libby Age(yrBP)：　1,730 ± 30 δ^{13}C(‰)、(加速器) = −23.58 ± 0.61 Δ^{14}C(‰) = −193.9 ± 3.0 pMC(%) = 80.61 ± 0.30
#1784－2	(参考)　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C(‰) = −191.5 ± 2.9 pMC(%) = 80.85 ± 0.29 Age(yrBP)：　1,710 ± 30
IAAA－70458	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷲ヶ迫 鷲ヶ迫遺跡 試 料 形 態：木炭 試料名(番号)：3	Libby Age(yrBP)：　1,590 ± 30 δ^{13}C(‰)、(加速器) = −28.38 ± 0.53 Δ^{14}C(‰) = −180.1 ± 3.1 pMC(%) = 81.99 ± 0.31
#1784－3	(参考)　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C(‰) = −185.8 ± 3.0 pMC(%) = 81.42 ± 0.30 Age(yrBP)：　1,650 ± 30
IAAA－70459	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷲ヶ迫 鷲ヶ迫遺跡 試 料 形 態：木炭 試料名(番号)：4	Libby Age(yrBP)：　1,550 ± 30 δ^{13}C(‰)、(加速器) = −24.59 ± 0.44 Δ^{14}C(‰) = −175.7 ± 3.0 pMC(%) = 82.43 ± 0.30
#1784－4	(参考)　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C(‰) = −175.0 ± 2.9 pMC(%) = 82.50 ± 0.29 Age(yrBP)：　1,540 ± 30
IAAA－70460	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町小字鷲ヶ迫 鷲ヶ迫遺跡 試 料 形 態：炭化物 試料名(番号)：5	Libby Age(yrBP)：　2,920 ± 30 δ^{13}C(‰)、(加速器) = −22.39 ± 0.47 Δ^{14}C(‰) = −305.2 ± 2.7 pMC(%) = 69.48 ± 0.27
#1784－5	(参考)　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C(‰) = −301.4 ± 2.6 pMC(%) = 69.86 ± 0.26 Age(yrBP)：　2,880 ± 30

参考

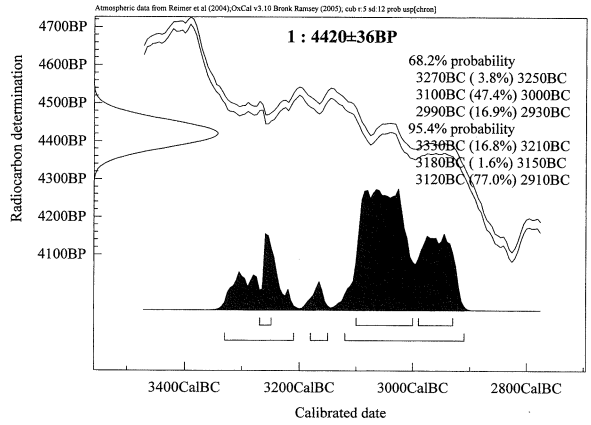
IAAA－70456に関しましては，代替試料を処理し測定した結果になります。

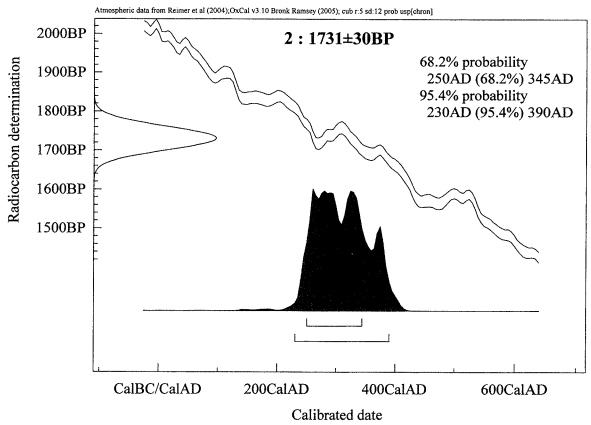
参考資料：暦年較正用年代

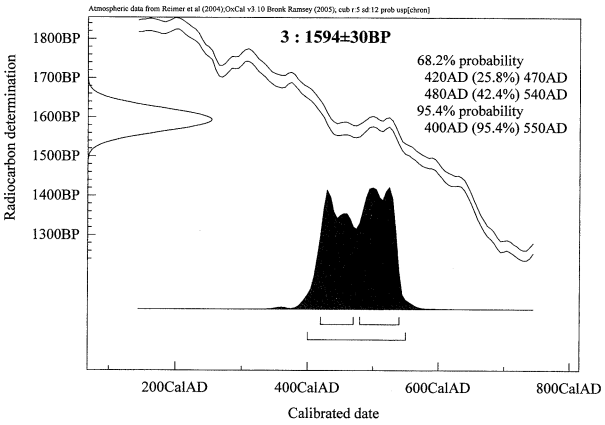
IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA－70456	1	4420 ± 36
IAAA－70457	2	1731 ± 30
IAAA－70458	3	1594 ± 30
IAAA－70459	4	1551 ± 29
IAAA－70460	5	2924 ± 31

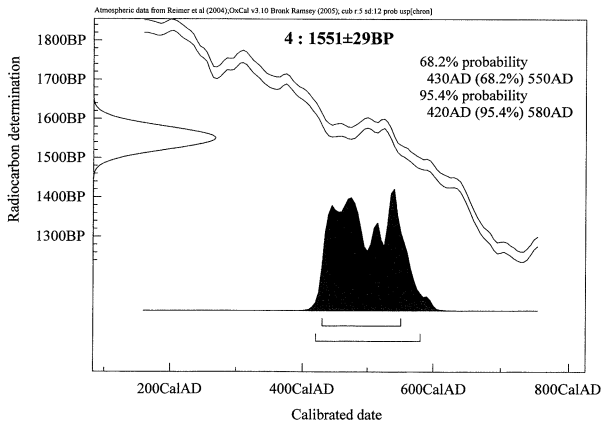
ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

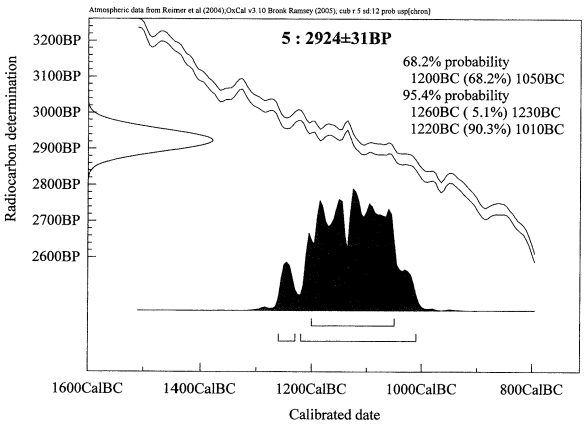
【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】











使用プログラム・OxCal　v3.10

放射性炭素年代測定結果報告書
（AMS測定）
鷲ヶ迫遺跡・北原中遺跡

㈱加速器分析研究所

(1) 測定の目的

遺跡内の住居跡や遺構の年代とその前後関係，集落の継続期間，遺物の年代を明らかにする。

(2) 測定対象試料

鷲ヶ迫遺跡のＤ－５区の住居３号内から出土した木炭（１：IAAA-70879），Ｃ・Ｄ－27区のⅢb層から出土した木炭（２：IAAA-70880），北原中遺跡のＤ－14区の土坑内から出土した炭化物（３：IAAA-70881），Ｃ－15区のⅣa層から出土した炭化物（４：IAAA-70882），合計４点である。

(3) 化学処理工程

1）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

2）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～１Ｎの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。希釈の際には，遠心分離機を使用する。

3）試料を酸化銅１ｇと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

4）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

5）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し，グラファイトを作製する。

6）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

(4) 測定方法

測定機器は，3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により^{13}C/^{12}Cの測定も同時に行う。

(5) 算出方法

1）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

2）BP年代値は，過去において大気中の^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る^{14}C年代である。

3）付記した誤差は，次のように算出した。

複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）δ^{13}Cの値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。

δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで，　$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$ または $(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$ または $(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}Cは，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し，標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Cを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，Δ^{14}Cは，試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。(1) 式の^{14}C濃度を，δ^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))^2 \qquad (^{14}A_S\text{として}^{14}C/^{12}C\text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000)) \qquad (^{14}A_S\text{として}^{14}C/^{13}C\text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \ (‰)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしないδ^{14}Cに相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており，Δ^{14}Cとの関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C=(pMC/100-1)\times1000$（‰）

$pMC=\Delta14C/10+100$（%）

国際的な取り決めにより，このΔ^{14}CあるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$T=-8033\times\ln[(\Delta^{14}C/1000)+1]$

$=-8033\times\ln(pMC/100)$

5）^{14}C年代値と誤差は，１桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6）較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

(6) 測定結果

鷲ヶ迫遺跡のＤ－５区の住居３号内から出土した木炭（１：IAAA-70879）の^{14}C年代が1680±30yrBP，Ｃ・Ｄ－27区のⅢb層から出土した木炭（２：IAAA-70880）の^{14}C年代が1550±30yrBP，北原中遺跡のＤ－14区の土坑内から出土した炭化物（３：IAAA-70881）の^{14}C年代が1580±40yrBP，Ｃ－15区のⅣa層から出土した炭化物（４：IAAA-70882）の^{14}C年代が2050±30yrBPである。暦年較正年代（１σ＝68.2%）は，１が330～420AD，２が430～560AD，３が430～540AD，４が110BC～0BC/ADである。化学処理および測定内容に問題は無く，妥当な年代と考えられる。

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

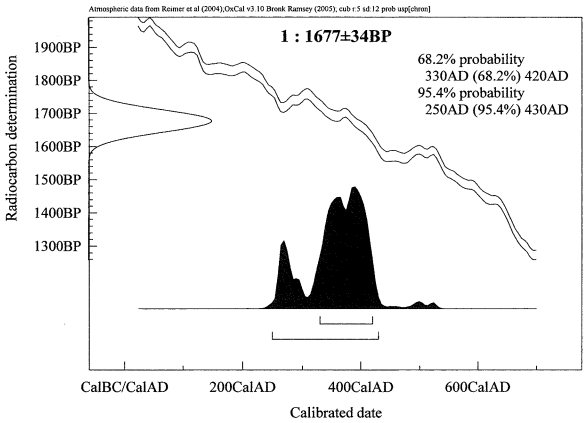
IAA Code No.	試　　料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA－70879	試料採取場所：鷲ヶ迫遺跡	Libby Age (yrBP) ： 1,680 ± 30
		δ^{13}C (‰)、(加速器) = −25.25 ± 0.72
	試 料 形 態：木炭	Δ^{14}C (‰) = −188.4 ± 3.4
	試料名(番号)：1	pMC (%) = 81.16 ± 0.34
		δ^{14}C (‰) = −188.8 ± 3.2
	(参考)　　δ^{13}Cの補正無し	pMC (%) = 81.12 ± 0.32
#1851－1		Age (yrBP) ： 1,680 ± 30
IAAA－70880	試料採取場所：鷲ヶ迫遺跡	Libby Age (yrBP) ： 1,550 ± 30
		δ^{13}C (‰)、(加速器) = −24.32 ± 0.92
	試 料 形 態：木炭	Δ^{14}C (‰) = −175.3 ± 3.5
	試料名(番号)：2	pMC (%) = 82.47 ± 0.35
		δ^{14}C (‰) = −174.2 ± 3.1
	(参考)　　δ^{13}Cの補正無し	pMC (%) = 82.58 ± 0.31
#1851－2		Age (yrBP) ： 1,540 ± 30
IAAA－70881	試料採取場所：北原中遺跡	Libby Age (yrBP) ： 1,580 ± 40
		δ^{13}C (‰)、(加速器) = −32.71 ± 0.90
	試 料 形 態：	Δ^{14}C (‰) = −178.2 ± 3.6
	試料名(番号)：3	pMC (%) = 82.18 ± 0.36
		δ^{14}C (‰) = −191.1 ± 3.2
	(参考)　　δ^{13}Cの補正無し	pMC (%) = 80.89 ± 0.32
#1852－1		Age (yrBP) ： 1,700 ± 30
IAAA－70882	試料採取場所：北原中遺跡	Libby Age (yrBP) ： 2,050 ± 30
		δ^{13}C (‰)、(加速器) = −28.74 ± 0.73
	試 料 形 態：	Δ^{14}C (‰) = −225.3 ± 3.2
	試料名(番号)：4	pMC (%) = 77.47 ± 0.32
		δ^{14}C (‰) = −231.3 ± 2.9
	(参考)　　δ^{13}Cの補正無し	pMC (%) = 76.87 ± 0.29
#1852－2		Age (yrBP) ： 2,110 ± 30

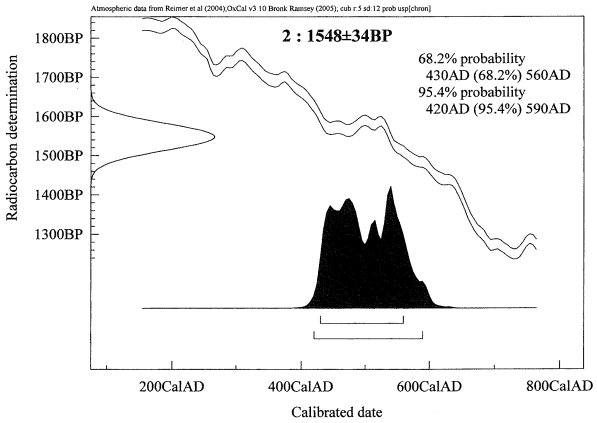
参考資料：暦年較正用年代

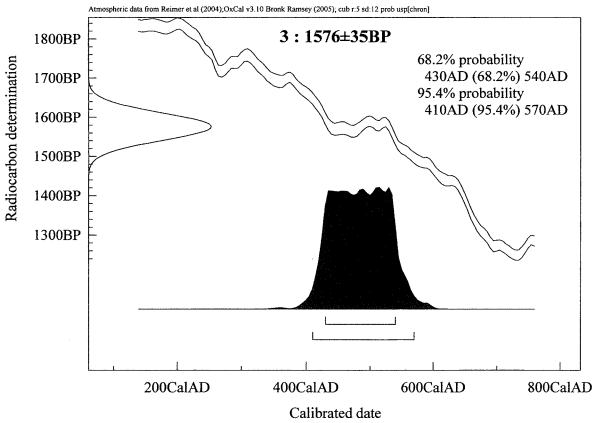
IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA－70879	1	1677 ± 34
IAAA－70880	2	1548 ± 34
IAAA－70881	3	1576 ± 35
IAAA－70882	4	2051 ± 32

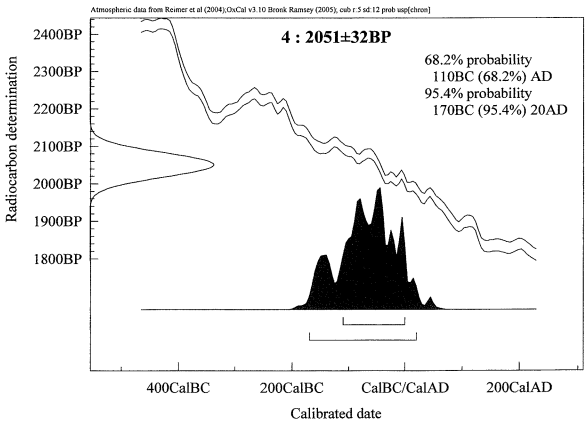
ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】









使用プログラム・OxCal　v3.10

放射性炭素年代測定結果報告書
（AMS測定）
鷲ヶ迫遺跡

㈱加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置と立地

鷲ヶ迫遺跡は，鹿児島県鹿屋市花岡町に位置する。標高約1000m級の山地から西に延びる標高約120～130mの台地上に立地する。

(2) 測定対象試料

測定対象試料は，鷲ヶ迫遺跡の竪穴住居跡１号から出土した炭化物（№１：IAAA-62496），Ｂ－３区土坑埋土から出土した炭化物（№３：IAAA-62497），Ｄ－５区円形土坑埋土から出土した炭化物（№５：IAAA-62498），Ｃ～Ｄ－27区竪穴住居跡１号埋土から出土した木炭（№７：IAAA-62499），Ｄ－５区竪穴住居跡３号から出土した木炭４点（№９：IAAA-62500，№11：IAAA-62501，№13：IAAA-62502，№15：IAAA-62503），合計８点である。

(3) 化学処理工程

1）メス・ピンセットを使い，根・土等の表面的な不純物を取り除く。

2）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理，アルカリ処理，酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～１Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後，超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後，超純水で中性になるまで希釈し，90℃で乾燥する。

3）試料を酸化銅１ｇと共に石英管に詰め，真空下で封じ切り，500℃で30分，850℃で２時間加熱する。

4）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し，真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

5）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（還元）し，グラファイトを作製する。

6）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，加速器に装着し測定する。

(4) 測定方法

測定機器は，3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また，加速器により^{13}C/^{12}Cの測定も同時に行う。

(5) 算出方法

1）年代値の算出には，Libbyの半減期5568年を使用した。

2）BP年代値は，過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された，1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

3）付記した誤差は，次のように算出した。

複数回の測定値について，χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い，みなせない場合には標準誤差を用いる。

4）δ^{13}Cの値は，通常は質量分析計を用いて測定するが，AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。

δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は，いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \qquad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \qquad (2)$$

ここで，　$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$ または $(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$ または $(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}Cは，質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し，PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として，それからのずれを計算した。但し，加速器により測定中に同時に$^{13}C/^{12}C$を測定し，標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Cを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また，Δ^{14}Cは，試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。(1) 式の^{14}C濃度を，δ^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))^2 \qquad (^{14}A_S\text{として}^{14}C/^{12}C\text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000)) \qquad (^{14}A_S\text{として}^{14}C/^{13}C\text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \ (‰)$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については，海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため，同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合，同位体補正をしないδ^{14}Cに相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として，pMC（percent Modern Carbon）がよく使われており，Δ^{14}Cとの関係は次のようになる。

$\Delta^{14}C=(pMC/100-1)\times1000$（‰）

$pMC=\Delta14C/10+100$（%）

国際的な取り決めにより，このΔ^{14}CあるいはpMCにより，放射性炭素年代（Conventional Radiocarbon Age；yrBP）が次のように計算される。

$T=-8033\times\ln[(\Delta^{14}C/1000)+1]$

$=-8033\times\ln(pMC/100)$

5）^{14}C年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6）較正暦年代の計算では，IntCal04データベース（Reimer et al 2004）を用い，OxCalv3.10較正プログラム（Bronk Ransey1995　Bronk Ransey 2001　Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger2001）を使用した。

(6) 測定結果

鷲ヶ迫遺跡のC～D－27区竪穴住居跡1号から出土した炭化物（№1：IAAA-62496）と木炭（№7：IAAA-62499）の^{14}C年代はともに1530±30yrBPである。暦年較正年代（1σ＝68.2%）は440AD～600ADに含まれ，古墳時代後期から飛鳥時代前半に相当する。B－3区土坑埋土から出土した炭化物（№3：IAAA-62497）の^{14}C年代は，1910±30yrBPである。暦年較正年代は60AD～130AD（68.2%）であり，弥生時代後期に相当する。D－5区円形土坑埋土から出土した炭化物（№5：IAAA-62498）の^{14}C年代は1240±30yrBPである。暦年較正年代は690AD～750AD（33.0%）・760AD～820AD（27.5%）・840AD～860AD（7.6%）であり，飛鳥時代末から平安時代前期前半に相当する。D－5区竪穴住居跡3号から出土した木炭4点（№9：IAAA-62500，№11：IAAA-62501，№13：IAAA-62502，№15：IAAA-62503）の^{14}C年代は，それぞれ1740±50yrBP，1720±30yrBP，1690±30yrBP，1660±30yrBPである。4点の暦年較正年代は230AD～425ADに含まれ，340AD～380ADが共通する年代であり，古墳時代中期に相当する。化学処理および測定内容に問題は無く，同一遺構から出土した^{14}C年代も近似することから妥当な年代と考えられる。

参考文献

Bronk Ramsey C. (1995)　Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon*, 37 (2) 425-430

Bronk Ramsey C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon*, 43 (2A) 355-363

Bronk Ramsey C., J. van der Plicht and B. Weninger (2001) 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon*, 43 (2A) 381-389

Reimer, P.J. et al. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP. *Radiocarbon* 46, 1029-1058

IAA Code No.	試　　料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA－62496	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷲ヶ迫遺跡 試 料 形 態：炭化物 試料名(番号)：1	Libby Age(yrBP)：1,530 ± 30 δ^{13}C(‰)、(加速器) = −27.11 ± 0.59 Δ^{14}C(‰) = −173.1 ± 3.2 pMC(%) = 82.69 ± 0.32
#1609－1代替2	(参考)　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C(‰) = −176.7 ± 3.0 pMC(%) = 82.33 ± 0.30 Age(yrBP)：1,560 ± 30
IAAA－62497	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷲ヶ迫遺跡 試 料 形 態：炭化物 試料名(番号)：3	Libby Age(yrBP)：1,910 ± 30 δ^{13}C(‰)、(加速器) = −28.65 ± 0.86 Δ^{14}C(‰) = −211.1 ± 3.3 pMC(%) = 78.89 ± 0.33
#1609－2	(参考)　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C(‰) = −217.0 ± 3.0 pMC(%) = 78.30 ± 0.30 Age(yrBP)：1,970 ± 30
IAAA－62498	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷲ヶ迫遺跡 試 料 形 態：炭化物 試料名(番号)：5	Libby Age(yrBP)：1,240 ± 30 δ^{13}C(‰)、(加速器) = −29.89 ± 0.87 Δ^{14}C(‰) = −142.7 ± 3.4 pMC(%) = 85.73 ± 0.34
#1609－3	(参考)　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C(‰) = −151.3 ± 3.1 pMC(%) = 84.87 ± 0.31 Age(yrBP)：1,320 ± 30
IAAA－62499	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷲ヶ迫遺跡 試 料 形 態：木炭 試料名(番号)：7	Libby Age(yrBP)：1,530 ± 30 δ^{13}C(‰)、(加速器) = −29.26 ± 0.92 Δ^{14}C(‰) = −173.0 ± 3.5 pMC(%) = 82.70 ± 0.35
#1609－4	(参考)　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C(‰) = −180.2 ± 3.1 pMC(%) = 81.98 ± 0.31 Age(yrBP)：1,600 ± 30
IAAA－62500	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷲ヶ迫遺跡 試 料 形 態：木炭 試料名(番号)：9	Libby Age(yrBP)：1,740 ± 50 δ^{13}C(‰)、(加速器) = −33.21 ± 0.87 Δ^{14}C(‰) = −195.0 ± 4.8 pMC(%) = 80.50 ± 0.48
#1609－5	(参考)　　δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C(‰) = −208.5 ± 4.5 pMC(%) = 79.15 ± 0.45 Age(yrBP)：1,880 ± 50

IAAA－62501	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷲ヶ迫遺跡 試 料 形 態：木炭 試料名(番号)：11	Libby Age(yrBP) ： 1,720 ± 30 δ^{13}C(‰)、(加速器) = −28.51 ± 0.83 Δ^{14}C(‰) = −192.8 ± 3.4 pMC(%) = 80.72 ± 0.34
#1609－6	(参考) δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C(‰) = −198.6 ± 3.1 pMC(%) = 80.14 ± 0.31 Age(yrBP) ： 1,780 ± 30
IAAA－62502	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷲ヶ迫遺跡 試 料 形 態：木炭 試料名(番号)：13	Libby Age(yrBP) ： 1,690 ± 30 δ^{13}C(‰)、(加速器) = −31.93 ± 0.80 Δ^{14}C(‰) = −189.8 ± 3.1 pMC(%) = 81.02 ± 0.31
#1609－7	(参考) δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C(‰) = −201.3 ± 2.8 pMC(%) = 79.87 ± 0.28 Age(yrBP) ： 1,810 ± 30
IAAA－62503	試料採取場所：鹿児島県鹿屋市花岡町 鷲ヶ迫遺跡 試 料 形 態：木炭 試料名(番号)：15	Libby Age(yrBP) ： 1,660 ± 30 δ^{13}C(‰)、(加速器) = −33.15 ± 0.86 Δ^{14}C(‰) = −187.1 ± 3.3 pMC(%) = 81.29 ± 0.33
#1609－8	(参考) δ^{13}Cの補正無し	δ^{14}C(‰) = −200.6 ± 2.9 pMC(%) = 79.94 ± 0.29 Age(yrBP) ： 1,800 ± 30

参考

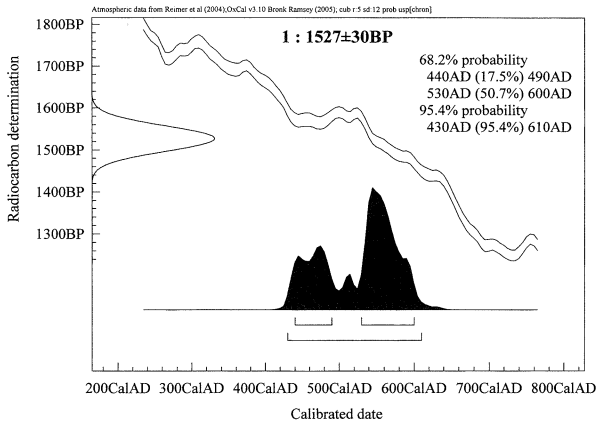
IAAA－62496に関しましては，代替２の試料のみを処理し測定した結果になります。

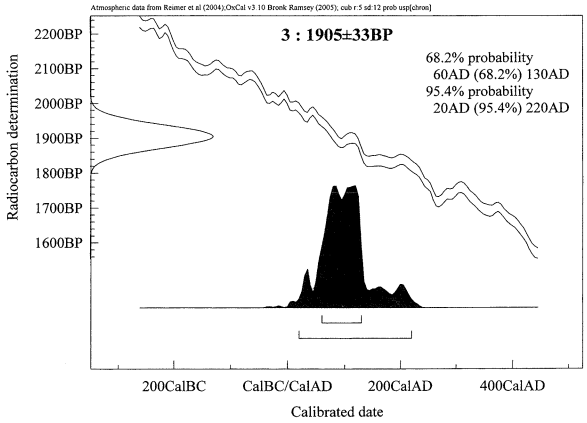
参考資料：暦年較正用年代

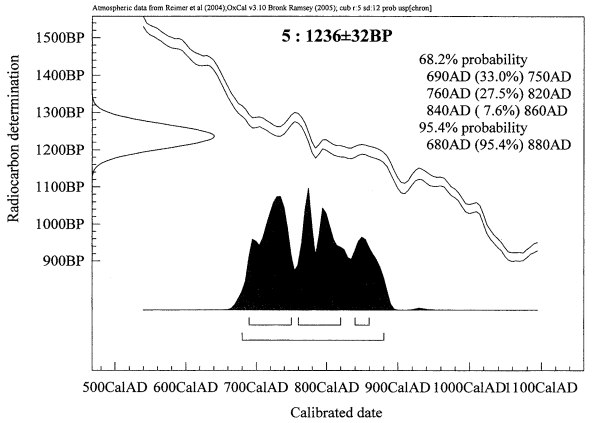
IAA Code No.	試料番号	Libby Age(yrBP)
IAAA－62496	**1**	1527 ± 30
IAAA－62497	**3**	1905 ± 33
IAAA－62498	**5**	1236 ± 32
IAAA－62499	**7**	1526 ± 34
IAAA－62500	**9**	1742 ± 48
IAAA－62501	**11**	1720 ± 33
IAAA－62502	**13**	1690 ± 30
IAAA－62503	**15**	1663 ± 32

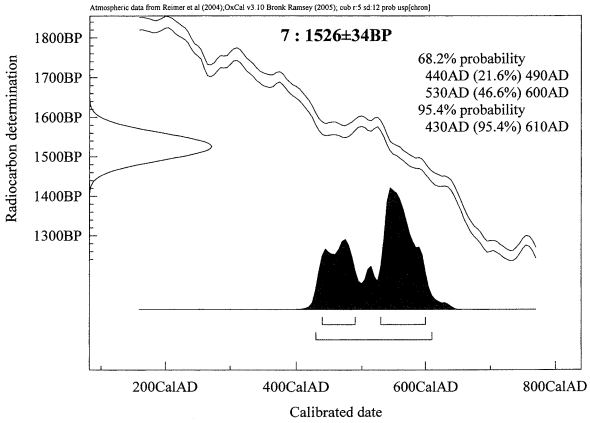
ここに記載するLibby Age（年代値）と誤差は下１桁を丸めない値です。

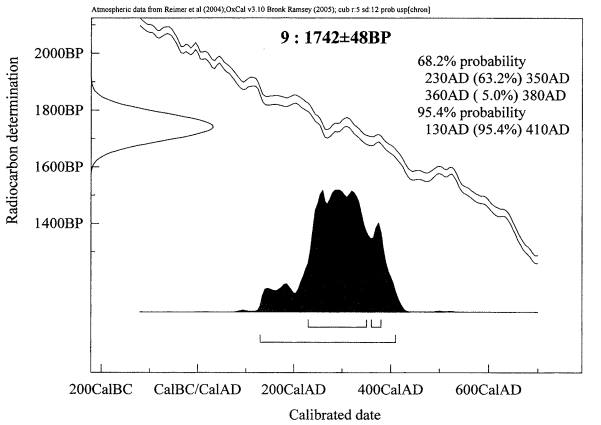
【参考値：暦年補正　Radiocarbon determination】

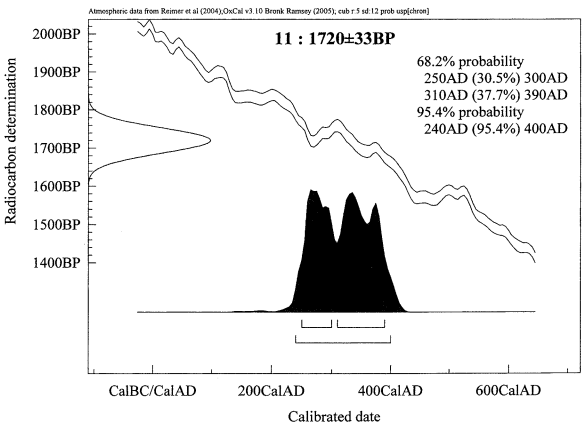


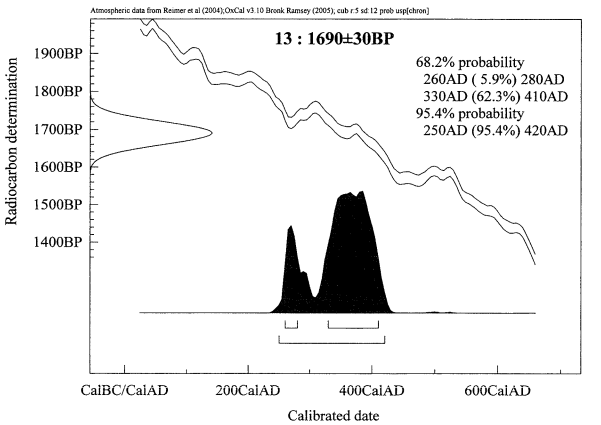


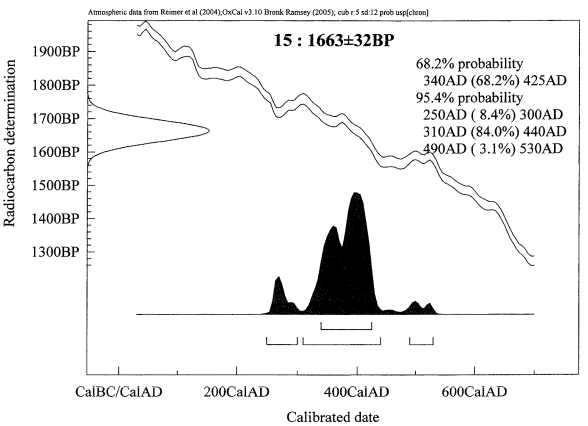












使用プログラム・OxCal　v3.10

写 真 図 版

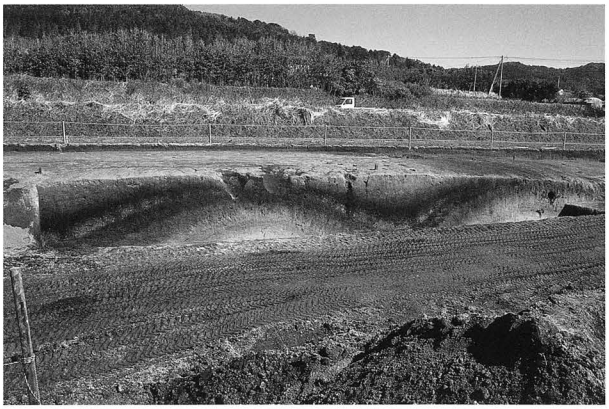
遺跡遠景（北から）平成16年

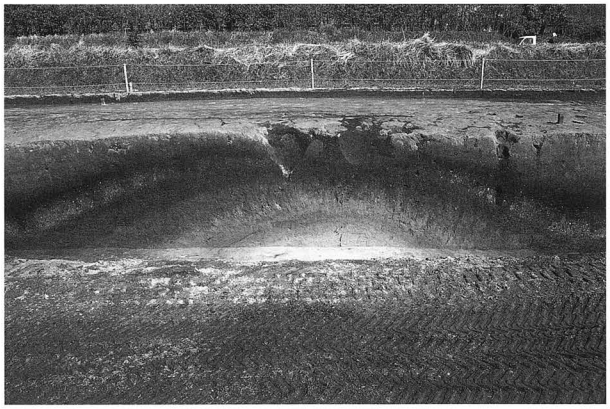
遺跡遠景（北から）平成18年

図版 2

遺跡全景

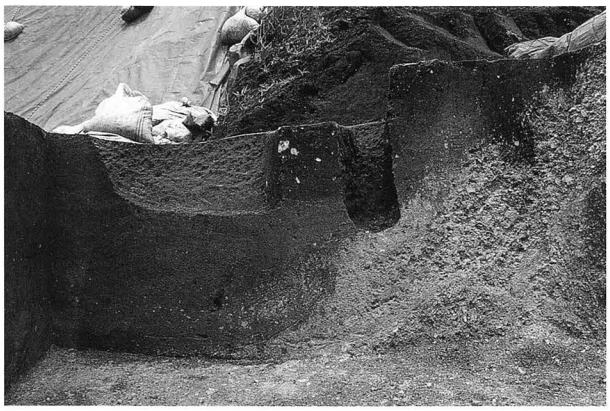
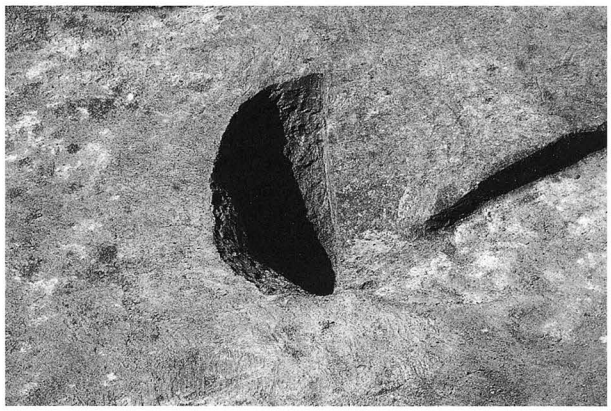
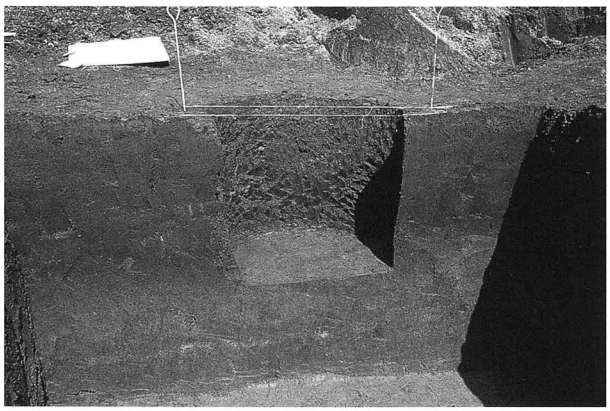
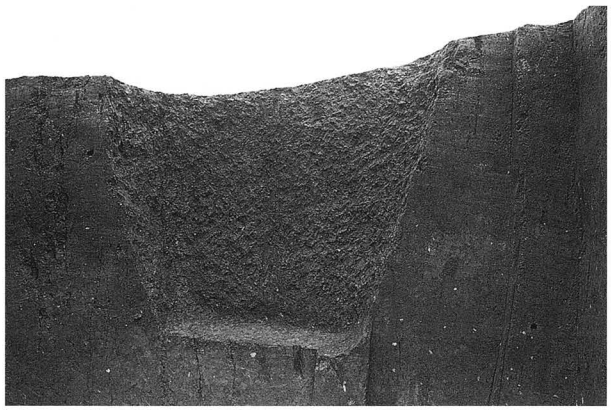
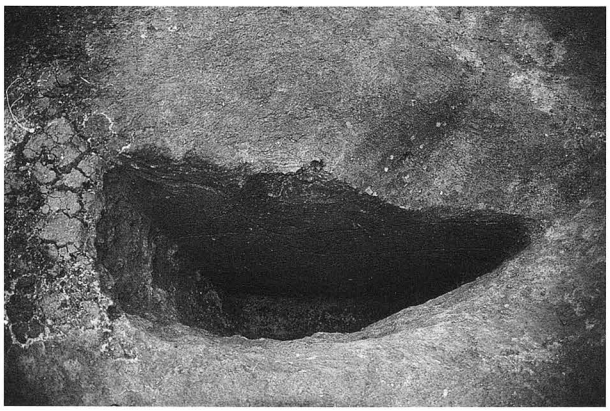
図版 3



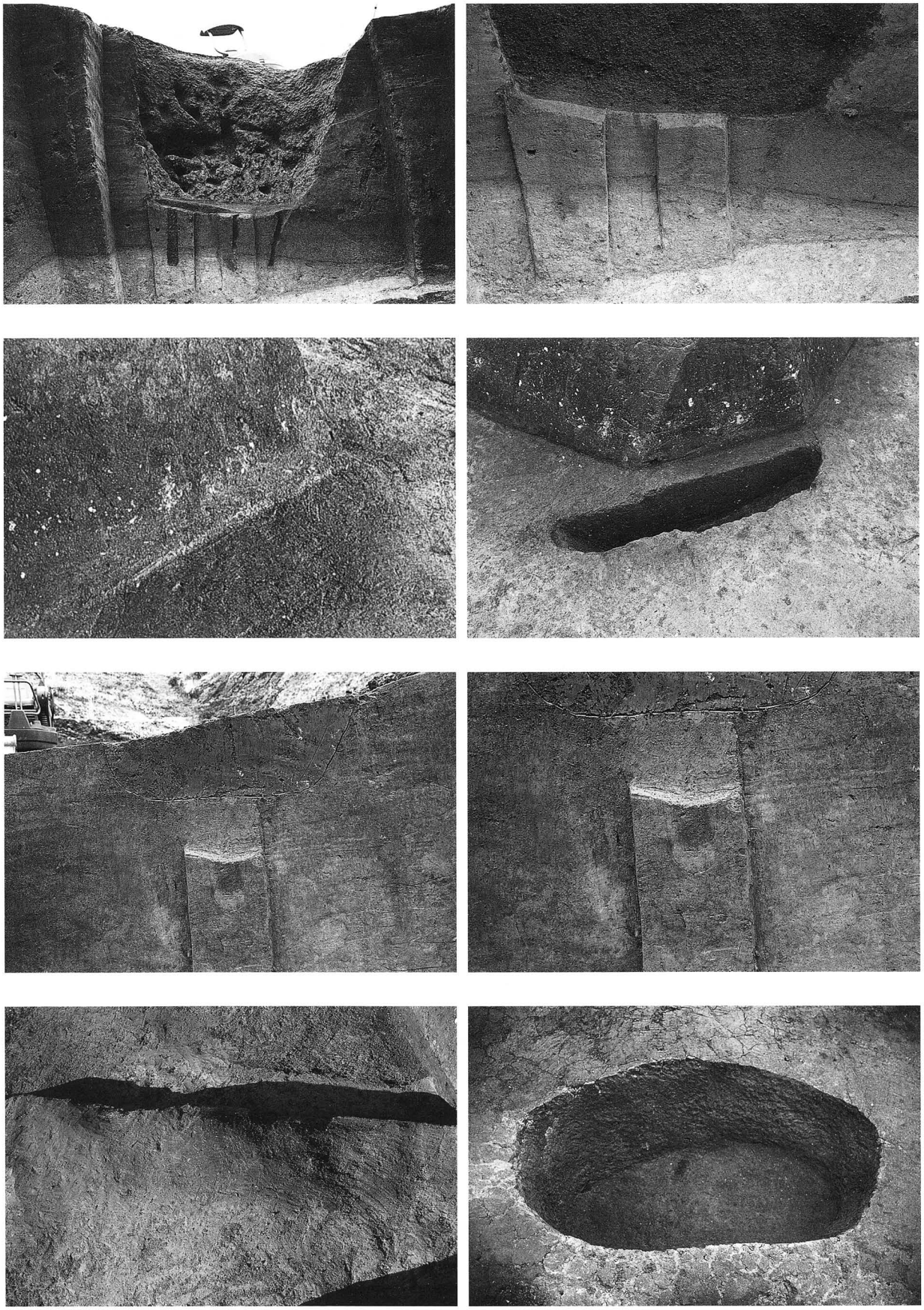


土層

図版 4

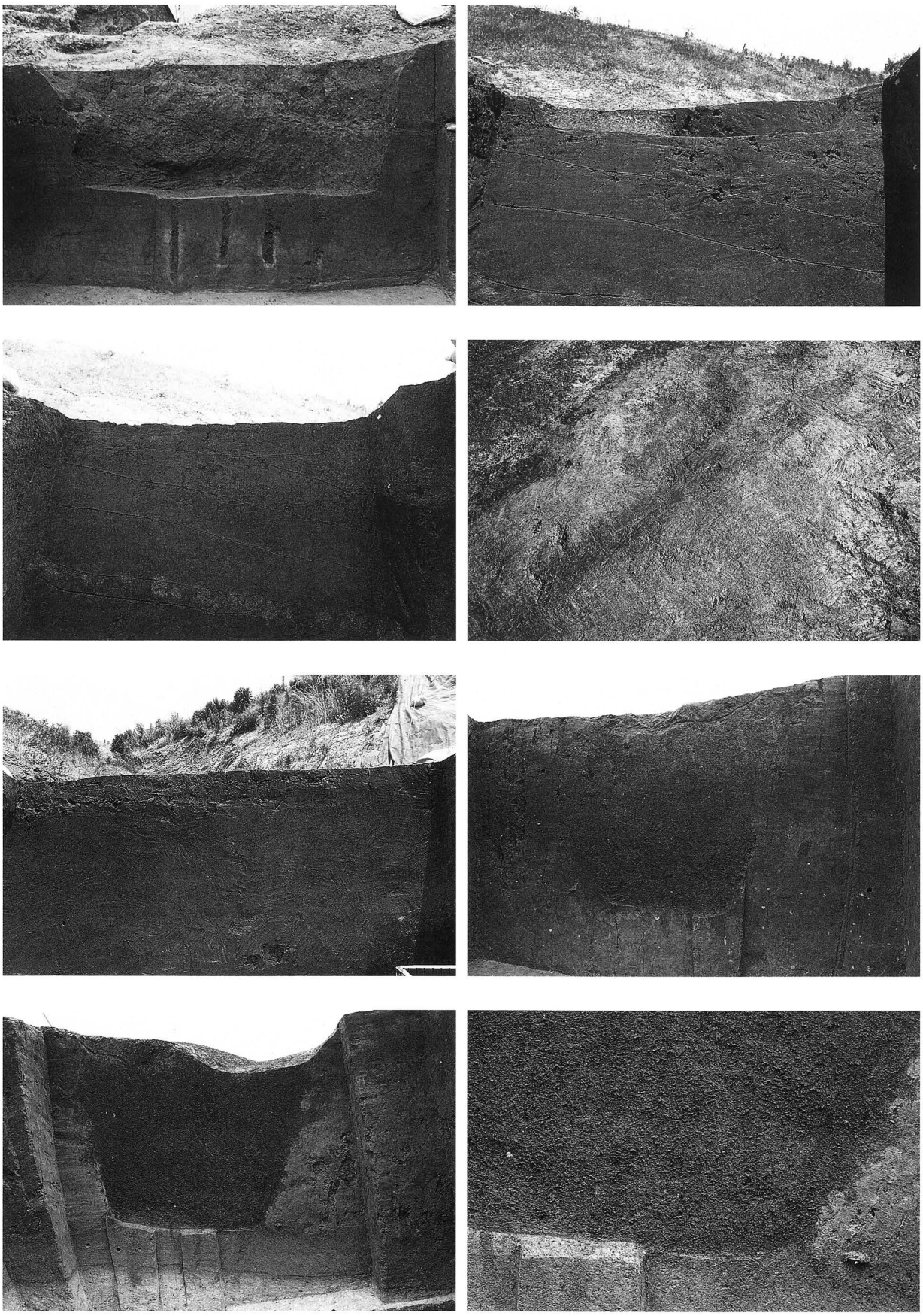






落し穴　1～4号



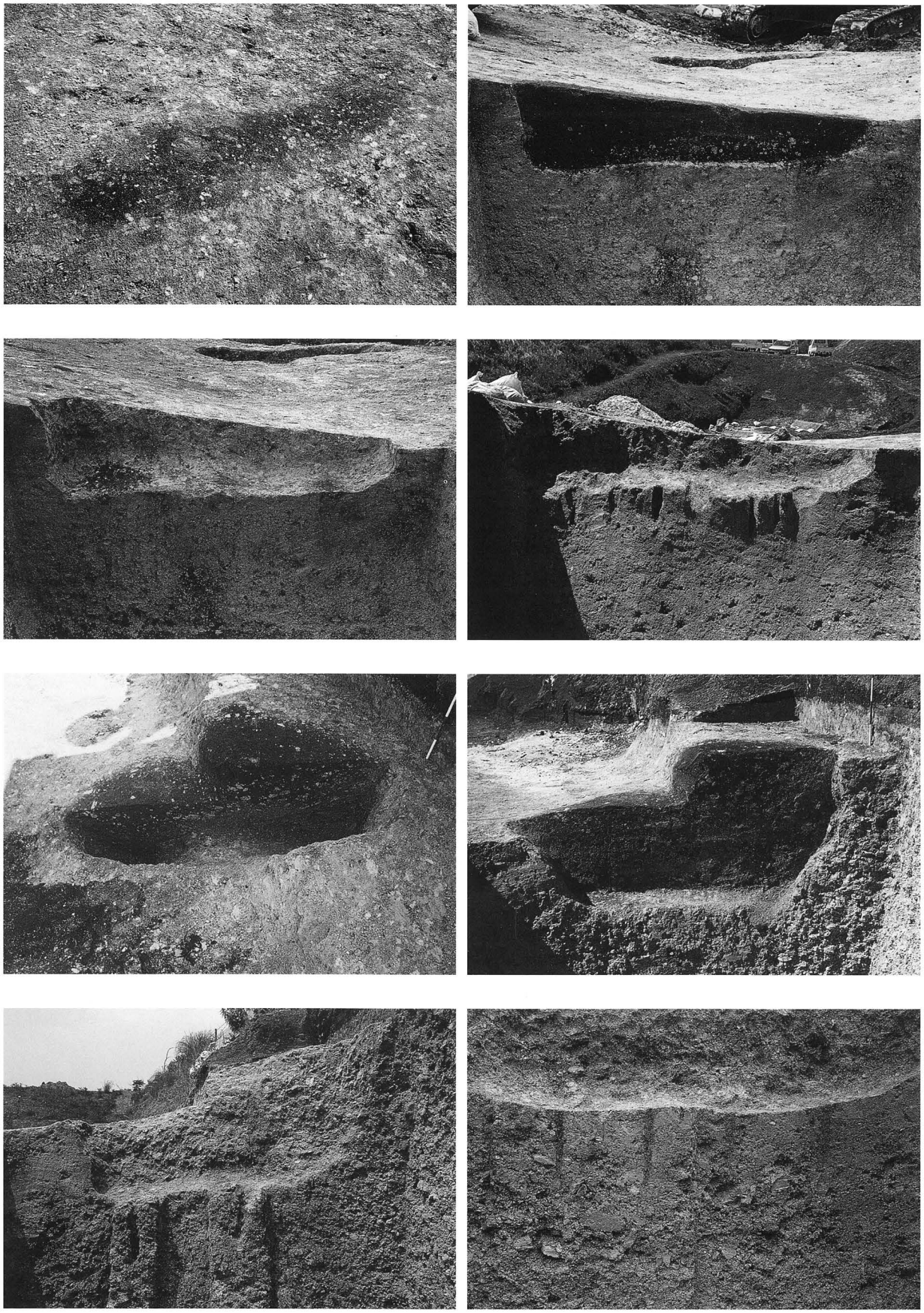
落し穴　4～9号

図版 6



落し穴　9～13号

図版 7

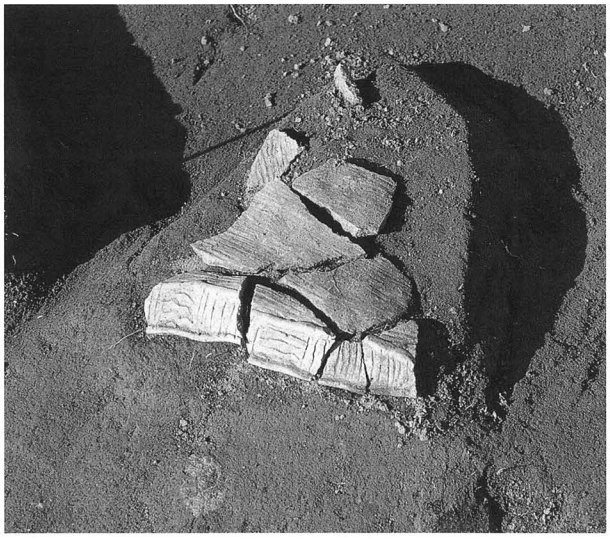
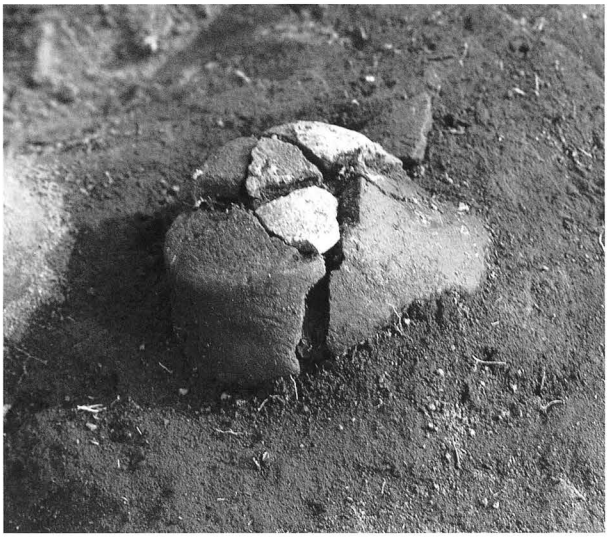


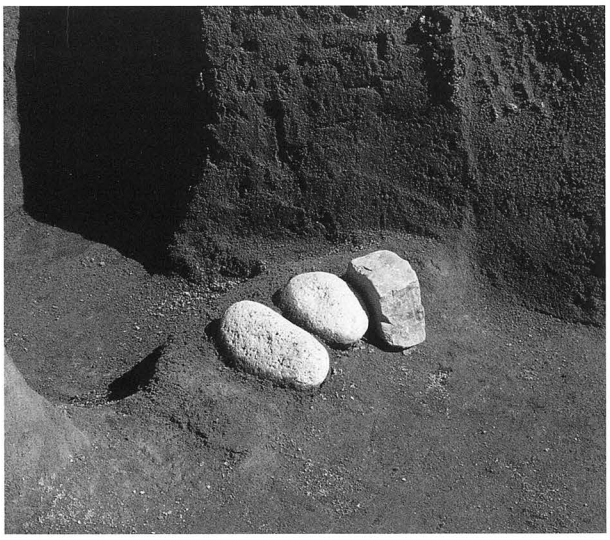
落し穴　14～15号

図版 8

礫群

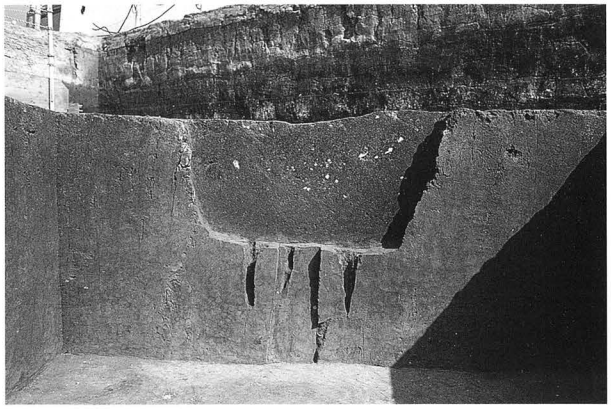
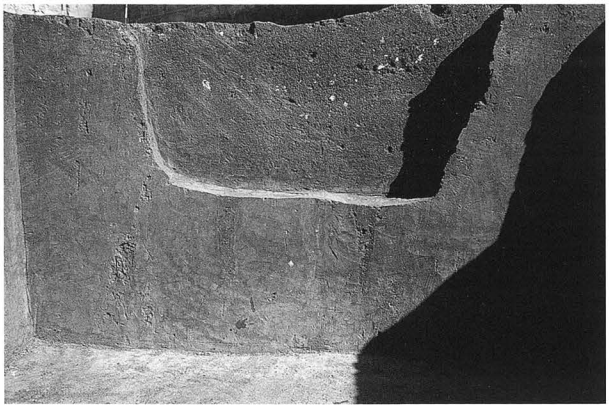
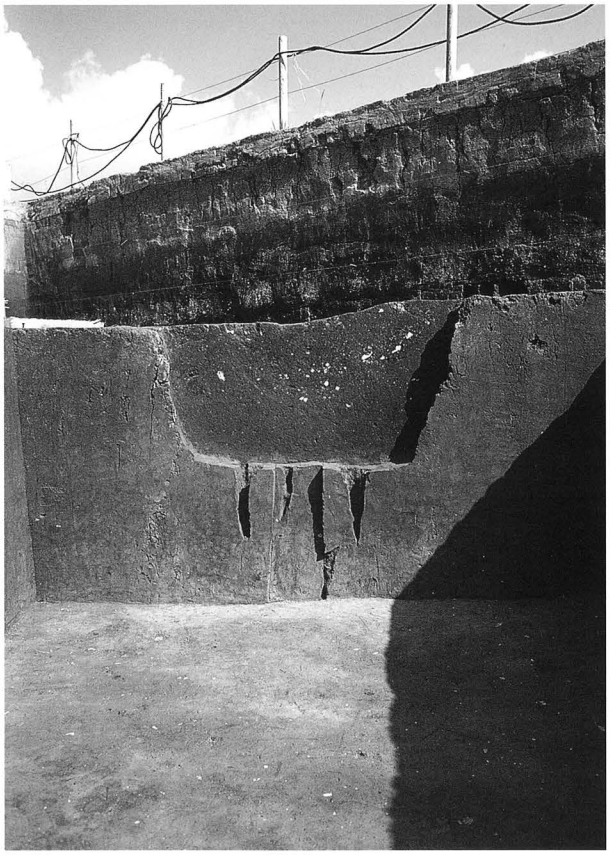
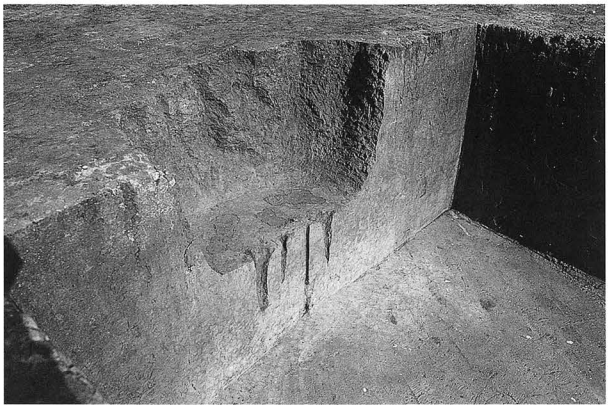
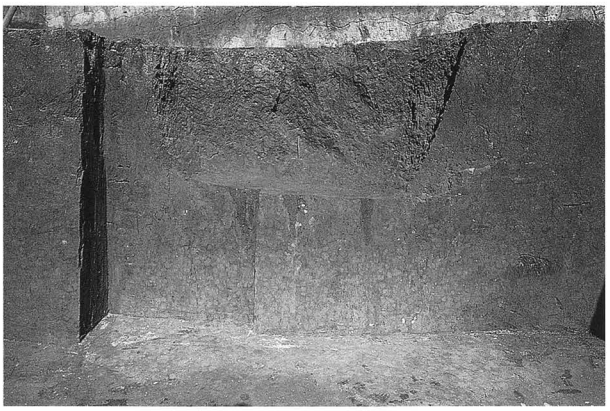
旧石器時代地形

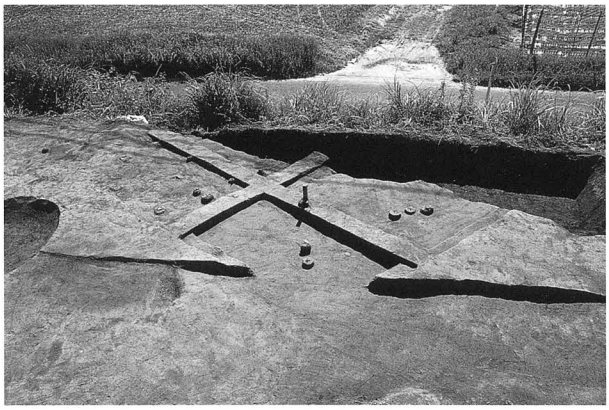


縄文時代遺物出土状況

図版 10

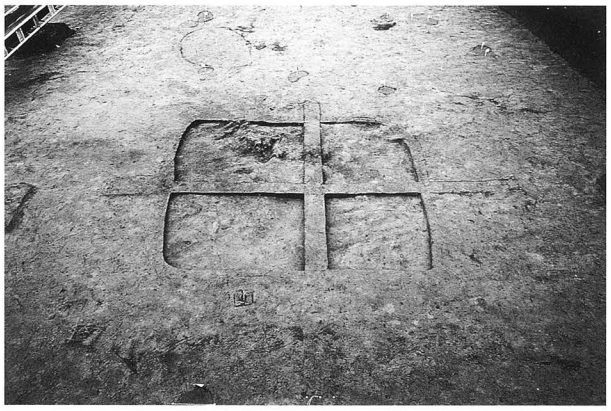






縄文時代落し穴　1・2号



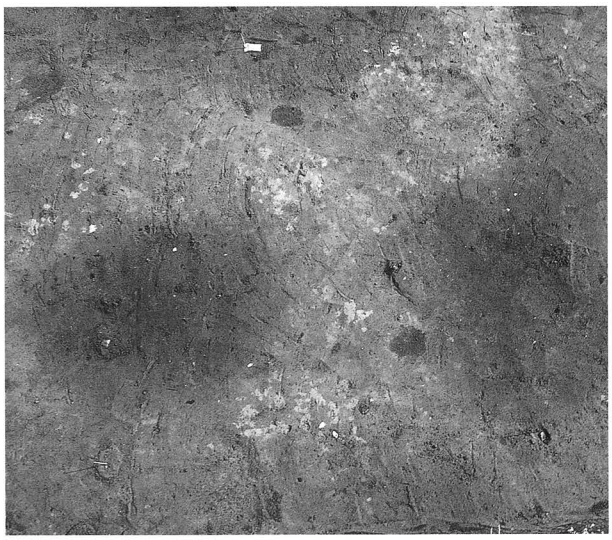
古墳時代住居跡

図版 12



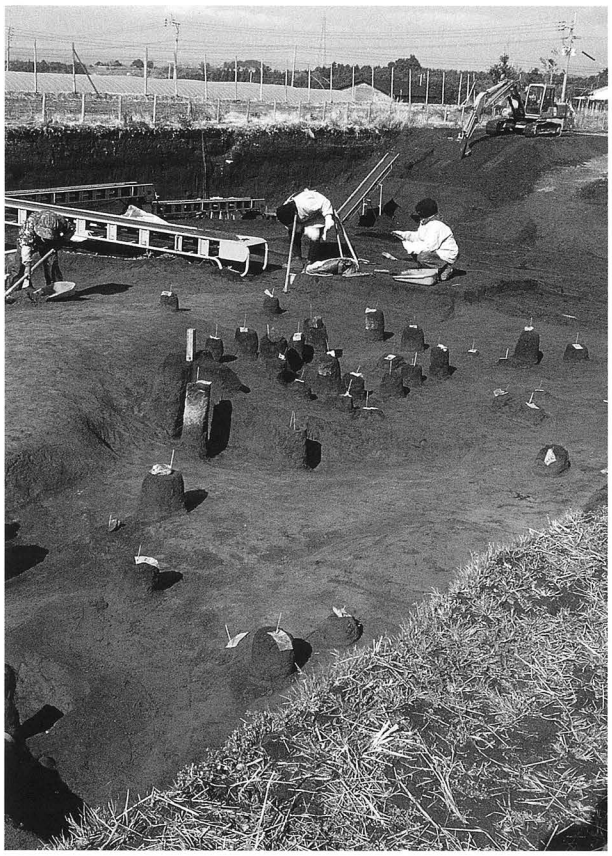
古墳時代住居跡

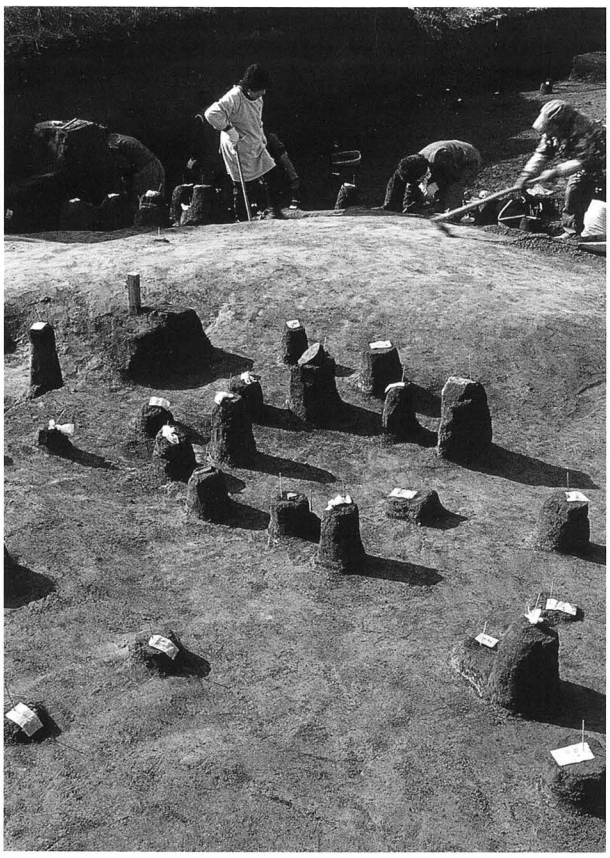
図版13

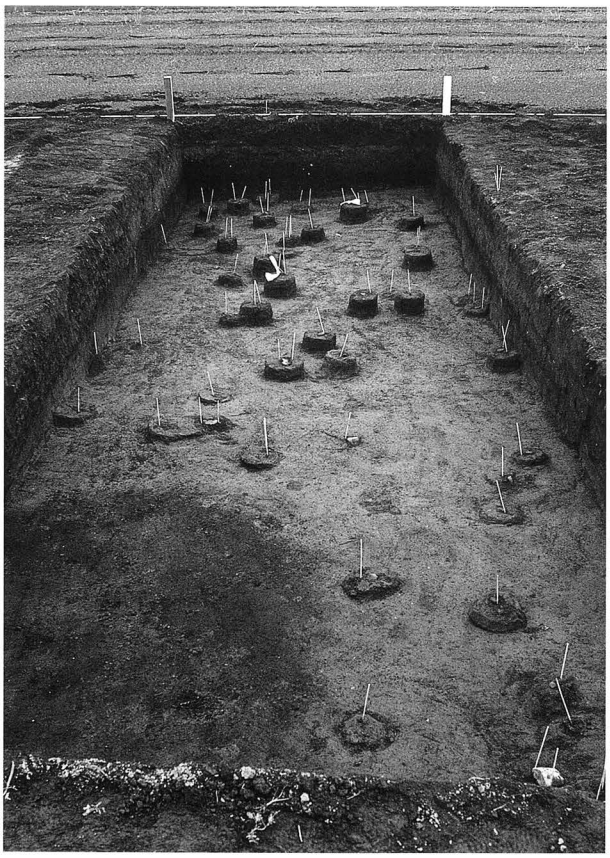


土坑

図版 14





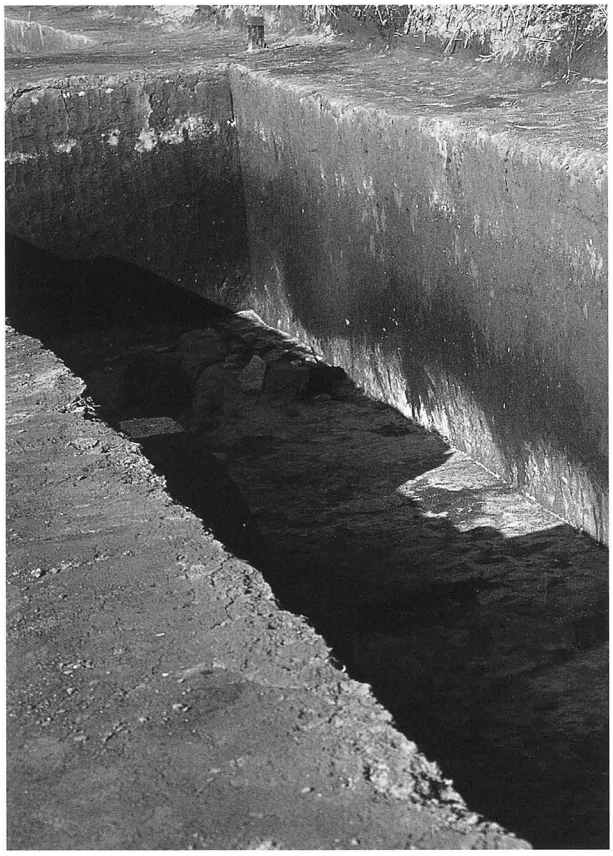


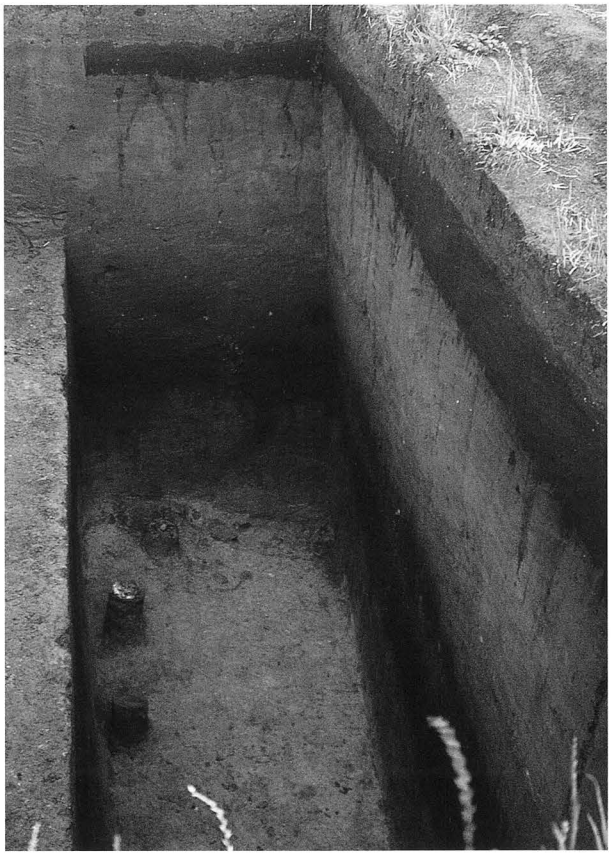
遺物出土状況

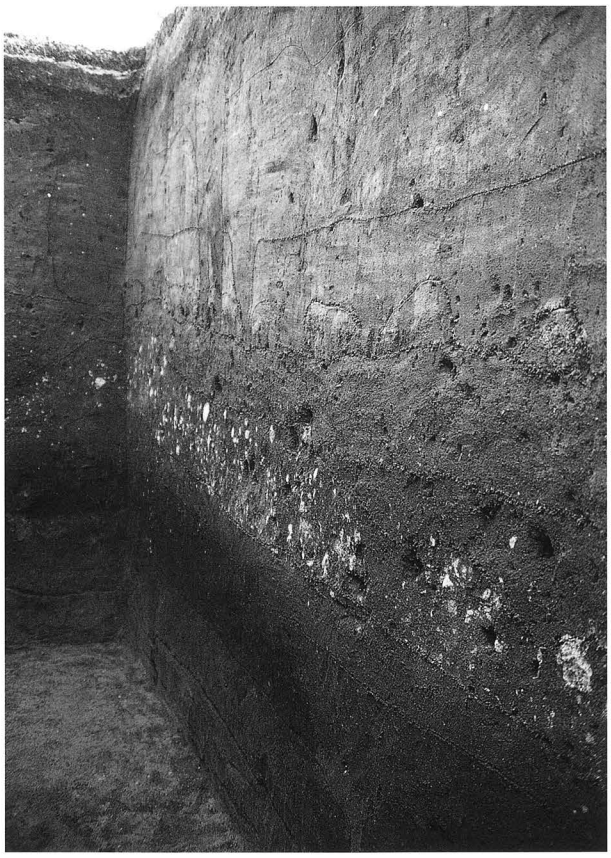
図版15

縄文時代遺構

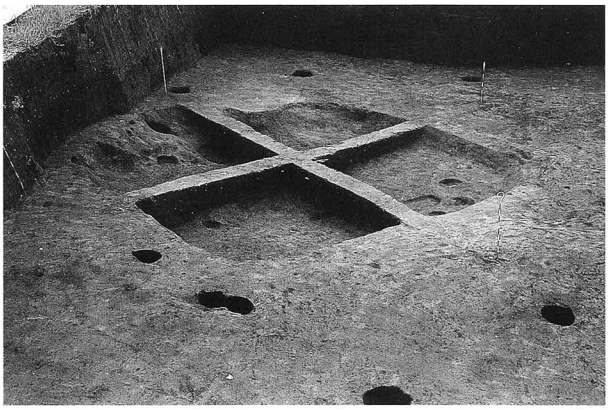
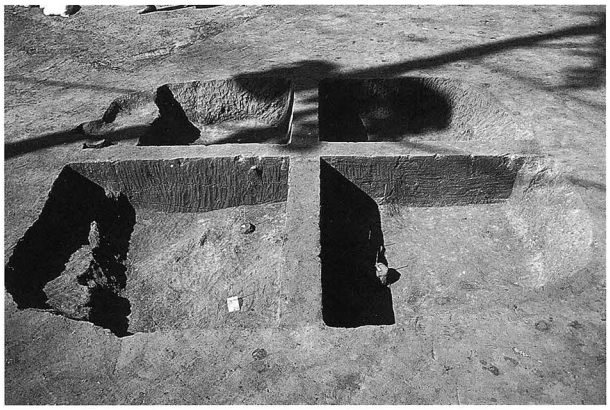
図版16

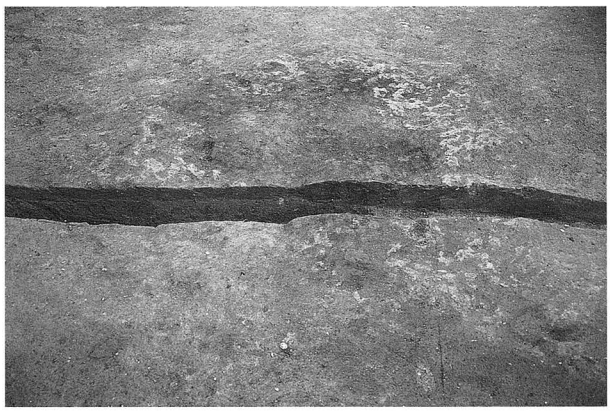






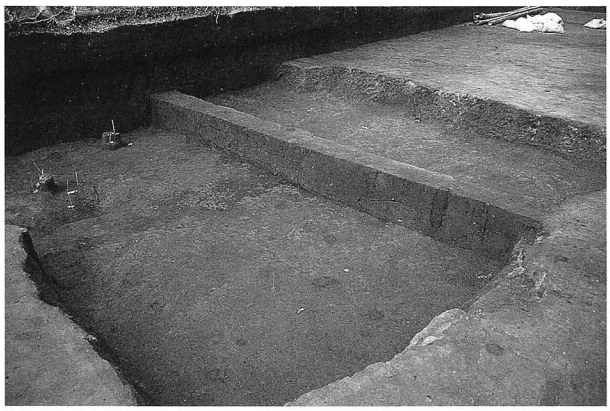
土層

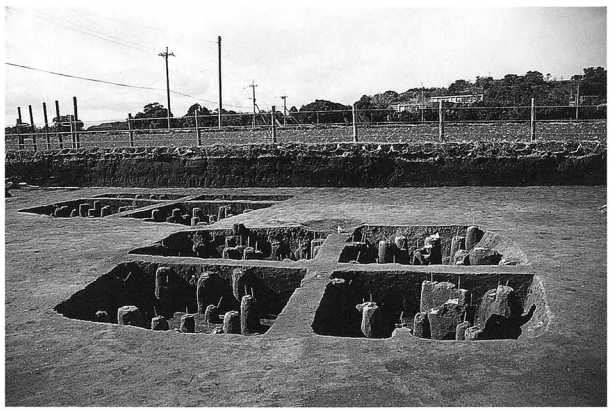



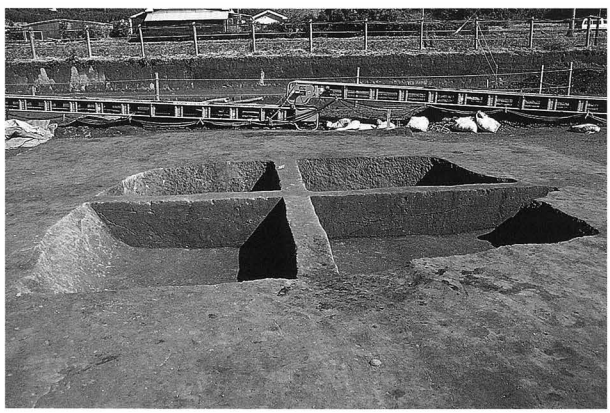


古墳時代住居跡

図版18







古墳時代住居跡